THE CENTRAL REVIEW

中央公論

六月號

第三百五號　第廿九年第六號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

「幸福」とは何ぞや
健全なる頭脳を指す

島村醫學博士證明



「不幸」とは何ぞや
健脳丸を服用せざる
脳神經病患者諸君を指す

神經をしづめ、逆上を引下げ、
脳病を快治し、
脳充血を豫防す。

健脳丸を少量宛常用せば逆上便通をよくし、脳充血、中風、卒中を未發に防ぎ記憶力を増進す。

主効

■脳充血■頭痛
■脳膜炎■耳鳴
■神經痛■眩暈
■脳貧血■健忘
■卒中■便秘

藥價 五週分貳圓 三週分一圓廿五錢 二週分八十五錢 一週分四十五錢 三日分廿錢

本舗 大阪 東京 丹平商會藥房

今國海外到る處の信用藥店に取次す

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

故田岡嶺雲譯並註

和譯漢文叢書

新時代の最大要請は時間と勞力との節約也

本叢書は此要請に應じたる者也

●全十二册完成
總クロース堅牢美本
原文の一字を換へず且懇切明晰なる註釋を加へたる者
●内容裝釘等の詳細見本は郵劵二錢を要す

第一篇 和譯老子莊子 正價壹圓 郵税拾貳錢
第二編 和譯韓非子 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
第三編 和譯戰國策 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
第四編 和譯荀子 正價壹圓 郵税拾錢
第五第六編 和譯史記列傳上下二册 正價各一圓廿錢 郵税各拾貳錢

第七編 和譯七書附鬼谷子 正價壹圓 郵税拾錢
第八編 和譯淮南子 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
第九編 和譯墨子列子 正價一圓拾錢 郵税拾貳錢
第十第十一編 和譯春秋左傳上下二册 正價各一圓卅錢 郵税各拾貳錢
第十二編 和譯東萊博議 正價壹圓卅錢 郵税拾四錢

◎批評◎

『譯文の簡淨、註解の明晰、亦嶺雲に非ざれば做し得ざるの特色あり』（東京朝日）。
『これならば譯と云ひても原文の妙を損せず且つ今の青年にも讀易からん』（萬朝）。
『想ふに是れ譯者嶺雲の學と識との他に超卓せるに因るなるべし』（日本及日本人）。

下山京子女史著 再版

一葉草紙（ひとはさうし）

▼コロタイプ版及邦助畫伯
▼插畫五葉入極美本

總クロース 全一册 正價九十錢 郵税十錢

故田岡嶺雲著 四版

數奇傳

▼雪嶺博士外十五名氏序文
▼插畫、未醒、芋錢、月村

總クロース 美本全一册 正價九十錢 郵税十錢

▶高橋五郎先生譯◀

エピクテタス遺訓

二千年來天下無比の安心立命經と稱せられ羅馬の賢帝として名高きマーカス・アウレリアス皇帝は生涯本書を其座右より離さゞりしと云ふ。以て其價値を知るべし。

總クロース 全一册 正價壹圓 郵税十錢

エマーソン處世論

目次
◎運命 ◎禮拜 ◎勢力 ◎餘論 ◎富有 ◎美 ◎修養 ◎迷想 ◎禮義

總クロース 全一册 特價壹圓 郵税十二錢

版元 東京神田區雉子町 玄黄社 電話本局二〇九番 振替東京七九九五 ●全國書肆

（前附の二）

東京帝國大學文科大學教授 文學博士箕作元八先生著

南亭史説集

▲最新刊▼

菊判函入全壹冊
總クロース製
裝釘頗美麗
總紙數五百貳拾頁
定價金貳圓也
郵稅金拾貳錢

●●●本邦に於ける西洋史家の泰斗箕作南亭博士の史論集●●●
卓越せる史眼と多方面なる題材と并に珍奇なる史料とに於て本書は實に時代史界のオーソリチーたり。

本書の特色

▼珍奇なる史料としては明の王太后より羅馬法王に贈りし論文、日本基督教徒より羅馬法王に贈りし文書及び英露連合日本侵略に關する文書等あり。又サラミス海戰并に戰術史上の教訓に關する所論は海戰史家たる博士の最近の研究を窺ふべきもの、又佛國大革命及びナポレオンに關する所説は實に博士獨特の史筆なり。
其他英蘭二國合同策、ゼンバッハ合戰の眞相、モスコー大火の原因、ポーランドの滅亡の如き有益にして興味に富める論文すべて數十篇を收む。

發行所 東京市京橋區南傳馬町二丁目 振替口座(東京)第一八〇九番 目黑書店

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

法學博士 浮田和民先生著

新國民の修養

杉浦非水先生装幀全一册中形上製
紙數三百七十頁●定價金壹圓 送費八錢

見よ 立憲民國の必讀經典 出づ

初版十日に賣切 再版三版出來

我が日本帝國は東洋の一島國より一躍して世界一等國の班に列し我國民の一擧手一動凡て列國注目の中心となる。我が大正の新日本に於て豈に國民的修養指針なくして可ならんや。本書は學德一世に高き浮田博士が其該博深邃の蘊蓄を發揮し獨特の穩健にして而かも痛快なる筆法を以て在來の矛盾杆格多き舊思想を排し現代に適應せる實踐的。立憲的。理想的。自由的。新國民道德を唱道喝破せられたる居家處世の活教訓なり。要するに本書は一般國民必讀の最良指針たるのみならず又親しく博士の講義を聞かる丶各學生、政治家、學者、教育者諸君の好參考書なり

發行所 東京市神田區錦町三丁目 振替東京二七八五一番 群書堂書店

發賣所 東京市神田區錦町一丁目 振替東京六二九四番 誠文堂書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

!!現文壇の權威世界の最大名著!!

■ダヌンツイオ著 □ 鷲尾浩氏譯■（最新刊）

フランチエスカ

●正價金一圓五十錢 ●郵稅内地十二錢

羅馬の大劇場が熱狂の觀衆を魅惑したこの**大戯曲『フランチエスカ』**は、伊太利大詩聖ダヌンツイオが、その絢爛の文辭と精錬の情調との極致を盡して琢き上げた世界大戯曲中の寳玉である。纖細麗美の舞臺面と、靈的悲劇的雰圍氣と蠱惑的描辭結構とは讀者と觀衆とを問はず恍然夢幻の境に彼等を導かずにおかねであらう。藝術の粹を味はむとする近代人にこの一卷をお奬めする。

四六版洋裝總布
極美裝箱入紙數約五百頁

熱狂的大歡迎

●ブランデス著●矢口達氏譯●

十九世紀文學主潮

移民文學

（菊判總布特製美本箱入紙數約五百頁全紙寫眞版六葉入　正價金二圓　郵稅内地十六錢）

千古未曾有の英傑ナポレオンが歐大陸を蹂躙したるかの恐怖時代前後を背景として、歐洲文藝は如何なる發達を遂げしか。不滿と絶叫とより生れたる藝術は抑も如何なるものなりしか。現代藝術評壇隨一の權威ブランデスはその博遠なる智識力と深鋭なる達觀力とを以て其時代を縱横無盡に解剖論斷したり。是正に現文壇最大名著なり、窮極する處を知らざる藝術の最深淵を採らむとせば乞ふ、本書に來り求められよ。

發行所　東京小石川高田豐川町　新陽堂　振替口座東京一五五七〇番



中央公論第廿九年六月號目次



東西力士評論

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

HONORÉ DAUMIER



The Third-Class Carriage

中央公論



六月號
第廿九年第六號
第三百五號

政界の分野漸く定る

（一）

大隈內閣の官僚的形容が日々に濃厚の色彩を帶び來るは爭ふべからず、其閣僚の顔振に付ては其組織當初已に世人が奇怪の感を成せし處なるが、當時尾崎氏の忌避に遭ひ大浦子に對し內相たるべき前約を取消し首相自ら之を兼攝することと爲せしは、事情頗る諒とすべきものあるも、再三犬養毅氏の入閣を懇請して拒絕せられ、三派合同を企劃して失敗し、內閣書記官長、內務次官を初め各省の次官皆な官僚系の人物を採用して官僚の本據を堅固にしたるに關はらず、又た過般の地方官交迭に於て遺憾なく大浦系の人物を要處に配置して以て內務の事務巨細となく一に大浦農相の指圖に待つことあるを證明したる

に關はらず、尙ほ且つ子を內務の椅子に座せしむるを躊躇するが如きは姑息も亦甚だし、當り障りのなき官僚系人物を求めて此椅子に就かしめんとするが如き亦姑息策たるを免れず、大石正巳氏の如き政黨系人物あるに關はらず之に與へんとせざるを以て察すれば、內務は是非とも官僚系に保有し置くを必要とする深き事情の其間に秘されあるべきや察するに足れり。

大隈首相が曩きに國民中正同志三派を各別に招待し、其席上になせし演說に就て察すれば伯の同情が果して如何なる方面に最も深く注がれつゝあるを知るべし、其演說中政友會の横暴失政を痛罵するの一事は孰れの場合も同一なれども、國民黨に對しては、

吾輩老軀敢て至難なる目今の政局に任ずるの難きを知りつゝ尙ほ且つ國家の重きに任ずる所以は文明的帝國の位置を向上せしむるの理想を實行するに在り、懷ふに諸君は改進黨以來の舊友にして多年苦樂を共にしたる人々なり、願はくば敍上の意味を諒として共に國家の爲めに奮鬪せんことを望む、

と云ひ、而して中正會に對しては

諸君は從來一人一黨を標榜し來りしも所謂公正なる議論は必ずや歸一する處あるを疑はず諸君宜しく研磨砥礪眞正の輿論を形成利導するに努力さるべし、吾等は諸君の公正なる批評を待ち相共に政治の衝に立たんことを希望するものなり。

と云へりしが、最後に同志會員に告げたる所は左の如し、曰く

想ふに國民は桂公當年の心事に大なる疑惑を抱けると同時に諸君に對しても亦甚しき誤解を爲し變節

派と呼び僞黨と罵れり、而も諸君は些も拒絶せず專心政黨の事に從事せられたり、當時予は桂公に向ひ君は從來妥協と情意投合とを以て政策を誤れり、故に今後は一平民と爲り現狀を打破して國事に努力せられたしと勸告せり、時に公は予や誤てり今後は心して力を盡さんと誓はれたり、其後公は病氣となりて遂に再び起たずなりしも、而も桂公によりて眞に政黨の發達を來したるは慶賀すべく、今日より見れば憲政擁護の聲は名のみ美くして眞實頗る無意味なりし事明白なり、諸君の變節云々に就ては既に今日國民も亦疑を解けり、過ぐる議會に於ける諸君の行動は實に公正なりきと。

伯の故桂公及び同志會に對する推稱や至れり盡せりと云ふべく、其傾倒親愛の情自ら言外に溢ふるゝものあり、犬養氏の機微を察するに明敏なる、伯が曾て桂公の妥協策を排しながら今自ら長閥官僚と情意投合するを看破し、不離不即の間に立ち入閣を肯せざるもの亦た一見識に非ずとせず、

（二）

然りと雖も大隈伯の情誼に羈絆されたりと稱して入閣せし尾崎行雄氏及其黨與に於ては、今更大浦子の內相たる事に反對するを固執するは野暮の骨頂にあらずや、想ふに隈伯今日の心意は全然改進時代と同一ならず、當時伯が在朝の長閥を嫉視せし心は一轉して今や政友會に對する猛烈なる敵愾心となり而て却て前日の舊仇とは情意投合し同舟の好伴侶たり、大浦子または他の官僚系の人物に是非とも內務の實權を與へざるべからざるは蓋し此邊の事情に基づくもの、尾崎氏等が強ゐて前説を固持するは偶々內閣の基礎を危くするの恐なきに非ず、朝鮮政務總監山縣伊三郎氏を移して內相たらしめんとすとの説あ

り、山縣氏ならば長州系の氣受もよく又大浦氏ほど或る方面の反對を受ることなく、而して大浦子は彼が寛大なる内相振りの下に自在に辣腕を内務行政上に振ふを得べきを以て比較的調法の人物と謂ふべし然れども是れ寧ろ姑息の解決なり、吾人は尾崎氏一派に告げん、速に前議を飜へし以て大浦子をして名實ともに内相たり得るの途を開くべしと、蓋し速に有力なる專任内相を定むるは臨時總選擧を目睫の間に扣へたる現内閣に取り焦眉の急務なればなり。

世人或は吾人の忠告を以て尾崎氏の爲めに謀りて忠ならずと云ふものあらん、然れども今日の場合尾崎氏の爲めに謀りて果して策の此外に出づべきものありや、若しも尾崎氏にして如何なる場合にも長閥とは提契せずとの固き決心ありたらんには始めに於て犬養氏の如く入閣を拒絶すべかりしなり、彼れは隈伯の情誼に感激してふならずも入閣を承諾せりと云ふ、吾人は必ずしも之を否認せず、多少情誼に絆されたるは事實なるべしとするも、尾崎氏が前年隈伯の情絆を蹴破りて伊藤公に奔りしことありしを思へば、氏が感情一遍の人たらざるは明白にして、今回の入閣に就ても必ずや利害得失の打算を忘れざりしや察するに餘あり、氏が在野當時の言論主張に顧み入閣後の其位地の困難なるべきは必ず考慮に加へし處なるべし、即ち氏の持論たる軍備縮少と陸海當局の擴張意見とは到底兩立すべからざるを夙に覺悟せるならん、而して双方意見の衝突は遂に氏の讓歩を以て解決を告ぐるの外なきは氏と雖も竊に期待する所ならずんばあらず、即ち尾崎氏は前途に軍備縮少の持論を抛擲すべき運命の下に立てり、今日大浦子排斥の議を撤回するが如きは寧ろ大事の前の小事に非ずや、吾人は尾崎法相が餘り多く世間の名聞に

拘束せられて大隈伯の知遇を空くするが如きの愚擧に出づるなからんことを信ぜんと欲す。

（三）

大隈内閣は多年進歩黨の希望し且つ犬養氏が今日理想とする如き政黨内閣に非ず、寧ろ官僚七分に政黨三分を加味したる聯合内閣たるは世間も既に認識する所なり、然れども吾人は毫も此點あるが爲めに大隈内閣を攻撃せんとするものに非ず、宛も政黨を以て時の勢なりと云ふべきが如く、官僚も亦時の勢にして、官僚なればとて其人を逆賊視するの愚なることは政黨者なればとて之を國賊視するの愚と多く擇ぶ所あらず、吾人は政友會が時に桂公と妥協せしとて强て之を咎めざりしが如く、大隈伯又は尾崎氏一派が官僚と情意投合したればとて之を攻撃せんとするものに非ず、隈伯等が一方に口を極めて政友會の妥協政略を攻撃しつゝ他の一方には自ら竊かに長閥系官僚と提契しつゝあるは頗る自家矛盾の嫌あるを免れざるも、是亦た普通政客の常弊として吾人は强ゐて追窮せざるべし、寧ろ彼等が往々自家放言の祟咀の爲め苦境に陷ることあるを憫笑するのみ、

蓋し吾人は大隈内閣の官僚色彩多きを以て之を攻撃せざるも、首相を初め政黨出身の閣僚が其包容せる官僚分子及び其繞圍せらるゝ非政黨分子に向ひ大に之を政黨化するの方略を採らんことを勸告せざるを得ず、三分を以て七分を濟度せんことは事頗る容易ならざるが如きも、政黨内閣を必要とする天下の大勢は寧ろ諸氏に利なるものあり、宜しく同僚内の頑迷を開きて大政燮理の上に於て國民多年の希望を貫徹せんことを努むべきなり、先づ其第一着手としては朝鮮臺灣兩總督及び陸海兩相の任用令を改正し

文武官平等に此等の官職に就くを得るの途を開かんことを要す、此等の官職を從來現役將官に限りしは薩長藩閥の割據に便にせし所にして、昨年陸海兩相の任用範圍を擴張して豫後備將官を加ふるに至れるも、當時尾崎其他の諸氏は之を以て姑息にして改正の旨に副はずとなして痛撃を加へしは世人の忘れざる所なり、吾人は諸氏が其在野當時の意氣に顧りみ速に此等官制の改正を斷行し以て現内閣が眞に天下公論を基礎として立つものなることを事實上に證明せんことを要望す。

政府が高等文官任用令の改正に意あるは其の言明に依りて明なり、其改正の旨とする所は前内閣が各省次官を政務官扱となせしを非とし、現在の次官を事務次官として政務以外に置き、別に政務次官及數名の參事官を置き議會の答辯說明に當らしめんとするに在るが如し、吾人は此の提案の果して官僚系より出でしや否やを問はず、自ら一理あるを思ふ、蓋し近時益々頻繁ならんとする内閣交迭ある每に次官の交迭あるは行政の統一を保つ上に少なからざる障礙たるは何人も認むる處なるべきも、而かも實際行政に當れる各省次官を議會の政府委員たらしめず、政黨出身にして頗る省内の事務に熟せざる政務官を以て獨り議院内の應酬に任せしめんことは事實上果して實行し得べきや否や、若しも之に反し各省次官は依然として議會に於て政府を代表すべしとせば假令政務次官を置くも自ら無用の冗官にして、前年の官房長と何の擇ぶ所なきに至らん、吾人は必ずしも政務次官に反對せず、只だ其改正の官僚閥擁護に終らざらんことを切に希望し置くのみ、現内閣の一大試驗は同志會主張の廢減稅案を如何に處理せんとするかに在らん、若槻武富兩氏の成案にして加藤男の承認を經て發表せし該提案は決して漠然たる減稅額

を唱ふるに止まらず營業税通行税の全廢、織物税三割及び地租の七厘減を明らに擧示せるものにして、國民は今や首々翹けて其實行を望みつゝあり、其他外交の刷新、黨弊の打破、此れ皆な隈閣の責任の襲がる所、吾人は其必ず平生の抱負に顧り大に成すあらんことを希望するものなり、但し海軍の廓清に闘して八代海相の英斷頗る人意を强ふするものあり、吾人は他の方面に於ても政府が着々改革を斷行し以て大隈伯の所謂文明的政治を開展せんことを待つ、伯の責任や大なり從つて國民の伯に求むるも亦大なるを覺悟せんことを要す。

（四）

吾人は現内閣の謳歌者と云ふほどに非ざるも、其熱心なる歡迎者なり、隈閣の成立は確かに政界の一進歩と信ずればなり、近時我邦の政界は頗る混沌として歸趣を知るべからざるに似たれども、此間自ら分野の頗る鮮明に劃定されんとするの徵候あるは否むべからず、殊に大隈内閣の現出して以來政界各方面に潛伏せる人物團體等苟も多少の勢力と認むべきものに於て各々其方向を定め其態度を明かにするの必要に迫られつゝあり、桂公の出動を悦ばずして隱然貴族院に割據して時機を待ちつゝありし純山縣系の一派の如き大に現閣に同情し、他日或機會に遭はゞ寺内伯を以て大隈伯に代はらしめん魂膽ありとさへ噂さるゝ程にて、茲に一たび二分せし長閥は再び融和すべき端を示すものと云ふべく、而して他の一方に於て一時薩閥の一角と提契して世間非難の焦點となりし政友會は山本伯一派の勢力失墜と共に寧ろ純民黨の色彩を濃厚にするの傾向あるに似たり、近時政國合同談の頗る熱心に研究せられ、遂に近き將

來に何かの形式の下に兩黨の統一を見んこと蓋し勢の然らしむる處なるべきか、而して多年民黨として苦節を守りし犬養一派が政友會と合同する日には頭數に大をなすの外、大に一種の聲望を加ふるに至るべきは想像するに難からず、假令山本伯齋藤男を除きて外の薩派の一部と尙ほ提契を持續すべしとするも、此れ既に政黨化せるもの亦た異分子視するを要せず、假りに異分子と見做すべしとするも極めて少數にして、十中一二に過ぎず、他の十中八九は純然たる政黨分子なれば、政友會の向後の地位は民黨として大に勢力を振ふを得べき幾多の便利ありと云ふべし、

形勢斯の如くなるに際し一大疑問となれるは西園寺侯の起立如何即ち是れなり、侯は昨年桂內閣斃れ山本內閣の成立するや一切政界との緣を絕てるものゝ如く、或は沼津に或は京都に門を閉ぢて人に接せず、其表面の理由は病中齋戒に由り面會を謝絕すと云ふに在れども、所謂違勅事件に關し自ら責を引き謹愼の意を表せること亦た退隱の一理由たるは否むべからず、然れども今や事局紛糾し憲政の一大發展を要するの時に際し、政友會は擧つて最も熱心に侯の復活を希望し、國民黨の如きも間接に之を希望するに似たり、所謂該違勅問題に就ては天下何人も侯の心事を諒とせざるはなく、形式上事志と相違せし憾あるは免れざるも、國家多事の今日、侯が永久に形式に拘泥して政界より隱退せんとするは果して臣道を全ふすべき所以なるや否や、是れ恐らく侯の復起を希望するものゝ侯に向つて勸說せんとする所なるべし、侯は果して其政友の懇請を聽すべきや否や、又た侯の健康は近來大に快氣に向へりと云ふも果して政界の劇務に堪ゆるほどに回復せしや否や、若しも侯にしても政界に復活し再び釆配を振ふに至

らば、民黨の陣形は爲めに一段の齊整を加ふべく、大隈伯、其黨與及び後援者と相對して悠然一快戰に臨むを得べし、若しも然らざるに於ては原敬氏を總裁となすより外なかるべく、多少世間の聲望に缺くる所あるは原氏の大缺點なれども、總選擧を前にしたる今日に於て彼の技倆膽略は遺憾なく發揮せらるべきを疑はず、西園寺侯の起立せざる場合にも至らば政進合同は一層其必要を見るべく、若しも原犬養相提けて陣頭に立つに至らば、假令何の日に解散あらんも在野黨は決して其勝算なきを憂へざるべし、

來る第二臨時議會の無事結了すべきは殆んど疑なきが如くなれども、政界の變は殆んど天變地異の如く豫測すべからずして、或は不幸解散の事あるも亦た知るべからず、假りに第二臨時議會は必ず無事なるを得るとするも、次の通常議會は到底衝突を免る可らず、元來衆議院に絕對過半數の反對あるに關はらず大隈伯一派が敢て內閣を組織せしは頗る大膽の行爲にして、是非とも一度解散を斷行して信任を問はざる可らず、而して總選擧の結果尙ほ現閣に非なるものあらば大隈首相は須らく國民の信用を荷ふものを後繼者に推薦して潔よく桂冠すべきなり、斯くて天下は自ら二大政黨の樹立に向つて一步を進めたるものと謂ふべく、今や長閥も薩閥も全然其存續の理由を失し自然に人民を代表する各政黨に混和すべきの秋に際會せり、

（五月十八日脫稿）

人心の荒廢を如何

（一）

初めは數年前の政黨の廓清呼はりに起り近くは海軍及び實業界の背德摘發に及び、或は高官人の刑事問題となり又は宮內大官の隱退を促がし、餘波の迸しる所最も神聖なるべき宗教界また遂に無難なること能はず、今後旋風の向ふ所果して奈何の方面や吹荒らずらん、或は陸軍部內か司直法曹界か、嗚呼忠君愛國の權化なりと標榜せし宮內省、海軍省の要路に於てすら此種の曲事あるを思へば旋風一たび向はゞ何れの處か難を免るゝを得べき、要は背德の行爲なるものが既に事效に係れるや否や、又は巧に法網を脫すべき構造の有無如何に屬す、苟も御用商人として暴富を爲せるものゝ如き蓋し曲事の古症なきものとては一人も之あらざるべく、政府の保護に浴する大會社の如き司直の手一たび之に及ばゝ一として無難なるを得べからず、而して政界の元老又は黨界の宿老の如き僅に其一二を除きて外は容易に清廉潔白を以て許すべからず、嗚呼觀じ來れば誠に心細き次第にして、今や武士道を以て世界に誇りし帝國の面目は散々に傷けられ、青年子弟は理想の先輩を失ふて心を寄する處を知らざるに至れるは豈に遺憾の極ならずや、若しも背德の事海軍の一局に限られたりとせば之を掃除すれば自ら廓清の業成るべし、然れども不幸にして腐敗の存する處は國家社會の一部一局に止まずして、其全般に亘り殆んど一として安全の局所なしと云ふを妨げざるに似たり、譬へば病毒の全身に瀰蔓せる患者の如く、一部を切開すれば毒は

更に他方面に向つて發し、一疾去れば更に新たなる病を生じ、殆んど停止するなきと一般なり、廓清とは腐敗を除きて後に廓然爽清なるを云ふ、然れども背德腐敗餘り多く、其及ぶ所餘りに廣き範圍に及び遂に司法の手を以てしては凡ての方面に向つて悉く刀を下すべからずとせば、今日の所謂清廓は眞の廓清にあらずして、一種の威嚇に終らざるを得ず、眞の廓清を謀らんには單に司直の手にのみ依賴せず別に人心を刷新するの法を講ぜざるべからず。

（二）

吾人は眞の廓清の法を求むるに先だち、我現代の社會が一般に斯くも背德腐敗の行爲を以て滿つるに至りし原因を究めざるべからず、憶ふに之が主なる原因は維新以後我上下擧りて泰西の物質的文明を輸入するに急にして、泰西の文明にも精神的方面の在ることを閑却し、我邦人心の根蔕を培養するの方法を講ずるを怠りしに在りと斷ぜざるを得ず、蓋し維新前後の人にして始めて西洋文物の燦爛たるを觀たるものは乍ち之に眩惑し心醉し、而して禮儀習慣の我と異なるあるを見ては彼に道德なしと速斷するの弊あるを免れざりしなり、乃ち此等の先輩は道義の根蔕を培養するを努めずとも、西洋の文物をさへ移殖せば我邦は直に强國の列に參加するを得べしとなし、國家社會の改造に向つて驀然猛進せり、振古未曾有の改革の時期に際し精神方面の閑却せられしは無理ならずとするも、今日の弊を助長せしは即ち此閑却に在りと斷ぜざるべからず、如何にも明治政府の先輩は忠君愛國を說けり、教育家亦た忠君愛國の一天張にて子弟を陶冶すべく努めたり、而して之を獎勵するの方法如何と云ふに、爵位、勳章、年金、

一時賜金等ありて殆んど遺憾なきが如きも、不幸にして道義の源泉を開發して存養省察の工夫を爲すことを缺如したるを以て、所謂忠君愛國は表面の行爲に止まり、人々の志す所は爵位勳章年金を得んとするに在り、寧ろ僞善の忠君愛國に流るゝの弊に陷落したり、吾人は夙に此弊風を看破し斯くの如くして尙且つ國家の基礎動かずとせば釋尊孔子の說法も一片の反古に同じと思惟したりしが、果せるかな近時の我邦の事情に由り先賢實に吾人を欺かざるを知るを得たり。

近來邦人は動もすれば武士道を以て世界に誇らんとす、何ぞ知らん、今日の所謂武士道は昔時のそれの如く、人心の奧に根ざせる生ける花蕚に非ずして一種の造化に過ぎざることを、殊に武士道が世界の流行語となりし以來模造品は一層增加せるの觀あり、譬へば一種の特色ある割烹店が一たび世間の評判に上り、其家を增築して以て多數の顧客を迎ふるに腐心するや乍ち本來特色の料理も大に品質を落すに至ると同じく、武士道も一たび世界の呼物となりて品質下落せり、是れ他なし、其根蔕を培養するの法を忘れたればなり、何をか根蔕を養ふの法と云ふ、之を歷史的に觀れば儒佛の感化に待つ即ち是なり、儒道は倫理の素養を與へ自反省察、克己復禮を敎へ、佛敎は殊に禪學に依り名利に超越し死生を解脫するの工夫を授けたり、是れ武士道の根蔕にして、其花果の美なる因緣實にこゝに在り、然るに維新以後儒佛の感化も皆無に歸し、舊社會の墮力に依り僅に多少の精神的素養を存したる耳、近來の青年は先輩なるものが其不謹愼の行爲多きに關はらず尙且つ社會の權威者たるを得るを見て、彼等も亦相率ゐて背德の事を爲し只だ表面法律に觸れざるを以て足れりとするに至れり。

試みに千有餘年間事實上我邦の國教たりし佛教徒が近年果して如何の態度を持せしかを觀るに、毫も國家の危機を解せるの狀なく輓近稍々活氣を加へ來れるが如きも是れ偶々外來の基督教に刺激せられ、其傳道の方略に倣ふて活動するに過ぎず、教學を興こし、教を海外に傳へ、殿宇を建立する等施設の見るべきものなきに非ざるも、毫も精神の一新を見ず、之を彼の天主教が舊組織の中幾多の腐敗を包藏するに關はらず、ゼズイツト、フランシスカン等修道院の中より不斷に得道の人材を輩出して以て宗教の命脈を新たにするに比すれば殆んど天地の別ありと云はざるべからず、而して新來の基督教は如何と云ふに、傳道開始當年の改革的英氣は疾に消磨し、其後多少の成功に安んじて將に第二の佛教徒たらんとするものゝ如し、是れを思ひ彼を思ふ、吾人は實に天を仰ぎ地に俯し我國家の前途に對し深慨せざらんとするも得べからず、

(三)

人あり吾人に告げて曰くシーメンス事件起つて以來各方面の醜事爆露し來れるは歎息すべきも、必ずしも之あるが爲めに狼狽するを要せず腐敗行爲は歐米諸邦の常事たり、宗教の如き西洋も亦た頗る不振の狀態に在りと、吾人は此種の議論を聞く每に未曾て論者の不明を笑はずんばあらず、吾人も亦た歐米に於て宗教の感化周ねからずして、倫理道德の制裁頗る薄弱なるを知る、政治界の腐敗、御用商人の醜事往々我邦に於て見るより却て甚だしきものあるを知らざるに非ず、然れども吾人が歐米の社會狀態を觀て感歎措く能はざる所以のものは社會の一方に道德紊亂の行爲夥だしく、單に此方面のみを觀れば亡

國の光景髣髴として蔽ふ可らざるが如きも、更に轉して他の方面を觀察すれば綱張り紀理まり、輿國の氣象蔚勃として存するを認めずんばあらず、宗敎の威權も巍乎として存し尙ほ社會の一大制裁力たるを失はざることは否む能はず、其敎壇よりする說敎亦た識者の敬聽に價するものありて、汎く普通人民の歸依を受くるあるは疑ふべからず、貴族富豪の家庭往々にして紊亂の醜聞を法廷に流すことあるは事實なるも、一夫一婦の道を守りて理想に近き家庭の存在するもの少なからざるも亦た事實なり、而して其公人に就て觀るに言質を履み責任を重んじ、廉潔の行あるは到底我邦政治家輩の及ぶ所にあらず、茲に於て政治界にも實業界にも將た文學界にも一方の權威者ありて萬衆の仰膽する處となる、即ち幾多一世の木鐸たるの人物ありて國民を指導し、宗敎の信仰は一般人民をして法律利名の外、冥々の裡に自ら天地神明の制裁に服せしむるものあり、若夫れ國步艱難に際しては、信仰の威力は國民をして失望落膽に陷らしめず尙ほ前途に向つて向上邁進の勇氣を奮起せしむるものあり、試みに之を佛蘭西の例に鑒みるに獨逸と戰ひ敗れ城下の盟を成して以來茲に四十餘年、內憂外患頻りに臻りて幾度か列强の輕侮を受くることありしに關はらず、近年に至りて共和政體の基礎漸く定まり、政界統一の傾向頗る著明にして、第一等國としての威風大に加はり來れるが如き、偏に多年敎養の賜なりと云ふべきに非ずや、而して碩學ベルグソン出て世界の思想を指導するに足るものある亦是れ佛人近來の一大面目たらずとせず。

（四）

吾人は我邦に背德醜事の多きを憂へず、之を排除し進んで國家社會一段の向上發展を期せんとする希

望信仰の頗る薄弱なるが如きを憂ふ、海軍瀆職事件の爆發してより茲に五箇月に及び、餘波の及ぶ處海軍省以外幾多の方面に怪我人を出だし、蜚語風説は幾多元老先輩の名譽を傷け、青年子弟をして其適從する所に迷はざるを得ざらしむ、國民個人として國家及社會の前途に對し危惧の念ある今日の如きは稀有の事に屬す、此時に當り平素綱紀を張り世道人心を補益するを以て任とする我宗教家學者輩の未だ一人として言論に文章に大に時弊を痛論して救濟の法を敎ゆるなきが如きは吾人の深く遺憾とする所ならずとせず、獨り澁澤森村の二紳商あり深く時勢に慨し數十萬金を投じ自助會なるものを起し大に世道人心を補益する處あらんとすと傳ふ、吾人は實に空谷の跫音として大に此擧を歡迎せずんばあらず、但し斯の如き運動の成功すると否とは一に其方針手段の如何に在りと云ふべく、而して初一歩に其道を得ざれば後に改むるも詮なきことゝなるべし、自助會なるものゝ目的方法等に就きては未だ何等の公表せるものなきに際し批評がましき論議を試みるは早計に屬するに似たれども、吾人は其成功を祈る同情心より聊か豫め一種の忠告を試みる所あるべし。

今日の我邦に處し大に世道人心を補益せんとせば周ねく公德の重んずべきを敎へ、背德者に對する社會の制裁を嚴正にすべしと云ふは何人の心にも浮ぶべき方法なるべし、然れども斯の如きは今の時勢に對し果して適藥と云ふべきか、吾人は疑なき能はず、社會の制裁を嚴重ならしむれば自ら破廉恥の行爲を抑制するの効果あるべきは論を待たずと雖も、其制裁なるものをして眞に威力あらしめんとせば社會を組織する道德的人格の發表たらしめざるべからず、若しも然らずして道德の根柢乏しきに關はらず強

ゐて制裁を嚴正にせんとせば一種の憂ふべき弊害を齎らさゞるを得じ、例せば法廷の制裁を受けざるものは悉く善人と見做し其集合意見を以て社會の制裁と認むるが如きは場合に依れば却て僞善者の階級を現出するの恐なき能はず、而して僞善者の階級を現出するが如きは實に亡國の一大原因を作るものと云はざるべからず、更に具體的に之を論ぜんに刻下の問題たる收賄罪又は賄賂行使罪の如き世人は隨分廣く各方面に行なはれ來れるを信ずるものゝ如し、只だ問題は其事件が果して法律の制裁に觸れるや否やにあり、觸るれば即ち惡人たり未だ觸れざれば假令其事實疑なきも善人として制裁を人に加ふるの位置に立つと云ふに至りては實に奇怪至極にあらずや、而して世人は只だ法律に觸れんことを恐れ、法に觸れざるの方略あらば如何に惡事を行ふも勝手たりと云ふに至らば國民道德の根蔕茲に破滅せざるを得ざるべし、昔者耶蘇の猶太國に教を說くや、學者とパリサイの徒は國家の要路を占め智識を衒ゐ善行を僞り、耶蘇を十字架に釘して其國遂に亡ぶ、又印度波羅の教徒は多年一切平等なる佛教の下に雌伏したりしが、一たび勢力を恢復するや、佛徒を迫害し佛教を撲滅し階級制度を復活したれば其國亦た亡び外來異民族の有と爲れり、僞善の風を助長するの弊に對しては豈深く警戒する所なかるべけんや、

今や我國人は久しく形式的道德に拘束せられて其良心は自然の本能を忘れたるものゝ如く、偶々各方面上流有力者の犯罪續々露顯するに際し殆んど茫然自失の態にあり、人心荒廢の光景亦た多年パリサイ僞善者の指導に誤られし猶太當時の狀態に髣髴たりと謂つべきなり、此時に際し自助會の組織成り將に大に世道の廢れたるを興さんとすれば、其の執るべき運動の方針果して如何せば可ならん、吾人を以て

忌憚なく意見を云はしむれば、吾人は云はんとす宜しく洗禮ヨハネに倣ひ悔改の說法を以て始むべしと自助會員たらんものは必ず比較的正義士なるべきも、若しも諸氏にして自個の正義を基として世人を警醒せんとするが如きあらば是れ初一步を誤るものと云はざるを得ず、自助會の運動は會員自らの反省を以て始めざるべからず、各自先づ以て自反悔改して後に、首相閣員を初め軍閥黨閥財閥に及ぼし、教育界に及ぼし、一般人民に及ぼすを要す、國民全體現今の虛僞の風を一掃し、眞面目なる本心に立歸りて後ち初めて刷新の効を期待すべきなり、記せよ罪を悔ゐ碎けたる心の奥には神も佛も住へることを、吾人は自助會の主唱者諸氏が能く此邊の機微を察し其方針手段に於て誤るなからんことを切に希望せずんばあらず、今日の我邦の必要は道德の說法にあらず、荒廢せる國民の心の沙漠に幾多の活ける泉源を開き以て人心を蘇生せしむるに在ればなり。

國力發展の急務及方策を說いて國內の政爭に熱する人々に與ふ

嶺八郎

予は最近十餘年間專ら海外に在りて、我が國力の發展と、我が民族の膨脹の爲めに、些か講究する所あり、又些か盡瘁する所あり。帝國百年の長計を策せんと欲すれば、我が朝野の政治家は勿論、一般世人と雖も、今少しく其眼孔を大ならしめ、今日世界の列强が如何に自國の發展膨脹の爲めに腐心しつゝあるか、又之が爲めには如何なる方策を執りつゝあるかを顧みて、速かに我が對外の根本方針を確立し、產業、軍事は勿論、其他百般の施設皆此の大方針より割り出し、擧國一致以て之が遂行に努力せざるべからざるを深く信ずる者なるが、最近二三年に於ける我が國情如何と見れば、多くは國內に於ける政爭に熱中して、其志す所、爲す所、自己及び自己黨派の利害の圈外に出づるもの殆んど稀なり。若し永く斯くの如くにして推移せんか。我が帝國は內、國力の萎靡沈衰を見、外、國威の不振失墜を來たし、他日必らず噬臍の悔を貽さんこと疑を容

れず。固より我が帝國の今日は、權力移動の過渡期にして久しく一部に壟斷せられし權力が、稍々國民的に配分せられんとするの時運に際會しつゝあれば、多少の政爭は已むを得ざる現象として之を默認せざるを得ずと雖も、今日の如く上下擧つて之が爭奪にのみ熱中し、自己、自黨の外に日本帝國あり、日本民族あることを忘れ、日本帝國、日本民族の外に、世界の列强あり、異人種あることを忘れんとするが如きは、是れ實に我が國家の政爭中毒の重患に罹れるものにして、心あるものゝ深憂に勝へずとする所なり。予は朝鮮、滿洲、臺灣、樺太等我が新領土に於ける經營の實際を根據とし、以て具體的に我が海外發展の未だ大いに足らざることを指摘せんと欲するも、歸國匆々今其暇を得ざるを以て、そは他日に讓り、次に少しく學理的に、若くは概括的に、國力發展の急務及び方策を說いて、天下有識の士の一考を煩はさんと欲す。若し之によつて幾分にても、國内政爭の迷夢を醒まし、海外膨脹の大道に導くの緣ともならば、予が願や即ち足れり。

我國の人口は年と共に加はり、其結果常に食料品の不足を來たし、單に米のみを以てするも、外國より輸入するもの、一ヶ年四千萬圓餘を算するの勢にして、此勢は今後益々盛んならんとするは、朝野共に研究すべき重大問題なりといはざるべからず。何となれば之が結果は直ちに生活難となつてあらはれ、今日往々良家の子女にして其節操を賣り以て生活を援くるが如きあり、又止むを得ずして窃盜或は詐欺に類する如き犯罪行爲を敢てし、以て一身一家を養はざるべからざる現況を見るに至れるは單に經濟問題のみにあらずして、實に一國々民生活の根本問題なりと云ふを妨げず。今之を精確なる資料に據つて研究し見るに、此趨勢は人口の增殖と共に益々其度を加へ、私生兒の出産率及び租稅滯納者の數は年々激增を見、救貧院の恩惠に浴し又は養育院の扶育に訴ふるもの亦歲々其多きを加ふるは、誠に慨嘆すべき現象にして、之が一面に於ては國民性の墮落を來たし、國家に對する觀念は不知不識の間に薄弱となり、一朝有事の場合に際し、賣國

の跡を續出すること之なきを保せず。是れ豈に一二軍人號が秘密圖を賣りし底の一小事に止まらんや。

獨逸の如きは、嘗て年々の人口增加約九十萬餘を算し、外國より輸入する穀物は年六百萬噸を示し、生活難の聲は到る所に囂しく、終に我にパンを與へよ、否らずんば死を與へよの叫びを發するの狀況に迫り、を以て、獨逸政府は此等に對する根本政策を確定し、官民一致之が實行に當りしが爲め、漸次經濟上の發展を來たし、先きに貧弱國として世界の一瞥だも得ざりし獨逸帝國は今や世界の覇權を握る商業國たる英國を凌駕し、製造工業の王者たる米國を震駭せしむるの勢を呈し、其狀恰かも旭日の天に冲するの概あり。是れ抑々何の原因によつて然るか。

顧みれば一八一八年より所謂三十年戰爭なるもの起り、國民の壯丁は悉く兵役に服し、其結果大半無慙の死を遂げ、一面に於ては戰爭の爲め各般の產業荒廢に歸し、事に當るべき壯丁は殆んど無く、村落は全く人煙を認めざる所さへ生じ、都邑亦極めて沈衰の狀態にして、國民擧げて老幼に非ずんば婦女多きを占め、資本亦枯渴して國民を養ふべき產業なるもの殆んど見るを得ざる有樣にして、只一日の生活を求め明日の計を如何にすべきやを知らず、相率ゐて詐欺、竊盜、甚しきは白晝公然强盜をなすの悲境なりしに加へ、更に一七五六年より所謂七年戰爭なるもの起り、產業の不振、國力の衰退一層甚しきを來たし、殆んど亡國の慘狀を呈したりき。殊に當時の獨逸は陸上の交通便ならず、港灣として只ハンブルグあるのみの有樣にて、從つて一も海外市場を有すること無かりし所の獨逸帝國が、今や其織物工業は一年約三十萬マクルを產して我日本の四倍弱を示し、農產物は百三十億マルクにして我日本の十二倍を示し、輸出は我に九倍し、鑛山業は我に六倍半し、會社の經營資本は我に十三倍するの盛況にして、ウエルニツケ博士の所論によれば、我帝國の如きは到底獨逸の競爭者にあらざるを論證し、彼の黃禍說の如きは淺見者の俗論にして一顧の値なき旨をも極論するに至れり。更に獨逸の經濟的要件につき瞥見すれ

ば、氣候は寒冷にして我帝國の如き温暖にあらず、土地は多く磽确にし豊沃ならず、加ふるに地理的關係に於て我帝國の如く四面良港なく、陸上亦運輸に資するの河川なく、殊に我帝國の如く寒温熱の三帶を有せず、從つて各種の産物に富まざるに、前述の如き隆盛を來たすに至りたるは、國民性其他の原因あつて然るものなるも、一に帝國が産業政策を確立して、官民一致、營々之が遂行に盡力したる結果ならずんばあらず。故に我が帝國の如きも、速に産業上の大方針を確立し、更に海外發展の方策を樹立して上下共に之が貫徹に努むるあらば、方今負擔する所の廿數億の負債を償却し、國民經濟の基礎を堅實ならしむること蓋し至難の業にあらざるべきを信ずるなり。

　佛國の碩儒ルロア・ボリユーは獨逸の人口增殖に關し、今後百年間には三倍即ち二億の多きに到達すべく、從つて獨逸帝國の問題は

（一）如何にして此殖增人口を養はんとするか。

（二）如何にして此增殖人口を收容せんとするか。

（三）如何にして人口增殖より襲來する經濟的及び社會的諸弊を調節せんとするか。

等なりと論斷せしが、此等の諸問題は獨り獨逸帝國のみの專有問題にあらずして、實に我帝國現下の最大最重の問題たるは、我人口增殖の甚だ大なるを知るものの等しく認めざるを得ざる所なるべし。

　抑々世界の國家經濟に關する方針は、其國家又は其民族により趣を異にするあるも、其歸する所は、自給排他の一事を以て、國家經濟の獨立、民族膨脹の大方針となさゞるはなし。蓋し國家百年の長計としては、之を內に在つて解決するか、若くは外に對して解決するかの二途あるのみにして、獨逸の如きは一時海外移住の政策を妨止し、生産的人口を國內に止め、之によつて産業振興の要具となし、資本積集の制を設けて、資本利用の法を開き、更に或は米國より、或は露國より、或は英國等より原料品を輸入し、之に獨逸人の研究し得たる學術上の應用を試み、以て低廉なる勞力により各種の製造品を作製し、之によつて國民生活の基

礎を立てんとしたり。即ち人口の增殖に伴ひ、此等製品の消費力を增加したるも、年々の增殖は到底國內產業の發展のみを以て之が救濟を行ふこと能はざるより、更に海外に向つて市場を開設し、由つて以て自國の製造品を賣捌き、貿易上によつて國民經濟の基礎を樹てんとせり。彼の海軍擴張を唱導したる根本理由は實に此海外貿易を擴張せんが爲めにして、即ち海軍擴張は其主眼を商權擴張に置き、海軍をして商業の先驅たらしめんとするにありき。之を以て或場合に於ては自國の製品を海軍の御用船に積載し、軍需品として一時販路地に上陸せしめ、更に或期間の後不用品として或商人に拂下げ、商人は之を有利なる方面に販賣することの形式により、其商權を擴張したるが如きは其一例に過ぎざるも、要は自國の製品に對し、運賃及び關稅を免れしめ、以て他の競爭品を壓倒せんとするの目的より出づるに外ならざるなり。即ち之を他の半面より觀れば、海軍省も、拓殖務省も、其他の官憲も悉く一致して事に當るのみならず、之に關係の商人も亦其目的に從ひ、所謂官民一致海外貿易の發展に盡さゞるなきの狀態を見るに足るべし。十八世紀の中葉にありて獨逸より他に輸出するものは、音樂、哲學及び詩の外は、單にリンネルの一品を數ふるに過ぎざる有樣にて、十九世紀の末葉に於ても大體に於て異る所なかりしを以て、佛國人は獨逸の輸出品を主に砂なりと罵倒せるは蓋し此等輸出品を船舶に積載するに當り、其量甚だ少かりしを以て、其容隙に砂を詰めたることを嘲けりたりしことを追想すれば、實に隔世の感なきを得ざるにあらずや。今單に英國のみへの輸出を以てするも、總貿易中の約十六パーセント(六億マルク)を算し、英國の輸入貿易中第一位に居り、而かも其品目は獨逸人の製造に係る毛織物、綿製品、或は砂糖の類其多きを認むるに、此等の原料品は即ち英國又は其殖民地より獨逸に輸入せらるゝに見るも、如何に獨逸人は他國の原料品を持來り、學術的應用によつて之に加工して他に輸出するかを見るに足るべし。

然るに我帝國の現狀は、其根柢に於て誠に寒心に堪

へざるもの甚だ多きにも拘らず、世の所謂識者若くは爲政家なるものは、只單に目前の問題にのみ焦慮し、或は一黨一派の勢力を扶殖するに勉め、若くは自己の權勢を擴張する位の事を以て能事となし、甞て此等國家の大計に關して深慮計畫するものあるを多く聞かざるは痛嘆の至りに堪へず。若し夫れ深慮熟考の上帝國の爲め百年の計を樹て、内に於て人口增殖を利用して産業の要素となし、之によつて農工業の發展を圖り、更に海外發展の方策を確立し、内外相待つて國民經濟の發達を求むるに至らば、獨逸帝國の發展に對して遜色なき結果を得ると決して難事にあらずと思ふ。要するに内に對し、將た外に對する國家經濟の大方針を確立し、官民一致之が遂行を期するの一事あるのみ。

更に顧つて我帝國の産業的要素を見るに、産業の基礎たる石炭に富み、又銅に富み、鐵の如きは隣國の支那其他より低廉なる供給を得べく、增殖人口によつて低廉なる勞力を得べく、更に四面環海の我國なるを以て良港到る處にあり、工業幼稚にして而かも年々消費力の增加する市場は隣邦支那あるのみならず、印度、濠洲等あり、又パナマの開鑿と共に米國方面亦一段の需要を增加することゝならん。彼の海軍擴張の如きも、帝國の貿易を振暢し、商權を確立すること、獨逸帝國の如き趣意を以てするに於ては、國家の爲め極めて意味ある計畫たるも、單に軍備擴張の爲めの軍備擴張たるに止るに於ては、我等は之に贊成するに躊躇せざるを得ざるなり。

産業政策の確立、海外發展の方策等は無論政府及び國民が之を一定して、其遂行を期せざるべからざるが、之が準備として必要なる事は一にして足らず。

先づ第一の要件たるものは、國民の歸嚮を産業の發達及び海外發展に向けしむるの制度を採らざるべからず。彼の獨逸の如きも、經濟的要素十分ならざるに拘らず。今日の隆盛を來たしたる所以は、國民性をして産業に對して適合せしむる如く訓練したるもの大いに與つて力ある所なり。蓋し獨逸の如きは氣候寒冷にして農業上の收入多からざるが爲め、勢勤勉其業に從

はざれば其生活を維持すること能はざるのみならず、忍耐持久よく其職に堪へざるべからざるを以て、國家の教育も亦之を導くに非常の苦心を費せること掩ふべからず。殊に注意すべきは獨逸が軍隊生活に於て養成せられたる柔順の德性を、産業上に應用せることなり。即ち秩序ある産業組織に於て、柔順にして勤勉なる勞働者として働けるは、其成功の一大原因ならずんばあらず。夫れ故に我帝國の如きも斯の如き邊に注意し、我教育の方針を定めざるべからざるなり。

第二は、從來の獨逸は國民にして教育あるものは軍人にあらざれば役人。辯護士にあらざれば即ち醫者と云ふの傾向なりしに、政府及び國民は其氣風を一變し、此等有爲の子弟を多く産業上に集中し、經濟上實業上に於て其一身を任かし、自己の運命を開拓するの空氣を漸次に馴致し、父兄も亦遺産を子孫に殘すことよりも寧ろ子弟に教育と訓練を與へ、子弟自ら實業界に於て自己の運命を拓くの方針を採れり。我國に於ても斯くの如き氣風を養ふこと最も必要なりと信ず。更に下層の子弟に至りては多少の教育を施したる後、專ら善良なる職工又は勞働者として、少年時代より秩序ある仕事に從事して、幾多の訓練を受くることの習性を馴致し、人口増殖に伴うて訓練あり且つ經驗に富む職工増加し、從つて一國の産業力を發展せしめしこと甚だ多し。此點も亦我國の大いに參考せざるべからざる所也。

第三には、形而上の法學、哲學等漸次冷却せられ、專ら産業上にとつて有益なる器械學、應用化學、若くは鑛山學、或は農業改良學の如きものを漸式發達せしめしは、獨逸勃興の一因なるが、我國も亦之に倣ふの必要あり。尤も近來我國に於ても、高等農林學校、高等工業學校等の數が增加し來りたる如きも、若しも之が政府の産業上に對する大方針より施設せられたるにあらずして、只漫然斯くの如き學校を建てたるに止らば、其功果の比較的少かるべきを恐るゝものなり。

國内産業としては先づ國内に於ける農業の改良を計り、各種の原料品の産出に勉むべきは勿論なるが、我

發が茲に最も識者の判斷を乞はんとするは、產業の分布—換言すれば地方的產業の分布に關する方針を確立せんと即ち是れなり。日本の如き寒溫熱の三帶を有する土地にあつては、各地方の土質氣候等も自ら異るのみならず、殊に西に朝鮮及び滿洲あり、南に臺灣の領土あり、北に北海道樺太あり、自ら經濟上の要件異るのみならず、氣候土質著しく異る故、自ら產業分布を要求するは必然の勢なり。此等の地方が特殊の產業を確立して之が發達に勉むれば、經濟上比較的多くの成果を奏するのみならず、國家の內にあつても互に有無相通ずるの端を開いて、國內貿易の發展を見ること蓋し少からざるべし。更に此等地方に於ける特殊の原料を以て諸般の工業を振興すれば、海外の市場に向つて輸出するの途を求むるも亦難きにあらざるべし。然るに內地といひ、或は朝鮮といひ、若くは臺灣といひ、此點に關しては些か矛盾を免れざるもの往々あるのみならず、互に調節を缺くの嫌あり。是れ蓋し產業の分布なる大方針が未だ決定せられざるに職由す。夫れ故に此等の方針を確立するに於ても、內地と各新領土との調和統一を計るが爲めに、所謂殖民地會議若くは產業統一會議の如きものを開くを可なりと信ず。更に進んでは或種類の農業若くは工業に對しては保護政策を採らざるべからずと思ふ。但し根本に於て獨立經濟の立たぬものに對して飽くまで保護するは國家其煩に堪へざるのみならず、事業振興の根本義に反するを以て、斯くの如きは之を廢せざるべからず。所謂溫室政策の如きは勿論之を避くべきものにして、一時溫室に養うても、他日野外に放つて獨立の發達を遂げ、開花結實の見込なきものは之を保護するも益なきものなり。彼の臺灣の砂糖の如き蓋し一例ならずんばあらず。又場合に於ては獨り積極的に之を保護するに止らず、又消極的に關稅によつて之を保護し、以て國內に於て外國品と競爭し得るのみならず、進んで海外に於ても其競爭に於て勝算あるの程度にまで成長せしめざるべからず。嘗て獨逸の經濟學者リストが頻りに保護政策を唱ふるや、當時の獨逸政府はリストの說を迎へざるのみ

ならず、之を虐遇し、リストは遂に憤慨の極自殺せり。其後ビスマークはリストの説を採用し、苟も見込のある事業に對しては、消極的に又積極的に之を保護し、遂に今日の獨逸帝國の隆盛を見るに至れり。今日に於ても物により、場合により、處によりては保護政策の必要少しも昔日に減せず。我帝國の如きも、海外發展を計るに當つては必らず先づ保護政策によつて、國內の產業を奬勵すべきは勿論なるも、海外に於て國民が經營する事業には一層其保護を加へざるべからずと思ふ。若し之を等閑に附せば、我が國力の發展、民族の膨脹は到底期すべからずして、國內に於ける不祥悲慘なる幾多の社會問題を續發すべきを疑はず。

一國の爲政家たるものは勿論、一般國民も亦深く思を玆に潛め、徒らに國內の政爭に熱中することを罷め、我が國力を外に發展せしめ、我が民族を世界に膨脹せしめんとするの方策に向つて驀進せんことを希望せざるを得ざるなり。

大隈伯の日英經濟同盟論を評す

松山忠二郎

大隈伯は頭腦が明斷と云ふので評判であるが、今度發表した支那に於ける日英經濟同盟論は愚論であると思ふ、到底一場の法螺に過ぎないので、出來ない相談と考へる。

大隈伯は如何なる方法を以て日英兩國が經濟同盟を作り得ると信ずるか。其話として世間に知れてある所

ては、英吉利が金を出して日本人の手で支那で仕事をしようと云ふ事である。詰り英吉利の資本と日本人の頭と同盟をしようと云ふ譯である。之は多分、英吉利では金が有り餘つて居る。さうして支那に於て有利な事業に放資せんことを希望するに拘らず、支那の事情に疎い、支那の事情は同文同種の日本人の方が餘計知つて居る。そこで彼の有り餘つた所を以て我の不足するものに供給する。即ち需要と供給と相一致するから、そこで經濟同盟が出來る、と斯う觀察したに違ない。成程自然の成行に任かしたなれば、こう云ふ具合に進む傾向があるであらう。然しながら之は所謂自然の發達を俟たなくてはならぬものである。人爲的に經濟同盟を作ると云うて出來るものでない。政權を以て、彼に金を出せ、我に仕事をさせよと命令した所で出來るものでない。即ち政治上の約束で俄かに出來るものでない。そして政治上の約束で出來ないものであれば、同盟とは云はれないのであつて、之は單に自然の成行又は發達である。成程英吉利人は資本を澤山持つて居るに違ひない。そして支那の事情は日本人の方が餘計知つて居るに違ひない。從つて英吉利人が日本人を信用すれば其金を日本人に供給するであらう。又日本人も英吉利人の資本を利用する方利益ありとすれば借れるに違ひない。が之は英吉利の臣民と日本の臣民とが個人々々に互に利害關係を打算して其上で出來るものである。人爲的に日英經濟同盟を拵へて出來るものでない。實は日本人で斯樣な事を考へたのは大隈伯許りでない。此前の西園寺内閣の時にも一度之を考へたのである。そして失敗の證據が殘つて居るのである。西園寺内閣の時には堂々と日英經濟同盟といふやうな名は用ひなかつた。然し恰度大隈伯が云ふたのと同じやうな事を遣らんと企てたのである。それは何であるか。今現にある日佛銀行である。日佛銀行の目的は佛蘭西の金を持つて來て、日本人の手で東洋に於て仕事をしたい。專ら支那に於て仕事をしたいと云ふのが趣意であつた。恰度大隈伯の考へて居るやうな事をやらうとしたのである。そして此銀行は日本政府が後援となつ

て拵へたものであるから、佛蘭西人にとつては最も信用を置くに足る銀行である。そして資本の方から云へば佛蘭西の方が英吉利よりも餘程潤澤である。國の富は英吉利の方が多いかも知れないが、使ひ途の無い遊資に於ては佛蘭西の方が多いのである。そして佛蘭西の方が外國人に金を貸す習慣が多いのである。英吉利人は自分の資本で以て自分で仕事をする傾向があるが、佛蘭西人は自分の貯蓄したもので外國の公債を買つたり、信用ある銀行に預けたりする習慣である。であるから佛蘭西の資本を以て、日本人の手で支那で事業をすると云ふ事は最も適當して居るのである。此點より云へば日英經濟同盟よりは日佛經濟同盟の方が最も行はれ易い譯である。然るに此銀行の設立になつた結果は如何であるか。其原因の何れにあるやはよく分らないが、現今の處では全く活動しない。佛蘭西の資本家も思ふたやうに金をよこさない。日本の事業家も佛蘭西の資本家を惹き附ける程有利な事業を支那に於て發見しない。そして折角の企ても今は有名無實である。之が大隈伯の所謂日英經濟同盟が事業上出來ない活きた證據である。斯う云ふ證據のあるに拘らず、大隈伯が日英經濟同盟を拵へようと云ふのは實は愚論といはなければならない。

尤も佛蘭西と日本とは極めて親善な關係にあるが、尚政治上の同盟を作つてゐない。然るに英吉利は云ふまでもなく日本の同盟國である。此理由から云へば日英の方が接近し易い譯である。そして經濟上の事は多少政治上の事からインフリユエンスさるゝことを免れない。感情と云ふものは妙なもので條件がよいからと云つて、何處の國へでも資本家は金を貸すものでない。現に露西亞と獨逸との最初仲の善かつた時分、露西亞は獨逸から澤山金を借りた。露西亞の公債と云へば多くは獨逸で發行されたものである。處が其後露佛同盟が出來た。それから以來は佛蘭西の資本が主もに露國に入ることになり、佛蘭西人が露西亞の公債を買ふ。そして之まで露西亞の公債を買つた獨逸人は買はなくなつた。のみならず、最初佛蘭西と英吉利との間

が具合のわるかつた時分には、佛蘭西人は露西亞の公債を買つても、英吉利人は決して買はなかつたものてある。然るに其後英吉利は佛蘭西とも仲が善くなり、露西亞とも大いに接近するやうになつてから英吉利の資本家はボツ／＼露西亞の公債を買ふやうになつた。箇様な譯てあつて、政治上のインフリユエンスが經濟上の利害關係を多少支配することはある。が大體は經濟同盟と云へば利害關係から割り出した結果てなくては出來ないのてある。利益さへあれば隨分敵國の公債ても買はない事がないが、利益がなければ親善の間柄ても必ずしも買はない。現に明治三十七八年戰役の時分に、日本は佛蘭西の同盟國たる露西亞と戰爭したのてある。だからして露西亞の敵は即ち佛蘭西の敵と云うてもよいのてある。にも拘らず日本が有利な條件て公債を發行すれば佛蘭西人も應じたのてある。經濟同盟は主もに利害の上から打算されるのてあるからして政治上の權力て束縛せんとしても出來る事てない。利益があれば捨てゝ置いても出來るし、不利益なればさせようと云うても國民が承知するものてない。故に大隈伯の云はるゝやうな日英經濟同盟といふものは歐羅巴でも亞米利加ても出來た例がない。さう云ふ實例は一つもない。之は實際出來ないからてある。嘗て支那に對して日英獨佛露の五ヶ國が同盟して金を貸した事がある。所謂五國借款と云ふものをやつた。之は政治上の權力を以て單に支那政府を縛るのみならず、五國の資本家を縛らんとしたのてある。之は或意味に於て經濟同盟といへるかも知れない。が之も到底其目的を達しなかつたのてある。支那では同盟以外の資本家から金を借りるのを便利としていろ／＼の資本家から金を借らうとした。現にクリスピーが種々な人と借款の契約までした。貸す方ても此同盟に加はつてる以外の資本家から頻りに借したがつた。英吉利ても香港上海バンクは此同盟に加入して居たが、チヤータード以下他の銀行家は此仲間入りをして居なかつたが爲めに酷く苦情をいひ唱へた。斯く借りる方も貸す方も双方共此同盟に滿足しないて到頭五國借款團と云ふものは毀

れて了つた。斯う云ふやうな譯で以て、經濟上の事は政治上の事と違つて、國と國と同盟した所で目的は達せらるゝものでない。國と國と約束しても肝腎の臣民がそれに贊成する場合もあるし、反對する場合もあるので、始終統一的の行動を取ることは出來ないのである。日英經濟同盟などとは大隈伯としては近來の愚論である。

政界教界に動ける新氣運の到達點

文學博士　井上哲次郎

大正年間となつて政治界を初めとし、宗教界其他の方面に於ても隨分甚しい變化を來たすやうな有樣である。尤も從來宿弊となつて横はつて居つたやうな事が隨分多かつたのであるからして、それ等が斯かる際に打破し去つて、そして新氣運を促すと云ふやうな事は進歩の爲めに必要であらう。どうしても世の中は絶えず改良刷新して行くやうな元氣が充ち滿ちて居らなければならぬ。さうせぬと云ふと、兎角惰眠を貪つて沈滯して行くやうな恐れがある。心理學的に云うても、意識と云ふものは刺戟によつて明瞭になる。刺戟が除（と）れると、意識がサブサイドして不明になる。そして意識が明瞭になるのは即ち自我が顯著になる所以であつて、刺戟の必要は此點から觀ても明かである。社會も矢張り同樣である。何時まで經つても何等目醒ましき變化もなくして、新氣運の生じて來るやうでなければ萎靡沈滯を免れぬのである。

只然しながら今日は、いろ〳〵なる方面の變化が、目まぐるしき程一時に起つて來るやうな有樣であるが爲めに、抑々此新氣運は今後どう云ふ風になるであらうか。そこにいろ〳〵な疑問が起る次第である。殊に

政治の方について見ると、從來藩閥などゝ云ふものがあつて、そこに政治上の權力が集つて居つた有樣である。處が藩閥が次第に淋びれて見る蔭もなくなつたやうに思はれる。藩閥も初めは餘程明治の文運に貢獻したてあらうけれども、樣々の弊害を產み、遂に其弊害に勝へぬやうになつたので、各方面からして反抗の聲を舉げて之を打破することに努めたのである。藩閥の方では餘程氣勢の衰へて居る時であつたからして遂に窮境に陷ることになつた次第である。今後政治上の權力は、さう云ふ藩閥に再び歸しようとは一寸考へられない。恐らくは永久藩閥は權勢を失ふ事であらうと思はれる。然らば今後どう云ふ所に政治上の權力は移つて行くてあらうか。之はなか／＼大問題てあつて、輕々しく云ふ事も出來ず、又ハツキリ分つた事てもない只揣摩臆測して見る丈けの事てある。尤も誤解してならぬ事は、帝室に對する考てある。帝室は之はもう古來日本國家の中心點てあつて、國民中に於ける重鎭てある。之は過去に於て然りと云ふのみならず、今後と雖も永久變るべきてない。即ち帝室が日本國家の永久的中心てあると云ふ事について何等の疑問の起る次第てはない。只、帝室は其時々々に起つて來る政治の渦卷の中に捲き込まれるやうな事があつては、累を帝室に及ぼす惧がある故、成るべく帝室は政治の渦卷の中に入れて來ないやうに――渦卷以外に超然たらしむるやうに勉めなければならぬ。之は福澤氏などもさう云ふ考てあつたかのやうに思はれる。尤も此事についても、少しどうてあらうかと云ふ事は、帝室をして超然たらしむると云ふ事に於ては異論は無い。けれども帝室を政權から强いて遠ざけようとする者の中には、或は帝室を除け者にするやうな恐れのある事を考へずして云つて居るてはなからうか、若し考へて云つて居るならば尙更ら再考して見なければならぬ事てあるやうに思はれるものもある。帝室を政治の渦卷の中に入れる事は無論可けないけれども、總て政權とは無關係となして了つて、政治の上から云へば、帝室は何等の關係はないと云ふやうな事にして了ふのは、日本國家の永遠

の國是の上から見て、果してよき事であるかどうか。此點は國家百年の計の爲めに餘程考ふべきではなからうか。百年處でない千年萬年の計といつてもよい位である。然しながら之は餘り大問題であつて、まだ成案も無いのであるからして、之を議することは他日に讓り、玆では帝室以外の事に議論を止める事にしようと思ふ。

詰り、藩閥に代つてどう云ふものが政權を取るであらうかと云ふ事であつて、具體的にいへば政黨か若くは官僚か或は其他に何か之に代るべきものがあるか、そこが問題になるだらうと思ふ。

官僚と云ふのは餘程漠然たる言葉である。官僚派などゝ云うて一つの、政黨に對するやうなものがあるかのやうに普通にいつて居るが、實は、官僚と云ふ言葉も嚴密にいへば、餘程ヴェーグに感じられる。諸官省に官吏になつて政務を執ると云ふ意味ならば政黨と雖もそれが内閣を組織する間は官僚系をなすともいへる然しながら普通に官僚と云ふのはさう云ふのではなく政黨以外の官吏の系統である。どの政黨にも屬せず、從來諸官省に政務を執り、其間に連絡がある。そして其連絡ある官僚系にいろ／＼政策を廻らすものなどもある。即ち政黨などに反抗して別に官僚系の利益を眼目として相互に朋黨をなして居る一團――それ等を漠然と官僚系と云ふ。そして夫れ等の官僚系は藩閥の關係あるものが多かつた。處が藩閥の勢力が失墜して政黨が次第に勢力を得れば、いくらか殘つて居る官僚もエライ勢力を得やうとは思はれない。それに同じ官僚系と云つても、それが皆一致して居るのでもなからうし、どうしても官僚が將來政治の中心をなすと云ふやうな事は考へられない。又それは餘り望ましい事でもない。何故かと云ふに、官僚が一團をなして政黨に當ることになれば、官僚は益々人民の敵のやうに見らるゝ。帝室と臣民との間にある官僚が人民の敵となるやうな事は帝室の爲めにならぬと思ふ。何故なら、人民から見れば官僚は自分共よりも帝室に近いやうに見えるから、人民が官僚を敵視するの結果は、累が帝室に

ても萬々一及ぶ事でもあると、非常にいけない事であるからして、さういふ事はどうしても望ましい事でない。どうか官僚派など云ふ者が政黨に對して特に權勢を爭ふと云ふやうな事にしたくないと思ふ。今後はどうしても帝室と人民と接近することが必要である。之は時勢の促がす所なるのみならず、古來の日本の精神を考へると、之は矛盾した事ではなくして、帝室と人民とひた〳〵と接近すると云ふ事は寧ろ古來の精神を實現する所以であつて、それは今日よりも將來に益々其必要があると思ふ。どうも中に隔たりが出來て、相互の意志を阻隔するやうな事は何時でも國家の爲めに憂ふべき原因となる。さう云ふものは退けて了はねばならぬ。即ち帝室は人民の帝室である。人民は帝室の人民である。人民と帝室とは須臾も離るることが出來ない。人民の中心をなすものは帝室であつて、帝室を中心として存續發展するものは人民である。此相互關係は日本の古來の精神であるが、それが古來權臣の爲めに變になされた事が少くない。尤も著しいのは賴朝以來の將軍時代であるが、それが維新の爲めに變つたけれども、然し直ぐに藩閥なるものが出來て、勿論將軍程ではないが、矢張りいくらか帝室と人民との間にあつて權力を取つたと云ふ趣がある。それは悉皆取つて除ける。之は私も贊成である。之を打毀はすについて人民が騷いだ、其騷ぎ方のモップ的であつたのは我々は取らぬ。リーゾンを離れて暴動をやつたのは、議すべき事が多いが、藩閥を取り除いたのは確かによい。

そこで矢張り人民全體の幸福を増進し、發展を計らうと云ふのは、眞に人民の側に立つて何等の私する所なく、其目的を達するやうに努力するものでなければそれに政權が歸すると云ふ事が六つかしからうと思ふそれでどう云ふ人の手に政權が歸するか、又どう云ふ政黨に政權が歸するかは豫め云ふ事は出來ないが、其れを得る資格を備ふるものに歸すべきことは疑ひない即ち政黨がいろ〳〵あるが、其政黨の中で眞に人民の爲めに計る。又固より帝室の爲めに計る。前にも云つた通り、帝室と人民とは不可分離の關係である。けれ

ども昔は人民と云ふものは餘程輕く見られて居つたと云ふ事は見逃すべからざる事である。舊幕時代に遡つて考へても分る。人民は餘程壓迫を受けたもので、且つ切り捨て御免など云ふ怪しからぬ掟もあつた。即ち生命財產の安全など云ふ事は今日ほど保障せられて居なかつた。然るに今日では人民を壓迫してはならぬ、輕視してはならぬ、大いに之を尊重しなければならぬ事が明かになつた。そこで藩閥とか官僚派とか云ふ、人民の方から敵視せられるものは、眞に人民の爲めに計るよりは、人民の損害になつても私すると云ふやうな風がいくらかなかつたか。なかつたか所ではない。現にコムミッション事件などが近頃暴露された所を見ると、人民の爲めを主とせざるのみならず、いろ〱の方面で私を主として居つたのである。斯う云ふ事は一掃されて了はなければならぬ。それで今後は從來よりも一層眞に多數人民の爲めに計ると云ふ方面に多く力を効す誠心誠意あるものに實權が歸しなければならぬ。又歸するであらう。イヤ、歸せしめるやうにしなければならぬと思ふ。人でいつても、政黨でいつても詰りさう云ふ資格あるものに政權が歸するであらうと思ふ。一時は可けない黨派が政權を私することがあつてもさう云ふのは直ぐに崩れる。多數人民が其私に氣附くと同時にそれは崩れて、眞に人民の希望を達するものが政權を得て內閣を組織する。其內閣が顚覆するやうな時には、何か其處に弱點を持つて居るに相違ない。其時は又其れに代つて、それより多少長所を持つて居るものが政權を取るやうになるであらう。そこらは其場合、其時勢によつて極まる事であつて、豫め斷言する譯には行かぬ。

けれどもこゝに注意すべき事は、眞に人民の爲めに計るものと云うても、單にデモクラチッシユの平凡主義に流れると云ふ事を希望してはならぬ。若しさうなつては實に詰らない。只愚衆が徒黨をなして政權を取る。世に愚衆壓迫程禍ひ多きはない。昔から識者は少數である。少數の識者の意見は百萬の愚衆のそれよりもエライ。之を愚衆が壓迫しては可けぬ。然し其壓

迫の恐れがどうかすると起りさうである。之は今から大警戒を加へてさうならぬやうにしなければならぬ。何故ならば政權を得んが爲めに多數の希望を繫がうとして人民に媚びる、機嫌を取る、又人民を煽り立てゝ東奔西走して勢力を作る――といふやうなリングリーダーが出來て來る恐れがある。さう云ふものが出來ると、わる〳〵すると、只上に立つ者に反抗するのがよいやうに思はれて來て、國家社會の秩序と云ふものが全くなくなり、延いては累が帝室にも及ぼすことになる。そこは大いに用心しなければならぬ。何處までも帝室を立てゝ帝室をして日本の重鎭中心たらしむるのが、日本の人民、日本の國家の爲め大變よい事である。其處に少しでも破綻を生ずる事がないやうにしなければならぬ。夫れ故に人民を導き、人民の爲めに計るものは愚衆以上に出てねばならぬ、愚衆の言ふ事を其儘に採用するものは眞に人民の爲めに計るものでない。遙かに人民の上に立ち、遠く人民の上に傑出して、愚衆の迷夢を打破り、彼等をして正義を踏み、人道に赴かしむるやうにするやうな賢明なる人物でなければならぬ。夫れ等が將來政權を執るのに適した人物であるが、矢張りそれは單にデモクラチッシュと言ふてなくして、或意味の貴族主義である。强いて云へば平民的貴族主義とでもいはうか、單なる平民主義でなく、平民主義の中の貴族主義でなくてはならぬ。然しさう云ふ貴族主義は只貴族が政權を執るとは違ふ。さう云ふ意味のものに政權が歸すると思ふ。又歸するやうにしなければならぬと思ふ。

宗教の側に於ても餘程動搖するやうな形勢が見える宗教の問題はまたなか〳〵大きな問題である。一體宗教と云ふものは古今を達觀すると、次第に世間化するの傾向がある。世間化せざれば效用を全うすることが出來ぬ。然し世間化は宗教に於ける一つの傾向であつて、總ての傾向ではない。其外にもいろ〳〵あるが、先づ一つの主もなる傾向である。ルーテルの革新は矢張り基督教の世間化である。舊教の方では僧侶が宗教をモノポライズしてバイブルも世間一般に讀ませぬと

云ふ風であつた。そこでルーテルがバイブルを獨逸語に飜譯して、誰でも讀むことが出來るやうにした。詰り國民をして基督敎に接近せしめたので、即ち世間化せしめたのである。それから以後バイブルは何處の國語にも譯されて、今では已に四百有餘の言語に飜譯せられて居る。佛敎でも同じ事であつて、世間化すればする程効用が多くなつたのである。僧侶と云ふものは餘程世間と隔つたもののやうに考へる者もあるがそれではいかぬ。親鸞の如きは實に大改革を施したものである。僧侶に肉食妻帶をして、世俗の中に入ることを許した斯くの如くして世間化せしめて來たのであるが、今日では更らに一層宗敎が世間化しなければ到底も間に合はぬ事になつて來たのである。殊に日本に於ては、今日宗敎と云ふものが敎育とは無關係になつて居るといふのは、いろ／＼な事情もあるが要するに今迄の宗敎では其儘に敎育に入れる事が出來ぬからである。若し宗敎と云ふものが全て無用のものであるならば、固より之を段々退けて了つても構はぬが、若し何か宗敎に採り所があるならば、日々兒童を敎ふる敎育の中に入るやうでなければ活用はなし得られない。今までの通りの宗敎では敎育の中に入れることが六つかしいがどうしても宗敎の中には敎育の中に入れて行きたいものがある。それは廣い意味の宗敎的情操である。人間にはどうしても感情の側がなか／＼必要な場合がある。そこで此宗敎的情操を何等かの形で以て敎育に加へんとして、未だ加へ兼ねて居る。我が宗敎界敎育界にとつて一大變化を醸さんとして居るのはこゝにあると思ふ。

又世界の各宗敎も次第に接近して來る傾向がある。之は交通機關の發達の爲めに、異つた宗敎のものが互に入り交り、從來の如く阻隔することが出來ぬ。さうして互に入り交つて見ると、我の宗敎に在るものが、彼の宗敎に在るものと餘程一致することなどもあり、以前の如く敵視する傾向が少くなつた。今の如く段々接近して行く歩調が一層進めば、或は其一致點を發見するであらうと思はれる處まで行つた。彼の歸一協會

などが其一例て、之は獨り、日本のみならず、米國にも英國にも同様のものが出來、寧ろ世界的傾向となつて來た。若し茲に世界的宗教の歸一の點が見出されたならば、それは非常に廣い、普遍的の宗教と云ふべきものてあらう。さう云ふやうなものが出來ると、それは教育の方で必要とするものと餘程似寄つたものてなからうかと思はれる。そこはどう云ふ風になるかハッキリ分らぬが、次第に何物かを促かす有様てある。

そこで此宗教の大勢から見ると云ふと、本願寺などに起つた事件は別に事々しく論ずる必要がないと思ふ宗教は其時勢〳〵に勝れた人格が出て、崇高なる宗教心を以て布教に當るものがあれば、そこに活きた宗教があるので、代々血統を繼いで宗教專賣の場所を存して置かねばならぬ必要は始めからないのてある。古い寺院と新らしい宗教とは別物てあつて活き〳〵とした宗教心を抱いた者が起れば、宗教が活きて行くのてある。

以上二つ共なか〳〵大きな問題てあるから、悉く之を論じ盡すことは到底咄嗟の間には出來ぬ。今は只念頭に浮んだ事を少し許りお話するに留めて置く。

次號の論文欄には

竹越與三郎

茅原華山

二氏の長論文掲げらるべし

政局當面の問題

△臨時議會と選擧權擴張

田川大吉郎

◎當面の問題としては、僕には、政局展開の前途如何が氣にかゝつて居る、去り乍ら、その考案は、未だ、はつきり、心に浮ばない、故に、それは後讓りとして、お氣附の、臨時議會説と、選擧權擴張に就て、聊か述べて見る。

◎先づ、臨時議會には、三説ありと思はれる、第一、臨時議會開會は、政策上、大隈內閣に、有利なりや、不利なりや、第二、憲法上、支障なきや、第三、解散の虞れなきや、これである。

◎この中の、第一に對しては、僕は、何とも謂ひ得ない、第二に就ては僕は違憲の說である、第三に就ては、解散の虞れなしと觀て居る、それ故、第一と第三に就ては述べず、第二に就てのみ申す。

◎臨時議會を、違憲ならずと唱ふる說は、憲法第四十三條を根據として居る、四十三條の條文は「臨時緊急の必要ある場合に於て常會の外臨時會を召集すべし」と成つて居る、此文句は、明々解し易し、何の疑ひも議論も無いのだが、而して僕思ふのは、此條文と他の條文の關係を、所謂積極論者は、如何に解して居るかの點である。

◎他の條文として、此際、第一に援用せらるべきは、第七十一條の「帝國議會に於て豫算を議定せず又は豫算成立に至らざる時は政府は前年度の豫算を施行すべし」との規定である、此文句も明白にして、火の如し何の疑ひも、議論も起らぬ筈である。差當り、積極論者は如何に之を解して居るかである。

◎今年の場合は、謂ふ迄も無く、此七十一條の場合である、政府は、現に、前年度豫算を踏襲すと聲言して居る、既にその通り公布して居る。

◎そこで、臨時議會論者は、海軍造艦費に困る、前年度豫算では、その支出、進捗の途が無くて、折角、着手中の事業が、空に爲る、無駄に爲るから、臨時議會を開いて之を要求するのだと唱へるが、之に對する僕の疑問よりも、寧ろ、非難は、それでは、豫算は區分し得べきものと、積極論者は、見て居るか、政府は、果して、そのやうの意見を有して居るか、然りとしなければ、此度の開會を承認すべき議論の立つ瀬はない筈だが、果して然りとすれば、憲法上、豫算議定上、大變な困難、混雜が起つて來る、積極論者は、それを如何に解し、如何に慮かつて居るかと謂ふのである。

◎も少し、詳しく言へば、僕の非難の立ち場は一層明白に爲る、今年の場合に於て、所謂臨時議會の海軍問題は、即ち、三十一議會の海軍問題であつたことは、申す迄も無い事實である、そこで、臨時議會の此案は三十一議會中、議して成立しなかつた有らゆる問題の中から、獨り擇り抜かれた、引つこ抜かれた案と爲るのである、左すれば、或ものは、前年度の豫算に由るべし、或ものは前年度の豫算に由らないことを得るとする、自由選擇の餘地が、憲法のどの條文かに與へられて居なければならぬ、憲法七十一條には、そのやうの餘地は與へて無いのだが、積極論者は、その餘地を、何處から見出し來たかと謂ふのである、これが僕の問である、又非難である、僕を以て、積極論者の意思を付れば、積極論者は、左の如く、第七十一條を解するもいである。

帝國議會に於て豫算を議定せず又は豫算成立に至らざるときは政府は前年度の豫算を施行すべし。

但、或部分は前年度の豫算に由らざることを得、その或部分は之を臨時議會に附議すべし

積極論者は、かゝる但書の餘地を第七十一條の條文、若くは、他の條項の文面或は文理或はその潜在思想の中に之を認め得ると做すか。

◎以上の卑見を、更に反言し、且、實例を以て示せば下の如くに爲る、例へば、一議會に於て、海軍省の要求豫算を否決した際（此の如きことは、實際に於て、常に有り得るのである、現に英國の如きは、昨年の議會に、陸軍大臣の俸給を一千圓低減すべしと發議した、陸軍大臣の俸給は一年五萬圓である、その中から一千圓を低減するとの決議は、即ち不信任決議である、此の如き部分的不信任決議は、何時でも、何れの國ても爲し得るのである）政府は、他の八省の要求は既に容れられたるものとして、之を公布し、否決された海軍一省の分のみ、之を前年度豫算に由り施行することが出來るか、事實は、海軍省の部分のみ、反對を受けたのである、故に、海軍省の部分のみ、豫算不成立である、故に、此不成立の部分豫算に對して、第七十一條の活路に逃げ込むことが出來るが僕は、之を出來ないと思ふものである、此の如きは、我憲法の容れざる不條理だと思ふものである、去り乍ら、積極論者は、此事をも、可能なりと、僕に語るものゝやうである、なぜかなら、彼等は、豫算を可分と視て居るからである、果して然るか、僕は、憂慮に堪へない。

鵜澤博士、花井博士も、臨時議會の積極論者である、兩君は僕のたよりにして居る友人である、凡て法律關係の問題は、僕は之を必らず兩君に聽いて向背を決したく思ふて居る、それ程たよりにして居る間柄であるが、而して兩君は、既に此く發表されたに拘はらす、僕は、明らかに此く疑ふのである。

◎美濃部博士かは、憲法は、國家の利害を保障するために有りとする點に、積極論の根據を置かれたらしい、僕は、此說に異議は無い、然も、憲法七十一條は、即ち、その爲に存すると做す僕は、言ひ換ゆれば、國家の利益を保障するため、その萬一の敗頽を防ぐため、第七十一條はある、第七十一條の設けは、專一にそのために存するのである、例へば、

第三十九條に、兩議院の一に於て否決したる法律案は同會期中に於て再び提出するを得ずと規定して、一院は可決しても、一院の否決したる場合は、一院の否決に重きを置き、一院の可決の意思を、空しく、闇中に葬り斷然として悔ゐざるに拘はらず、そは、法律案の場合である、豫算は、一國活動の血脈である、一瞬たりとも、その活動を阻止すべからずとの主旨より、即ち、七十一條を設けて、之を救解したものだと、僕は解して居る、故に、僕は、博士のその解說に同意する、けれども、既に七十一條を與へた、政府はその間に、我慢して補綴すべきである、決して七十一條の以外に踰すべからずと、僕は解する者である。

○更に一言する、議會の議決を如何に觀るか、之を、猫の眼の如くぐるぐる、時々に雜作も無く換るものと觀るか、即ち、その議決には、確定の意思なきものと觀るか、果して然らば、如何にして、議會の議決を尊重せしむるか。これも考へて置かねばならぬ、本爭議の根底には、確に此問題も籠つて居る、(臨時議會を臨時突發の問題を議する場合と解しない以上は、今回の如く、前議會の議したことを、臨時議會で再議し得るといふ慣例を開く以上は)

○又更に一言する、憲法を解釋し、運用する我國民の氣風である、憲法といふものは、兎に角、一定の規律である、而して我國民は成るべく此規律に遵據しつゝあるか、若くは、いゝ加減に、その文面に依據するのみで、實際の運用は、しだらなく爲りつゝあるかの問題である、或は、豫算外の支出と曰ひ、或は責任支出と曰ひ、或は剩餘金の處分と曰ひ、或は決算の不始末と曰ひ、我國に於ける憲法施設の實際は、太だ不仕鱈に爲りつゝありはせぬか、いゝ加減に、誤摩化し調子に爲りつゝありはせぬか、無論、憲法は改正さるべきものである、自然に展開さるべきものであるが、然も、この運用の實際は、太だその本來の主旨目的に遠ざかりつゝありはせぬか、それが心配である、而して今日の事も、亦、我憲法を、ゆるく、しだらなく、運用せんとする氣風流儀の、我知らず發露した一端では無いかと、僕は、此樣な意味に於て、今日の臨時議會を頗る不滿に眺めて居る。

○書き方が下手て、臨時議會論が、あまりに長く爲つたから、選擧權擴張に關しては、極めて短く書く、僕は、元來、普通選擧論者だ、僕の見解に由れば、代議政治は、即ち、普通選擧だ、普通選擧を以て、その目的に適ふ自然の方法と、初めから得心して居る政治組織だ、今日の如き制限選擧は、一時の便宜沙汰で、決して本來の精神では無い、故に我國は早晩普通選擧に達すべきである。

○然し乍ら、今日、普通選擧を行ふことは難い、行つて行はれぬこともあるまいが、例へば、帝國議會にしても、その抱いて居る考へが、普通選擧には頗る遠い、それには、まだ大分の距離がある、僕は、一人の意思を成さうとは思はない、議會政治は、そんなものでは無いと思ふて居る、それだけ、普通選擧の實行は、今日に望み難いと諦めて居る。

○そこで、實施案を求めると、先づ、今日の選擧權は、左の標準に由り制限されて居る。

（一）（二）略

（三）選擧人名簿調製の期日前滿一年以上地租十圓以上又は滿二年以上地租以外の直接國税十圓以上若くば地租と其他の直接國税とを通して十圓以上を納め仍引續き納むる者

これが所謂選擧有權者である、而して別に市町村會議員の選擧資格がある、それは

（前略）且其の市内に於て地租を納め若くは、直接國税年額二圓以上を納むるもの

僕は、右、市町村會議員の選擧資格にまで、國會議員の選擧資格を下げたいのである。世上には五圓と曰ひ、七圓といふ說もあるが、僕は左樣に、種々の階級を設くるのを無駄だと思ひ、又有害だと思ふ、それ故以上の如き改正を希望する、現在、國會議員の有權者は約百九十萬人であるが、右の如くすれば、それが四百四十萬人にまで增加する、即ち、殆んど三倍近くまで增加する、僕は、その程度までの擴張を、大隈內閣に希望するものである。

○それから、中學の卒業生とか、實業學校の卒業生とかに、知識を標準として、權利を賦與する說があるけれど、僕は、反對者だ、僕は、我國民は、皆、我國家を擔ふべきものだと認めて居る、而して現に、擔ふて居ると解して居る、我國家は、中學校卒業生や、實業學校卒業生で無ければ擔ひきれないやうな、そんな憶劫なもので無い、或は、そんな面倒複雜なもので無い、而して實際に於ては、或階級の智識を優れりとし、或階級の知識を低しとする程、そんな區別の立てらるゝものでも無く、その知識の甄別は、要するに無駄だと、僕は解して居る、而して例へば一家の如し、長兄も、弱弟も、等しく家の要素なる如く、その間に何等の差等を設けざるを當然とする如く、僕は、僅ばかりの知識を標準として、かゝる區別を要求するやうな、左樣なケチ臭い感じは、我國民は抱いて居ないものと思ふて居る、而して政治といふものは、由來、乾坤を呑吐し、天地を包容する底の、大きい、廣い、のび〳〵した氣象經綸の上に旋轉さるべきものであるから、學校的差別をこゝに設くることは、此洋々たる大精神の容れざる所だと思ふて居る、それ故、僕は、こんな細かしい、チク〳〵した改正沙汰には反對だ、僕ば、今はたゞ、漠然、渾然として、而して四百萬程度にまで擴張せらるゝ改正を望む。

△第二臨時議會と政務次官

小川平吉

政局當面の問題は何ぞやとの質問に對しては、私は今日の重大問題は即ち第一外交、第二財政なりと答へたいのであるが、質問の意味は恐らく內政上に於ける目前の問題と云ふ事であらうと思ふから、次に第二臨時議會と政務次官の事について些か話して見ようと思ふ。

一體、新內閣が出來るや否や、一般國民が此內閣は何時潰れるであら

うかと嘲するやうな――内閣の瓦解を以て單に時の問題にして居るやうな内閣では甚だ面白くないと思ふ。然し今日の大隈内閣は止むを得ない徑路として出來たのであるからして、只我々は一日も早く、力の强い内閣が出來て、外交及び財政の方面を、只口先ばかりでなく、實際其政策を實行する事にしたいと思ふ。

第二臨時議會の開會については又々憲法論が矢釜しいのであるが、我國も憲法實施以來已に廿餘年も經つて居るのに、何か問題の起る毎に、憲法上の疑義が出るなど云ふ事は實は餘程耻かしい事と思ふ。民權とか自由とか立憲的とか非立憲とか云ふ言葉は早く葬つて了つて、そんな言葉を唱へるものは笑はれるやうな世の中にしたいと思ふ。三十年近くも政治組織の爭論をやつて、未だに政黨内閣がよいとかわるいとか、ヤ、立憲的だの、非立憲などと云つて居るのは誠に困つた話で、アングロ、サクソン人などから、日本人には憲法政治が適しないなどゝ冷笑されても、辯護する言葉に窮する次第である。餘程お互に注意して、詰らぬ感情論や屁理屈などをやめて、眞に國家の爲めに善良なる政治をやるやうにしないと、新思想と舊思想、新道德と舊道德と混亂して居る目下の日本を救ふべからざるの窮境に陷らしめないとも限らないと思ふ。

一體から云ふと、臨時緊急の場合に議會を開くと云ふ事は憲法上に規定されてあることで固より差支ない。然し海軍の補充費と云ふものは緊急ではあるが臨時ではない。それで通常議會で否決になつた海軍費を再び臨時議會に出すと云ふ事は、正面から云ふと固より違憲である。海軍補充費は第三十一議會の重もなる題目として十分研究せられ、大正四年三月まで議會は此費目に向つて協贊を與へないと云ふ事に決定した。即ち此案は否決せられたのである。若し帝國議會の權威と信用とを全うせんとすれば、解散せざる同一の議會に向つて、同一の費目を提出すると云ふ事はどうしても出來ぬ譯である。憲法の明文によれば、同一の法律案は同一の議會に出すことが出來ぬ事になつて居る。之は議會の議決の權威と信用を維持する爲めに出來た規定である。即ち法律案は、四圍の事情が如何に變化しても同一議會に出すことが出來ぬ事になつて居るのに已に卅一議會に否決になつた海軍補充費を、四圍の狀況に何等の變化も生ぜざるに解散せざる同一議會に向つて提出すると云ふ事は許すべからざる事と思ふ。或新聞に若槻藏相の談として揭げられた所を見るに、若し御大葬費が三十一議會に否決せられたと假定すれば之を臨時議會に出さなくてはならぬと云ふやうの意味の事があつたが、之は恐らく新聞紙の誤りであらうと思ふ。何となれば御大葬費など云ふものは絕對のもので決して否決せらるべきでない。之を否決と假定すればといふが、決して假定の出來ぬ事件を例に取るなどは甚だ間違つた話である。海軍費の否決は之を他の通常のものに比較すべきで、例へば鐵道とか學校とか監獄とかの費用に比較すべきである。若し此等の費用が否決せられた時分に、臨時議會を開いて其費用を復活しようと計つたならば、それこそ議會の議決の輕きこと塵の如きもので、政府は屢々議會を開いて議員を誘惑したり、威嚇したりしてまでも、總てを政府の思ふ通りにやると云

ふ事になるかも知れない。

夫れ故に私の考では政府は勿論此非難を避くる爲めに、第二臨時議會に出す海軍補充費案は三十一議會で否決されたものとは其性質に於ても形式に於ても餘程違つたものであるだらうと想像し、又それを希望するのである。淸浦子爵は内閣組織の大命を拜した時分に、海軍側から臨時議會を開く口約をして呉れとの要求に對して、其口約丈けも與ふる事出來なくして内閣は流產に終つた。それ程の重大問題であるんだからして、多分三十一議會のものとは餘程違つたものにして出すだらうと信ずる。

近頃新たに政務次官を置くと云ふ噂がある。之にはいろ〳〵の利害得失があらうが、私等は之に反對の方である。何となれば今日我國の現狀に於ては、政務と事務とは區別が附かない。或は政務とは主もに高等政略を指すものとの說もあるが、政略と政治の事務とも矢張り劃然たる區別をすることが到底出來ないと思ふ。之を實際に徵するに、尾崎君などの云ふ政務次官と云ふものは大臣の話相手にはならうが、事務には一向通ぜぬもので、いはゞ憲政黨内閣當時の官房長のやうなものとなり、各省の實際の政治には事實上殆んど權力の少い、無用の長物に過ぎまいと思ふ。或は議會に出て說明する爲めと云ふが、實際の事務は事務次官の方が知つて居る。若し一々事務次官から聞いて說明の任に當るとすれば政務次官は只の傳達使に過ぎぬ事になる。さうすれば實權は却つて事務次官の方に歸することになり、政務次官設置論者の希望とは反對の結果を見ることゝなると思ふ。

側かに聞く所によれば、事務次官以外に政務次官を置くと云ふのは、實は却て樞密院あたりから出た案であつて、それは尾崎君などの趣意とは正反對で、各省の實權を政黨員に奪はるゝことを恐れ、官僚系の次官を何處までも各省の要所に頑張らせて置く趣意であると云ふ說もある。若し果して然りとせば單に無用なるのみならず、却て有害のものと信ずる。

△政國合同は遂に成らん

子爵　秋元興朝

非政友三派の合同問題は一時政界を賑かしたが、犬養氏にどうしても其意なきの明かなるに及んで、此事は中絕せられたのみならず恐らくは永久斷念の外なからうと思ふ。一體犬養氏も云つて居る如く、國民黨と同志會とは、單に感情の衝突あるのみならず、其政黨の成立理由には根本の相違がある。同志會は如何に辯解しても、どうしても官僚臭味の多い――或は官僚によつて自己の立場を作らうとした政黨であつて、國民黨の如く徹頭徹尾官僚反對を標榜し且つ實行して來た政黨とは全く正反對の素質を有するものである。

人或は政友會が官僚と妥協をしたり、情意投合をしたりした過去の經歷を見て、官僚黨といつたり、若くはいろ〳〵の罵評をするが、之は只

皮相の觀察であると思ふ。何となれば政友會は徹頭徹尾政黨として行動して來たものであつて、常に官僚と對立しつゝ、一歩〳〵官僚の勢力を挫く事に努めて來たものである。官僚との妥協若くは情意投合は、其時の勢、誠に止むを得ざるに出でたる一時の權道であることを忘てはならぬ。何故なれば德川幕府を倒して明治維新の新政を開いた殊勳者は薩長であるからして、明治時代に於て薩長の權力の強大であつた事は、正さに勢の然らしむる所である。政治といふものが勢であり、又實際である以上、其勢を利用し、實際に準據して、一歩〳〵自己の理想抱負を實現せんと努むることは當然の事といはねばならぬ、若し勢未だ可ならず、機未だ熟せざるに於て、薩長を倒さうとしても、徒らに紛亂騷擾を招いて、而して却て自滅するの外なきのは、如何なる時代、如何なる邦國の歷史を見ても明瞭の事である。故に政友會が或意味に於て、官僚を利用しつゝ、一歩〳〵自ら大きくなつて、遂に大正の新時代と共に官僚の勢力に大打擊を加へ、遂に純然たる政黨政治の時代を開かんとしたのは、冷靜なる批判者から見れば、政黨政治の實現に向つて、巧みに、實際的に行動し且つ成功したるものと稱せざるを得ぬと考へる。それで同志會の如く官僚によつて事を成さうとしたものと、政友會の如く官僚と對立して之を倒さうとしたものとは其態度に於て非常の相違があると思ふ。

顧つて國民黨の歷史を考へるに、之はどこまでも正面から、理屈から、官僚藩閥に對抗して來たもので、政黨としては最も正道を踏み、主義を貫いて來たものと推賞するに躊躇せぬ。

そこで政友會と國民黨といふものは、一見すれば大變其歷史と態度に差異があるやうであるけれど、一方は權道から、一方は正道から。一方は實際から、一方は理想から藩閥官僚に對抗して來たものであつて、其手段は違ふが、其目的は確かに同一であつたと斷言してよい。區々たる黨派的感情を一掃し、皮相的觀察を一拋して、冷靜なる觀察を下せば玆は確かに前の如くいひ得ると思ふ。

今や日本の國政は紛亂に次ぐに紛亂を以てし、少しも中心的勢力の確立したるものを見ぬ。此秋に方つて正面裏面より藩閥官僚の打破に向つて努力したる政友、國民の二黨が合同して、國政の中心勢力たる政黨の基礎を確立するとは、我目下の政局にとつて最重最要の問題と思ふ。

然し玆に注意して置きたいのは、世の政客には斯くの如き問題を以て、一時の政略問題となし、非政友三派の聯合を牽制する爲めであると云つたり、又或はさう信じて居るものもあるらしい。然し私は之には大反對で、合同するからには、互に誠心誠意一點の私を挾むを許さない。若し一時の策略の爲めに一寸合同して又分離するやうのものであるならば、初めから合同せぬがよい。兩黨が解黨して更らに新名稱を以て起つてもよいし、又政友會が多數であるから、少數の國民黨を下に見ると云ふことも許さない。全く國政の中心を政黨に樹立すると云ふ趣意を以て互に眞心を以て合同しなければならぬ。それには政友會の中にも大いに刷新を加へなければならぬと同時に、國民黨の方でも、到底實行の出來ぬやうな主張は之を拋却せなければならぬ。國民黨の現に主張して居るもの

には、在野黨として人氣を繋ぐ必要上から、如何に自分等が政權を取つてもなか〳〵容易に實行の出來ぬ事の見え透えて居るものが少くない。此等はどうしても抛却して眞面目に實行の出來るものを主張するやうにしなくてはならぬと思ふ。要は政友會も國民黨も見えとか、體裁とか、在來の歷史とか云ふ小問題に囚はるゝ事なく、眞に國政の重きを以て任ずるの大抱負よりすれば、其合同は決して出來にくい事でないと思ふ。そして私はさう云ふ機會が餘り遠からずに來るであらうと考へて居る。

△三派合同は失敗、政務官は蛇足

早川鐵治

三派合同と云ふ事が、我々の當面の問題とする所であるが、之れはどうも失敗に畢つて今後どうなるか、よく分らない。

一體政友會は絕對多數を有して、勝手氣儘な振舞をなし、黨弊を遺憾なく發揮して居ると云ふ事は怪しからん。市井無賴の徒が跋扈し、待合の親方が特殊大會社の采配を振ると云ふやうな事は由々しき大事である。之を其儘に捨てゝおく事は出來ぬと云ふ事は、殆んど期せずして何人の胸中にも浮んだ考であつて、國民も眼が覺めるし、元老連中も足腰は立たぬが、明治時代に自分等が握つて居つた政權の後始末をつける責任があり、且つ先帝崩御の時に新帝を補翼するやうにとの御諚も頂いて居るんだから、政友會が黨派本位から不急の事業を起したり、地方問題を餌にして自黨勢力の擴張にのみ腐心するのを見ては、矢張り一般國民と同じくどうも此儘に捨てゝ置けぬと考へて居つた。處で、非政友三派を一所にした所がまだ政友會よりも少いが、三派が合同すれば、天下に瀰蔓して居る反政友會の感情の後援によつて、政友會を打破ることは出來る。が三派を一所にする見込のある人を求めて、遂に大隈と云ふ事になつたのである。之れが抑々今回大隈が出て來た根本理由である、

何故大隈ならば三派を合同する見込があつたかと云ふに、三派の中の主もなる人物は不思議にも皆大隈の養成を受けた後輩であつたのだ。犬養は固より子飼ひの乾兒であるし、尾崎も久しい間大隈の幕下に居た。同志會の總理の加藤は今までは政黨關係がなかつたが大隈が外務大臣をした時に秘書官をし、其後もずつと大隈の引立を受けて居る。又同志會の幹部の大石とか武富とか島田とか箕浦とか皆元の大隈の門下だ。同志會の非幹部派と目せられて居る不肖早川鐵治なども、加藤から氣に入らぬ點もあらうし、又我輩も加藤には氣に入らぬ點もあるが、大隈なら、我輩もまア嘗て其下で仕事をした事もあるし又年に免じてゞも一つやらして見てもよいと云ふやうな譯で、期せずして大隈にあらずんは三派合同は出來ぬと云ふ事になつたのである。勿論同志會と國民黨とは年來の行掛り上犬と猿のやうな間柄であるが、若し大隈が我々の勸めたやうに、同志會、國民黨、中正會を同一に見て、虛心坦懷誠心誠意を披瀝して犬養、尾崎、加藤三氏に同時に計つたならば、犬養も多分拗ねなかつたらうが、大隈が約束を重んぜずに主として加藤に計つて、同志會本位にやらうとしたものだから犬養もとう〳〵あの通り拗ねたのである。大隈のあの態度は先つ第一着の失敗で、其後幾回やつても思ふやうに行かぬのは、第一きつかけのあの過りに座するのである。

嘗て我輩の妻の死んだ時に品川彌二郎が態々我輩の宅まで悔みに來て吳れた時の話に、貴樣は武士であるが大隈とは型が違ふ。あゝいふ狸爺

に魅入られたのは貴樣の不運ぢやといつた事がある。我輩の恩顧を受けたものを狸爺など〻は怪しからぬと憤慨した事があるが、大隈には矢張りどうも誠意の足らぬ所はあるやうだ。薩長の如き大隈を向ふに廻した人から見れば或は狸爺のやうに見えたかも知れぬと思ふ。大隈は自ら天下の豪傑を以て任じ、天下の人心期せずして我が出盧を促がし、又足腰の立たぬ元老が跛脚しかない我輩を立たしたのは、我輩に降服したのだと思うて居るかも知れぬが、元老などは今でも決して大隈に感心して居りはせぬ。只以上の理由によつて大隈が三派を一所にするに最も都合がよいし、三派を一所にしなければ、横暴なる政友會を挫く譯に行かぬから、大隈を起たしたのであるが、大隈の第一發の失敗から三派合同が成らぬとすれば之から先はどうなるであらう。第二臨時議會を開くことになつて居るが之は無論無事に行くに違ひない。先達の議會では政友會が進退を賭してまで主張した海軍補充費なんだから今更ら反對する譯にも行くまいし、又現にあれが否決さるれば一番困るのは川崎とか三菱とかの造船所なんだから、從來の政友會との關係から見て一寸反對しさうに思はれない。で今度の臨時議會は無事に行くに違ひないが、三派合同せずして冬の議會を解散しても、現內閣にどれ程の勝算があるか。棚から牡丹餅といふ風の同志會の最高幹部の働き振りでは政友會を二百名以下にする事は六つかしい。殊に同志會は在野黨として營業稅、通行稅の全廢地租輕減等を主張して居り、又加藤總理は政友會の官制改革を改善にあらずして改惡なりと評し、陸海軍大臣任用を文官にまで擴張しなくてはならぬと明言して居る。又同志會では國防會議を作つて陸海軍の統一を計るといふて居る。我輩などは國防の智識なき素人や、政黨員などに國防を議せしむることの可否を疑ふものであるが、我黨としては兎に角在野當時に以上の如き諸種の政綱を揭げてある。之を實行しなければ自ら其責任を負はねばならぬ。隨分困しい境遇だ。又冬の議會で解散をすれば、干渉でもしなければ到底も多數を得る見込はないが、今日の如く津々浦々まで新聞の勢力の行渡つて居る時には干渉などは到底行はれまい。すれば此內閣が果して長く壽命を維持し得るかどうか甚だ疑はしいと思ふ。

又政務次官を拵へると云ふ說に對しては、我輩其何の必要あるかを知らぬ。實は二流三流のもの〻猟官熱を滿足させる爲めに冗官を置くもので、之こそ眞の蛇足を添ふるものぢやないかと思ふ。今の次官など云ふものは皆小僧であるが、此等の小僧と對等になつて政治家たるものが滿足出來るか。此等の小僧と肩を並べて、而かも却て實權は此等の小僧にあると云ふ事ではどうしても二流三流以下のものでなければ我慢は出來まい。議會に出て說明するといふけれども、よく行政事務が分つて居らなければ說明は出來るものでない。又政治上の方針とか政策とかに關することならば、それこそ大臣がすべきものだ。私は今度の政務次官は全く昔の憲政黨內閣時代の官房長や勅任參事官の如きものになつて何の勢力もないものになつて了ふだらうと思ふ。現に尾崎君は明治三十年に外務省の勅參になつたが何にもせなんだ、何にも出來なんだ。我輩二ケ月ばかり政務局長をやつて、今までの役人共をウンとイジメてやつたが、尾崎君などはイヂメることも出來なんだ。要するに今度の政務次官は全く二流三流以下の猟官熱の連中を滿足するに止り、それ等の連中は今の小僧のやうな次官に追ひ廻されるに違ひないと信ずる。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

蘆花德富健次郎著（第二十五版）

みゝずのたはこと

語に曰く唯眞故新。士の常に古くして常に新らしきが如く、雲雀の歌の去年のまゝながら今年の耳に嬉しきが如く著者の實生活より流れいでたる『みゝずのたはこと』は恒に新なるべき書籍の階級に屬す。未讀の諸子は速かに一本を購ひ閉づれば默し、開けば即ち緑麥を撫する春風の如き音をもて諄々と慰藉の言葉を語る此耐久朋を諸子の身邊に座せしめよ。

□定價壹圓五拾錢（郵税十六錢）

發行所 東京市銀座通新橋際（振替東京二〇〇番）東京日本橋呉服町八（振替二〇七六番） 新橋堂服部書店

神經衰弱自療法

第十四版

◉狩野病院長狩野謙吾先生著

本書は腦神經、背髓神經、心臟神經、胃神經、生殖器神經等各神經衰弱症の自療法を詳細に説明したるものなり其内容を示せる目次は往復ハガキにて御申越次第無代進呈す

□定價六拾錢 郵税八錢

昭憲皇太后陛下へ献上

賜天覽台覽

東京大正博覽會寫眞帖

全卷に充てる鮮明なる寫眞版はよく博覽會の實況を示して遺憾なく看るものをして居ながら博覽會に遊ぶの思ひあらしむ。

内容豐富（寫眞百六十余種） 紙質善良（上等アートペーパー）

印刷鮮明（精巧寫眞銅版印刷） 裝釘優美（菊倍版大和綴）

定價一圓二十錢 郵税十二錢

◉大隈伯爵夫人序◉尾崎密藏著

家庭養雞法

第八版

大隈伯爵家の模範養雞場に飼養せらるる各種雞は本書の著者が經營せる尾崎飼禽場より供給せるものなり。本書は斯く養雞の事に實際家たる著者の多年の研究より成れるものなるを以て其如何に實際的價値あるかは玆に贅するの要なかる可し。

□定價四拾錢 郵税四錢

東京市京橋區出雲町一番地
銀座大通前出雲町電車停留所前

新橋堂

電新橋一九一九・一九九一
振替貯金口座東京二〇〇

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

博覽會と天賞堂

協賛大賣出し　天賞堂

●三月廿日より舉行（御購求額の多少に不拘記念品進呈）

大正博覽會は規模雄大結構壯美眞に刮目驚嘆に値ひすべく殖産工業の發達乃至美術工藝の進運に甚大の資益を與ふべきは勿論に候。本堂大に此趣旨を賛し奮つて各館に多數の出品をなし又開會中愛顧諸賢の御便利を謀らんが爲め即賣店を開設して御用命を仰ぎ上候。

先づ會場内の出品場所と品目とは左の如くに候。

美術館（第一會場内貳ヶ所）には本堂工場及び現代諸大家の考案妙技に成れる立體置物又は貴金屬の彫鏤を施したる花瓶類其他多種を出陳す。

工業館（第一會場内）には本堂工場に於て技術熟練の妙手を選み製作せしめたる美術應用の金白金寶玉入裝身具室飾品飲食器等諸種を出陳す。

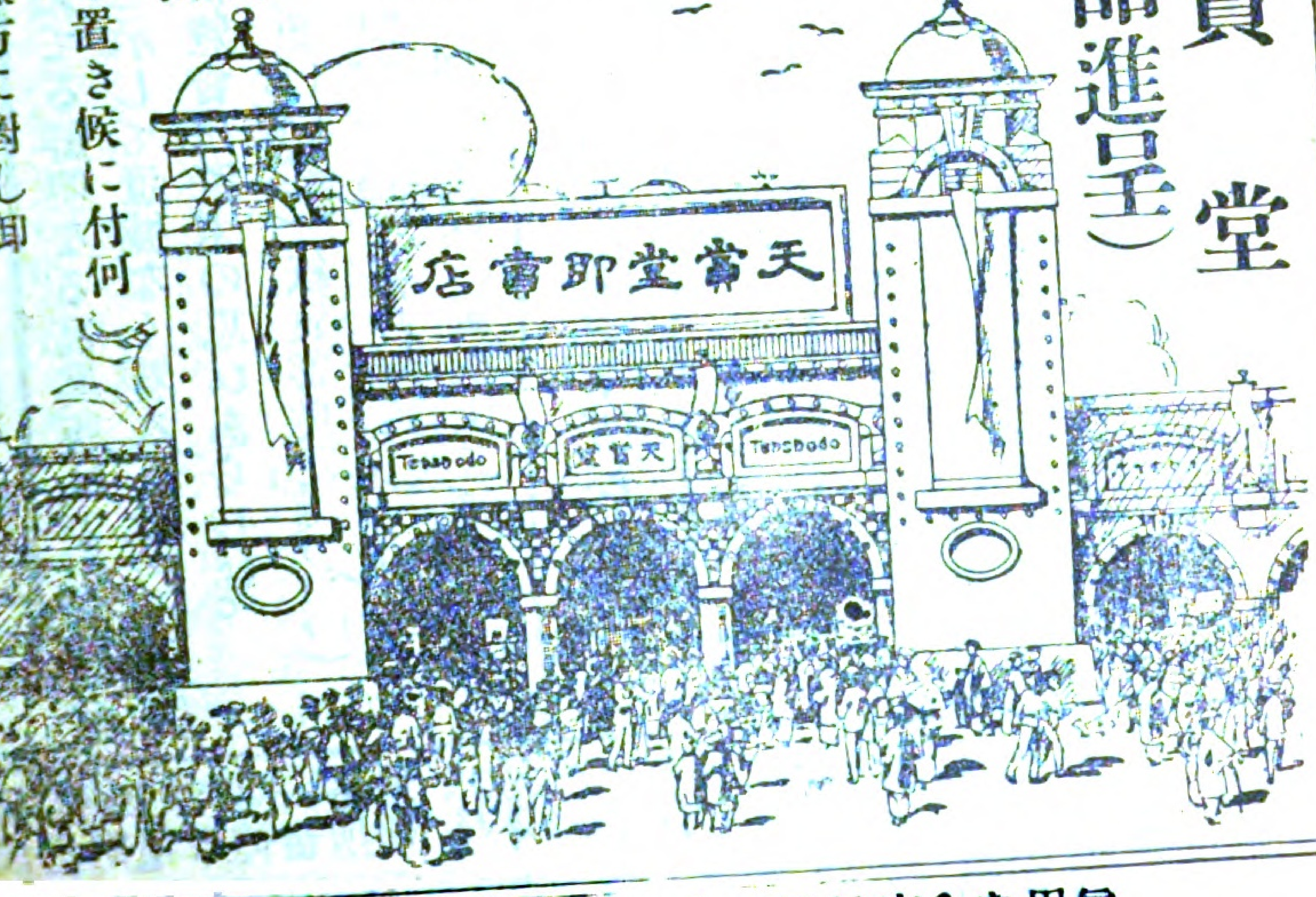
外國館（第二會場内）には特に斯道精通の店員を歐米に派遣し選擇せしめたる現時流行の金銀時計寶玉類雙眼鏡置時計蓄音機類各種を出陳す。

即賣店 右の外上野不忍池畔に開設したる本堂の即賣店には總ゆる商品を陳列し廉價を以て理想的優秀品を提供仕候又本店にも多數の歐米最新流行品金銀時計寶玉類を始とし美術應用の指環、帶締、簪、時計鎖、同提物、眼鏡等に至る迄中外雜貨の粋を集め置き候に付何卒博覽會御觀覽の御序を以て御枉駕の程伏して奉冀候

即賣店及本店の**客用電話**は御立寄の御客様方に對し随意御使用に供へ置き申候。

時計寶玉貴金屬美術品內外雜貨商　東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
天賞堂本店　電話新橋特長（三三、三三、三四／七〇、三一、一五二）

東京第一會場（中央）即賣店　下谷區上野不忍池畔
天賞堂博覽會即賣店　電話下谷（特）二六二四



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

歐洲文壇の大權威

ストリンドベルグ作

狂者の告白

原名 インフエルノ

見逃す勿れ
新自然主義の
快著を

「譯者曰く
譯はドーデモインフエ
ルノでお讀みなさい！

文學醫學博士 森鷗外先生序
文學士 生田長江先生序
文學士 蘇武綠郎先生譯
畫伯眞山孝治先生装幀

本書はストリンドベルグの四大自叙傳中の白眉たるインフエルノを譯せるものにして歐洲の文壇を震駭せしめたる世界的の最大傑作なり氏は新自然主義の巨擘なれば其描寫はモウパッサン以上の大膽を極めたるものなり複雜昏迷せる人生の直底を解剖し自己の眞實驗より得たる痛烈深酷の悲哀小説は實に此狂者の告白（インフエルノ）なりとす。彼のイプセンをして「より以上の偉人」と絶叫せしめたる大文豪の赤裸々なる告白と闇黑面の大膽なる曝露を知らんとする者は先づ一本を書架に備へられよ！

△四六判三百五十頁寫眞版九面入總クロス美本箱入
定價金壹圓郵税八錢

振替口座 東京一九〇四四

東京神田區連雀町十八番地

福岡書店

（創業明治二十七年五月）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中附一の三）

思想界の珍寶 ☞ 最新刊

飼山遺稿

故山本一藏氏著
金子筑水先生序
深澤白人氏編輯

金子筑水先生序文の一節

早稻田大學の文科在學中此のあはれな故人は、おほかた多數の人との交りを避けて、ひたすら淋しい隱れた生活を追つて進んだ。彼は何故然かし孤獨の生活を選まざるを得なかつたか。彼は何故然か一身を高く標置して世に背かざるを得なかつたか。そも〳〵また彼は何故むざ〳〵蕾の花を蹶散らさゞるを得なかつたか。(中略)故人の此の舊稿は眼識ある者には、明らかに故人の内生活の秘密を語るもの、隨つて人生の少なくとも一面の深秘を暗示するドキユメントであらう。此の稿本の尊さは主として此の點に存する。そしてまた自分は此の點から此の稿本を世の眼識ある人々に推薦する。

内容

若き自殺者の日記
クロポトキン原著 相互扶助論
書簡及諸家の感想

菊判三百五十頁
上製美裝全一冊
故人肖像筆蹟
寫眞版挿入
實價金壹圓
郵税金拾貳錢

新刊發賣

ラムスウス作
佐藤綠葉先生譯

人間屠殺所

新體裁四六判
上製美本全一冊
定價金五拾錢
郵税金六錢

本書は獨逸にて發行後三ヶ月以内に十萬部を賣り、直ちに八ヶ國の歐洲語に飜譯せられ昨年度の歐米讀者界に多大のセンセーションを起した。——一市民が其事務所を棄て、其妻を棄て、其家庭を棄てゝ今日の戰爭に出かけて行つた物語で、機械的の發明は『名譽の戰場』を『人間屠殺所』に變更し、人が人に對する電氣、力、熟練等にかゝるに今日の戰爭は、巨きな榴霰彈が一時に數十人を粉碎し夜間飛行機からダイナマイトが落下し、電氣ボタンを一つ押せば一聯隊の兵士が全滅するやうな近世戰爭の機械力に就て、直接に文明人の良心に訴へたものである。

發行所 東京市神田區南神保町 振替東京二四八五九番 **泰平館書店**



政爭圏内の地方長官の色彩

鐵拳禪

（一）

新内閣成立後、必ず地方長官會議の開かるゝを恒例とす。而して其の會議の席上に於て、必ず首相より新内閣の施政方針、内相より内務行政に關する訓示あるを常則とす。然る後に於て會議の本筋に入り、警保、土木、衛生、其他各般の行政事項に就て協議を遂げ、且は其の管内に於ける縣治上の報告をなす事となり居れるなり。されば、地方長官會議は、名は會議なりと雖も、新内閣の諸相に對するお目見えと、首相及び内相の訓示指導を仰ぐが主たる要件なり。

苟くも帝國の内相として、各府縣知事の動靜を知らざるの不都合なるが如く、各府縣知事としても新内閣諸相の顔を知らずとありては相濟まぬ譯なり。斯の恒例會議は僅かに數日間に過ぎざるも、各府縣知事は諸相の風丰を印象し、内相は又地方長官の面魂（つらだましひ）を知り、篤と其の能不能、其の迎合非迎合の程度を測るを得て相互に制御若くは拜倒の便宜鮮少に非ざるなり。斯るが故に、地方長官會議は、内相より觀れば各府縣知事の小手調べなり。内務行政の指導召集なり。又地方長官の側より觀れば、内務行政の受驗場なり。主務省と

の意志疏通會なり。事務打合せ會なり。其の孰れにもせよ、新内閣成立後に於て、地方長官會議を東京に召集するは、決して無意義の業に非ざるなり。

現大隈内閣も亦恒例に依り、去十五日を以て地方長官會議を内務省に開き、首相兼内相大隈の政綱政策に關する長廣舌は勿論、藏相若槻の財政方針の演說あり次て諮問事項、指示事項等を附議し、各府縣知事より其の管内に於ける縣治上の報告ありたり。而して今次の會議の、從來と稍其の趣を異にせるは、各府縣管内に於ける行政實況を詳細に報告せしめたるの外、地方行政の刷新に關する意見を十分に開陳せしめ、當局者は之に對して一々其の方針を授けたるにあり。而して其の授けたる所の方針が、果して地方行政の實際に適切なるか、果して能く根本的刷新を企圖し得べきものなるやは、後日に徵するに非ざれば明かならざるも、惟ふに役人の卓上方針にして、眞に地方行政の刷新に資する所ありや疑なき能はず。

現内閣にして、伯大隈等の聲明するが如く、地方行政の刷新を圖り地方財政の整理を成さんと欲せば、各府縣知事を更迭するに際して、先づ深く留意せざる可からざる筈なり。惟り現内閣に限らず。何れの内閣にても、其の成立後に於て地方官の更迭を決行し、然る後地方長官會議を開くの例なるが、是れ甚だ謂はれなき處置と言はざる可からず。吾人は決して地方長官更迭に反對するものに非ざるのみならず、新内閣成立後に於て不良二千石、惡知縣の如きを假借なく免黜するを大に可なりとするものなり。然れども、地方長官會議以前に於て之を更迭するは、殆んど其の良否を鑑別せず、徒らに黨派的感情に驅られて、妄斷するの嫌なきに非ず。而して此の更迭されたる所の新任知事が、果して能く地方長官會議の席上に於て、遺憾なく其の管内の行政實況を報告し得べきか。彼等は屬官等の手に成れる報告を、單に一片の報告として報告する迄にして、地方行政刷新に關する切實なる要求の如きは、到底開陳すること能はざるなり。而も政府が、是等の盲漢をして衆を撫せしめ、以て其の意見を開陳せしめ、而

して一々其の方針を指示すと云ふに至りては、滑稽も亦極れりと言はざるを得ず。

新内閣の地方長官を更迭する、宜しく地方長官會議の小手調べ後にせざる可からず。即ち新内相は、先づ地方長官會議に於て縣治上の報告を聽き、而して其の人物の能不能を檢し、適不適を鑑別し、然る後に各府縣知事及び事務官の更迭を斷行し、以て縣治の發達を圖らざる可からざるなり。首相兼内相大隈にして、眞に地方行政を刷新し、地方財政を整理せんと欲するの誠意あらば、從來の弊習を踏襲せずして、地方官更迭の暴玆に出でざる可からざりしなり。然るに、彼れが例の月並手段に依りて更迭を妄斷せるは、自ら立憲の大義に則ると高言し、新局面の展開を試みんとする伯大隈の爲めに惜まざるを得ず。

(二)

斯く現内相の地方長官更迭は、從來の子大浦、原敬等の内相時代に試みたる月並的筆法以外に、何等の新味を發見すること能はざるなり。啻に發見する能はざるのみならず、其の更迭方針の如きは、全然農相大浦の言に聽きて、内相大隈の決行せるものたるなり。伯大隈の現内閣に於ける、常に『華』を持たせられて、其の『實』は他の採る所となるなり。其の演說、其の聲明する所は、常に堂々たる大政治家の所論なるも、其の實權は他の握る所となり居るが故に、其の實行の段に至れば、彼れの所期と副はざること、啻に一二のみに非ざる也。恐らく地方長官更迭の如きも、周圍の事情に制せられて、官僚的色彩を濃厚ならしめたるものなるべし。若し然らずして、是れが伯大隈の眞意なりとせば、彼れが聲明し、力說する所の地方行政刷新の如きは、表面を粉飾するの辭柄に過ぎずと斷ぜざるを得ず。

伯大隈の黨閥打破を絶叫するは、甚だ結構なることなるも、之に代ふるに官僚閥を以てするが如きは、吾人の讃する能はざる所なり。前内相原は、老朽淘汰を聲明して、大浦系統の縣知事を馘首し、之に代ふるに政友會員の人物を以てし、其の要所要所には自家腹

心の徒を配置したりき。是に於てか、さらでだに優勢なる政友會は、其の地盤を開拓するの便を得、黨勢の緊張せる事前代未聞と稱せられたり。既に黨勢の緊張せるが上に、政府黨たりければ、我黨內閣の權威を笠に着て、横暴を極めたる地方も尠からず。現內相大隈の黨閥打破は、蓋し此の黨禍の襲來に憂ふる所あり、猛然痛擊を加ふるの意なるや明かなり。然るに、伯大隈が黨閥打破の聲明を實にせる所の地方長官更迭は、原系統の夫れに代ふるに、大浦系統の夫れを以てし、現政府黨たる同志會の黨勢擴張の便宜より打算せるの觀なからず。吾人は必ずしも世人の揣摩する如く、來るべき對總選擧の準備なり、政友會對戰の陣立なりとは信ぜざるも、さる臆測を容るゝの形跡あるは爭ふべからず。何となれば、前內相原に馘首されたる者の多くは復活し、子大浦昵近の士は拔擢され、所謂官僚系の色彩頗る濃厚となりたればなり。

現內閣の成立は四月十六日にして、爾後數日間は次官其他の更迭を試み、二十一日に至りて始めて地方長官の免黜を決行し北海道長官中村純九郎に休職を命じ休職福島縣知事たる西久保弘道を其の後任に拔擢し、東京府知事宗像政の依願免官を好機として、土木局長久保田政周を其の椅子に据ゑたり。此の第一次の更迭既に明かに大浦系の復活を語るものなり。啻に休職知事の復活せるは、一西久保のみに非ず、曩に馘首されたる伊澤多喜男は警視總監となり、上山滿之進は農商務次官となる等、一癖あらん程の面魂の者は、何れも大隈內閣の下に蘇生復活して、各自其の要職を占めたるを見る。非政友の人物を拔擢せんと欲すれば、勢ひ斯の如くならざるべからずと雖も、前內相原に斥けられたる徒が、揃ひも揃ひて權勢の地位に立ちたるは、政界の奇觀ならずんば非ず。世人の見て以て、頭首を換へたる桂內閣の再現に過ぎずとなすもの、又故なきに非ざるなり。

然れども、大隈內閣は飽くも大隈內閣なり。伯の所謂輿論內閣なり。立憲內閣なり、政黨內閣なり。鷄鳴を以て曉を告ぐるの第一聲なりとせば、伯大隈は憲

政の黎明に高鳴く最初の金鷄ならざるを得ず。吾人は彼れの官僚辯を聽く迄もなく、官僚なるが故に毛嫌し官僚なるが故に排斥すべしと做すものに非ず。大臣も官僚なり、次官も總監も官僚なり、府縣知事も官僚なり。一たび官僚となれるを排斥せば、拔擢し推擧すべきの人物無きに至らんと云ふが如きは、畢竟するに一場の詭辯に過ぎず。從來の所謂官僚なるものは、即ち非立憲の徒を指せるの名詞なり。非政黨主義に冠せる所の惡名なり。眞に彼等にして、伯大隈の裏書するが如く、輿論の趨向に從ひ、憲政の本義を發揮して天下に臨み、舊時の官僚臭を脫却するに於ては必ずしも舊惡を責むるに及ばざるや論なし。其の表面桂內閣の再現に似たるあるも、其の內容に憲政の大義を盛るに於ては、矢張伯大隈の自慢するが如く輿論內閣となすを妨げず。さりながら、其の叫ぶ所の黨閥打破の必ずしも黨閥打破に非ず、府縣知事の顏觸の必ずしも良二千石に非ざるは、黨閥打破の手心餘りに寛にして、地方行政刷新の將來に對して悲觀なき能はず。

（三）

地方長官の第二次更迭は、同二十八日に行はれ、其の異動實に十九縣知事に及び、原の腹心たる安藤謙介（新潟）森正隆（宮城）大島久滿次（神奈川）大芝惣吉（群馬）依田銈次郎（長野）及び、南弘（福岡）田中武雄（青森）の七縣知事は休職を命ぜられたり。而して德島の渡邊勝三郎は特に地方局長に拔擢せられ、稍原系に近しと目されたる小橋一太は土木局長に移され、所謂黨閥打破の筋書は玆に一段落を告げたり。

休職知事中、森は比較的地方に人望ありと雖も、其の縣治に對しては依然として旅稼ぎの觀あるを免れず夫の築港の如き積極的經營に關しては、大に彼れの手腕を稱し、彼れの運動を德とするが如きも、一縣の財政整理上より觀る時は、深憂に堪へざるものあり。森は他の知事の如く勿體振らず、勉めて下情に通ぜんとするは賞すべきも、感情家たるだけ夫れだけ黨派心强く、時に常規を逸するの行動なきに非ず。前知事に馘首されたる技師古藤某を己れの實弟なるが故に復職せ

しめたるが如き、郡長警部の輩に至るまで己れが前任地たる新潟又は秋田より輸入し來りて諸所に配置せるが如き、其の乾兒政略を試みたるの點に於て、縣民の惡感情を挑發せり。其の休職は寧ろ當然なりとす。大芝も亦、政友會の爲めに犬馬の勞を惜まざるは、敢て昨今に始まれるに非ず。其の手腕に於ては未だ森の域に達せずと雖も、其の遣口の露骨なるに至りては、休職知事中の随一なるべし。大島は横濱市會議員選擧區問題に關して物議を釀し、刷新派より非立憲を以て痛撃せれたるは、世人の記憶に新なる所なり。彼れが黨派心に囚はるゝは、既に臺灣民政長官時代の遣口に徴するも明かなり。而も其の遣口餘りに露骨に、餘りに偏頗なるが故に、到底牧民官として好良なる成績を擧ぐるど能はず、南及び田中等の、森、安藤、大島以下の輩と同列に馘首されたるは、聊か氣の毒の感なきに非ざるも、此の二人者は前内相原の下に始めて知事に任用されたるの故を以て、現内閣に睨まれたるやも知る可からず。併し、黨派關係より觀る時は、轉任せる折原己一郎(島根)秦豐助(德島)川口彦治(奈良)谷口留五郎(福岡)の如き、留任せる川村竹治(和歌山)高橋琢也(沖繩)の如き、原系統の徒あるを見れば、彼等の休職には他に何等かの理由あらん。さは云へ、其の人物、手腕を較すれば、休職者の、却て轉任乃至留任者に勝るものあり。折原の手腕あるも人物の香ばしからざる、秦の秋田に於て失態を演じたる、高橋の老朽にして無能なる、馘首の運命は免れざるべしと思はれたるに、案外にも其の生命を取り止めたるは不思議なり。若し毒にも藥にもならざるが故に、之が免黜を敢てせざりしものならば、現内相は單に原に報復せんが爲めにのみ、地方長官の更迭を妄斷せりとの非難を免るゝ能はず。黨閥打破もさる事ながら、苟も地方行政の刷新を期せんとする以上は、有能を存して、無能を斥けざる可からず。然るに、伯大隈が此の當然を行はずして、却て老朽無能を庇護せるは、宛然原の老朽陶汰を標榜して自家の手足を任用せるの筆法に類す。川口の如きは、夙に政友會に加擔し、彼れが事務官當時より地方

政界の波瀾を惹起せるは、大芝と頗る相似たるものあり。而も西久保と好からざる大芝は馘首され、川口の大分より奈良に追はれて事濟みたるは、所謂單に報復手段のみに非ざるを示せるにや。將又懷柔の一途を存せるにや。是に於てか、黨閥打破の鋭鋒の聊鈍りたるの觀なくんば非ざるなり。

（四）

然れども、翻つて新任の顔觸を見るに、政友會の勢力を覆さんと欲して大浦系の腕つこきを配置せるの形跡歴々たるものあり。川上親晴を起して熊本に封じたるが如き、休職の黒金泰義を大分に、熊谷喜一郎を石川に復活せしめたるが如き、石原健三を神奈川に抜擢せるが如き、同志會の爲めに謀りたるは蔽ふべからず川上は第三次桂内閣の警視總監となり、憲政擁護運動に高壓を加へ、良民を鐵蹄に蹂躙して、遂に新聞社及び交番燒打を誘致せるの巨頭なり。彼れは身を警察界に起し、常に暗黒面をのみ凝視せるが故に、性獰猛冷酷となり、政府に反抗する者あれば直ちに以て狂徒なり、暴民なりと獨斷して憚らず。斯の如き人物が、果して能く地方牧民の職責を完うし得べきや。加ふるに彼れは無學なるが故に、時代思想を色讀すること能はず、徒らに舊來の官僚式を發揮し、威壓を加ふれば以て足れりとなすなり。此の筆法を以て熊本の政界に臨み、反對派の彈壓にのみ急なるに於ては、却て地方行政を破壞するに至るべし。今後川上の三思すべき點は實に玆にあり。黒金も警察系統の人物にして、身を子大浦の配下に起せり。曾て神田署長たりし時、其の部下に八人斬の巡査を出し、滿都の視目を一身に集めたることあり。帝大の出身なれば、無識川上の如きに非ざるも、偏狹なる官僚的思想を持すること、其の姓名の武裝せるに似たるものあり。石原は軀幹堂々たるも痘痕滿面の不美男なり。首府の關門たる神奈川縣の知事としては外國人の手前如何あらんかなど心配するものなきにあらねど、夫れよりは紛糾せる現下の横濱市政を如何に解決すべきかにあり。曾て北海道長官として失敗を演じ、近く愛知縣知事として實績を擧げ得ざ

りしに見れば、今次の難關を巧みに處理し得るや疑なき能はず。熊谷は伯寺內と姻戚關係あり、一時長閥の寵兒として羽振好かりしも、今日漸く油の拔け加減なり。曩日の竦手を揮ひ能はざるべきも、樺太に長官楠瀨幸彥と力爭せる程の頑强は尙幾許か存するものと見るを得べく、さすれば石川縣の政界に向つて多少の活動を期待されざるに非ず。

事務官より陞任せる新顏に、力石雄一郎(長野)三宅源之助(群馬)の二人あり。大隈系統の新顏に、阪本三郞(秋田)あり。彼等は新顏なりと雖も、新彩の顯著なるもの少く、其の人物、手腕に對しても、亦裏書を附するに躊躇せずんば非ず。而して其の任地を觀じ來れば、何れも政爭激甚の地にして、難治の縣たるなり。力石の依田の、三宅の大芝の後を襲へるは、前任者の政友會贔負にして、而も相應に竦手を揮ひたるだけ、新米の二人者が苦痛ならざるを得ず。苦痛なりと雖も其の力量を試みるに足る好個の地たるを以て、大に努力するを要す。阪本は早稻田の出身にして、且獨逸法學博士の學位を有す。辯護士となり、判事となり、行政裁判所長官となり、休職後母校の敎授となりて、親族法を講義しつゝありしが、今次伯大隈に拾はれて秋田に封ぜられたるなり。難治の縣とは云へ、凡才秦の散々に失策せし後なれば、遣り樣によりては案外に好評を博し得べけんも、そは之を今後に徵するの外あらず。同志會の後援を得れば政友會の阻止する所となり、さりとて政友會を叩き潰さんことはなか／＼に難かるべく、生中の事をすれば却て兩者の板挾みとなるの危險なしとせず。

又、警視廳出身の新顏に、青森の小濱松次郎あり。彼れは帝大の出、太田政弘(福島)の曩に警保局長に轉任せるの後を受けて、警視廳第一部長となれるも、其の人物、學識、手腕、共に太田に下れり。唯彼れの勢力を支持せるは、所謂芋畑育ちなるが故のみ。人と爲り小膽狹量にして、卓拔なる識見を有せず、時流に迎合するの傾きなきに非ず。其の第二部長時代に、某々等の利用する所となりて、人格に對する非難の聲を生め

ること事あり。彼れが新任地青森は、今や政友會の舊勢力の崩壞期に際す。加ふるに、縣治上には大凶作救濟の喫緊事あり。繁多なる用務あり。彼れの双肩に擔はんには、餘りに重荷なり。宜しく在來の色眼鏡を撤して縣民に接すると同時に、緊揮一番するを要す。宮城に轉任せる俵孫一は、博士俵國一の弟なり。伯寺内に擢んでられて朝鮮の府尹となり、後内地に歸りて知事となり、相應に用ゐられつゝあり。俵の後を承けて三重に赴ける馬淵鋭太郎に比すれば、機鋒或は鋭きものあり。鋭太郎は、純九郎と共に知縣二鈍の稱ありしも、中村の如き鈍物には非ず。其の手腕の何處にか、多少俊鋭の閃きなきに非ざるなり。

轉任知事中の敏腕家は、何れの方面より觀るも、阪仲輔(新潟)を推さざるを得ず。彼れは到る所、相當の實績を擧げ、茨城以來の好評を失墜せず。人と爲り剛直、爭風覇氣併せ有するも、平常之を表面に露出せざるを以て、頗る如才なき紳士の風格あり。然れども、一たび事に當れば其の本質を發揮し、二たび難關に逢著すれば、飽く迄も之を突破せずんば歇まず。實に斯の勇氣と、學識とは、彼れをして今日あらしめたるなり。純然たる大浦系統なるも、官僚臭を發散せざるが故に、原敬の斧鉞を免れて、今日に至れり。是れ彼れが官海游泳術の巧みなるに由るべしと雖も、亦人格手腕の相伴ふ所以ならずんば非ず。池松時和(滋賀)は湯淺倉平、太田政弘、小橋一太等と同じく、明治三十一年の官學出身なり。佐柳藤太(千葉)は私學出身なるも、辯護士となり、轉じて官界に投ずるや、厲官より叩き上げたるを以て、なか／＼に事務の腕はあり。其の政治的色彩は鮮明を缺くも、初舞臺の關係上子大浦と因縁あるに似たり。池松と迭に國替を命ぜられたるを見れば、佐柳は何程か人氣の荒き千葉向きなるや。池松は又何程か贏利に拔目なき江州人を御するの適才なるや。斯の如きは、聊か更迭を玩弄するの嫌なからず

（五）

第三次桂内閣以來(或は夫れ以前より)其の地位の動かざるもの、古き所には大森鍾一(京都)服部一三(兵

庫)あり。中の部には大久保利武(大阪)李家隆介(長崎)鹿子木小五郎(香川)有吉忠一(宮崎)不破彦麿(佐賀)岡田文次(栃木)濱田恒之助(富山)川村竹次(和歌山)あり。新參には小田切磐太郎(山形)岡田宇之助(茨城)深町錬太郎(愛媛)の徒あり。動かずと雖も僅かに四五年に過ぎざれば、其の動く者に至りては、內閣の更迭毎に、其の席の暖まるの遑なきなり。彼等の只管に官僚に迎合し、政黨に貪緣して、一身の榮達を圖らんとするに急にして、縣治上に對して全人格の努力をなさざるは、寧ろ當然なりと謂はざるを得ず。然らば異動せざる地方の實績、異動せるの地方に比して擧れりやと云ふに、心ずしも然らず。其の知縣の人物劣惡にして、却て縣治上に拔くべからざる弊根を深くするものあり、更迭の頻繁なることの、不良二千石を据置くに優ると無きに非ざるなり。彼等の地方行政に對して無定見なる、猫眼主義なる多數黨本位なる、其の操守の堅固ならざるが故に地方行財兩政に向つて斷平たる刷新と整理とを加へ、以て縣民の福祉を增進すること能はざるなり。

就中、在職の長きは大森、服部の二人者なり。其の年輩閲歷よりするも、其の人物手腕よりするも、巨然として頭角を抽んずるものあり。然れども、往々黨爭の渦中に投ぜられて、非難の標的となる事あり。幾度か其の地位の動かんとせるも、巧みに波瀾を押切り來りたるは、羣小知事の如く左顧右眄して迎合を是れ事とせざるの、毅然たる態度に由らずんば非ず。夫の壇の浦知事の稱ある宗像の、清浦內閣の流産に殉せる今日、大臣以上の抱負を持するもの、此の二人者を措いて他に求む可からず。服部は既に勅選議員なり、大森と共に隱退の期は甚だ遠き將來に非じ。時勢は彼等の頭髮を白からしめたると同時に、彼等をして其の空想せる大臣の椅子に凭らしめざる可きなり。

岡田(文)及び濱田は、共に警察界の出身なり。小田切は上海總領事より內地に舞戾りて、今日の椅子を得たり。彼れは下岡、伊澤、上山、久保田等と同じく、明治二十八年の帝大出身なり。知事として突き出され

たるは新しけれど、其の卒業の年度に於て南、有吉等の先進なり。久保田は茫漠たる風格あり。公山縣の緣戚なるも、官僚臭味を發揮せず、顏に似はぬ恬淡なる素質を有す。小田切は外交の辭令に巧みなるも、手腕膽略共に前者に若かず。山形相當の知縣なり。大久保は無能に近く、川村は形勢觀望の爲體なり。李家は山中の桃李の如く、逡巡として振はず。鹿子木は早稻田出身の雄なるも、三年不鳴不蜚の有様なり。更に其他の留任者に見るも、宛として二股膏藥の如く、粗製濫造の器械の如く、利き目もなければ、活潑潑地の活動をなす者なきに非ずや。

要するに、内閣更迭毎に馘首さるゝは、比較的有爲の人物なり。所謂地方政界の攪亂者となり、黨閥の走狗となり、時に狂奔する事なきに非ずと雖も、縣治上に何等かの痕跡を印せずんば歇まざるの氣概あり。其の才氣と手腕とを善用するに於ては、必ずや縣治上の實績を期し得べきものあり。然るに内閣の、地方長官更迭の方針は、常に自黨の地盤擁護を主とするが故に有能者の多くは黨弊を醸すを免れざるなり。其の毒にも藥にもならざる者は、又碌々として其の椅子に凭るに過ぎず、何の爲めに知事として威張り居るやを疑はしむるに過ぎず。彼の寺田祐之(廣島)の如き、川島純幹(鳥取)香川輝(福井)高橋琢也(沖繩)の如き、如何にしても適才の適處にあるものとは見るべからず。寺田の人格下劣なる、川島の老朽なる、最早淘汰するも惜からざるの人物なり。然るに現内閣は、黨閥打破に急にして、其の人物の詮衡を等閑に附したるの結果、其の更迭の實際は伯大隈の聲明と副はざるものあるを覺ゆ。苟も政黨政治を認むる以上は、政黨の發達を助長せざるべからず。既に政黨の發達せる以上は、黨人の實業其他各種の事業に關係し、各府縣の中心勢力たるは言を俟たず。黨弊の芟除素より然るべきも、徒らに黨閥打破を呼號し、却て官僚臭味を帶びしめんとするが如きは、原の老朽淘汰を揚言して、却て老朽者を擧用せると、何の擇ぶ所なきに至るべきなり。吾人は更に一歩を進めて、伯大隈の地方長官會議に於ける

長廣舌を實にすべく、其の小手調べの結果に由りて、斷平たる處置に出で、地方長官の面目を一新せられん事を望まざるを得ず。

（備　考）

府縣名	桂内閣（大正元年十二月）	山本内閣（大正二年二月）	大隈内閣（大正三年）
北海	山之内一次（轉）	△中村純九郎（休）	西久保弘道
東京	△宗像政	｜（免）	久保田政周
京都	△大森鐘一	｜	｜
大阪	大久保利武	｜	｜
神奈川	大島久滿次	｜（休）	石原健三
兵庫	△服部一三	｜	｜
長崎	李家隆介	｜	｜
新潟	伊澤多喜男（休）	△安藤謙介（休）	○阪仲輔
埼玉	島田剛太郎（轉）	添田敬一郎	｜
群馬	黒金泰義（休）	○大芝惣吉（休）	三宅源之助
千葉	△告森良（免）	池松時和（轉）	○佐柳藤太
茨城	○岡田　之助	｜	｜
栃木	岡田文次	｜	｜
奈良	若林賚藏（轉）	折原己一郎（轉）	川口彦治
三重	俵孫一	｜（轉）	馬淵鋭太郎
愛知	石原健三（休）	松井茂	｜
静岡	松井茂（轉）	笠井信一	｜
山梨	熊谷喜一郎（休）	若林賚藏	｜
滋賀	○佐柳藤太	｜（轉）	池松時和
岐阜	薄定吉（免）	島田剛太郎	｜
長野	△千葉貞幹（死亡）	○依田銈次郎（休）	力石雄一郎
宮城	△寺田祐之（轉）	森正隆（休）	俵孫一
福島	西久保弘道（休）	太田政弘	｜
岩手	笠井信一（轉）	堤定次郎	｜
青森	武田千代三郎（休）	○田中武雄（休）	小濱松次郎
山形	小田切磐太郎	｜	｜
秋田	秦豊助	｜（轉）	○坂本三郎
福井	池松時和（轉）	香川輝	｜
石川	阪仲輔	｜（轉）	熊谷喜一郎
富山	濱田恒之助	｜	｜
鳥取	岡喜七郎（轉）	△川島純幹	｜
島根	高岡直吉	｜（轉）	折原己一郎
岡山	大山綱昌（免）	湯淺倉平	｜
廣島	中村純九郎（轉）	△寺田祐之	｜
山口	馬淵鋭太郎	｜（轉）	赤星典太
和歌山	川村竹治	｜	｜
徳島	渡邊勝三郎	｜（轉）	秦豊助
香川	○鹿子木小五郎	｜	｜
愛媛	深町錬太郎	｜	｜
高知	杉山四五郎（轉）	○永井金次郎	｜
福岡	△川路利恭（免）	南弘（休）	谷口留五郎
大分	昌谷彰（休）	川口彦治（轉）	黒金泰義
佐賀	不破彦麿	｜	｜
熊本	上山滿之進（休）	赤星典太（轉）	△川上親晴
宮崎	有吉忠一	｜	｜
鹿兒島	谷口留五郎	｜（轉）	○高岡直吉
沖縄	△日比重明（免）	△高橋琢也	｜

以上△は舊來の特別任用者○は札幌、高商、其他私學出身者、記號なきは悉く帝大出身なり。

趣味の煙草記（中）

黑頭巾

其一

◉吾輩、青年時、尙ほ大學に在りし時、好煙家の一青年ありしを記憶す。其の人、頗る俊才なり。酒を飮み、酒間、パイレイトを吸ひつゝ火の付きたるパイレイトを青眼に構へ、竹刀に代へて、鼻前に揮りまわす、ヨイショ〳〵と叫びつゝ、機鋒百出、以て、談笑したりし景情、恍として眼前に在り。パイレイトは當時、舶來、兩切りの尤も美味なるものなり。吾輩、奪はれたるパイレイトの昔の美味を想起する每に彼の男を聯想せずんばあらず。

◉此の俊才の青年は、また甚だ贅澤にして趣味ある喫煙法を爲せり。彼は、パイレイトを、其の三分一、乃至、四分一ばかりを吸ひては、直ちに、角火鉢の灰の中に突き込む。かくして頃刻の中、角火鉢の内緣を環ぐりて、パイレイトの林立せる行列を作り成すに至るなり。

◉パイレイトの名、太だ苦味走りて、紫煙の叢り湧く光景に適はしき名なり。其の表紙には、日本ならば、先づ毛剃九右衛門といふところなるべし。甲板上に大刀を提げて突立てる海賊を描き、堅紙を用ひず、軟かき、艶やかなる紙函なりしかば、見るからに、愛煙家をして、垂涎せしむるに足れり。

◉當時、吾輩、これを學友に聞く。博士和田垣、一日、大學教場に入り來るや、講壇に登りて曰く、諸君は、煙草のパイレイトの意義を識れりや。學生答ふる者無し。彼曰く、東西人情相同じ。吾が邦人、音羽屋のイナセの舞臺姿を喜ぶと同じく、彼等も亦たダンビラ提げたる海賊姿を憧憬するのみと。博士和田垣は烟草中毒の愛烟家にして、此時、音羽屋の全盛の晩年なりき。

◉パイレイトの意義如何は暫らく之を措く。英國には、煙草にパイレイトあり。煙管にセイラアス、パイプあり。海の趣味は、遺憾無く、煙草の上に發揮せらる。

「海の帝國」たる所以なり。

●吾が國の官煙にも、大軍艦の名を以て、巻煙草に命ず。富士、敷島、やまと、朝日、八雲の如きは是。當時、海軍の短劍は國民に愛好せらるゝの時なりし。今、海軍廓淸の問題、天下を占領するの時、吾が愛煙家は、是等の官煙の實質の改革を要求せずんばあらざるべし。

●舶來の埃及煙草に、三笠と東郷とあり。日本向の輸入煙草として特製せられたるもの。歐洲人の商機に敏なるは、吾が國人の戰機に敏なるが如く、感嘆するに値すと雖も、煙草に付するに、直ちに、海の名を以てするは、依然、海の趣味の國民たるを失はず。

●三笠には、吾が海軍旗を描き出して、放線狀の紅旭光、燦爛たる上に、大將東郷の「皇國の興廢此の一擧に在り」の號令を、ペンサキの日本文を以て記す。此の如き、絶好の煙草名と、文章とを、吾が官煙に採らざりしは、豈、惜みても餘あるに非ずや。

其二

●煙草の美味は、巻煙草ならば、口付にても、金口にても其の先頭二三分、若くは半分に至るまでの間に在り。殊に、官營の巻煙草に至つては、最後の二三分は甚だしく興趣を減却す。

●刻煙草を程能く、煙管に詰めて、好火を以て、吸ひ付けたるの時、巻煙草に、マッチの火の、唯だ一擦に燃えて、バット紫煙の吹き散するとき、春花の初めて煥發するの興味あり。這裏の興味は、喫煙家に非ざれば解道するを得可らじ。

●吾輩、先日、不圖、松崎天民に邂逅せり。彼も亦た短身肥滿の男なり。其の上衣を脱して、玉を突くを見れば、其のズボンの臀の、驚く可く大なるは、宛として袋なり。

●彼は、愛煙家なり。吾が煙草記を讀みたりとて、爲めに感興を語る。彼は十七歳にして、初めて煙草に親しみ、强烈なる趣味を喜びしことありしも、近來、一轉して、唯だ一意、專ら敷島ばかりを吸ふ。吸ひ且つ書く。夜を徹して、筆を「亡き妻の骨を抱いて」に染むるとき、一夜に、敷島の四袋を吸ひ盡くす。而して彼の吸ふは、一本の敷島を、其の半分ばかりを吸ひ、其の餘は捨てゝ火鉢の灰の中に突込む。

●天民が、玉を突きつゝ、煙草を語るの時、偶、老人冠も來りて、また吾輩の爲に、趣味の煙草を語る。

●抑、巻煙草は、其の全幹を吸ひ盡くす可らず。煙管

の刻煙草は、灰となるまでに吸ふ可らず。卷煙草の全幹を吸ひ盡くすものは、煙草に於ては素人なり。例へば、碁を打つて、悉く駄目を推すにも似たり。勝敗の味は、駄目を推さずとも分るべし、餘裕を殘して、煙草を捨つるは、則ち駄目を推さゞるの碁客なり。煙草に於ては入段の客なり。

其 三

◉吾輩、魯士、漫遊記程を讀み、煙草の記事に至つて、頗る興趣を引く。此の書の著者は、中井櫻洲山人、山人は磊落の奇才、而して頗る愛煙家なり。此の書は、明治九年、則ち西南戰爭の前年の事に係る。今より之を見れば、光景、すべて茫として、煙を隔つるの山水に似たるなり。

◉櫻洲山人は、獨逸に至りし時、雪の二月なり。伯林を發して、エッセンに向ひ、クルップ製鐵場に至る。其の夕、招かれてクルップの自邸に至る。馬車を驅り、雪を侵して、一里許の村路を過ぐ。左右深林、蹊を夾み、景色極めて幽致なり。人家は稀にして、閑雅の意、筆に寫す可らず。煙草の煙、寒空に散ず。

◉クルップの家は、山の半腹を開いて、稍、平坦の一境を劃す。山人は、クルップと握手し、其の事業を賞讃す。此の時、クルップ年既に七十有餘、尙ほ矍鑠として壯夫を凌ぐの慨あり。態度、綽々として餘裕を存す。客を好み、談論を喜ぶ。宴畢つて、茶と麥酒と煙草とを供す。山人乃ち近來、煙草を嗜むこと頗る過度なるを談ず。クルップ自から煙草と皮袋とを、山人に贈り、且つ一句を題せんと乞ふ。山人、例に依り、直ちに七絶一首を口占して贈る。

◉櫻洲山人、伯林（ベルリン）に在る時、公使靑木周藏、彼に惠贈するに、珍らしき煙筒（パイプ）の一本を以てす。此の煙筒（パイプ）は、孛帝則ちウヰルヘルム老帝の面を彫めるものなり。蓋し人面パイプは、維新前、既に吾が國に舶來せし事もあり。大槻磐水の薦錄にも其の圖を載す。然れども日本人自から其の國に至り、其の國王の面を彫刻せる人面パイプを得る。當時に在つては、日本人、外遊中の一箇快心事といふ可く、山人の得意、察するに餘あり。

◉日本人の藝術及び趣味に於て、從來、人面美を利用するもの必ずしも少しとせず。假面は勿論の事、殊に、其の通俗なるものに至つては、酉の町の於多福の如く、熊手に人面を飾るものすらあり。煙管の彫刻にも、人物を圖するものはあり。然れども彫刻の人面を以て灰皿となして煙草を吸ふ事には想到せざりし也。酒に獨

體盃の名ありて、煙草に人面パイプ無かりしは、吾輩、舊日本の愛烟家に、遺憾無くんばあらず。

◉日本人、果して創意に富めりや。一たび煙管の構造。略ぼ一定してより、意匠といふは、唯だ其の形體の上に施すの装飾のみ。其の形體の根本的意匠に至つては、雁首と吸口には、三百年來、大なる變化ある事無し。唯だ煙管の一些事に過ぎざるに似たりと雖も、亦た以て日本人の創意力を徵するに足らずんばあらず。漫に、雲煙過眼に附す可きの事に非ず。

◉櫻洲山人、土都に到るの時、外務卿の紹介に依り、首相マームル、パシヤ公に面會す。當時、首相の語無し。首山人は、記して太政大臣となす。彼は所謂土其耳の太政大臣の衙署に到る。太政大臣は自から長柄の煙草管を吸ひ、山人等には紙卷煙草と珈琲とを供す。抑も日本は由來、長煙管の國、此の時、日本人却つて煙管を用ひず。恐らくは山人は「お株」を敵に奪はれたるの感ありしならん。

其四

◉汽車、汽船の中にて、煙草を禁ずとせば、旅行は如何に寂寞たらん。煙草は旅客の伴侶なり。旅行の興味の一部は煙草に依つて涵養せられずんばあらず。

◉東京の電鐵が、未だ馬車鐵道なりし頃、車室は甚だ狹隘、天井も亦た低し。當時、未だ禁煙の制無し。雨の日、悉く車室の窓を閉鎖して、爲に、窓硝子と、重き濕潤せる空氣とは、煙草の煙を封鎖して、濃厚ならしめ、車中の人を煙殺せんとせし事は、尙ほ吾輩の記憶に在り。

◉愛煙家と雖も、『鎖國の煙』を恐るゝなり。淸淨なる、野外の、開ける空に於ける煙は、甚だ美味なり。紅塵百丈の市街、電車の中の如き、濁れる、狹き空氣に禁煙するは、一切の理由を除き、煙草の美味を供給せざるの故を以て、必ずしも、愛煙家を苦しましむるものに非ざる可し。

◉西洋に於て、婦人の面前に於て喫煙せざるの理由を以て、日本の汽車に禁煙するは、必ずしも有力なる理由とはならず。

◉東京の山ノ手線に於て、喫煙を自由ならしむるは、此の線の電車の感想を、頗る興趣を帶びしむる所以ならずんばあらず、山ノ手線は、到る處に、雜木林あり、曠原も見え、都人をして自然の大氣を樂しましむべき、唯一の、帝都の交通機關ならずんばあらず。車室廣く、天井高くして煙草室に適す。若し夫れ晚春、初秋、春

花、紅葉の時、或は、夏の朝暮、殊に清涼の朝、窓硝子を開放したらんには、武藏野の清氣、水の如く、内外を流通す。此の時、煙草一吹、紫煙、窓外に流れて、搖曳して、野花野草に向つて奔る。

◉櫻洲山人、倫敦より巴里に往く時、公使榎本武揚と伴ふ。此の二人者は共に愛煙家なり。汽車には吹煙車、汽船には吹煙室を買ひ切つて乘り、婦人を避け、隨意に吹煙を逞しくす。山人、特記して旅中の一適なりとせり。憶ふに此の時彼等は、吹煙を逞しくするのみならず、併せて、定めて、趣味の放談を逞しくせしならん。

◉山人、英海峽を記して曰く、船中に望む英の海岸は皆白灰色なるを以て、宛として白壁の城郭の如く、佛國の海岸を望めば、黛色模糊として煙の如し。彼、詩あり、曰く、吹煙車靜午眠閑、殘夢覺來往似還、佛岸如煙英岸白、船窓時見二州山。此の典雅の詩は、山人が吹煙を逞しくする間の口占なり。

◉愛煙の詩人は、煙草を口にせざれば、詩を吐く能はず。櫻洲山人の漫游記程は詩多し。造語は、煙草の煙と共に口を衝いて發せしならん。煙鎖亞羅比亞海、雲迷亞非利加洲。客身既在青天外、萬里鵬程一葉舟の詩、卷中の絶唱となす、また當年書生の間に傳誦せらる。此の如きは、彼が、煙草を啣へて、甲板上を、徐ろに濶歩せし、得意の風神を髣髴するに足る。

◉李白集が、殆んど酒記たるは人皆これを知る。李白一斗詩百篇なるものなり。愛煙家は上煙一本、則ち一詩あり、乃ち、愛煙詩人の詩集は、また一の煙草錄たらずんばあらず。

其五

◉清少納言は、つまらぬものを木の屑に譬へたり。彼女の時には、惜哉、未だ煙草無かりき。若し煙草あらしめば、彼女は纖細なる、皿の大なる、銀煙管を以て、煙を輪に吹く可かりしなり。紙卷煙草を吹かすべき、新しかりし彼女にはあらず。而して煙草あらしめば、彼女はつまらぬものは『煙草の屑』といひしならずんばあらず。

◉實に、『煙草の屑』ほど、世に無用なるはあらず。吹煙には妨害となり、これだけにては吸はれず、吸へば咽喉に詰まり、如何なる偉丈夫をも嗚咽せしむべく、風吹けば雄飛して人の眼を塞ぐ。紙屑籠にも入れられず、焚いて「焚付（タキツケ）」ともならず。乞食も、燒芋の尾の落ちたるを拾へども、「煙草の屑」の路上に落ちたるを

集めず。

◉刻煙草に比すれば、西洋煙草は「煙草の屑」にも稍、取る可きもの無しとせず。葉卷の屑の落ちたるを集めて、粉煙草の紙卷を作る。吾が國にも舶來して、廉にして、美く、强きもの也。所謂煙草の返魂草なるもの也。

◉西洋の粉煙草の返魂草を作るは、譬へば殘飯を集めて昔の粟おこしを作れるが如き乎。然りと雖も、粟おこしの需用盛んなれば、殘飯を以て供給するに足らざるが如く、粉煙草の流行するに及びては、遂に、初より返魂草の粉煙草を製造するに到る。端役は落伍者の適處とも見ゆれども、また初より端役の適材をも製造するの必要あるなり。

◉粉煙草の返魂草は、恰も、吾が國の『粉茶』に似たる乎。『粉茶』は、さま〴〵の茶の粉、則ち茶の屑を集めて作る。故に一袋の粉茶の中、惡處あり、美處あり。塊然、これを集めて、單に、これを混合したるばかりにて、化學的變化を起さしめず、唯だ物理的混合ばかりに依つて、一種、烏合の味を生ぜしむるは、粉茶、粉煙草の妙處なり。這般の意義に於ては、粉茶、粉煙草は、全然、返魂紙と其の性質を異にす。返魂紙は烏合の材料を用ふと雖も、一種、特生の返魂紙を作出して、根本の材料如何を識別するを得ざるなり。

◉砂礫をして嚙むを得可からしめば、風光明媚なる海岸、松影、濤聲に磨がれたる、玉石混淆せる、須磨、明石の松原の砂礫を袋に盛り來りて咀嚼せしめば、まさに粉烟草の趣味を發揮するものある可し。

其　六

◉吾輩、此の頃の麗らかなる朝に、浩々歌客の望岳山房を訪ひ、不計、奇景を得る。是れ實に、近來稀に見る、趣味の烟草の舞臺なり。

◉歌客の書齋は、西片町十番地に在り。十番地は、所謂東京の學者町なり。而して彼は、中村秋香の故宅に住み、誠之小學に裏隣す。則ち彼や、居然、學者町の一中樞を占むるものといふを妨げず。

◉彼の書齋は、學者町の崖上に在り、西面して、小石川の町を越えて正しく富士山を望む。所謂窓含西嶺千秋雪なるもの。吾輩、屢、此の書齋に來りて、富士山の峥嶸として眞白に、小石川臺の雜木林に映出するを見る。然れども此の日、不思議に見得たる奇景は、未だ嘗て想到せざるなり。而して歌客も亦た今年初めて認めたりといへば、去年無くして今年得たる新風景なるべ

し。

◉彼の書齋に、水平に正面する小石川臺の雜木林は、近隣厦屋の間に、一角の畑地を占領して、一箇、別天地を劃出す。定めて此の地だけの持主あるなるべし。雜木林の間に、菜花畑を點出して、黄光遙かに人を照らす。而して其の燦然たる金色の色彩、漸く芽ばみつゝある雜木林と、一杯に晴れて、薄く霞める。朝空との調和の美、吾輩をして、恍惚として烟草持てる手を忘れて、茫然自立せしむるものあり。既にしてハット自覺するの刹那、殆んど本能的に、烟草を取りて、一吹すれば、烟、硝子障子に當つて、碎けて湧き返る。

◉吾輩は、關西の人、關西の趣味の春の一半は菜花に在り。菜花十里夕陽黄の奇景は關東には無し。浩々歌客は富士山麓、大宮の人、また菜花の金波、富士山を浸すこと無きを遺憾としつゝあり。此の人にして、菜花の畫趣を、眼前、帝都の中に。占領しつゝあるは、吾輩の、欣羨に堪えざるところならずんばあらず。而して菜花畑の持主の心胸面目、果して風流爛漫の人なるべし。吾輩も知らず。歌客も知らず。

◉今の帝都は、昔の武藏野なりといふとも、昔も菜花の畫趣無く、野に立ちて吹くべき趣味の烟草も無かりき。在原業平が、「若草の、つまもこもれり、われもこもれり」と歌ひし詩情も、雜木林の間の菜花畑に、富士山の倒映するにいづれぞや。

◉吾輩は、此の奇景に對して、恍然耽思するもの久し。縱令、菜花は落ちて實のるの頃とならんも、此の風景、長く印象して忘るゝこと無かるべし。

◉吾輩は、此の奇景を賞するに、生憎、一本の上烟をポケットにせざりしを惜む。蘇東坡の所謂、月あれども酒無きの嘆、此の時に在り。吾輩、嘗て、旅行者は須らく美酒一罇を携へて、好風景に逢ふ毎に、一杯を擧ぐ可きを言へり。今に於て、旅客のポケット、またつねに上烟の數本を蓄へざる可らざるを思ふ也。

吾輩、未だ博覽會の煙草を見ず。また併せて煙草と人物とを論ぜん事を思ふ。櫻花散りて、葉櫻の影、疊に敷く。此の頃、風、紅塵を捲きて、吾が座事亦た太だ忙がし。政局の著々、展開して、臨時議會の頃まさに此の稿の完成を見る可きなり。

新内閣成立の後二日、　　黑頭巾記

東京市政を支配する人々

鷲城學人

○東京市政刷新の聲は今までも耳に鮹の出來るほど聞かねてゝないが、最近市會議員の改選が行はれるに及んで一層高くなり、新しく起つた候補者は一級二級三級を通じて孰れも市政刷新を唱へ、人格の疑はしいものまでも之れを旗印として居る。殊に第一流の實業家が打つて出たことは餘程變つた現象である。

○今まで市政に携はつたのは辯護士や政治關係の人が多く又た實業方面のものもないてはないが、社會上の位置と聲望とを具備するものは絶えてない。東京市政と財界と密切の關係あるに拘らず、從來此階級の實業家は何事も冷淡に構へ、眞面目に市政を研究し、公益を計るといふ觀念に乏しい。然るに今度粒選りの人々が奮起したといふことは市民の氣分を眞面目にするのみならず、之れが先驅になつて將來東京市を始め東京以外の都市に於ても、立派な實業家が自治制の爲めに盡力するやうになるかも知れぬ。

○東京市政の腐敗は一朝一夕のことでなく、嘗て沼間守一の府會議長時代に胚胎し、其後星亨が政界の大魔王として魔手を市に延すに及び其極に達した。彼が刺客の兇刃に殪れた後も一旦深く築き上げた勢力の根抵は、幾多の乾兒に依て擁護されつゝ終に今日に至つた

○星の忘形見ともいふべきは今日東京市の、伏魔殿と稱せられ、刷新派の攻擊の標的となつて居る常盤會といふ團體である。初め市政倶樂部といひ、次に二十日會といひ、更に月曜會となり、それから今の名稱に改まつたのであるが、其形成分子なり市會に於ける遣口は今も昔も變らない。政治系統は無論政友會であるが會員の中には政友會以外の分子も少くない。衆議院て

は政友非政友て喧嘩をしても、從來市會の問題については同じ行動を取つたものもある。

○常磐會といふ形には必ず利益問題といふ影が伴ひ、電車市營、瓦斯合併、電燈統一其他今までに起つた總ての市の大問題の背後には必ず常磐會が潜んで甘い汁を吸うて居る。帝國の首都として大きな財政を有つて居る市のことてあるから、大なり小なりいろ／＼な事業がある。一年間に使用する砂利だけても莫大な額てある。いろ／＼な方面に手を廣げて居る常磐會が市民の利益を計るといふが如き高尚なる考へなく、凡そ自分等の喰物になるものは、砂利てあらうが、塵芥てあらうが、糞尿てあらうが更に選ぶ處ないといふ有樣てある。

○斯う利益があるから意地汚い議員は常磐會に集つて來る。從來代議士選擧に於て政友會は劣敗者の位置に立ちながら、市會議員の選擧になるといつも常磐會が多數てある。

○歷代の市長は松田秀雄ても尾崎行雄ても將た坂谷芳郎ても此團體を無視しては何事も出來ない。又た何人を市長に選ぶにしても一に此團體の嚮背に依て決するのてあるから頭の上らない筈てある。

○殊に尾崎の如きは市政の亂脈について最も責任がある。彼が東京市長に擧げられたのは衆望が歸した譯ても何てもなく、第一桂內閣の地租增徵案のことから伊藤總裁と衝突して政友會を脫すると、伊藤は彼を敵に廻はすの益なきを思ひ、懷柔の意味から政友會のものに旨を含めた結果てある。此事情は一部のものしか知らない。恐らく尾崎自身もさる事とは知るまい。

○市長在職六年間、議會に出てもスンともスウともいはず、市政について何一つ自働的に仕事したことなく、總て一派の傀儡に使はれ、漸く市長を罷むるに及んて、恰も鎖と箝口具を外した犬の如く、自由の行動を執るに至つた譯て、口先きて大言壯語しても、實際意氣地のないことは是れても分る。

○今度の選擧に於て常磐會の撲滅運動は猛烈なる勢ひを以て起り、常磐會反對を標榜するものは歡迎されるが、常磐會派は不人氣であるから、當選後其系統に入るべきものも、明らさまに名乘るの不利なるを思うて假面を被るといふ有樣である。

○斯かるは强者に對する反動なるの勿論なるが、一面には海軍問題の起つて以來、廓淸といふ聲に刺戟された點もある。實業家の歷々が市政に關係せんとし、世間も之れを歡迎するのはやはり反動の結果ともいへばいへる。

○要するに非常磐會の叫びは近頃政界の流行語たる非政友の聲と同じだと看れば誤りない。併し今まで常磐會以外にも隨分質の善くない人間が居た。今度でも非常磐會の側に如何しい顏觸れが少くない。唯だ常磐會を討つに急にして、他の惡分子に緩なる結果は第二の常磐會を造ることになるから餘程注意せねばならぬ。それ故に常磐會といはず、非常磐會といはず、市政を喰物にせんとするペスト菌は總て驅逐することにして、立派な人物を擧ぐることに努むるのが第一である。

二

○星の殘黨にして一時市政界に知られた中島又五郎は失敗して生きたか死んだか分らなくなり、渡邊勘十郎は近年引退して噸と聞えず。池の端の旦那といはれた江間俊一は最近まで市會議長の椅子を保つたが、近頃勢力がなくなつて殆んど忘れられた形である。現に活動して居るのは市會に於て森久保作藏・安藤兼吉市電氣局に於て井上敬次郎及び黑幕に隱れて惡辣なる手腕を振へる利光鶴松等である。

○常磐會には政黨の如く誰が首領と定まつた譯でないが、森久保が首領の位置に居り、安藤が其參謀長とも見るべきである。常磐會が斯くまで纏まつた勢力になつたのは兎に角森久保の力である。故に常磐會といへば必ず森久保を聯想し、森久保といへば必ず常磐會を思ひ浮べ、常磐會攻擊は即ち森久保征伐を意味し、彼を倒しさへすれば常磐會は忽ち致命傷を負ふことになる。

○故星をタマニー・ホールのクローカーとせば、森久保は小なるマッフィである。彼は星の學問と膽力なく、眼中一丁字なき壯士上りであるが智恵はなか〳〵ある殊に籠絡の才は星門第一であらう。

○三多摩壯士といへば自由黨の昔關東に鳴り渡つた。其中少しく教育のあるものは東京府廳、市役所、各區役所、各郡役所の小役人になつて居るが、然らざるものは今でも二三千南多摩、北多摩、豊多摩の三郡にゴロ〳〵して居る。

○最初三多摩壯士〃總大將は憲政黨內閣の時群馬縣知事になつた石坂昌孝で、其結社を武藏俱樂部といひ、森久保及び村野常右衞門は其編裨たる位置にあつた。石坂の沒後、武藏俱樂部は森久保の指揮下に屬し、今ても彼の命令のまゝに動くから、是れが彼の爲めに餘程の勢力てある。

○森久保は最初大井憲太郎の爲めに働いたものて、現に大阪事件に關係して牢に入つた。然るに星が大井を蹴倒して關東派の牛耳を執るに及び、初めて其麾下に馳せ參じ、星は專ら彼を通じて三多摩壯士を使つた。尤も彼は操縱方てあつたから、自らステッキ・棍棒を振はなんだ。

○武藏俱樂部時代の彼は或は米相場をし、或は花を引き、或は東京市の砂利のカスリを取つて俱樂部の經濟を立てゝ居た。今ても相場は彼の本業て、大問題の起る每に必ず之れを利用して大なり小なり儲ける。

○現に四十二年電車市營問題の時も買收金を四方八方に配り、或は市會議員を誑し込み、兜町て十數萬圓を儲けたて、其一部を以て自分の借金拂ひを爲し、大部分を乾分に分配した。斯くの如く市を喰物にして惡錢を手にしても自分の懷中(ポケット)のみを肥さない處は流石に親分肌てある。

○彼は十年以上市會議員をして居るけれども、未だ嘗て發言を求めたことなく、又た代議士としても議會に一言半句の演說を試みない。併し彼の舌頭には一種の魔力がある。君は三尺の劍を揮へ、我れは三寸の舌を振はん。三寸の舌は彼の唯一の生命てある。

○されど彼の舌は踔厲風發四莚を驚かす雄辯宏辭にあらずして、四疊半的の喃々私語てある。彼が滿面の愛嬌と猫撫聲とを以て口說くと、大抵のものはコロヽホルムを嗅されたやうにグニャリとなる。斯くして彼は常磐會を撫摩し、總ての問題を纏めるのてある。

○彼は表面の活動家にあらずして、如何なる場合にも裏藝の人てある。殊に選擧運動に掛けては餘程作戰に長じて居る。唯だ無學てあるから折角の鬼才も善面に用ゐるを知らずして、惡ひ方面にのみ發達して居るか

ら、品格ある紳士となるを得ず、何處までも鷄鳴狗盜の雄たるを免れぬ。

三

○兄弟分の關係を結んで森久保と形影相伴へるものは利光である。彼は辯護士をしただけに多少學問もあるが、品性上の修養を缺き、惡い事をする智慧は或は森久保の上に出て居るかも知らぬ。金を儲けても自分の懐ろに入れ周圍を霑はさぬから、森久保のやうに手足になつて働くものが居ない。

○明治三十一年代議士に當選し、市會にも首を突込み、星直系の鬪士として知られた。議會でも凡そ利益問題と名の附くものには彼の關係せざるなく、市會に於ても爲し得る限りの惡事をして醜名を謳はれた。蓋し此兩三年が彼の全盛時代であらう。

○三十三年收賄事件の爲めに檢擧されて代議士及び市會議員の公職を失ひ、それからといふものは政界と縁切れになつた。同じ醜仲間の中島以下の徒は全然浮ぶ瀨を得ずに終つたが、利光は出獄後間もなく街鐵の重役になつた。是れは星の勢力にも因るが、一は多くの權利株を有つて居たからである。

○是れより先き電車市營民營の議論が喧しかつた時、星の一派は電車を民營にして東京市が公納金を徴せなければならぬといふ言前から民有運動に狂奔し、目的の爲めに手段を選ばずといふ星のモツトーを遺憾なく實行した。

○當時權利株は羽に羽を生じて各要處に飛んだが、其總元占めを勤めたのは利光で、森久保の如きも其手先きに使はれて少からず權利株の頭を刎ねた一人である。

○利光が如何に惡辣家であるかといふ證據は、百株を取扱へば帳面には千と記入し、千株を配れば二千と記入し、少からぬ權利株が彼の手に殘つた。これが段々高値を吹出して、今日の富を造る基本となり、又た三社合併後の東鐵に入つて重役の椅子を贏ち得た譯である。

○東鐵時代も彼は表面に顏を出さなんだけれども、裏面の勢力は素晴らしいもので、彼がチン〱といはねば電車が動かぬとまで稱された時代もあつた。或る目的の爲めに尾崎を操縱した影武者の錐頭は彼で、尾崎でも誰でも彼の前には頭が上らなんだ。

○嘗て東鐵重役改選に際し、銓衡委員が今の鐵道院總裁仙石貢を社長に擧げやうとすると、星系の株主は極力之れに反對し、株主大會の時、三多摩壯士を入れて大騷動を惹起したことがある。此反對運動の黑幕の誰であるかは問はずして明かである。

○蓋し利光なり森久保なり井上敬次郎なり、私利の爲めに私黨を組立てゝ居る一派は、暗面の秘密が暴露して何事も出來ないことになるのを恐れたから、仙石排斥を企て、其代りに千家尊福を社長に擔いだのである。それ故に千家は初めから終りまで彼等の藥籠中のものであつた。

○利光は議席を有たぬから、昔の如く直接市會に向つて睨みを利かすを

得ぬから、其方は棒組の森久保が引受け、自分は專ら會社を操縱し、内外呼應して暗中飛躍を試みたが、現在に於ても鬼怒川水電に楯籠つて常務會を利用し、森久保も何事か起れば必ず相談して居る。

○利光もあれだけの才氣を善方面に用ゐたら、一廉の人物になり得たかも知らぬが、森久保と同じく惡用するから暗黒面(ダークサイド)の人になつて仕舞つた是れといふ星の長所に私淑せずして、何事も其短所を眞似た結果であるまいか。

○利光・森久保の外に今一人類似の人物が居る。それは高橋義信といふ男である。彼も自由黨の壯士上りで、無學なる點に於ても、代議士として何一つ發言しない點に於ても森久保と同じである。

○惡錢も負けず劣らず取るが、それも自分に着服せずして人に分けてやるから一箇の小ボスとして立てられ、先生の尊稱を口にするものもある今まで市會に席を有たなんだが、議員中には彼の命令の下にどちらにでも動くものが十人内外あるといはれた。市會議員選擧の結果、此兩雄の相撲が餘程見物である。

四

○實業家の立つたのは自發的であるか若くは他動的であるかといへば、豊川にせよ加藤にせよ無論自發的と思はれぬ。併し自發的にせよ、他動的にせよ選擧に打つて出たことは非常なる奮發である。

○豊川・加藤の外に大橋新太郎と星野錫も出ることに決したらしく、朝吹英二も最初起つ筈になつて居たが仔細あつて辭退した。何の仔細であるか確知するを得ぬが、元來彼は三井系の耆宿であるから、出るとなれば三井家から推薦する譯であるが、最近ヴヰカス事件に關し、三井の重役相率ゐて刑事被告人となり、大に世間を騷がしたので、時節柄遠慮したのであるまいか

○豊川は實業家というても、今まで自分で事業を經營した譯でなく、三十何年間三菱の番頭として始終し、いろ／＼な會社の重役になつたのも多く三菱の勢力を代表してのことである。昨年春莫大なる隱居料を貰うて表面關係を絶つたけれども、世間ではやはり三菱の元老として遇し、三菱の方でも先代岩崎彌太郎と郷國を一にするのみならず、親類關係になつて居るから、全然他人扱ひにする譯に行かぬ。

○彼の本性は小野春也であるが、大阪に居る頃理想の豪傑たる豊臣秀吉德川家康・張良・陳平の各一子を綜合せて今の姓を製造した。慶應義塾に學んだ時も、三菱に入る時も此姓を用ゐ、親の附けた名を變へるのは怪

しからんと彌太郎からひどく叱られたさうであるが、餘程氣に入つたと見え、豊川良平の變名で今まで通した。

○こんな名を附けるだけあつて、人間も一風變り略もあれば膽力も相當にある。近頃年を取つたので酒をやめたが、昔は斗酒尚ほ辭せずの方て、飲めば怪氣焔を吐いた。普通の商賣人と違ひ、金を儲けて貯込むといふ方てないから、位置の割合に富んで居ない。小石川の家なども財界の閥族としては案外粗末なものてある

○若い時或る友人と三人寫眞を撮つて此中誰が一番早く大臣になるかといつたさうであるが、肌合からいへば政治家にもなれる。大藏大臣にすれば高橋是清などよりも遙かに好いかも知れぬ。

○友人が大臣になつたり、世間の評判が好かつたりすると、内心嫉妬を起すのが世間普通の淺間しい人情てあるが、豊川には毫もさる小人根性なく、寧ろ友人を世に出すことに骨を折り、友人が仲たがひすると心配して調停をする。一時同志會贔負になつたとて彼是れいふものがあつたが、若し同志會に傾いたとすれば、それは桂に心醉した譯てもなく、又た同志會の主義政策が氣に入つた譯てもなく、加藤高明なり大石正巳なり仙石貢なり、其他多くの友人が關係して居るからてある。

○同志會と反對の立場に居る友人ても陰に陽に盡して少しも變りない。陸軍の楠瀬幸彦ても海軍の島村速雄ても同郷の友人といふので親切に交際して居る。殊に前海相齋藤實とは自分の子を養嗣子にやつた程の間柄てあるから、海軍問題については齋藤が頭を惱ましたと同じ程度に豊川も心配したらしい。此友達思ひといふことは彼の美質といつて好い。

○加藤は伯耆の人で年少の時坊主であつたが、後ち還俗して兵庫縣の屬官になつた。其關係から時の兵庫縣令森岡昌純が共同運輸會社長になるに及び加藤も同社に入つたが、間もなく共同運輸は三菱汽船會社と合同して郵船會社と改まり、引續き其重役として今日に及んだのであるから隨分功勞がある。財産も餘程出來たと見え、先夫人が重患に罹つた時、幾萬金を投じてラヂウームを取寄せたさうである。

○人物も勢力も豊川に比して、遙かに劣るが、三菱系の實業家としては苔が生へて居る。此間近藤廉平の隱居するに及び、彼は副社長より社長

に進んだが、此次は彼の退隱すべき順序である。

○大橋は出版界の成功者であると同時に、出版以外にも各種の事業に手を出し、兎に角財界に相當の位置を占めて居る。先考佐平の如く創業の手腕があるか何うか知らぬが、父の志を繼いで今日までに博文館を發展させた經營の才は尋常でないことを認める。

○年少故中村敬宇の同人社で學問の片端を噛つたに過ぎぬが、經濟上の理窟は一通り分り、實業家の會合に於て時々下唇の突出した妙な口附で經濟論を試みることがある。商才はあつても士魂に乏しく、利に敏なる一方で人間が冷たく出來て居るから德望がない。

○彼に比すれば星野は先輩でもあり又た人望もある。極めて眞面目な實業家で、方面に依つては中野武營よりも實務力があるかも知れぬ。併し過ぐる代議士運動に際して有權者に鰹節を配つた處はやはり商賣人たるを失はぬ。將來中野の後繼者として目されて居る。

○是等の人々は常磐會にも非常磐會にも關係せず、孰れも不偏不黨を標榜して居るが、將來の態度に就て二樣に解釋せられる。

○善意に解釋すれば、彼等は智識と富と聲望とを兼有する紳士であるから、苟くも自己の利益の爲めに如何はしい振舞のある譯がなく、眞に二百萬市民共同の利益を理想として治制の發達に努めるに相違ない。さすれば悪い舊勢力を抑制して市政を支配する新勢力となるかも知れぬ。

○併し彼等は孰れも電燈なり瓦斯なり直接利害關係を有し、殊に加藤の如きは郵船會社々長として築港問題と密切なる干繫がある。自分等の利益擁護を以て必ずしも絶對の目的とせぬまでも、少くも思惑外でないとすれば、他日經濟關係の問題が起れば或は同一行動に出づるかも知れぬ。又た不良團體も實業家を表看板にして裏面でいろ〳〵仕事するのを便利とするかも知れぬ。

○併し余は飽まで善意に解したい。尤も彼等に多くを期待するの無理なるにせよ、少くも彼等に依て市會の品格を善くするだけの效能があると思ふ。

（五月十八日稿）

大阪の五夫人

松井すま子

近松座以來の後援者廻りをする

梅原夫人には此前はお目に掛れなかつたからと心配して居ると、此前とは違つて御本宅の方へ車は降りた、『オヤッ』と思つたけれど、お店の方へ行つてお目に掛れなかつたのだから却つて仕合せにしてお玄關のリンを押す。

十八九位の色の白いきれいな女中さんに案内されて、堂島の川を見晴した明るいお座敷に通る。三四人の女中さんが代る〲お茶やらお菓子やらコーヒーやらを運んで下さる、やがてスラッとしたお背に紫紺掛つた縮緬のお羽織をしなやかに召した奧樣がお見えになる、そしてお氣輕るにいろ〲話して下さる。

『吉崎さんの奧樣へ入らして？まだ、そう、入らしたらね、澤山いろ〲な事をお願ひ遊ばせ、私もね、今はね子供が出來ましたので引こもつてばかり居りますけれど、以前はよく吉崎さんや横山さんとつながつていろ〲の事をしたり出あるいたりしたものですよ、此度お逢ひになつたら私の分までもつてよくお願ひ遊ばせ、私からもまた電話をお掛けして置きますから』

『エ、アノ吉崎樣の奧樣はこちらへつきます？すぐお電話で、待つてるからすぐ來る樣につて仰つて下さいました』

『アそう、そりやよかつた、まあね私も出來るだけのお手傳ひはしますから、一生懸命遊ばせよ』つて、これが大阪の社交界で有名な梅原夫人かと思はれる程打とけて、初見の私に親切にして下さるので、ほんとうに嬉しかつた。此夫人を花に見立てたら黃菊と言ふ所でせうか。

横山夫人のお宅は土佐堀一丁目、備後橋を渡ると永井旅館、此處へ來るといつもマグダの時の事を思ひ出す。其時の女優連一同が先生に連れられて住吉へ行つた歸り、二階の幹部室の廊下からT氏が、電車から降り樣とした私たちを、ギッと睨んだ目玉の白かつた事

を思ひ出した。

『御用のお方はこれをお引き下さい』と書いた札のさがつてる綱をひいて名刺を出すと、やがてお玄關の向ふの方から

『サアお上んなさい』と威勢のいゝお聲を掛けて下さりながら小走りに出て入らした奥様、色の白い長面にホンノリと薄ばら色のさした生々としたお顔が、夕暮に近いお玄關の薄暗がりの中にくつきりと浮き出て見えた、そして

『今日はこつちへ入らつしやい』、と先に立つて洋風の應接間へ案內して下さる。

『何日着いたの』

『きのう―』

『アそう、もう方々へ行つて來て?』

『エ半分程、あしたまた後半分を廻りますの』

『妹の處へは?』

『え、之からですの』

『そう、ねえ須磨さん困まつた事が出來ちやつたの、横山の父が亡くなつたの』

『アラッ』

『夫でね、いつも程は出來ないかも知れなくつてよ、でも私だけは何にかして行きたいけれど、』

十二三位の、前髮を分けてハイカラなあみおさげのお孃樣がお茶を持つて來て下さる、

『須磨子さんこれ私の娘よ』

『アラまあ、こんな大きなお孃樣が?』

『エそうよ、』奥様はすましたもの—

『〇さんコーヒーを持つて來てお上げなさい、早くしないと須磨子さん歸へつて了ひますよ今日は急ぎなんだから、あんた番附けを持つて來て?、ア〇さんちよいとお待ち之をアスコへ持つて行つてね今日中に廻して下さいつてね、早くしないと手おくれになりますよ、あんたね妹の處へ行つたらねウンとどつさり働かせておやんなさいよ、Uさんなんかそりや賴み込む事がうまいのよ』

『エ、どんな風にお願ひしたらいゝでせう』

『そうねーま、せい〱どつさり働かせておやんなさいよ』

『でもあんまり御無理をお願ひしても、若し御迷惑になる事が有つてもいけませんわね』

『だめよそんな氣の小さい事を言つて居ては少しUさんを見習ひなさいよ』

お孃樣の持つてらして下すつたコーヒーを頂くとすぐおいとまする、

『ぢやね一廻りすんだらゆつくり入らつしやい。先生によろしく』、涼しいお聲をお玄關から、私の背後へあびせかけて仰る。

外は何時か夜になつて居る。暗にまばゆいともしびの中を車上にゆられながら堂島へ出る。

横山夫人は白菊といふ感じ。

吉崎夫人は紺地お召に赤のあらひ縞柄、半巾はやたら縞、半巾は麻の葉模様、のお召物に半襟を掛けて、

ねづみ掛つたお召の派手なお前掛!!、其艶麗なお姿には思はず目を見はらずには居られなかつた。御挨拶が濟むと、

『此前はちやうど折惡く東京へ行つたものだから何にもお世話が出來ませんでしたから、今度はもう其分まで働くつもりでおつきになつたと聞くとすぐ電話をお掛けしましたの』

私は下山さんからMさんの傳言されて來た品物や手紙を出したそして

『Mさんもいつれ伺ひますからつてよろしく申されました』

『アそう、Mさんつて方はどんな方?、一體どんな經歴の方?』、私は思はずハッと息結まつたけれど

『アノ前に他の劇團にも居た事のある方ですから芝居の經驗は有る方でせうと思ひます』

『ヘアそう、貴女は大層いきな物をなさるのですつてね、着付けの好みは御自分でなさるの』

『エヽ、出來るだけは自分でもしますけれど大體は先生方が、粋なんて私の柄にないのですからよつぽど着付けでもよくないといけないんですけれど』

『西洋物の方は貴女も馴れて入らつしやるし、夫に西洋物は私だちにも分りませんからよござんすが、日本物となると皆目が肥えて居ますからね、よつぽど氣をおつけにならなければいけませんよ、お召しはどんなの?』

『着物は紺地に茶の棒縞、夫から羽織はお納戸縮緬の格子縞にして見たのですけれど、やつぱり黑の方がいゝと言ふ評ですから黑にしようと思ひます』

『黑?のそうね、黑ならちやうどいゝのが有りますよ』

やがて女中さんが紺縮緬に紅葉の模樣の出たお羽織を持つて來て下さる、

『サ 召して御らん遊ばせ』つて、まあ私の此上へ!とおど〳〵して居る私に奧樣は氣輕に立つていらして着せかけて下さつて、

『少し袖がみじかいけれど、貴女のは何寸?、短かかつたらねおなほしなすつてもかまひませんよ縫込が有りますから、でもねあんまり長いのはやぼなのですよ、夫から羽織の下は半巾帶がいゝのですよ、巾廣のは何うもいけませんよ、黑繻子か何かの前へ出る處だけ何か派手な模樣をおいてお貰ひになるとよござんすよ、夫から髮はいゝ格好に結へてますか』

『エ、東京での評判は惡くはなかつたのですけれど』

『私の髮結ひに結はして上げませうか?』

私はフト床山が大坂にはお○と言ふ髮結ひが居るから下手な髮は結へないと言つた事を思ひ出した

『エ、有難うございます、けれどかつらですから如何でせうね、生地の髮と違はないものでせうか?』

『エエそりやもう人形の髮だつて假髮だつて結ふんですもの、けどそんな事をしたら假髮屋が怒りますか?』

『いゝエそんな事はございませんでせうと思ひます、夫に床山だつてこちらの髮の結ひぶりを見たいでせうから、其方は大丈夫と思ひますけれど』

『ちやね床山に斯々だからつてよくお話しなさいよ』

『エヽ、ではあのおところを伺つて置いて』

『ナニ平野町のお菊と言へばすぐ分ります、ちやね髮を持たしておやりになる時一寸私の方へ電話をお掛け遊ばせ、私もちよいと序が有りますから女中によく言ひふくめてやつてきますから』

なほいろ／＼と心づけて下さる、私はもうお禮の言葉もない様に只おじぎばかりして、拜借した召物を大切に抱えて外へ出た。

こちらはお姉様の白菊に對して牡丹の奥様だと思つた。

人の親切の嬉しさやら何とも知れない不安やらて上氣した頬に川風が心地よく吹いて行つた、穏かてない胸の動悸を押へて早く宿につけかしと思ふと大阪の車の氣の長い事!!

湯に入つて食事をすますとがつかりした、高く下げられた電燈の下に、手枕て横になるもの、トンビ足をして三味線を引くもの、横へ足をなげだして本を讀むもの、誰やらへ手紙をかくもの!!、旅の氣散じに見え氣を拔いた宿屋の女優室の夕!!

あくる日は安宅夫人が逢つて下さるお約束の日。うらゝかな日和の午後一時頃、女中に案内されて二階の洋風の一室に通される。

表通りに向いた右手には、本戸棚、机、椅子、左手中央にはテーブル椅子、肱掛椅子（アームチエヤー）、ソフアなどが置かれてあつて夫がみんなセセツションに出來て居る。

サラ／＼とやさしい衣摺の音がすると私は立上つた。奥様はお背の高いスラリとしたお身體に茶と鼠の棒じまのお召に、白茶掛つた黒繻子と腹合せの帶をつゝましやかな格好にしめて入らつしやる。長おもての瓜さね顔、とても言ふ様なお顔だちに、夫からお顔の地がすき通る様、大奥のおつぼね様と言ふ様なおもかげが何處やらに見える方!、

『まあ此度はほんとに折が惡うござんしてね、此間もお茶に參りましてね皆様と是非連中見物をしませうつてお約束したのですけれど、ほんとうに折が惡うございましたわね、けれどあんまり大速にしないで皆様で毎日に分れて行けば目につきませんから、今日もね午前に皆様がお花の稽古に入らつしやいましてね、おうわさをして居りましたの、吉崎の奥様?』

『昨晩入らつしやいましたけれどまた月曜に來るからつて仰つて下さいました』

『ぢや私も其時にしませうか知ら、夫からね貴女、神戸へ入らつしやる様なら是非御紹介する處が有りますよ、此次お出の時までにお手紙を書いて置きますから』

女中さんがお菓子を運んで下さる、大きな草餅、奥様は夫をお小皿に取つて下さりながら

『之はね私が注文して作らせたのですよ、召上つて御らんなさい』、と仰りながら御自分から太い大きな楊子で小さく切りながら召上るので私も心安く頂く事が出來た。

安宅の奥様は姫百合夫人。

横山さんのお宅はすぐ近くなので歸りに一寸おじやまに伺ふ。奥様は

例の通り小走りに出て入らして、

『待つてたのよもう來そうな物だと思つて。今日は此室にしませうよ』つて、二疊に床の間と違ひ棚のついて居るチンマリとよく整つた小座しき紫檀の可愛いゝ机の上に英書らしいのが開かれて有つた、

『奥様御勉强?』

『いゝえ、ナニちよいと獨乙語をはじめたの、芝居の樣子は何う?』

『おかげ樣で六變いゝ樣ですわ、奥樣はまだ?』、と言ふとクスリと肩でお笑ひなすつて、

『實はね昨日行つたのよ』

『アラツ、まあそして知らんかほして入らして、それで誰も敎へてくれないんですもの』

『知れない樣にコツソリ行つたのよ、だけどとう〳〵見附かつて了つたの』

『そうですとも、そんな事をなさるから』

『あんたうまいわね、こんな格好をして(私が舞臺でしなをする眞似をして)、そして御次男坊のあたまをこんなにして撫でたりなんかして、五郎さんたらねついでにピシヤツとやらなければうそだつてへへ、、、』

『ハ、、、、』

『妹がお部屋へ行つたでせう?』

『エヽ、てねいろ〳〵注意をして下さいましたわ、お千代の半襟の模樣ね、手綱かなんかなら引立つだろうつて仰つて入らしたのですけれど、今日はまだ買ひに行かれませんでしたの』

『あんたそんな物自分で買ひに行くの?』

『エヽ、』

『そうね、もつとも貴女の樣なそんななりをしてブラ〳〵心齋橋の邊をあるいて居えつて誰も氣附くものなんか無いわねフフフ』

『エ、然ですとも、フフ、口の惡い奥樣ね』

『ハ、、、ちやね私が三越へあつらへてあげませう、金糸の縫で模樣を出してね、だけれど夫では大阪ぢや間に合はないわね、そしたら京都からおつかひなさいよ、私夫を寄附して上げるわ』

『何うも有難う』

『ア夫から今日は古門の奥樣の處へ遊びに連れてつて上げませう、ちよいと待つてらつしやい着物を着かへて來るから』

やがて二臺の車は木香新しい格子造りの家の前に降りた、お店らしい處を通り抜けた處がお玄關、右手の奥の方から漆色に光つたお藏の扉が見えた。

日本髪の奥樣が出て入らして横山の奥樣とお顔が合ふと同時にニツコリ、

『今日は』

『お出やす、サアお上りやす。』

そして廣い明るいおざしきの座につくが早いか

『あんた東京へ行つてお琴を引いたつてね、』

と横山の奥樣、

『どこからお聞きやした』、夫から私には分らない會話が三ツ四ツ有つた後、

『之はね奥樣、松井すま子さんつて私の大すきな人なのだから何卒よろしくお引立を、』

笑ひながら殊更に氣取つたしぐさをして仰る、私もつひ笑ひながら御挨拶をすますと

『おとゝひから浪花座てやつてんのよ、今度のはそりや面白いのよ』

『エヽ此間東京へ行つた時な、帝劇てやつてやはつたわ私の行つた時は廿七日頃だしたわ』

『アそう、ねえ此人の日本物ちよいといゝてせう』

『エヽほんとによろしいわな』

『おりゑさんがね半襟は手綱にしたらいゝだろうつて言つてたけれど、ちよいと貴女何うして何時かのお揃ひのは？』

『アレ、アレはまだ持つてます』

『そう私誰かにやつちやつた、貴女のを時に上げて置いて頂戴な、三越へあつらへて上げ様と思つたけれど夫ぢや間に合はないから』

『よろしいとも私のを上げますわ』、と奥様はちやうどお菓子を持つて見えた女中さんにお命じになる、横山の奥様はフト美しく盛飾られた干菓子に目をつけて

『ちよいと之（これ）頂いてもいゝの』

『エヽお上りやす』

『そう私またこんなにきれいに盛つて有るからいけないのかと思つて怖かつた、須磨さんも頂きなさい、夫からお茶のお代りも頂きたいものですね、須磨子さんにはお湯がいゝのよ、何故あんたお茶を飲まないの？色が黒くなるから？聲が惡くなるから？』

『サアどつちてせう？』、私がフト心附いて時計を出しかけると横山の奥様はす早く御自分の時計を出して御らんになつて

『アラもう三時、須磨子さんお歸へんなさい樂屋入がおそくなるから——ぢやまた來るてせうね？』、そしてお二方て玄關まて送つて出て下さつた。こゝの奥様は海棠かと、そんな事を思ひながら、大阪午後の町のあはたゞしい中を車にゆられて浪花座へと急ぐ。

大阪社交界の名花を一々おたづねして見た印象が、みんな私には嬉しいものてあつた。

紹介狀を頂いてもこんどは折が惡かつたのや、お目に掛つてもこゝには書けなかつた方々もあるし、東京てはこんな風に社交界の目ぼしい方に心安くお目に掛る便宜が少ない。大阪の社交界が一層西洋式だと言ふ或方のお説はこゝいらかと思つた。

（新東方）

常陸山　西の海　朝潮　小常陸　綾浪



宇都宮　綾川　陣幕　千年川　佐賀ノ海　兩國　釋迦ケ嶽



東西力士評論

△各力士の得手不得手と今場所勝負豫想

『報知』相撲主任記者　生駒翶翔

本年春場所の大接戰に於て、東西兩軍死力を竭して奮闘の結果、一月十九日最後の決戰に、東軍利あらず、優勝旗を西軍に奪取されてより、月に閲すること五ケ月、日を隔つこと一百四十日、再び戰機熟して、五月卅日より夏場所の開場を見ることゝなつた。新東軍に於ては、常陸山の退隱、駒ケ嶽の死亡に依つて、著しく最高幹部の寂寥を感ずること、恰かも松田正久男と、長谷場純孝氏を失つた政友會に類するが、偶原白頭翁に比すべき西の海が、隱然總裁の位地にあつて、全軍を指揮するあり。嫌がる西園寺侯を、無理に引張り出さんとする政友會に倣はずとも、大隈伯にも比すべき、太刀山軍の來襲を邀へて、一大血戰を試むることであらう。夫れに前場所に異常の好績を收めた宇都宮、綾川等の俊秀に加ふるに、新入幕の兩國、釋迦ケ嶽あり、朝潮の大關候補戰に於ける奮闘、及び小常陸、四海波、綾浪、小錦等充實

龍ヶ崎　大の川　紫雲龍　近江富士　四海波



したる中堅を以てすれば、必ずしも猛將林の如き新西軍と、勢力の懸隔を見なからうと思はれる。然し唯た漫然と相撲を見ても、千篇一律の勝負を繰返すのみで、大して興味を惹かないが、各力士の得手、不得手、才倆、技術、取口の癖などを心得て見物すれば、一番毎に特殊の興味を覺え、幾十番見ても飽くことを知らぬものである。今茲等初心の見物の爲めに、重なる力士の得手、不得手を解說しやうと思ふ。

各力士の得意と缺點

▲西の海　體格の立派なことは東西第一人と稱すべく、性質溫厚で取口は鷹揚な所、天晴な大關と云ふべく、昔の谷風とはコンな力士かと想像せられる、格別得意と云ふ手もないが、突張りもなか〳〵強く、開いて叩く器用もあり、小手投、上手投も利く、四ッになれば腹を遣つて釣りもあり、投げを打つてヂリ〳〵寄るなどの正攻法も心得たもので、石山、土州山、浦ノ濱、陣立の如き敏捷、精

（幕下有望力士）



大錦　栃木山

悍な對手をも巧みに取りコナシて相撲にしない所、慥に故駒ヶ嶽よりも相撲が上品で、手堅き觀がある。殊に春場所太刀山と角して、最初猛烈な叩きを殘すや、進一無二突張つて、さしも大敵を東土俵に追詰め、太刀手操つて正面に廻るを、再び突擊奮進したが、氣は焦つても疲勞を覺えて、出足の伴はない機を計つて、太刀山が二度の叩きに、西脆くも腰の備へを取られ、結局西溜りに突出されたが、其戰法の覇氣に富み、精氣潑辣たること、近年稀れに見るの壯觀であつた。思ふに横綱候補戰の今場所に於て、西たる者太刀に對して、一層峻烈なる相撲振りを見せるであらう。偖此力士の缺點は、一般力士の第一資本たる腰の粘力が乏しいのと、右足に生理的故障があつて、不意にガクリと折れることがある。前場所大蛇潟と左四ッに組み、互に兩廻しを引いた所で、大蛇が上手投と捻りの相の子の樣な、不得要領の手で左方に担ねるや、西の右足がガクリと折れて土俵に片膝突き、誠に詰らない負け方をした。斯かる缺點があるので、足を遣ふ敵に對すると、非常に臆病になつて、平素の輕快にして飄揚な、春の波の如き取口が見られなくなる。玉椿や玉手山に對して、勝手次第に内懷に飛込まれ、忽ち

柏戸　土州山　玉椿　黒瀬川　玉手山



足を捲かれて、大きな圖體を引繰返されること、鯨が鯱に出合つた有樣なのは、全く腰と足の缺點を自覺して、餘りに敵を恐れ過ぎるからである。鳳や黒瀬川と四ッになつて分けを取るのも、亦た敵が足を遣ふ得意があるのを知るからだ、嗚呼天二物を與へず。若し彼れに前代荒岩の腰を與へたならば、無論太刀山よりも先きに横綱を張つたであらう。

▲朝汐　此力士は長身にして脊力衆に超え、腰骨强靱にして、膽力の大なること東西無比と稱すべく、加ふるに奇手縱横、進退敏迅、敵をして應接に遑なからしむる所、定に東軍の精華である、最も得意とする所は右の下手投だが、敢て得意に拘泥することなく、右か入れば下手投を打ち、或は右上手、左下手等機に應じ變に處して投げを試み、兩廻しに手が掛れば、委細構はず午蒡抜きに釣り出すこと、權助が枯木を引抜くよりも易く、先年綠島が兩廻しを引き、首を朝の胸に當て、充分に喰ひ下つたのを、强引に釣上げた爲め綠の首が曲つて、翌日から休んだ事がある。之は物理學上槓桿の理を度外視した取口だが、彼れは鋭氣に任して、コンな强引な手を出すのである。其上彼れには突張りと叩きと引落しの飛道具があるので、鳳、伊勢の濱、大蛇潟などは、西の海よりも、却つて彼れに對するのを、氣味惡るがる樣だ。西軍多士濟々たりと雖も、彼れに對して必勝を期し得る者、獨り太刀山あるのみ。彼れ亦た東軍の雄鎭たるに足る。彼れは斯の如く相撲上手であるが惜しい事には其脊力を恃み過ぎて、往々無理な相撲を取り、或は相手を侮りて思はぬ敗を取ることがあり、殊に負けが續いて來ると、益々取口が粗笨に流れる弊がある。去年の夏場所浦の濱に敗れた如きは、憖かに敵を侮つた罪で、先年玉椿に兩廻を引かれて喰ひ下がられながら、首を抱へて振り廻し、結局足を捲かれて引繰り返された如きは、丸で素人の相撲の樣であつた。

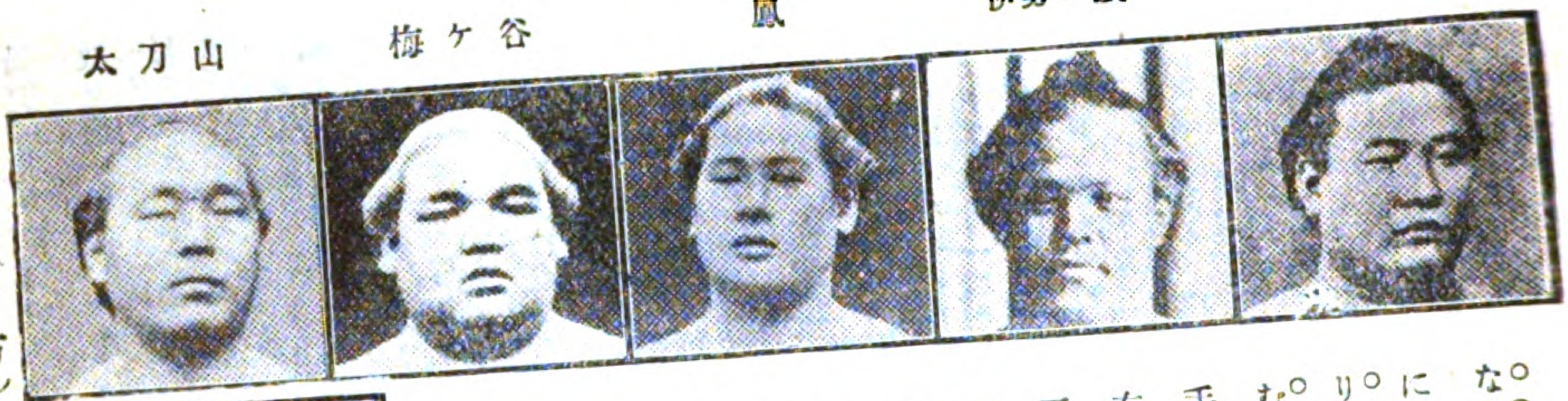
（幕下有望力士）



松井川　九州山

▲四海波　腕力も腰力も相應に強く、突張りも大阪出には不似合な程强く、叩きとイナスのは大阪力士の特色だから、捌からら管がなく、其上相手によりて取口を變化する呼吸を覺えて居るので、今では東軍幹部の有力なる一員である、此人の悧巧な所は、梅ケ谷の樣な退嬰主義な力士に對しては、猛烈に突撃して土俵際迄攻め付けるが、此上長追せば敵に伏兵ありと見れは、忽ち矛を收めて手四ッとなり、足を飛ばして敵を脅威し、徹頭徹尾敵に攻勢を與へずして引分と

大蛇潟　伊勢ノ濵　鳳　梅ヶ谷　太刀山



(新西方)



小野ヶ崎　平の石　綠島　苅藻川　浦の濵　大鳴門　金の花

なる。近來此人と梅とは引分けと極つて居るのは、此人の策戰が巧いからである。然し是れは消極的の長所だが積極的には、玉椿に對する策戰は、尤も精妙を極める。即ち玉に左りを差させば東軍一人も必勝を期し得る者なき代りに、左りを差し得ない玉椿は、恰かも水を失ひし河童の如く、手も足も出ないを知つて居るので、立上りに玉が電光の如く飛込むのを、四波一歩下つて受止め、右手を玉の胸に當て、敵の右手を引張り込んでグイと絞り上げる、こうなると玉得意の左手を入れることも出來ず、右に廻しを引くこともならず、進退谷つて策の出つる所を知らない。其所で四波は機を計つて左手に敵の首を捲き、同時に長身を利用し、左足外掛左方へ捻り廻すので、此放膽にして細心な取口が、奇妙に成功して、玉昨年夏場所、と今年春場所に續いて二回負けて居る。其他彼れが前場所大蛇潟の鋭鋒、正面から攻めるの不利を曉り、突撃と見せ掛け、敵が勢ひに乘りて突進する所を、右に開きて叩き込み奇勝を占めたる如き、將た先年火の出る樣な太刀山の鐵砲を潜りて、其左足を取り。太刀渾身の力を竭して、押潰さんとするも、彼れの腰堅固にして砕けず、土俵際に責め付け十中九分九厘迄勝ちし相撲を、打棄られて負けとなつた事もあつたが、是れは例令負けても彼れの歴史に特筆大書すべきである。然し斯く相撲は上手でも體格、力倆中力士の階級にあるから到底大關になる望みはなく、關脇迄行ければ結構であるが、所詮は前頭三四枚目位が一番適當な所であらう。

▲綾浪　上脊も脊力も腰力も相應にあり、取口堅實にして、特に四ッ相撲の强味は、東軍有數の好力士である。彼れが上下兩廻しを引き、兩足をウンと踏張ると、容易に攻陷し難い、太刀山の强力を以てしても、嘗て彼れに兩廻しを渡した爲めに、責めあぐんで水を入れた程である。況んや鳳、伊勢の濵、黒瀬川、浦の濵などが、彼れに兩廻しを與へながら、

强引に釣りに行つた爲めに、外掛け浴せ倒しの秘手を喰つて、見苦しき敗を招いたこと一再に止まらない。唯た彼れの取口はジミに過ぎて、精彩を欠き、勝味遲くして敵の仕掛を待つ風あるは缺點で、突張りの利がないのも損である。

▲小常陸　左差し右筈一氣に寄るのが得意で、其寄身の猛烈さは、凪、伊勢、大蛇の如き大力士でさへ、受け切れぬこと多きを見て知ることが出來る。特に此力士の寄りには短身と便腹を利用して、下から腹でグイ〳〵押上げながら進むので、對手の腰が自然に浮いて終ふのである。格好は餘り好くないが、短身な彼としては、已むを得さる策戰で、又怜悧な取口である。双筈の押しも得意の一つで、殘れば引落しの奇手もある、出足の早いのは稽古熱心の御蔭で、痛みの外は絶對に分けを取らないのは、東西を通じて、此力士一人である。缺點は仕切りに街氣あると、全力を最初の一擊に竭し、相撲が少し粘ると忽ち勝機を失ふことで、二の腰の用意は今一段修養の要がある。之を要するに取口は烈しくキビキビして居るが、單調で變化に乏しい。

▲宇都宮　常陸山、西の海の後を繼いで、東軍の總帥たるべき、有力なる候補者である。得意は突張り、組んでは釣り、投げ、寄り等、諸藝一通りは心得て居り、身長六尺一寸、膂力群を拔き、之に肉が付けば立派な大關たが、夫れ迄には未だ數場所の修練を要する。去年の夏場所入幕當時、敵を輕んじ無暗に引張り込んで取つたので、散々の不成績、僅かに充分潜り込んだ、玉手山を、中釣りにして强力を示したに止まつたが、今年春場所には讙然曉る所あり、突張りの一手を練習して、大體の敵は刎ね飛ばして了つた。然し四ッ身の修養は未た不充分で、黒瀬川や大蛇潟に對しても、突張では七八分の强味を見せたが、四ッに渡ると苦もなく敗れて、何の味も見せなかつた。將來に大志を抱かば、此欠點を補はねばならぬ。特に此力士に注意したきは、立上りの粗笨にして精氣を欠く事で、力士の仕切りは最も大事な瀬戸際である。恰かも滿月と引絞られたる弦上より、矢の將さに發せんとするが如く、渾身の鋭氣を丹田に集めて、猛然とし立つのが法則である。然るに彼れの立上りを見ると、如何にも若猾で、自己の精氣を練らず、對手の呼吸を計らず、上はの空で立上る癖がある。去年の夏場所初日に、金の花に敗られたのは、即ち立上りの精氣を欠いた爲めで、引續き連日の敗因は十中七八迄其爲めであつた。前場所は突張一點張りであつたから、割合ひに此欠點が目立たなかつたが、依然として其惡癖は改まらなかつた。敢て堅くなれとは云はぬが、今少し土俵を大切な物と心得る必要がある。此場所の人氣を一身に集める地位にあるから、特に苦言を與へるのだ。

▲其他　綾川は突張りも四ッ身も共に强く、體格も立派だが、取口に街氣あつて變化に乏しい。兩國は敏捷無比、腕も腰も强い所、先代兩國を辱めない。土俵眞中に相手を櫓に掛け、グル〳〵と二三回振り廻はして投げ飛ばす藝當は、此力士の獨佔で、突張りの猛烈な對手は、透して叩き込み、寄り身の早い對手は、開いて小手を振るなど、對手次第で千變萬化する機智は、得易からぬ才物であるが、多く危道を用ふるから、

一旦調子が狂ふと思はぬ不成績を見るかも知れぬ、同しく新入幕の釋迦ケ嶽は、地力は兩國以上で、取口堅實、勝味早く、四ッ身も強いから、なか〱有望だ。

▲太刀山　新西軍の總帥太刀山は、近年稀に見るの强力士で、單に强い點から論ずれば、先代梅ケ谷（今の雷權太夫）の全盛時代よりも强からう。得意は何かと問へば、誰れでも鐵砲と佛壇返しと答へるが、其鐵砲なるものが、青年時代と、今の圓熟時代とでは、大に趣きを異にするを知らぬ人があるかも知れぬ。即ち四五年前の彼れは、常陸山、駒ケ嶽、西の海、朝潮を初め、如何なる對手にても、滿身の力を双腕に込めて、所謂十二吋（インチ）式の巨彈を發射するを常とし、之を眞面に受留めるは、常陸、駒位のもので、他は皆一擊でケシ飛んで終ふのであつた。所が大砲が大きい程、發射の度數が少ない道理で、太刀山の鐵砲も、餘り全力を込めるので、第一擊を逃げられると、第二彈を送るに、一寸手間が取れる、之を狙つて敏捷な力士は色々な策を弄した。即ち先代兩國の一本背負、櫓、碇潟の足取り、朝潮のイナシ、西の海の叩きなどに掛つて敗れたのは、皆巨彈の狙ひが外れた結果である。玆に氣が付いた彼れは、近來相手を見て、突張の强弱、大小を加減する樣になつた。即ち常陸、駒、西、高見山の如き大きな的に對しては、十二吋以上十四吋位な巨彈を浴せるが、先代兩國、浪の音、小常陸、碇潟、稲ケ崎等の如き嬌捷にして變化に富み、動もすれば彈雨を潜つて、手元に採込まうとする對手には、速射砲若くは機關砲的に、突張を細く速く刻んで、寸隙を與へない樣たな

つた。彼れは近來誰れにも負けなくなつたのは、相撲が弱くなつて用心するからだと云つて居るが、將來は知らす今は決して弱くなつて居ない、寧ろ絶頂時代である。唯だ以前は客氣に驅られて守備を怠つたのを、今は攻守節に當る樣になつたのが、常勝の榮冠を得た理由である。斯かる偉大なる力士として、吾人が竊かに遺憾を感ずるのは、餘りに勝敗本位に流れて、取口に含蓄と溫味を欠き、横綱の品位を具備せざることゝ、立上りに變な所があることだ。吾人は必ずしもペテン立ちとは云はぬが、彼れの立方が完全を欠くの例は、常陸山や西の海に對して時々實見した所である、常陸が米國から歸朝以來彼れと初めての顔合せに、近時稀れに見る大相撲を取りて彼れの勝利に歸したが、此時の立上りに常陸の聲を受けて、少し氣を拔いて立つた爲め、多少物議を招いた。昨年の夏場所か一昨年の春場所かにも、彼れの立ち方が面白くなかつた爲め、常陸は唯だ二突きに突き出された。此時は常陸が衰境に向つたので、最初不意を衝かるれば取返す餘地がなかつたのだ。又昨年夏場所、西の海の空際を待つたなしに立つて、周章てる所を突出したのも見苦しかつた。敵の待つたを豫想して、空聲などを掛ける西の海の愚は責むべきも、横綱、大關の取組に、一回も待つたなしに立つと云ふ策戰は、敵の不意を打たんとする卑怯の精神があると云はれても致方がない。彼れが今後敵に對して成るべく立ち易い樣にして遣り、成るべく全力を竭さしめて、然る後勝味に行く度量を備へたならば、眞に完全無缺の大力士と稱するに躊躇しない。

▲鳳 體格、力倆完備して、手足を用ふること自由自在、所謂進退駈引思ひの儘の荒武者である。其上二六時中新手を研究し、一場所毎に戰法を變ずるので、彼れの對手が、折角苦心して應戰の方略を考へ付いたときには、彼れはもう異つた戰術を用ふる。是れ彼れが最も敵軍に畏敬せらるゝ所以で。初めケン〳〵で賣出し、中頃小手投の一手村正の銘刀の如く、觸るゝ所斬らざるはなかつたが、敵軍次第に防ぐ方法を考へ付いたと見るや、近來體格が出來、地力が加はつたのを利用し、双筈若くは左差しの押しを發明し、誤まつて敵に双手を差さるれば、閂に極めつゝ、異常の腰力を發輝して、捻り倒すの荒事を試み、或は綾浪や、西の海の様なシブトい對手と四ツになれば、努めて廻しを渡さず、足を飛ばして脅威しながら、下から捻り上げて寄い切る戰法を取る。(前場所綾に兩下手を引かせながら片手に首を卷き片手に渡し込んだのは、除外例で四十八手以外の珍手だ)斯くも變化の早い力士で、斯くも體格力倆の揃つたのは珍らしいが、慾には大關としての落付きが足らぬと思ふ。

▲伊勢の濱 腰の強きは西軍の隨一と云ふべく、腕力の強さも西、駒を凌駕する程で、立ち方は奇麗で、取口がキビ〳〵し、勝敗に拘泥しない處は、眞に江戸ッ兒たるに耻ぢない所で、大關としての價値はあるが、體格が、鳳に對して見劣りするのと、勝敗に淡白過ぎて、屢々強引無法の取方をなし、思はぬ失敗を取るのは、大關の榮位を辱むる者である、矢張り朝潮と共に、理想的關脇力士で、當人も其の方が相撲が取り易いと思はれる。得意は左差し右筈の寄り、或は双筈一氣の押し、土俵際の小手投げ、敵の差手を鉈の振り飛ばしなどの辣手もある。

▲大蛇潟 腕力と體格は二三年前から、好角家に認められて居たが、如何にも相撲が野呂間で、少し素早い對手に向ふと、間誤〳〵して手も足も出ず、兩脇は明けつ放しで、敵の爲すが儘に任せ、フンダンに轉がされたものだが、如何なる風の吹き廻しか、去年の夏場所以來、急に相撲の手を覺え、三日目左りの下手投げで、大敵常陸山を西土俵に詰め、絕體の打棄りに同體に落ちて預つたが、六分の利を見せてからはひどく調子付いて、西、駒と四つに渡つて五分の相撲を見せ、今年の一月場所では、新發明の引摺り投げで、物の見事常陸山を投げ出し(矢張り三日目)、西の海、宇都宮、綾川などの强敵と四つに組んで、樂々と勝つて了ひ、四つ身の強さは、寧ろ鳳、伊勢以上かとも感ぜしめた。此勢ひで二場所程進んだら、正大關の榮位は、彼れの頭上に落ち、更らに進んで、太刀山の後繼者となるかも知れぬ。然しまだ年の若い爲めか、相撲にも若い所があつて、敵の長所、短所を研究して、之に應ずるの餘裕なく、又敵の攻勢に虛實の別あるを知らない爲めに、思はぬ敗を取る事がある。前場所小常陸の樣な、寄身の早い力士を引張り込まうとして、寄り出され、四海波の僞兵を信じて突進し、伏に陷つて叩き込まれた如きは、善き教訓である。此上は突張りを研究して先づ敵勢を挫き、然る後四ツ身の強味を發揮するを心掛けるが善い。

▲玉手山 は玉椿退隱後西軍唯一の技者である。(玉椿は此場所休場近き將來に退隱するであらう)未だ玉椿程の冴えはないが、其頭と足と

を善く遵ふ點に於ては、東西を通して匹儔罕である。然し斯かる小兵、非力の力士は、最初の注文が外れると、存外脆い負方をするものだから、役力士としては感服出來ない。今場所の榮位も、到底永續きはしまい。其他金の花、浦の濱、十州山などは、西軍の中心勢力として、注目するの價値があるが、刹那の氣分と調子で取る力士だから、非常に出來、不出來がある。中に就て金の花が最も堅實である。

今場所の好取組豫想

(一)太刀山對西の海　太刀山に對して多少見るに足るべきは此一番であるが、西の方から突いて行けば叩き込み、西が叩きを用心すれば、太刀が突いて勝つのが常例で、前々場所は太刀が突いて出て、前場所は西が突くのを太刀が叩いたから、今場所は西が受けて立つを太刀無二無三に突出す順序である。萬一西が此豫定順序の裏を掻いて、太刀の勢を受け右に開いて叩けば、西が勝つかも知れぬ。西としては此一手の外勝味なし。(二)西の海對鳳　離れて突合へば、双方叩きもあり、突手を引掛けて小手の振り合ひなど面白く、組んで廻しを引けば引分け、廻しを引かさない間に仕事をすれば鳳の勝(仕事とは組んだ儘で鳳が、土俵を斜に眞一文字に背進するので、コウなると西は寄らうとする出鼻を、敵の方から引張られるので、體が重く出足が伴はず、腰の延びる所を小手投で鳳の勝となる)然し西も一度此手に掛つて居るから用心すべく、鳳は前場所上手投で、見事に投げ出されたから、此場所少しく西に分がある。(三)鳳對朝潮　朝大關候補として最も大事な相撲であるが、朝から突き捲り鳳怯えて突き返す所を右に開きて叩くより外朝に勝味がない(朝は右に廻り込むのが得意だ)然し鳳の出足は早いから、朝が策を施すに遑なく、左差し右に渡し込んで鳳の勝になるであらう。(四)伊勢の濱對朝潮　伊勢昨年夏場所九日間全勝の傾勢を以て、尚ほ朝の叩きに四ツ違ひの醜體を演じ、前場所も亦た朝の勝ちとなつて居るから、伊勢としては取り惡い。朝は離れて突張らんとし、伊勢は組止めて寄り出さんとし、注文の成功した方が利を得るのであらう。朝は右差し、伊勢は左差しか得意であるから、伊勢としては立ち上りに左りを差し、朝に上手廻しを渡さぬ内、一氣に寄れば、伊勢の勝となるべく、互に兩廻しを引けば一寸面倒になる。(五)鳳對宇都宮　新顏合せだから豫想が六かしいが、徹頭徹尾突張りの外宇都に勝味がない。所が鳳には敵の突出す手を捲いて小手を振る奥の手があり。誰れでも一度は此洗禮を受けるから、宇都も亦た此例を脱し得まい、然し之れを恐れて躊躇すれは、忽ち左差しに寄り倒されるから、何でも宇都は突張り一點張りに行くが善い。(六)伊勢の濱對宇都宮　是れも初顏であるが、宇都か突張つても、伊勢は土俵際が粘るから、引かれる憂がある。左り四ツで兩廻しでも引けば引分か、或は宇都に利があるかも知れぬが、夫れ迄に伊勢の爲めに料理されるであらう。但し其前日に伊勢が誰れかに負けて、宇都が善き星でも取ると、此豫想が大分狂ひを生じ、伊勢例の強引を試み、却つて宇都の寄勝を見るかも知れぬ。(七)大蛇潟對兩國　事に依る

と顏が合はぬかも知れぬが、兩前場所拔群の好績を收めたれば、或は顏が合ふかも知れぬ。其場合は極めて面白い、一方は鈍剛、一方は敏銳、一方は巧遲、他方は拙速、離れて兩に利あり、組んで大蛇に分あり。交互の苦心亦た玆にあるべし。然かも兩は土俵一杯に驅け廻る內に、遲鈍なる大蛇に例の兩腕に陷てゝ見せると、飛鳥の如く滑り込んで、兩下手を引き、得意の櫓に掛けて振り廻し、案外な勝を制するかも知れぬ。要するに此相撲は、大蛇が上下何れかの廻を引くか否かに依りて、勝敗が分れる。

△相撲縱談

伯爵　板垣退助

角力は我國國粹の妙技であつて、洵に國の名物である、何處までも之を奬勵し發展せしめて永久に保存しなければならぬ。

昔と今と――私が角力を見初めてから此方――即幕府時代の力士の俤と現在の力士とでは其間に非常な相違がある。一體に幕府時代の力士には武張つた、武士的又は俠客的な、義に感じ情に動かされて、弱い者に頼まれたら好んで命をも捨てるといふやうな義俠的な所があつた。又陛下の御登遐の節には錦の御旗を力士が捧げたもので、戰の時には旗持ちの役を務めたものであつた。要するに力士は武士の手傳ひをするものであるといふ觀念が自らにも強く、又他からもそれを認めてをつたやうである。各藩の抱力士が帶刀を許されたなどの例に見ても明かであらうと思ふ。

然るに今日の角力は純然たる興行物であつて、力士は紛ひもなき藝人である。是れは正しく角力道の墮落で、慨嘆の至に堪えない次第である。

その代りに昔と今とは改良された點も少くない。勝負も昔は虛が多かつた。幕下の者が幕內の者には決して勝たれない事に相場が定つゐた。近來ではそのやうな事がない。力一杯腕限りの角力が取れる。それだけ生氣の潑溂たるものがあり、觀てゐる者には非常に興味を與へるのである。

ところが今日最も改良を要すべきは四本柱である。元來四本柱は檢査役で、之を裁判官に比すれば、溜力士は辯護人である。そして、ピッタり法廷のそれに當嵌まらないにしても、行司は恰も檢事の役に相當する。であるから土俵の上は必ず四本柱に依つて決すべきである。然るに四本柱がのこ〳〵立つて協議を初め、それも自分の意見を持出すではなく、勢力ある者の意見に聽いて初めて自分の意見を定めるといふやうな極めて卑屈な檢査の仕方を採つてゐる。であるから溜りに居る控力士に勢力ある橫綱とか大關とかが居れば其勢力が四本柱を動かすに至る。洵に不安心な裁判である。是れは是非とも斯らいふ風に改めねばならぬと思ふ。

それは今度から四本柱は其檢席を立たずに、行司が四本柱の所信を聞いて多數で決することにしたい。若し四本柱の意見が各半數であるならば、それに行司の意見を加へて多數決にし其勝敗を決することにし度いと思

ふ。是れは早速實行したいと提議しておいたのであるが早晩實行せられる事と思ふ。實際は年寄連も内心肯さういふ事を希望してゐるのであるが何分力士の勢力が强くて實行を言ひ立てることが出來ずにゐるのだから、早晩必ず實現の運びに至るであらうと思ふ。

それから進んで力士の强弱論に入るが、どの力士が强いとか、この力士が弱いとか言つても、同時代の力士ならば比較をする事も出來るが、現在の太刀山程の力士が昔に有つたか無かつたかといふやうな問題は何とも言ふ事が出來ない。今の年寄二十山、其當時の小錦が横綱を張つてゐた時分は所謂力士の切れ目で、其當時は相手方に强い者が無かつた爲めに、あの様に土附かずの成績を舉げ得たのではないかといふ觀察が下される。然し其當時相手方に廻つた八幡山といふ力士などは何うかといふに俵八俵を搬いで土俵の周圍を廻つたといふ程の大力であつた。尤も大力といふ事と角力の强いといふ事とは自ら別問題であるが、要するに比較する事が出來ない。此點に於いては現在の力士が昔の力士に比して强くなつてゐるとも弱くなつてゐるとも斷言する事は出來ぬ譯である。

只然しながら現在の太刀山は近年に無い力士だといふ事だけは出來ると思ふ。此間も或人に話して、太刀山は梅ケ谷よりも年齢（とし）は上であるがまださう衰へ相にもない。あれは何時迄續くものであらうと言ふと、其人は、まだ／＼衰へるどころではない。却て益々强くなつて來るやうですとの事であつたが、此分では當分まだ盛に取れるとだらうと思ふ。

また或時今の尾車（大戸平）花籠（荒岩）の親方に訊ねて、太刀山の强いのは事實だが、彼れは果して何れ位强いであらう。常陸山の全盛時代とはどんなものであらう。と言つた處が何分常陸山の時分は相手の方に大砲、梅ケ谷、それから海山、それに私（前荒岩）も居りましたから、常陸山關の力を測る事も出來ましたが、今の太刀山には他が衰へて相手が無いから、果して何れ程强いものか、强さの底を知る事は出來ませんがとの事であつた。が矢張り其節の話に、過日岐阜の興行に、尾車と花籠が稽古をて見ようと思つて稽古場に行くと、今しも太刀山と國見山とが申合せをしてをる最中であつたが、太刀が國見の右を左に捲いて、國見の腹へ右の手を宛てゝ、國見の體を土俵の外へ投り出した相な。國見山は僅か三十三貫か五貫かあつた筈だがそれが宙を飛んで投げられたといふので、其時花籠と尾車とは思はず額を見合せてにつと笑つて、「何といふ力だらう。稽古の時でさへこれなんだから、此人を怒らしたらほんとに何れ程の力が出るか知れぬ」と話し合つたといふ事である。

太刀山を幕下に附出したのは彼の二十四の時であつた。が其時既に幕下で請合つて彼に勝つといふ者は一人も無かつた。今の東には常陸山の世話で有望な力士が大分澤山に出來たやうであるが、例へば——宇都宮、大錦、九州山、兩國、對馬洋、綾川などいふ連中が集つて多士儕々の形であるが、それでも太刀山の角力を取り出した時分のやうな勢の者は一人もない。今の處ではまだ西の方に太刀山、鳳、大蛇潟、柏戸、伊勢濱などの面々が揃つてゐるから、どうしても當分まだ西の方が强いやうで

ある。相撲の上手な事鳳のやうな者も珍らしい。千變萬化、敵の機略に應じて自由自在に進退の妙を極めてゐる。體格も完美してゐる。伊勢の濱は何うしたものか、あの丈の低い體で西の海を吊りに行つたりなどするのは考へ物だと思ふ。大蛇潟に至つては未來の大關相撲の資格を備へてゐる。今の處で相撲はまだ下手だといふ。成程下手に違ひない。が相撲が下手で大關まで昇るやうでないと面白くない。どつしりとした貫目といふものが自らそこに備つて來るのである。成程鳳の相撲は見てゐて面白い。鳳くらゐ當意即妙の手を出して敵を倒す者はない。殆ど豫想する事が出來ない。いかにもキビ〳〵して才氣の勝つた相撲振りである。がその代りに鳳の相撲くらゐ觀てゐてハラ〳〵させる相撲もまた珍らしい。詰り迯へば敗け相で危(あぶな)かしい所が澤山ある。

力士といふものは其體格――胴と足との釣合――で大低其強さが解る。腰の發達が良くて、足の附根、太股の處の肉附きの良いのがよい。胴は長過ぎるよりも寧ろ短い方が良く、足は長く延びた肉の薄いのよりは短い方がよい。それから、胸と胴との厚みは薄つぺらなよりも、どうしても厚い方が腕力が有つてよい。腰の力に關係するらしい。此標準で知らない力士が東西から出て來るのを見てゐると、大抵其勝敗の數は豫想する事が出來る。

相撲といふものは贔屓が無いと面白くも何とも無いものである。が贔屓は下の者を育てゝ立派な力士にする處に興味があるので、太刀山の如く天下無敵になつては左程興味のあるものではない。もう今日では私が贔負にしなくとも世間の人が太刀山々々と言つて騒いでゐるから、私の世話なしの役目は済んだやうなものである。國見山といふのは、今私の世話をして遣つてゐる力士である。が場所の運の不良い男で、既に業に幕内に入つてゐるべき筈であるのに今尚幕下にゐて、今度も怪我で休場をせねばならぬとかいふ話である。

序に體育と相撲との關係に就いて述べてみると、西洋人は日本人に比して非常に腰並に足が弱くて、どうしても相撲の仲間入が出來ない。それに較べると日本人は足の屈伸が自由でいかにも強い。これは何に原因するかといふに、西洋人は始終椅子を凭つてゐて足を屈めるといふ事をしない。それに反して日本人は靜座又は胡座を習慣としてゐる。特に相撲界に於いては、昔は師匠が弟子を發育するに、夜間は足を屈めてそれを縛つて寐させたものである。これは甚だ研究すべき問題であつて、日本も近來西洋風が入つて、家に在つても椅子卓子を用ゐてゐる所が多くなつたやうであるが、此等の關係から考へると、少くとも胡座といふものは極めて有益なものであらうかと思ふ。日本人は常に靜座若くは胡座の習慣をとつてをるが故に無精になつて、身邊の用事でも他人を使はずにゐられないから、運動不足で體育に宜敷くないといふ說もないではないが、足の屈伸を自由にする事が有益な事でありとすれば果してどうであらう。

私は玆に何研究すべき問題が殘つてゐるであらうと思ふのである。

△若手有望力士概評

佐藤得齋

私は角力道に頭を突込んでから未だ十數年しか經ちませんから、云はゞ角力を見た位の事で角力を評する眼識と云ふ點から申しますと丸で未だ新弟子なのです。然し新弟子にも新弟子丈けの批評のある者で所謂岡目八目の評ですから、勿論當を得た者ではありません此點は豫め御斷りを申して置きます。

今一つ御斷り申して置きますのは私は今度の東方に關係深いのですから東方の有望力士は場所と稽古場とで其技倆を見て居ります。從て其評も多少は當つて居る積りです。然し西方の方は場處丈けで稽古場は一二度見た丈けですから或は當を得て居りませんでしよう。されば西方の方は只名前を連ねる位で其れに其人の得意を示す事に止めたいと考へます。

一體角力を評するには體格、力量、腰の善惡、技術此四點に注目する必要がある。體格偉大なる者は小兵力士の如き敏捷潑剌たる角力振りを望むことは出來ない。又之に反し小兵力士に向ては大關角力の如き餘裕ある取口を注文することも出來ない。從て其個人の體格及技術に應じて之を評し、又將來の希望を述ぶる必要がある。又前陳四個の注目點も多くの場合は先天的に自ら附與せられたる體格なり技術なりを發達活働せしむるに止まるけれど、稽古工夫の結果は生れ付き持て居らぬ欠點を掩ひ隠し、恰も自然に完備して居るかの如き觀を呈することがある故に此批評は更に六ケしくなり、深山の中谷及本場所の取口を見たる上でなければ甚だ困難なる事です然し、私の此處に記しますのは我流の勝手なる評ですから其積りで御覽を願ひます。

先づ幕内から申しますが若手有望力士と稱するを得るは十目の見る處宇都宮、對島洋は動かぬ所であらう。

宇都宮 は此一月場所から滅切手腕を現はし、此度歸京しての稽古振を見ると更に一段の強味を添へて居る。彼は丈六尺に餘り力強く新進の勢を以て敵を一氣に押し倒してしまう。彼の今日迄用ひたる得意と申しますは突張突張は唯一の武器であろう。然し此頃は四つに渡ても仲々藝を施し、上下投、卷落し或は釣り出し等をやる。只惜むらくは未だ戰場の數を重ねざる悲しさは立合を會得して居らぬ。若氣の至りとは申乍ら敵が餘り立たないと氣をいらつて惡い處でも無理に立つと云ふ傾きがある故に小兵力士で出足の早い者には懐に這入られて一氣に押し出さるゝ如き不覺を取る。此點は大に注意すべき所であろう。今一つの注文は彼の唯一の武器である所の突張りも腰のよい體格の大なる敵には未だ充分に利目がない。之は自分の長所として飽く迄も發達せしめ突張の本家たる太刀山をも押し出す迄に進めなければいかん。

對島洋 は宇都宮に比して尚一層立合の呼吸を呑込んで居らん。此一月場所などは毎日惡い所許り立つて居る。此點は一段の研究を要する。

此角力は四つ角力で直ちに引張り込む。四つになれば自分に都合がよいからである。然し同じ四つになるにも立合に直ぐ引張込むは彼れに取りては甚だ損である。彼は六尺三寸五分と云ふ長大なる軀幹を有して居る從て懐は甚だ深い故に若し立合に敵を一つ突いて扨て次に飛込む敵の手先きを見て始めて四つに渡つたならば自らの好む儘に取組むことが出來る。此點は彼れの大に考慮を要する所であろう。彼の小手投は甚だ恐るべき者で大に敵の膽を寒からしむるに足る。然し之も敵を褌に付けず兩方の體が開いて居る時でなければ功を奏しない。從て前陣の注文は尚更必要である。今一つの注文は體格の大なる者には少しく六ケしい希望であるけれど、今少し勝味を早くすることである。稽古でも場所でも組で充分にならぬと術を施さぬと云ふ欠點がある。之は甚だ損で、敵に猶豫を與へずに術を施したならば、一層成効を近からしむる事が出來ようと思ふ。

十兩では先づ指を**兩國**に屈するに躊躇しない。彼は近來の軽力士である。或新聞は彼を評して鳳式で然も昔日の逆鉾を加味して居ると云はれたが大に我意を得たりである。彼體軀大ならずと雖ども力飽迄強く組でよく、離れてよし。加ふるに鳳專有物であるかの如く世人に思はれて居るケン〳〵を有して居る。彼は實に手と足で角力を取つて居る。

彼は角力界に投じて以來只四回丈けしか負て居らぬ。從て彼にも對島洋同樣立合を知らない欠點がある。今一つの欠點は立合に直ぐに敵の一本を引掛けて小手を振ると云ふ藝當を施す。之は注文にはまれば實に奇麗

に勝を制することが出來ますけれど、敵が出足が早い時は體をあづけられ思はぬ不覺を取る。此點は大に改良を要する。彼の小手投は鳳同樣甚だ有力なる者であるけれど立合に直ちに行ふは絶對に封じ、一度敵を突いて然る後行ふを得策と思ふ。然し私の彼に望むは此小手投でなく左を差して四つに組み而して好む所の術を施すは彼に取ては最も萬全の策である。此一月場所は殆んど四つに渡りて皆成効して居る。小手投は若し敵が四つを嫌ふ場合に行ふ術で、彼に左四つに組まれたならば東西幕内中横綱大關の一二を除けば一人も敵の立つ者はなかろうと思ふ。

釋迦嶽 此人の立合は既に堂に入た者である。然し此立合は味方が宜しいと云ふと敵では汚ないと云ふけれど、彼れの立合は決して汚い立方でない。自分の充分な所を立つと云ふに過ぎない。彼れは體軀大ならずと雖ども力甚だ強く腰亦惡くない。幕下時代には至つて角力振不器用で只力で許り角力ふと云ふ傾きがあつたが、近來大に面目を改め、出足が非常に早くなつた只技術に富で居らぬ丈い觀客を喜ばしむるてふ派出な角力振りを望むことが出來ない。願くは一段階の修業に熱中して貰ひたい。今度は幕内の好位置を占むる事であろうから西方に取ては仲々の强敵で目醒しい働きを見せる事であろう。

九州山 は軀幹長大ならずと雖ども力あり腰あり彼何有望の一人たるを失はずである。只惜むらくは勝味が遲い。今少しく出足を早く稽古したならば巾あり重量ある丈け小常陸の働きをなす決して望まれざるに非ずと思ふ。彼の長所は度胸頗大なるにある。從て二段目付出しの力士と

しては立合も悪くはない。只四つに組でも押し出すにしても充分とならぬ迄は術を施さない。之が此人の大欠點である。

栃木山　之も珍らしい力士で前角力より今日迄只二回しか負た事はない、彼は體、力、技、腰皆揃ふて居る。加ふるに出足早く頭を敵の胸に付け兩手を筈に當て〻一氣に押す術は實に目醒しい者である。此度の地方巡業中最も頭角を表はしたのは實に彼である。其體格術を見るによく伊勢濱に彷彿たる所がある。只彼の大に注意を要することは立合である。立合ふや否や直ちに一氣に押し出さふとすると直ちにはたき込まる〻恐れがある。此一月場所松井川に之を喰ふた、宜しく立合に注意して此はたき込みに要心が肝腎と思ふ。

大錦　體格偉大にして脊力あり稽古熱心の結果は出足も早く勝味も早し、腰少しく弱しと雖ども稽古研究の賜物は之を隠して餘りある。彼の體格は優に幕内を凌駕して居る。云はゞ西の海の勝味の早いのであるから、未來の大關期して待つべしと云ふ代物である。彼の立合を見るに敵の差し手を防ぐ爲めに右の腕を軀幹につけ、前腕を胸部に當て、左手を筈に當て〻押す傾きがある。あの右手前腕を胸部に當てるを止め、前方に開いて敵の肱を押へ、兩手で押したならば尚一層有力であると思ふ

西方十兩の有望力士を物色するに、私は千代ケ嶽と云ふに憚らない入幕候補の眞砂石、中軸の鳴戸洋ありと雖ども彼等は將來に非常なる希望を囑するに足らない。入幕しても中軸以上は望まれない。千代ケ嶽は體格あり力量あり術あり。然し惜むらくは勝味は遅い。今一段の稽古を積んで大に敏捷ならんことを望む。

幕下有望の者を列擧すれば出羽の海部屋の戎洋、一港井筒部屋の源氏山二十山部屋の千葉ケ崎、小戸ケ浦、大見崎、高砂部屋の大の音、濱風部屋の因幡嶽浦風部屋の明友綱部屋の太刀嵐熊ケ谷部屋の清瀬川であろう殊に源氏山千葉ケ崎などは大に囑望されて居る。皆體格の偉大なる者許りであるが、一人り清瀬川は丁度兩國の如き角力で力あり腰よく勝味早くして術ある怪力士である。此等の細評もしたいのですけれど、彼等は尚春秋に富むを以て又批評を試むる期會あらんと思ひ、只名前を並ぶるに止めて置きます。（終）

△徳川公爵の相撲に關する意見

一記者

左に掲ぐる所のものは徳川公爵の相撲に關する意見であつて、明治四十五年公爵が無名氏てふ匿名を以て同好の數氏にのみ頒てるものである。此度び「力士評論」を載するに當つて公爵の高見を聞かん事を乞ふたところが、時は諒闇中ではあり、殊には御大喪もまだ濟まぬ第一期の諒闇中に於いて、相撲に關する話をするなどは不謹愼であると言つて一言もこの事に言ひ及ぼされなかつた。そこで記者は請うて此舊談話を本誌に掲載するの許諾を得、左に之を掲ぐる事としたのである。

相撲に關する私の考は中々澤山申したくもありますが、滅多に人の前で輕卒に其思ふところを言ふと、私の意見であるとか、殊に新聞屋などが聞込むと直ぐ何の某の相撲に關する意見とか何とかいふ事を書く。さう云ふことを書かれると、誠に迷惑するので遂にまだ一言も相撲に關する意見を申述べたことは無い。一體私は世間で知つて居る通りに中々の相撲好きである。本年なども幸に相撲開會後本年ほど閑の年はなかつた故に、十分相撲を見やうと樂んで居つたところが僅か最初の四日だけ見物が出來たゞけで、後の四日と云ふものは風邪に冒されて他出の出來ない爲に巳むを得ず自分の考よりは少なく見て甚だ殘念に思つたのである併ながら九日目十日目は見物が出來たので先つ巳むを得ないことゝ諦めて居つた。

一體近頃は相撲に限らず、官界――政府の役人とか又實業家――會社とか云ふやうなところにも無論情實と云ふことは今始つたことでないと思ひますが、相撲の番附を見ますと、明治元年から明治八年頃までは幕内の相撲が十人、三役即ち大關關脇小結と其の外前頭が七人、都合十人と云ふのが殆んど定員であつたと思はれる。處が明治八年からそれが十一人になり、それから又明治九年十年十一年あたりは元へ戻つて前頭七人即ち幕内十人と云ふやうになつたやうである。それから明治十一年十二年十三年十四年十五年等の番附を見ると、十二人であつたり十一人であ、つたり色々になつて居るやうである。併し段々幕内と云ふものが人數の殖えるやうになる傾きがあるやうである。明治二十一年から二十五年二十六年の一月の場所には前頭が七人であつたのが十一人に殖えて來た。さう致すと詰り幕内と云ふものが十四人になる。それから明治二十六年の夏場所になると前頭が十四人になり、それから二十七年には前頭が十六人になると云ふやうに段々幕内の數が殖えて來た。

それで私の考は少し昔を好むきらひがあるか知らぬが、矢張り幕内と云ふものは人數の制限を付けて十人とするのがどうも適當であらうと思ふ。併し色々事情もあらうし、無論取締其他の役員の考もあらうから、唯なんにも知らない我々が空論を唱へたところでそれが實際用ゐられることではあるまいと思ひますが、畢竟幕内の人數の殖えるなどゝ云ふのも前に申述べた皆情實から來ること、それから又地方の巡業の時にも、幕内の力士の居る組は色々都合の好いとがある。それと今前に申した情實とに制せられて段々人數が多くなつたのではあるまいかと思ふ。それから本年の一月の番附を見ると、前頭が十八人即ち横綱を加へて幕内が二十三人に殖えて居る。どうもそれは甚だ多きに失して居るやうに思はれる。それで官吏社會であつても近頃は續々高等官二等以上高等官三等以上が年々殖えるやうであるが、それも矢張り幾分か情實と云ふとがありはしまいかと思はれる、それからもう一つは今の横綱即ち常陸山梅ケ谷太刀山の技倆に就いて横綱に適當であるとか不適當だとか、それ程の技倆が無いとか云ふ非難をする積りではないが、近頃濫に横綱と云ふものが出來るやうになつたと思ふ。それで唯今のところでは横綱と云ふものは是非なくてはならぬかと思ふ樣である。それで梅ケ谷常陸山太刀山と

云ふ現在の横綱が追々年も取り躰も悪くなり横綱を廢める、廢めると今度は誰が横綱になりませうか、あなたは誰が横綱になつたら宜からうと云ふ御考でございますかと云ふことを度々聞かれることがある。處が私の考では横綱と云ふものはさう必ず始終なくてはならぬものではあるまいと思ふ。明治何年であつたか、境川と云ふ相撲が横綱を張つて其後に今の梅ケ谷の先代――今取締をして居る雷權太夫が横綱を張つた。其梅ケ谷が横綱を張つたあとで西ノ海、小錦、大砲と斯の如く續々横綱を張るものが出來た。それで相撲と云ふものが我國に出てからも横綱と云ふものは容易に出來ないものであつたと思ふ。僅か二十三人とか二十四人とか云ふ位である。それで此横綱も容易に設けないのが宜からうかと思ふそれで相撲のことを書た本にも、横綱の起源を以て谷風小野川と稱するものは大砲に至るまでを十五人とし、明石志賀之助を元祖とするものは十八人となす。此位少ないのである。それで將來今の梅ケ谷なり常陸山なり太刀山なりが退隱してから、非常に强い者が現はれて横綱になるべき資格の者が出て來たならば無論それに横綱を張らせない考では無論ないが、横綱と云ふものは是非東西になくてはならぬもんだと云ふことは原則にして置きたくないと思ふ。是も矢張り前申した幕内の力士の數が非常に年々殖えて來ると云ふのと同じことで、地方巡業の時に横綱の土俵入を田舍者に見せるとか云ふのも非常に景氣に關する故に濫に横綱の免許を與へることになつたのではないか。前申したやうに昔から横綱になつた者が僅か三十人に滿たない二十幾人と云ふので、昔も横綱と云ふものはさう容易く設けられるものではないだらうと思ふ。

それからもう一つ常に見て考へるのは、相撲の勝負の檢査をすることである。此頃はどうも、外の人はどう考へるか知らないが、自分の見るところでは勝負檢査役と云ふ五文字を名の上に冠らせて居る人々の中には非常に强硬の意見を持つて居る人も無いではなさゝうだが、又中には溜に居る有力なる力士――有力と云つても力のある有力でなくして權のある力士などに對しては非常に腰が弱い。それで四本柱に座を占めて居る檢査役である以上は、もう少し檢査役の權力を以て自分の思ふところに隨つて勝負の判斷を付けて、無論贔屓とか云ふやうなことは避くべきことではあるが、さう力士の御機嫌をとるやうな事ではいけない。それでは唯卑屈になつて、勝負に對して苦情でも起ると見物が迷惑をするのであつて唯長引くだけである。無論控力士なる者が東西の力士溜に勝負を見て居る故に、其控力士が互に自分の味方の爲に辯護するのは當然のことである。一々其說を聽いて彼の云ふことが是と思へばそれを用ゐても宜からう。其爲めの檢査役である。故に檢査役の見るところに隨つて判斷を下されたら宜からうと思ふ。それには檢査役の見識を以て勝負を判斷するに努めると同時に、依帖贔屓なく公平に判決を下すと云ふことが最も必要であつてそれは我々の言を俟たないことであらうと思ふ。

高砂とか雷とか云ふそれぞれ年寄の部屋と云ふものがある。それで檢査役の中には自分の弟子も無論ある故に、名を指しては甚だ其人を嘲けるやうで惡いかも知れないが唯話の序に名をあらはすが、尾車なら尾車

が檢査をして居ると見れば其尾車の部屋に屬する力士の勝負を其尾車が判斷を下すと云ふことは——所謂裁判所などで忌避と云ふ語があるやうであるが——或は忌避すべききものかも知れないのであります。私は常にさう思つて見て居る。相撲の勝負檢査役も矢張り貴族院衆議院の議長と同じものであつて、其議長が何派何黨から選ばれた——無論貴族院は何派から選出せられるのでなくして勅任せらるゝのであるが——議長としては何派とか何黨とか云ふ事は眼中に置くべきものでないと思ふ。それで議長が或派の者を喜ばせやうとか、或黨のものを苛めやうとか云ふ考を以て不公平の處置をしたならば一日も誤りなく職を勤める譯には往かないものであると同じく、勝負檢査役をして居る間は自分の弟子であらうが他の年寄の弟子であらうが、さう云ふ事を眼中に置かずに勝負を檢査して貰はねではいけないと思ふ。一體本年の一月の場所に檢査をして居つた檢査役が前の場所に於て檢査をした人々と其優劣を今私が明言た如のは避けたいと思ふが、本年の場所には限らない、どうも前に申しするく此頃の檢査役は皆が皆とは申さぬが力士の御機嫌をとる事がないとも言はれないと思ふ。隨つて力士の中にも物の解つた人もある代りには又解らない者もあらうから、餘り檢査役が御機嫌ばかりとつて居ると増長して、檢査役の意見と云ふものは一向用ゐられなくなつて力士が我儘を言ふ事になる。それで若し檢査役が濫に自分の意見を主張して仕舞へば「俺はもう明日から相撲は取らぬ」などゝ云ふて當局者を惱ませる、あれは甚だ惡い習慣と思ふどうか相撲協會の規約でも改めて相撲勝負檢査役にもう少し權限を與へたく思ふ。又相撲檢査役を選ぶにも私の考へるところでは元相撲を致して居る間に非常に巧みな手を以て強かつた人とか即ち横綱の免許を得た者が相撲の技倆は優れて居つても事務をやらせるのには不適當の人もあらうと思ふ。それと云ふのは追々敎育のある力士も出來るであらうが、又昔からさう皆力士と云ふものが敎育のある人ばかりではないから檢査をするにも多少辯舌の優れた人が必要であらうと思ふ。それで元力士をした人が無論年寄に多くあらうが、或は行司の中で行司を廢めて檢査役にでもなつたならば勝負のことは行司だから能く判るであらうから、是も一つの檢査役になる資格中に元の行司を入れたらどうであらうかと思ふ。

それから此頃の新聞に掲載してあつたのを見たことであるが、此頃のやうに物言即ち勝負に關する苦情が多くては見物人が困るばかりである故に左樣の場合には取直しをさせる、即ち花相撲などでやる如く取直しをさせたら宜からうと實に良法を發見した如くに書てある新聞も見た。併し自分の見るところでは其日に取直すと云ふことは不可能と考へる。何となれば一寸とした樣く手間取れない立合であるならば又取直すも宜いかも知れないけれども、非常に長く又どうせ勝負に苦情の出るやうな相撲ならば必ず烈しい相撲であらうと思ふが、それが銘々十分力を一杯に出してそれを又直ぐ取直すと云ふことは不穩當であると思ふ。人から聞くのに、さうなると少しでも技倆の上の力士はさう云ふ場合には非常に強いもので、私の考では寧ろさう云ふ場合には、十日間の大相撲が十

一日にも十三日にも延びろかも知れないが、他日の苦情のあつた取組は全く外の日にやらせたらどうであらうか、併し是も隨分言ふべくして行はれないことであらうと思ふ。なぜならば苦情のある取組はさう澤山は無いのである。それ故に其苦情のある取組ばかりで大相撲興行中に特に一日とか二日とか開場すると云ふことも困難であらうと思ふ。現に今此に本年の勝負の星取表を持つて居らないからはつきりしたことは申せないが「立川」と云ふ力士は預が夥しくあつた。さう致すと本年などから申すと「立川」と組合せる者が殊の外夥しくなるだらうと思ふ。さうすると其立川のために四日も五日も相撲を催されなくてはならぬ、それは到底出來ないことであらうと思ふ。故に結局取直すとか、又他日其苦情の付いた相撲を催すと云ふことは言ふべくして行はれないことゝ思ふ。それには前申した通り成るべくさう云ふ苦情の起らぬやうにし、苦情が起れば勝負檢査役並に其席に列して居る取締が適當な判決を下して、其判決に服從させる代り其判決たるや極めて公平にせねばならぬ、それより外に途は無いと思ふ。

それから色々な事を述べるやうであるが、引分と云ふことは自分の齒が敵の額に當つて出血するとか云ふことのあつた場合で、それは無論引分即ち「痛分」と云ふことであらうが、引分と云ふことを濫にせずに眞に組んで揉み拔いて疲れたと云ふことが檢査役に於て認められるとか、若くは行司が十分兩方とも疲れたと認める場合の外は容易に引分と云ふことをしない方が見物人も喜ぶし公平になりはしまいかと思ふ。中には無論相撲を仕掛けては敵の術中に陷ゐる虞がある故に仕掛けずにぢつとして居れば必ず引分になると云ふ唯安全の策を講ずるのみで一歩も動かずに居る立合も屢々見る。勝負と云ふものは無論其時の工合である故に十分やるところまではやつて見ろ、其注文が外れて思はない失敗を招いてもどうもそれは致し方がない、立合ふ時は四つに組んで動きもせず引分を待つやうなことは面白くないと思ふ。

それから此頃出來た優勝旗の制度であるが是は無論相撲の奬勵には申分ない方法であらうと思ふが、一方の横綱大關關脇小結と云ふものがどの位奮發しても其下の力士が一致して勝を得ることに努めざる以上は、到底其方へ優勝旗を受けることは困難だと思ふ。どうぞ東西の力士が互に優勝旗をどうかして得るやうにしたいと云ふ熱心の行動を執るやうにしたいと思ふ。私の友人などが私に向つて一體あなたは御贔負の力士があるかと問はれることが度々ある、私も人情として甲の力士と乙の力士と取組めばどちらかを勝せたいと云ふ觀念は無論起るのである。併し外の相撲を見られる諸君の中のやうに或力士が弱くなつた、又或力士が負けたのを見て甚だ殘念に思つてもう相撲は見たくないと言つて相撲場から歸つて仕舞ふ人があるが、縱令負かしたくない力士が負けても腹を立てゝ其日の相撲を殘して歸ると云ふことはしない。それから又或人は太刀山なら太刀山が非常な勢であつて誠にいまいましく思ふ、どうぞ弱くなつて負ける樣にしたいと言ふ人もあるが私は東西に太刀山の如き強い力士の益々多くならむことを望むのである。東西になんでも強い相撲が大

勢居らなくてはならない。それで前申した如く品行宜しからず、又惰けて稽古に身を入れない結果として出來の惡い力士は容赦なく位地を下げて仕舞ふ方が奨勵になると思ふ。

それから俗に謂ふ「八百長」と云ふ申合せの付いた取組が能くある。それは少し相撲を巧者に見る人には直ぐ分る。互に釣ることを試みたり何かしてさも眞らしく相撲をして居ることがあるが、餘程俗に謂ふ臭い相撲がある。それは此頃は大分檢査役に於て制裁を加へるやうであるから宜しいが、斯の如き申合せ相撲はどうぞ段々數を減らすやうにしたいと思ふ。

それから本場所が濟んで地方へ巡業に行く際に、昔は東西と兩側に分れてやつて居る。例へて申せば太刀山組ならば太刀山と國見山を東西の大關とし駒ヶ嶽組ならば駒ヶ嶽と西ノ海を兩大關として地方へ行くやうである。收入を圖ると云ふ方から申せば、東方は東方、西方は西方と分つて興行せずに矢張り一つの大相撲組を作つて諸縣を廻る方が宜いかも知れない。併し東京に居る相撲好きの爲には大相撲が濟んで數ヶ月の間取らないで又國技館の本場所で顏の合ふと云ふ方が興味が深い。餘り一ツ組で巡業して參ると所謂互の長所短所も能く分つて參るし、隨つて仲が餘り好くなり過ぎて色々の弊害を生ずる虞があると思ふ。先由も威力士に私はさう言つたことがある。此頃では地方の興行の勝負附が東京の新聞に電報又は電話で申して來て日々新聞に掲げられるのを注意して見て居ると、兩大關が甲乙丙丁と四ヶ所の取組に於て必ず甲が甲の場所で勝てば其次の場所では乙が勝つ、又其次の即ち丙の場所では甲が勝ち其次の丁の場所では又乙が勝つと云ふ如く、二十回顏が合へば兩方とも十度づゝ勝つて居る。それは嘘ではない能く調べて見ると分る。例へて言へば二十回の中で甲が八度勝てば乙も八度勝ち、殘りの四度と云ふものは引分とか預とかを取る、そんなに等しく勝負せぬでも宜いぢやないかまさか今度はお前の負ける番だ俺の勝つ番だと云ふことを言つて申合相撲を取るのでもあるまい。それならば地方の見物人を馬鹿にするのであると云ふことを申した時に、其力士が地方の見物人を「馬鹿にする」と云ふ御言葉だけは餘りおひどいではございませぬかと申したから「馬鹿にする」と云ふ五文字はそれなら取消さう併しさう能くも勝の數を同數に出來たものであると始終思つて居つた。それは畢竟さう云ふことが始終重なると段々仲が好くなり出して本場所の相撲でもつい申合せの如き勝負が現はれるのである。

それから本場所の各力士の成績に就ては申したい事もあるが、さうすると一々力士の名を申して其力士の巧拙に評を下すことになるからそれは私の流儀として申すまい。唯どうぞ將來優勝旗の制度のある以上は互に東は東、西は西と優勝旗を得ることに努められて東西各々一致して、幾ら一方の大關が奮勵しても他の者が惰けて勝星を取ることを努めなければ面白くないと思ふ。私は何も相撲社會の又相撲協會の内情其外慣例などを承知して居らない故に唯思ふ儘の事を述べたのであるから實際當て嵌らぬことが多からうと思ふ。

終りにもう一言申述べたいと思ふのは京都大阪にも相撲協會と云ふものが今存してあるが、承知は致して居らないが大阪には確に大阪の相撲協會と云ふものがあつて矢張り毎年兩度大相撲の番組が出來興行があるやうである、併し東京の相撲に較べれば其技倆が稍々劣つて居るかも知れない。又近頃は段々大阪の相撲が色々の事情もあらうが東京へ來て東京相撲になる傾きがあるから、大阪に殘つて居る力士は數も少なし技倆も不十分であるかも知れないが、一體三府即ち東京京都大阪の三府を合せて年に二度は東京で大相撲を興行し一回づゝ大阪京都で興行するさうして所謂三府合併の番附を調製したならば大に興味があらうかと思ふ。其他其それには其相撲協會の取締に敏腕なる人が必要であらうと思ふ。其他其協會の役員となるべき人物も普通の者では適當でないかも知れないが、又經濟の點から申しても斯の如き合同は餘程成立に困難かも知れないが併し相撲は我國の國技——兩國の國技館も即ち其「國技」の二字を取て國技館と命名せられたのであらうから、他日私の希望の如く三府合同の相撲協會と云ふものが出來たならば三府のみならず全國各縣の中の三府以外に又非常に强い技倆のある力士が居るかも知れない、居るならばそれをも合併して一興行を催したならば非常に興味が深からうと思ふ。それこれも前に申した勝負檢査役の權限を多大にして又行司も立派な行司を設けたいと思ふ。唯謹に紫の紐を軍配團扇に付けることを許されるとか又草履を許されるとか云ふても其勝負を判斷する力が乏しくては將來心細い話と思ふ。物事餘り數が多くなると貴くないものであつて、各國にある勳章でも數が多くなると其勳章が如何にも價打が低く見える樣に、さう續々濫に紫の紐を付ける軍配が殖えては前に申す幕内の力士の數が年々殖えると同じに考へものであらうと思ふ。

以上申述べた事柄は誠につまらなき事であるが、唯平素相撲好きで常に相撲のことに就て思ひ居ることのみであつて十分に考へて申したのでない故に其積で御了解を願ひ度思ひます。（明治四十五年一月二十四日談）

△相撲の盛衰

尾車文五郎

昔から觀ると、現今の相撲は一體が總て器用になつたやうです。相撲の手も幾ら殖へたり變つたりしたか知れませぬ。此の頃では幕内の力士でも、昔の若い者の取つたやうな相撲を取つて怪しむ者も無くなりました。昔は下手投を打たれたりなどするのは苟も幕内力士の耻辱としたものですが、此頃では下手投もあれば掬ひ投もある。何でも彼でも構はない勝ちさへすればよいといふ風で、褌を取られやうが引かれやうが只勝敗のみを眼中においてゐるやうです。尤も勝敗を度外した相撲といふものはない譯ですが。其結果は從つて相撲が一體に激しくなつたやうです。それでゐて稽古は昔よりも熱心なといふ譯にはゆきません。昔は組合の

巡業も精々で百人に足るか足らずの人數でしたが、今では二百人三百人の同勢ですから、從つて思ふやうには練習も出來ない譯になります。

私が力士になつたのは明治十七年でしたが、其時分はまだ相撲が一時衰微してゐた時代で、其前年かの吹上御苑で天覽相撲を興行して、稍復活しようとしてゐた時代でした。今の雷、其時分の梅ケ谷が何年の間か負けた事が無かつたのに、大達に負け、其翌年高砂に負けて夜逃げをしたといふ評判のあつた時分の事です。能く聞いてみれば夜逃げをしたなどいふのは嘘で、橫濱か何處かへ人を見送りに行つたのだ相ですが、何しろ相撲が大評判でして、今後次第に發達するだらうといふので、自分も力士になつて見ようと思立つたのです。が其當時は力士は一體に細かかつた。今も隨分大きな力士が揃つてゐるが、私等の以前も中々大きかつたものです。西の海、梅ケ谷、劍山、大鳴門などいふ力士が揃つてゐたものです。丁度其中間が私達の時代で、どうも相撲は餘り流行らなかつた。小泉橫、平川天神、（それから今の歌舞伎座のある木挽町あたりで能くやつたものです、が東京はまだしも田舍では入りがなかつた。高砂などが色々變つた事を考へて、幕の内が二人げいしと言つて飛付きのやうな事をやつたりなどしたが、それでも這入らなかつた。どういふ原因であつたか、それは解りませんが、其以前に盛んに裸踊りなどをやつて其筋から禁止されかけたりした事が累ひをなしたのかも知れません。

私は剛氣勝ちで三十一の歳には退いたのですが、今の若い者は腕次第で幾らでも出世が出來ます。その代りに落ちるのも早い。昔は情實があつた譯でもありませんが、規則としてチヤンと一定したものはあつても實際に於いてはさう大して上げ下げはしなかつたものです。見物の方でもさう急に上げ下げする事を欲しなかつたやうです。それが次第に見物の眼が肥えて來るに從つて承知しなくなつた。謂はゞこゝにも輿論の力が働いてさういふ事になつたのだと思ひます。

△東西力士の精銳

「萬朝」相撲主任記者　三木愛花

或人曰ふ力士評は其體格力量を實視し有形顯狀に就て評すれば中らずと雖も遠からざるべし、劇評に至りては藝術文學に亘り形あつて形なきものあり故に力士評は易くして劇評は難しと。曰く然らず力士の長短強弱は文字言語を以て糊塗すべからず其實證は今日評して明日判明さるゝに至る、故に體格の完備、力量の非凡を見て評して無敵とする者も一旦登場して土俵の砂を浴びるに至れば其評は即ち全然不適に失す、劇評の證あつて證なく褒貶筆に從ふものと同じきを得ざるなり予好んで角力を觀、又好んで力士を評するも益々其評の難きを悟れり或人曰く巡業中の成績、稽古場の強弱を參酌し之を體格の消長に考ふれば亦中らずと雖も遠からざるべしと。曰く然らず力士巡業中の成績は妥協多くして眞の勝敗少なし稽古場の強弱は外形の大標に過ぎず其

技術と精神とは隱くして顯はすことなし故に稽古場の强弱を見て元氣非常と新聞に唱へられたるものも國技館の角力に連敗蹉跌するものあり、不元氣平凡と書かれたる力士にして善闘奮勝するものあり、之に因て著名の力士にして看客を失望せしむるもの無名の力士にして嶄然頭角を顯はすもの、毎場所必ず二三人を見るに至る、是を以て力士の評は其理中るべくして其實中ること難し。中央公論社より力士評を請はるゝに及び其好む處なるを以て辭せずして筆を採ると雖も其適不適に至つては予も亦保するを得ず（五月二十日記）

太刀山　現在の力士中に於て嶄然頭を拔き西の海、朝潮等の大力士と雖も實は其懸隔の遠きを見るものを太刀山となす、太刀山は啻だに現在の力士中に頭を拔くのみならず古今の力士中に於ても其類殆んど稀れなるべし、予本年一月場所後に於て彼が十場所間の成績を考査し之を明治年間の横綱大關に比較し太刀山の第一たることを評して之を萬朝報に揭げたりき、蓋し明治年間の横綱は先代梅ケ谷、現代常陸山を推すことは公評なり而して兩横綱が全盛期十場所の成績を見るに其敗數は各三點にして勝點は七十點前後なり太刀山に至りては其敗數は同しく三點と雖も其勝數は九十餘點に上れり且つ梅、常陸の敗には後へ土俵を割りたるものあるも太刀山の敗は碇澑のために足を取られたると同力士のために手繰られて足先きを踏み出したるに過ぎず其他の一點は西の海の爲めに故さらに勝を讓りたることも公然の秘密たり即ち敗は敗と雖も其敗に區別無かるべからず加之舊時は九日間にて全勝たりしと雖も現今は十日間にあらざれば全勝たるを得ず而して太刀山は十日間の全勝を三四回重ねるに至りたり從來九日間の全勝と雖も三回に至りしものなし、若し統計にして信を置くに足るとせば太刀山の如きは古今恐くは一二人なるべし況や彼の體質は筋肉に發達して脂肪性にあらず、年齡稍晩期に屬するも尙ほ先代梅ケ谷の全盛期と現代常陸山が洋行前の年に同じく未だ以て衰境に入れりと云ふ能はず、人或は彼が蓄財の念に厚くして活達の行に乏しきを唱へ其人格に就て是非するものありと雖も之がために却て攝生に努め斯業に砥礪し品行も亦指摘さるゝものなし故に病故少なくして體力の維持を長くせり、人或は彼の角力の前年に比して多少辛辣を脫したるを見て其或は衰境に近づきたるかを疑ふものあるも其實は却て圓熟して用意の周到を致せるに過ぎず彼決して未だ衰へず本期の場所に於ても尙ほ彼が鼎の輕重を問ふものなかるべし。然りと雖も國技館の一番勝負は死中に活あり、活中に死あり、太刀山如何に强者と雖も際限なく全勝を續くることは希ふべからず縱令足取りにせよ手繰にせよ近く一度は彼に勝つものなきを保すべからず而して其初めて彼に勝つものは能く國技館を震動せしむるに至らん、此光景を瞑想する時は未だ之を見ざるも肉躍り胸躍するものあるを覺ゆるなり

西の海　太刀山に亞ぐ力士を西の海、鳳、伊勢の濵、朝潮とす四力士各其長短得失ありと雖も姑く其地位體格を見て西の海を以て首めに置くを適當とすべし、彼其力量體格に於ては既に横綱の資なり只其角力の悠温にして勝ち味に遲く加ふるに捷略に缺點あり之がために土俵ぎはに於

て敵に計られて體を崩し膝を突くの失あり故に往々にして不覺の敗を招ぎ毎場所に二三點の黑點を取れり斯の如くんば其横綱たることと期することと難し、然れども本年一月場所の角力は稍ゃ生氣を生じ又勝ち味に行くこと多くして出足も亦從來に比して早きを認め得たりき蓋し其全盛期に達せるものなるべし且つ彼の武器は敵の進むを待つて土俵さばきに小手を振るの力にあり鳳の如きも之を知つて尙ほ且つ往々にして其圈中に落つ、當場所にして能く從來の武器を守り又一月場所の生氣を利せば或は太刀山以外の力士には失敗なきことを得んか、然して太刀山と少くも引分を取らば常陸山退隱の明年一月場所には横綱の月桂冠を頂くの榮を得べし、況や太刀山とは曩きに妥協の實例あり西の海若し九日まで土つかずの好成績を得ば十日目太刀山との角力は引分若しくは勝ちを讓らるゝことと難きにあらず縱令又太刀山に敗るゝと雖も前年梅ケ谷が九日目に常陸山に敗れたるに拘はらず八日までの全勝に因て常陸山と同時に横綱を襲りたる例あり西の海にして九日まで全勝若しくば土つかずの成績を得れば横綱は即ち掌中にあり彼の當場所は實に一代の榮辱を賭したるものと云ふべく刮目に價することと前場所に數倍すべし

○**鳳**　常陸山隱退後に於て横綱を西の海と競ふものは先づ鳳を以て近しとすべし鳳の體格は西の海に數歩を讓ると雖も其敏捷にして技巧に富めること西の海に數倍するも亦世人の認むる處なり從來兩力士の勝敗は全く相ひ半ばし當場所は其決戰なり而して西の海の利は守つて土俵きばの武器を利用すること恰かも一月場所と同一なるべきに在り鳳の利は一氣に寄り倒すか、速かに小手を振るか然らざれば組んで足くせに卷き倒すにあり、其中一氣に寄るは殘れば必ず危ふく小手を振るは殘れば寄らるゝの恐れあり足くせも亦切つ返さるゝの慮りなき能はず要するに鳳の勝は咄嗟の成功にありて殘れば西に利あり兩力士當場の決戰は殆んど端睨することと難し或は互ひに大事を取りて組んで褌を引くに及び終に引分に了るの豫想なきにあらざるも西の海は東方に横綱を缺くの好機を握ては引分るも尙ほ可なりと雖も鳳に至つては頭に二人の横綱あり容易に横綱の横を摑みがたし先づ西の海を敗つて之を挫き置くの要あり故に失敗するまでも奮闘して引分けざるの覺悟あるものと云ふを至當とす、是に於て西、鳳の一番は太刀、西の一番より却て大に興味ある角力と云ふべし、西の海に次で鳳の好敵手は朝潮なりと雖も尙ほ未だ鳳に一歩の長ありと云はざるべからず

○○○**伊勢の濱**　身長體量より見る時は大關中に於て獨り遜色あり然れども其膂力は非凡にして腰脚も亦健全なり、故に進んで押すも退て守るも共に力と腰の妙所ありと云ふも其最も長ずる所は四つに組んで褌を引き櫓らに取つて投げるの技にあり然るに彼本年一月場所に於て始めて大關となり責任の重きに顧みて却て策戰を誤り從來の長所を棄て咄嗟の勝を狙らひ鳳の長所に傚つて急遽に小手投げを擬るの不覺を爲し小常陸に失敗して西の海に蹂躙せる、知らず當場所の彼は如何に策戰を改めしか一に彼の胸中に在つて予の未だ窺ふ能はざる所なり

○○**朝潮**　予彼を評して好力士と云ふ其身長と筋肉の適當したる一なり、

容貌風采の態揚たる一なり、立ち合ひ角力ぶりの卑劣ならざる一なり、勝つて驕らず負けて悪びれざる一なり、鋭氣あつて邪氣なき一なり、四肢に缺點なく過退滞澁せず左右に捌き能き一なり、只惜むらくは從來彼の角力は疎笨を免れずして愼重を缺き幸ひにして一月場所の角力には稍や其弊實を出でしと雖も彼れ若し始めに一二日を失敗せば忽ち本來の性格を發揮し所謂「すてばち」の角力を取るに至るべきを懸念せざるを得ず、彼今年尚全盛期に屬す且つ幸ひにして病まず、加ふるに大關駒ヶ嶽を失ひたる東方に於ては朝潮の大關は既定の問題となれり、太刀山には勝算なしと雖も鳳、伊勢の濱とは伯仲して星を爭ふを得べし、而して前來の成績に見るに鳳には一籌を輸して伊勢の濱には少しく利あり兩力士に對する當場所の朝潮は實に其眞價の判定さるゝ秋なり豫め之が勝敗を云ふものは却て角力を知るものにあらず之を知りがたしと云ふは即ち知れる言なり

○○○**玉手山**　年若く角力に巧みにして今は既に玉椿を凌ぐと云ふべし三役に入つて果して其實を得るや否やは豫め知るべからざるも當時玉椿が三役に入るの日に尚ほ同じき評あり而して玉椿の久しく三役に出入すること彼の如きを見れば玉手山も亦其前途なしと云ふべからず西の海の苦手は最も彼にありて西の海横綱の鎖鑰半ば玉手山の手に握られたりとすれば亦一奇ならずや

○○○**大蛇潟**　相撲年寄某評して曰く大蛇潟は横綱ものなりと、予曰ふ彼年最も若く膂力亦非凡なりと雖も角力の術に拙く亦進歩の氣に乏し斯くの如きものにしても能く横綱たるの目あるべきかと、年寄曰く、大器は晩成にあり其拙なるは即ち大器たる所以にして進歩の氣に乏しと云ふは疎漫ならざる所以なりと此談は昨年五月場所の日に在りたり、而して本年一月場所に至りて彼果して其年寄の言に適應するの兆を見ることを得、啻に力量體格の益す發達せるのみならず機を見ることも亦敏活を致し敵の來るに乘じて却て投げを打つて一氣に寄り倒すと云ふが如き一技を修得せり常陸山、西の海、宇都宮等皆此術中に落ちたり其果して大關たり横綱たり得べきやは尚ほ他日の問題に在るべしと雖も彼の年齢尚ほ二十四歳と云ふを聞けば其將來の至る處測るべからざるものあるべし西の海の強敵にして朝潮の好對手たり

○○**綾浪**　身長力量、體格共に適合し誠實の角力ぶりにして立ち合ひも亦愼重なり何人も當然小結たるべしと想像せしに小常陸の爲に其位地を奪はれしは氣の毒也但彼は進んで勝つに拙く又變化に乏し故に太刀山の如き大力士に對して奇功を占めがたく又鳳の如き敏捷の力士に逢ひては手を下すの暇なし伊勢の濱、大蛇潟の如き四つ角力に對しては守つて勝つの妙あり當場所の如きも恐らくは可もなく不可もなきものなるべし

○○○**黒瀬川**　角力は功者ならざるも身長ありて四つ角力に慣へり漸く圓熟に近づきし彼は綾浪と好對にして再び三役に入るの期あるべし當場所の好敵手は朝潮、綾浪、千年川、宇都宮、綾川等ならん

○○○**浦の濱**　彼少しく慢氣あり一月場所は零敗に了れり若し氣概あらば當場所は捲土重來の勇あるべきも惜い哉彼は巡業を敵方と共にせる其敵愾

心の養成に於て十分なりしやを疑はざるを得ず彼にして若し太刀山等と巡業を共にし太刀山にブツカリ鳳、伊勢の濱、大蛇潟等と申合ひたらんには恐くは東方をして震駭せしむるの發達ありしなるべし然れども彼の角力は所謂調子ものなり始め一二日を勝たば體格、力量以上の成功あるべく亦豫め知りがたきの力士なり

○○
綾川　容貌風采、朝潮に亞げる好力士なり蓋し三役の候補者たるべし然れども彼が一月場所の好成績は實力以上に出てたり之を再び得べきや否やは保しがたし朝潮を凌ぐ力士にあらずして大關の資にあらず

○○○
宇都宮　體容と角力ぶりと故駒ケ嶽に似たるものあり其實質に於ては駒ケ嶽に至ることは或は難かるべきも其氣象は駒ケ嶽の如く小膽ならざる者の如し兩者互ひに長短ありと雖も宇都宮の惡く駒ケ嶽に似たる處は手にて押すこと強くして出足の之に伴はざるにあり組んで亦術に乏しきにあり故に押して殘る時は忽ち敵に乘ぜらるゝの失あり直に駒ケ嶽を以て比するは早計の評なり當場所に始めて敵の三役に對場すべし鳳、伊勢の濱等と皆好取組たりと雖も其實は何ほ未だし好取組とは云ひ得べきも好對手とは云ひがたかるべし

○○
兩國　鳳、朝潮を混合したる風あり、鳳、朝潮を混合したりと云へば鬼に金棒たるべしと雖も之を混合して小にしたるものなりと云ふに留まる、然れども敏捷にして變化に富み出沒計りがたき妙あれば予は之れ等の力士を以て却て太刀山との好取組とし一種の興味を以て觀んとす但し當場所は未だ對場に來らざるべき歟

以上の外、小常陸、對馬洋、千年川等東方に於て注目するに價し、金の花、土州山等西方に於て見るべきものあらんも小常陸は前場所と大差なかるべく對馬洋は前場所ほどの不成績はなかるべきも豫期せるほどの有望にあらず千年川病癒へて稍や振ふべしと雖も既に前年の千年川にあらざるべく金の花も病氣全癒して登場し土州山亦氣を以て凌がんとす此他幕下の新進に評すべきもの少なからざるも紙數剩りなく許さざれば之を略せり

△術と力

花籠平五郎

相撲は矢張り稽古が一番肝要です。病氣をせずに稽古を一生懸命勵みさへすれば乾度一人前になれるものです。それがどうもさうは行かないもので、つひ怠り勝ちになりたがるものです。私どもの若い時分と今頃とでは其間に大分相違があります。私ども若い時分、博多にゐた時などは、朝から晩まで汗みづくになつて稽古したものですから、もう日が暮れると、グツタリ土場に突伏して寢て了つて、遊びに行く處の話ではありませんでした。朝起きると身體が痛くて動かれない。それを我慢してまた稽古を初める。初めの間は痛くて思ふやうに働けないが、何時の間にか其痛みが除れて　稽古が濟　でお湯に入つた時の氣持たら、それこそいが清々したものです。此頃ではそれ程稽古をする者は尠いやうです。

其證據には見て御覧なさい。其綺麗な身體をしてゐますが私などの若い時は傷だらけだつたものです。太刀山關も今ではあの位强くなつて、何と言つても一番でせうが、あれで昔は隨分稽古を勵んだものです。

一體相撲は力ばかりでもいかず、術ばかりでもいかぬものです。力が無くては無論お話にならないが、力ばかりでは勝てません。どうしても此技を覺えなくては駄目です。それには、人から敎へられたからと言つて覺はるものではないのです。彼れをせよ此れをせよと言つて喧しく言つても其通りに出來るものではありません。銘々自分の身體に具つたやうに自然に技を體得するやうになるのです。それは稽古を積んでゐる間に、自然に自分に勝手の好い手を覺えて、それが自分の流儀になつて了ふのです。相撲ばかりでなく劍術でもさうでせうが、稽古をして自分で其道に達しなければ到底駄目なものでものです。引張つたり、いなしたり、逃げたり手繰つたりして勝つ事もありますが、ケレンで勝つたのはほんとに勝つたのではありません。チャンと腰がきまつて型に成つた角力でないと立派な角力とは言へません。

相撲を見てゐると、勝つた者は滅法强くて、敗けた者は馬鹿に弱いやうですが、そんなものではありません。あれではどうもお話にならぬと思ふ人もありませうが、さう違ふものではないのです。尤も太刀山關とか常陸山關とかいふやうに闊抜けて强くなつた人は別ですが、さう違ふものではありません。相撲に勝つて勝負に敗けたといふ事がありますが、土俵際の指一本で勝敗が顛倒する場合が幾らもあります。

又妙なもので、相撲といふものは身體ばかりにも因らぬと見えて、玉椿關などに、あんな身體でよく力士になれたものだと思ひますが、あれで立派に勝つてゆくから不思議ですよ。而かも立派に四つ相撲を取るのですからね。全くあの人は相撲界の名物です。只小さいだけなら何でもありませんが、あんなになると相手も取り難いです。相撲といふものは中々註文通りには行かないもので、傍から見てゐると、あの場合、あの手で逃ればよかつたになどと、よく被仰る事ですが、本人になつてみるとさうはまゐりません。又本人も、先には右四つで敗けたから今度は左四つでなどと註文を附けたりしても、それでは却つて先きに自分の方で手も足も出なくなつてまゐつて了ふ事になります。ですから相撲といふものは臨機應變に、自分の流儀で敵を倒さねばなりません。それには平生の稽古が肝要だといふ事になるのです。

△名力士常陸山

山方香峯

何といふも常陸山は名力士なり、古今の名力士といふことを得ずんば、明治の名力士なりといふに止むべし、兎に角名力士たることに於て異言なし。誰やらが、近代の强力者を擧げて、陣幕、次が太刀山なりなどいふ者あれど、鳥滸の見なり。陣幕の敗星少きは、土俵數少き故なり、常陸山の晩年太刀に敗込みしは、常陸老て太刀若きが故なり。北國隨一の[illegible]

十郎左衞門も、老ては若年者に其白髮首を授けざる能はず、常陸とて兇神にてはなし、四十を越してから壯年の力士に負けしとてよも恥辱にあるまじと思ふ。元來役者なれば、若き時は若さで賣り、老ては老功で賣出すことを得れども、力士は土俵上の勝負が其身上なれば、敗績くが最後、人氣も落ち、位置も落つるなり、これを豫見して早く土俵を引退せる先代梅ノ谷の如きは悧口者なれど、その悧口者が、己の養ひたる現代梅ノ谷の老骸を今に土俵上に晒し置くは、悧口でも事情には勝てぬと見ゆ。常陸山の引退も四五年後れたりといふものあれど、這は當人の事情を考へぬ説なり。米高い當世、ソウ理想一片でも行くまじ。老ても多く引分は取らず、又負込でも居れば居らるゝ横綱の地位にあり乍ら、自己の衰老を自覺しては一日もこれに居らざる決心は、流石に名力士たる常陸の料簡なりと高く買つて遣るべし。彼は慥に政界の元老などよりは、見切がよし、又手際もよし。

相撲道初まり以來、力士中誰が一番强きやといふは疑問なり。吾輩一己の考にては、寛永の昔は知らず、元祿この方、初代谷風、白山、丸山、釋迦嶽、二代谷風など皆名力士なるべけれど、强味に於ては寛政の雷電が古今獨歩なるべしと考へらる。其後に阿武松、稻妻、緋縅、不知火、劔山、秀ノ山、雲龍、不知火(光) 陣幕、境川、梅谷など出で、そして今の常陸、梅の時代に及べり。今常陸山を、前代の何の力士に比すべきやといふに、二代谷風とは中々に似寄りし點多し。然も谷風に小野川あるは、對常陸に太刀あるが如きか、谷風と常陸に共通點ある以上に、小野川と太刀に共通點あるなり。小野川の谷風に比して晩出なるに拘はらず、最後の勝利は多く小野川の上にありたるも相似たり、又其取口の如きも似たる節ありて、人物などは殊に相肖たりといふべきか。今成島司直の「相撲上覽の記」を讀むに、小野川の人物を記して曰く

「東の大關小野川たうさきの上に横綱といふものかけたりこれはあるが中にもすぐれたるものゝゆるさるゝことゝぞ弟子のすまひ二人前後にひきつれてねりいづまづ埓のもとに拜し土俵の内に入たるさまささきいかめしう見えつるものしにもはるかにうちこえしなり黑きおももちむづかしげにすさまじき毛はへたるがさすがにおそみながら此道にしてはわれはとおもひあがりたるさましたり」

風貌何となしに太刀山に肖たるならずや、若し二者に相違點ありとすれば、そは小野川の丈短くして太刀の長身なることなり。其他取口の鋭き、寄身の速き受けて立つといふ大關風の堂々たる態度を缺き、奇趣横生、矢次早の手練なる、共に二人者間に似通ひし點なり。一體小野川といひ、陣幕といひ、太刀山といひ、勝負の星數を主とする立合には、其に都合よく出來たる力士にして、立上りさま敵の機先を擊し、電光石火、勝を占むるといふ敏捷さは、其體質上特有の長所なり。それ故に陣幕の對敵たりし不知火の如きは、三番勝負ならば次の二番は屹度勝ち得べきも、最初の一番は到底勝ち難しといへりとぞ。谷風―小野川、不知火―陣幕、常陸山―太刀山の關係は、凡て皆此の如しとはいひ得ざるも、かゝる傾向のあることだけは疑ふべからず。要するに力士としては、仕切

り、立合、勝負の三拍子揃はねば、眞の力士とはいひ難し、これを他の半面よりいふときには、體格力量、技、人格の三長を兼ぬることとなり。二代谷風は之に庶幾し、明治の常陸山亦この倫なり。獨り小野、陣立、太刀山の屬は、假令星取の上に優者たるの實あるも、斷じて名力士とは稱し難し。

再躍は明治の力士中、境川、綾瀬川、朝日嶽、雷電、両國、武藏野の時代より、延て今日迄の力士を歷觀するに、態度の堂々たる、眞に大關の貫祿具れりと見しものは、先代梅ケ谷と今の常陸山となり、これに次ぐは朝日嶽ならんか。強弱は別問題なり、單に強いばかりが能ではないと同じく、單に勝星を占むるばかりが力士の名譽にもあるまじ。されども勝負は土俵上唯一の評價標準なれば、勝を求むる心が主となりて、往々力士に有るまじき卑劣の技を弄するものあり、堺の八角が初代谷風を投げしも是なり、太刀山が曾て常陸を張つて痛分となりしも是なり。これ等の力士は、力量技術如何に拔群なるも、再躍の所謂名力士にはあらじ。

常陸以外、現在の力士中、仕切り奇麗に、態度の如何にも晴々したるは、伊勢と朝潮となり。この二人者は、實力よりも其態度に於て大關の貫祿ありといふべし。今の花籠、即ち荒岩も亦仕切の奇麗なる力士なりし、彼は小野川型の力士にして、奇手を以て勝を博する力士なりしも、其取口は堂々たるものなりし。其他は、伶悧なるは狡智を役し、遲重なるは餘に狂調にして、再躍等が、目を拭ふて快踏するに足る者は殆んど無しといふも可なり。（四月十五日）

△梳子のひまに

花月女將

只今ちよつと髮を結ひかけてをりますから、こんな處で失禮いたします。いよ〱夏場所も近づきまして御座いますね。此場所は私どもの鶴見の方が出來上りまして、此三十一日にいよ〱開闢式を致しますものですから、殘念ながら此場所はいつものやうに毎日出掛けられないかと思つてをります。此場所は綾川が大變強いといふ評判で御座いますね。それに両國宇都宮など、どうも東の方には將來有望な力士が澤山出來たやうで御座いますね。常陸山といふ人は中々悧巧な人ですから。私ども別に何方が贔負といふ事も御座いません。東の方にも好きなのがあれば西の方にも贔負があるといふやうなわけで東方西方といつて別に區別は致しませんが、別して玉椿を贔負にする處から、何だか西方贔負のやうに思はれるので御座いますが、私ども常陸山には全く感心致してをります。梅ケ谷のやうに雷といふ立派な親を有つてゐるではなし、全く自分一本立で借金をしてまでも熱心に後進を養成してゐるのは全く感心で御座いますよ。ですからズン〱良い力士が出て來ます。見てゐて御覽なさいませ。私は今に協會の力士の殆ど全部は常陸山部屋から出るやうになりはしないかと思います。でないまでも他の部屋の者全部を集めた

者がやつと常陸山部屋の者に對抗するやうな事になり、東西の大入粹りを初めなくてはならぬ事になりはしないかと思ひます。さうすると同じやうに横綱は張つてゐても年寄に成つたら常陸山の勢力の方がズット梅ケ谷より上になるだらうと思ふので御座いますよ。其段になりますと、私は決して梅ケ谷を貶す譯ではありませんが、梅ケ谷では稍々後進養成の熱心が缺けてゐはしないかと思ふので御座います。それは何らいふ理由かと言ふに、何と言つても梅ケ谷は養子の身分で、何彼につけ自分の思ふまゝにはゆかないといふ事ゝ御座いませうし、家は歴然（れつき）として財産は澤山有るといふのですから、つひそんな風になるのかも知れません。そこへゆくと常陸山は自分一代ですから、何とかして自分の後を立てゝ呉れるやうに立派な弟子達を養成しておかうといふ事になるので御座いませう。萬事梅ケ谷と常陸山とでは其取口の示してゐるやうに、一方は地道に、内へ内へと許り引込み思案な、それこそ懐から手を出すのも厭だと言つたやうな遣り方と、片方は萬事派手に、無い金でも蒔き散らして思ひ切つた事を遣つてみたいといふやうなのと總てが正反對なのですが、梅ケ谷もも少し熱心に部屋の者を養成して呉れたらと思ふので御座います。何と言つても常陸山は悧巧で御座いますよ。別に八百長も取らず、相談もせずに、それでゐて勝負以外の勝負をしますからね。

昨日の日々新聞に此場所の豫想が出てをりましたが面白く拜見致しました。大體に於いて異論はありません。が、小常陸と伊勢の濱とが五分五分といふのは如何でせうかね。これは伊勢の方に六分の勝目がありはしないかと思ひます。四海波に玉手山が五分五分だとしてありますが、これは確かに違ひます、今年の玉手山は以前の玉手山とは違ひます。玉椿が一生懸命に教へたものですから、今では玉椿そつくりの手を覺えて、全く取口など斯うも似るものかと思ふ位ですよ。ですから私は今年の玉手山は乾度面白い働きをするだらうと思つてをります。それから強くなるだらうと思つて案外好くならないのは小野ケ崎です。これは私にもつと強くなるだらうと思つてゐたので御座います。それに沂藻川もね。鶴渡りといふ力士も稽古をさへすればもつと何うにかなるのでせうが、何しろ西の海と一所で殆ど稽古をした事がないといふのですからね。

私が思つてをりますのに、相撲といふものは力と技とそれから運だと思ひます。力も強くなくてはいけませんし、技も上手でなくてはいけません。が運が好くないと何うも出世が出來にくいやうです。早い話が今度のやうに、駒ケ嶽が死ぬる。常陸山が退隠するといつたやうな場合にめき〳〵頭を擡げた者は仕合ですよ。それが頭に何時までも太刀山のやうな強い力士に頑張つてゐられると出世も容易な事ではありませんからね。

私は玉椿を贔屓にしてゐるのですが、何故私が玉椿を贔負にするやうになつたかといふに、まアあの年になつてお女房（かみ）さんは無し、家は無し、無論財産は無し、有る物は借金許りで、年中汚い褌一つでゐる。それでゐてお金が入らないかと言ふに決してさうではないのです。随分立派な贔負筋があつて貰ふには貰ふのですけれど、それは皆下の者に頒けて遣

つて了ふ。玉椿くらゐ下の者を可愛いがる者も少う御座いますからね。ですから彼の人は勝負でも自分より下の者に敗けたのは少しも苦にしませぬ只一枚でも自分より上の者を倒さう〳〵として掛つてゐるので御座います。番附の一枚も上に成り度いの、何時までも三役でゐたいのなどといふ慾見は微塵も持つてゐません。只自分より上の者には何とかして勝つて見度いといふ願だけで御座います。ですから是れまでの成績表を見てもあの人の敗けたのは下の者に多くて、上の者には割合に勝つてゐます十日のものが九日まで敗けたにしても、自分より上の者にさへ勝てばそれでよいと言つた調子で御座います。それは〳〵中々の理窟屋で、相撲仲間でも毛蟲のやうに嫌はれてゐるのは事實でして、私どもでも、餘り理窟を聞かされて厭やになる時も御座いますが、その代り曲つた事は、これつぱかしもしないといふのが彼の人の氣性なので御座います。何時か力士が協會に反抗して新橋倶樂部に集つた時が御座いましたね。あの時に唯一人協會に踏止つたのが玉椿です、何故お前さんあの時に皆と一緒に行かなかつたのだと言つて訊きますと、『協會の組織が惡いとか、規則を改正せいとかいふ事なら、それは私も贊成をします。が高が給金を上げて呉れといふやうな事で協會に反對は出來ません。私ども力士が今日迄喰つて行けたのは皆協會のお蔭なのですから、其協會に對して金錢上の事で弓を引くやうな事は私はしない。誰も居なけりや構つた事はないから獨り相撲でも取る決心です』と言つて殘つてをつたのが玉椿です私ども今日まで役者から落語家、講談師まで色々な藝人が隨分と贔屓に致しましたが、玉椿ほど藝人らしくない藝人を手掛けた事は御座いません。私は其氣性を買つて贔屓にするので御座います。何しろあのやうな小さい身體をしてゐて强い者に勝たうといふのですから一通りや二通りの苦勞ではいけません。常陸山のやうな人でも「こんな大きい身體をしてあんな小さい人に敗けるとみつともなくて仕方がないけれど、うつかりしてゐると敗かされるので油斷も何もなりやしない」と言つてをります。全く對手方に一番嫌はれるのは玉椿で御座います。今度愈々鶴見に家を建てゝ遣りましたが、次には好い女房さんを世話したいと思つてをります。があの通りの氣難し屋ですから、餘つ程しつかりした女でないと持たないだらうと思つて心配してゐるので御座います。

△横綱常陸山の相撲談

好角生

開口先づ大關駒ケ嶽の頓死を惜んだら藹然として難有う御座いますあれも誠に可哀想な事をしました私は水戸興行の仕度の爲め鄕里に歸て居りますと駒ケ嶽危篤との電報を受けましたから直ちに醫者と共に自働車を飛ばし約一時間で着しましたけれど其時は早や事切れて間に合ませんでした、あれの關係者は勿論惜まるゝのは御尤で御座いますが私の心になつて見ますれば尙一層可哀想で實に悲歎に堪えません何しろ坊主頭の

時から手習にかけてあれ迄にしたのですから其苦心は並大抵ではありませんそれがあの様な頓死を致しましたのですから丸で掌中の玉を取られたとでも申しましようか未だに死んだとは思はれませんと語て暗涙に咽んで居た。

第二に若い者養成の苦心談を尋ねましたら之も私許りではありますまい各部屋共に此點に就ては大に研究して居る事と思ひます、何職業でもそうでしようけれど殊に此職業は嚴に失すると逃亡しますし緩に失すると怠けると來て居ますから始末にをへません此緩嚴の度を調子よく整えるのは最も至難の事です私は是迄の取りし方針は少しく嚴であつたかも知れませんが御承知の通り此道に志す者は敎育のある者は澤山ありませんから嚴重に致しませんと規律は立て行きません其勢か御蔭様で私の部屋からは是迄に一人も法律上の罪人を出した事はありません。

私が從來取り來りました弟子敎育方針とも申すべきは能く個人の長處短處を探り長處は飽く迄發達せしめ短處は之に備ふる方法を授くると云ふやり方でした然し如何に師匠が骨を折て敎育しても當人が馬鹿で勉強する將た研究すると云ふ氣がなければ到底發達は致しません我々の勉强と申しますと乃ち稽古で稽古さへ熱心にして居りますと知らず〳〵の內に體格も出來技術も熟して參ります又研究と申しますは一勝一負決して苟もせず如何にして勝ちたるか如何にして負けたるかを追想し次に來るべき勝負に其欠點を補ふと云ふ準備を地方巡業中に稽古熟練すると云ふ覺悟がなければいけません此勉强研究の好標本とも申すべきは梅關の處の玉椿と内の小常陸ですあの體格では到底幕中軸の位置を保つのも六ケしい位です然るに稽古の賜物は屢々三役に進入りました。

素人の方は角力取位呑氣な商賣はない一年中只廿日間丈け働けば殘り三百四十五日は遊んで暮して居る樣に思はれますけれど地方巡業でも我々には前陳の樣な苦心があるのです此大切の地方巡業を素人の方の御考の樣に空に過して來た者は大場處になつて必ず不結果として表はれますですから私の巡業には稽古を奬勵するは勿論の事假令坊主共でも必ず眞劍に勝負せしめまして若し八百長を認めた場合には地方巡業と雖も決して假借致しません相當の罰則を課します。

世の中が開明に向ふと共に何職業も困難になつて參りましたが我々の職業も矢張之に洩れません昔は體格と力量で角力を取りましたけれど今後は決して體格や力許りでは角力は取れません戰爭でも今日では丸で學問の戰爭になつたと同じ樣に我々も今後は體格力量以外に頭腦で角力を取ると云ふ覺悟が必要になりました即ち力の運用、堪久、變化の迅速と云ふ樣に學問上から割出して研究練磨しませんと今後の角力は勝てません。(終)

△常陸山の弟子養成法と有望弟子

三宅碩夫

常陸山は云ふ迄もなく一代の名力士であつて、此人の事について話せば話すべき事は幾らでもあるが、然し常陸山個人として彼自身の事について評することは、些か時機が後れて居るやうである。寧ろ今後の彼の生命は其養成に彼の魂を打込んだ弟子にありと云ふを當れりと信ずる。で玆に些か彼が弟子養成についてやつて居る苦心の實況と、其苦心の結果によつて得た有望弟子との事についてお話して見ようと思ふ。

弟子の選擇

力士養成の必要なと共に其困難な有様は、内部の事情を聞くと門外漢が思ふよりか餘程面倒なものらしく思はれる。弟子の選定は多くの好角家が推選して吳れます爲めに、候補者を得ることは左程出來にくい事ではない。殊に常陸山には幸に同情者が世間に多い丈け、推薦者は非常に澤山にあるから、其方の都合は他の力士より好さゝうである。然し素人のよいと思うて推薦するものが必らずしも大成すべき體質を備へず、餘り多く望を囑せざるものに却て大成するやうな者がある事もある。それで折角に推薦して吳れても、其者が成功しなければ穀潰しとなつて親方泣かせのものとなつて了ふ。成功すれば本人と共に親方まで非常な仕合せをする譯であるが、其推薦するについて十分に注意しないと、本人も親方も泣かせ合ふやうな事が間々見受けらるゝ。

弟子の教育

力士の志望をする位の奴だから自ら進んで技術の練磨と體力の養成には他人の奨めを俟たずして遣るべき筈のものであるが、入門の當時は自ら一躍して大關になると云ふやうな自惚があつて遂に角界に入るものが多いが、それが親しく締め込みを締めて土俵に出て見ると、自分の眼から見て相手にならぬ位の小僧にバタバタやられ、自然土俵に立つことが大儀になつて、興味を以て練磨する機會を殺ぐこと間々見るやうである。又初めて入門した時分に厭氣を出させないやうに善導して行くと云ふ事が親方たるものゝ責任であるのですが、其責任をすら盡すことが出來にくいのが所謂力士氣質の、疎放の所から招く缺點である。でやゝ角力になり終ふせると云ふ決心を告げた後でも、十兩になるまでには數年の時間を要する譯であるから、其間に一張一弛を免れざる爲めに、自然逆境のあるべき力士が墮落する機會に遭遇することもあり又彼等仲間に有り勝な病氣にかゝつて折角の機會を取り逃がすこともあるやうである。從來の教育法は其邊については殆んど自然の淘汰に任かして居るかの傾がある爲めに、醫學の進歩と共に病氣傳染の豫防術を强制的に施行せしむると云ふ事などは、獨逸の醫學者界に於て一般人に注意する方法を先づ此力士界に應用することが必要であると云ふ事について、部屋贔負の外科專門の醫學士などは常陸山に向つても奨めもし、之が實行を試みようとして居らるゝ方もあるやうだから、之が實行さるゝ事になれば、有望力士と謳はれたものが中途に頓挫することを從來よりも餘程防禦し得て、一般の候補者をして此途に入る丈けの方法を講ずることが出來るだらうと考へる。

力士の禮儀

それから從來の力士は禮儀とか德義とか云ふ事について無頓着なのを以て寧ろ普通性の如く考へても居り、世人も之を看過して居つた有様であるが、之は社會の進運と共に大いなる悪弊として改む

べき事であると云ふ事については、常陸山の最も苦心して居る事の見えるのは斯道の爲めに喜ばしき現象として視せざるを得ない。

力士の節制 普通悪戯に耽つて力士の品性を陷し、練磨に缺くる所ありと云ふ事は斯道の通弊として一般人の痛惜する所であるが、此點に向つては常陸山は最も深く意を用ひ、彼の部屋に於ては賭具を有せしめず、地方興行中も他の部屋に比して嚴重の取締ある趣であるが、雨天、夜分其他角力の時間以外の多くの時間を利用する方法が彼等の仲間に於て發見されてゐない爲めに、自然身を持ち崩す所以ともなるのであるから、何か之に適當の方法を授けると云ふ事が固より必要の途で、力士廢業後の處世術の上からしても十分講究すべき問題なのであるが、今に至るまで適當の途を見付けることが出來ぬのは常陸山の最も苦心する所であつて、同情者も亦研究を怠らないのであるが、矢張り未だ最良の方法を見出すことが出來ずに居る。若しも簡易なる小說でも讀ますとそれに讀み耽つて仕方がない。碁、將棊と云ふやうな事も總ての時間をそれに向けることも出來ず、此點について何か力士の爲め適當の方法を見付けてやつたならば、自ら品性も高まり、且つ廢業後彼等の身を處する上に於て大いなる賜物になるであらうと思ふ。

宇都宮 常陸の弟子の中で、今まア著しく目立つて居るのは宇都宮である。宇都宮も今少し取口が緻密にして引張り込むと云ふ事を罷めたならば堅實の度を增して益々彼の膂力を發揮せしむることが出來ると思ふ。彼の體力も前場所に比して著しく增大し、肉附きも甚しく肥滿の度を加へたるを見ても、彼の進境の目覺ましきものあるを思はしむる。今の元氣を持續して一二年を經過せば、彼は目的の大力士となり得るの曙光をあらはしたものといつてよい。

兩國 宇都宮に反して、體軀大ならずと雖も最も怪物と見られて居る兩國の技術、變化。敏捷にして策戰に巧みなることは、單に看るものゝ意表に出づるのみならず。恐らくは兩國自身も無意識に働いて居るのぢやないかと思はるゝ程の神妙を極める。蓋し本場所に於て敵を畏縮せしむる飛道具を有する怪力士として、到底隅に置けぬ代物である。

栃木山、釋迦ケ嶽 兩國に反して最も質實にして正道を踏み、攻守常軌を逸せず、金城湯池の陣構をなし、攻むれば必らず取り、戰へば必らず勝つの概あるは栃木山、釋迦ケ嶽の兩雄である。其他大錦、九州山等大物の候補者少くないのは常陸山の教育其宜しきを得たにもよるであらうが、又よき弟子を見付け出したのにもよることで、之は實に自他の仕合せであつたと思はるゝ。

△國技戰場

龜城山人

東西〳〵抑相撲の濫觴(はじまり)は昔垂仁天皇の即位七年七月大和當麻邑の勇悍士蹶速と云ひて筋力天下に一人として敵手なしと聞えしものあるを天皇知食出雲國の勇力士野見宿禰を召上し角力の技を叡覽ありしに宿禰の技

畢捷りけん蹴速竟に蹴仆され脇骨胸骨踏折られて叫びもあへず死んでけり、宿禰はこの恩賞に蹴速が地を賜りてそが儘皐都に召置かれ朝廷に仕奉りぬ是本朝相撲の祖神と云ふ斯くて相撲手捌古來四十八手と稱し「投げ」敵の腕を取つてミツを吊上げるやうにし腰へ力を入れて投げるもの、上手を曳けば上手投げ、下手を曳けば下手投けと云ひ、土俵際で極る時を寄投げといふ「手繰り」敵の腕を手繰り込みながら足を掛けるなり殘れば内掛け外掛け切つ返し等に變化する「三所攻め」敵の腋へ頭を附け片手を胸へ掛け殘る片手を足に附け片足がらみにて押し行く「肩透し」右なり左なり得意の方にて四ツに渡り頻りに寄ると見せて敵の耐ゆる所を見て差手をグイと曳きながら透すと共に敵の首を叩き落す其他素首落し、腕捻り、脊負投げ、内外無双、櫓、捻出し、渡込み、襷反り、登りがけ、倘ほ其外合し總じて四十八手と云へど此外新舊の極り手も少なからず斯くて又相撲手に禁止七手あり一、眼を指首て突く事一、鼻先を拳て突く事一、鳩尾を拳て突く事一、臍を拳て突く事一、睾丸を突き又は絞る事一、兩耳を双手で手拍手を撲つ事一、頬を張る事一、頭髪を掴む事一、前袋即ち睾玉のある所を曳く事一、尻に廻り居る竪ミツを曳く事等禁じつゝありしが其中の撲手は現今用ひつゝあり、又土俵の傍へ桶に水をたゝへ力士に與ふるを化粧水又は力水と唱へ力士が土俵へ登場するに際し溜りに控へ居る勝力士より受くるを例とせり興りは往時の召合せ相撲には勝負に生命を賭し死を決したるもの多かりしかば力水は元來水盃の意味又取疲れて引分となる力士は互ひに溜りを取違ひて敵方の力水を掬するが之戰國時代の餘波にて義を重じたる武士が敵へ疲れを見ずるに忍びず馬上にて敵に酒を與へたるなぞいふ例めしもあれば夫等によりしもの、又力士が土俵へ登りて一寸俵の塵を捻り拍手して後双手の掌を開くは敵に兇器なぞ持たぬとの意を示すものにして往時は私怨より種々相撲に事寄せ遺恨の刃傷などありし故なりとぞ、など斯く口狀永々並べ立て囀り立て書き立つれば如何にも相撲道には、いやが上にも事明かなる樣なれど其筋に無筆文盲なれば錯へる事も少なかるべきが然し昨今我一人ならで疑問の節のなきにあらず苦言の數々左に書並べて當事者の一考を乞はんとす、

▲物言と檢査役　押倒す、寄倒すなどいふ時によくある即ち敵にクングン遮二無二寄られ押されて身は絶體絶命九死一生の際、やぶれ、かぶれでやる打棄りの手はよく物言の付く角力である多くの眼には甲は確かに而も立派に押倒した寄倒した行司又必ず萬能でない前後左右居所に依つてよく見えぬ事もある軍扇は衆目の見た所と同じで甲に上げたが乙の控力士此方に打棄りあつたと物言を付ける四本柱の檢査役ドッコイショと許り立上つて互ひの意見を述べ甲乙控力士の又意を叩く所が甲乙一歩も譲らぬ檢査役は爲めに行つたり來たり長きは三十分間餘も費すことがある斯くて結句が行司は「預り置きまして新手を御覽に入れます」と來る、されば之が決末が付いたのかと聞けば、ナニ、星は打出し後協會でといふ有樣好角家は少しも早く何れが勝何れが負か聞きたいが遂ぞ其日は判らずに仕舞とは元々此の打棄りなる手が疑問であるが又控力士の權威と

檢査役の權威と何れが重きか疑ひなき能はすだ望むらくは土俵上の事は土俵上て決末を付けて貰ひたい、

▲勝あつて負なし　次に疑問とするは勝あつて負なしといふ角力だ矢張り物言の結果で前述の如き物言に於て兩者一歩も讓らぬ末が檢査役も我を折つてか、はた如何なる考ひからしてか然らば甲丸星、乙半星負なしで承知してくれ、それなら御任せするとあつて結末が付く、實に怪しなものだ一方は勝つて居りながら一方は負て居ない引分や全く同體に落ちての預りは別だが星も勝負只二つには出來ぬものか知ら聞けば半星取か隱れ星なんといふものもある暗夜や雨夜の星でもあるまいに此所が即ち檢査役の權威を疑ふ點である、決して物言を付けるなとは言はぬ

▲引分と休場　小力士にはあんまりないが大力士となるとなる程、ガツシと四つにでも組んで仕舞ふと程の四分と五分も經たない内に水だ引分だと來る觀客の中には組んだのを見た許り極り文句の引分かと勝負も付かぬ内に出て仕舞のが少なくない檢査役諸君は大物は兩者負かすのが氣の毒な爲めか昔は命を賭してさへ遣つた角力今日は然し世の進歩と共にさる事は出來まいが取るものも然し心掛け丈けは昔の氣を持つて貰ひたい、一日只一番の角力濟むが早いか縮緬着物で腕車を飛ばし直ぐと花柳の巷に馳付くるなどは數もなからうが又一人二人でもなさそうだ、又今一つは初日、二日、三日と續け樣負けると、とても此場所は駄目だなど自分から心を腐らして怪我や病氣でもない癖に休場する力士が大物に却つて間々見える觀客別して得意客に又かと云はれ笑はれるもつらからうが其所が辛棒の仕所男の内の男と昔から賞めらるゝ大の力士諸氏よ記者の苦き言葉も斯道の發展を祈ればと思ひば奮闘努力乞ふ花を咲かして貰ひたい、

▲注目すべきもの　惡まれ口は之位此の夏場所で注目すべき數々の中で二三を記して見たならば一、鳳對西の海之は鳳は出足が早い所へ西は未だ腰が申分ないといふ迄に至らないから面白いガツシリ四ツにでもなれば鳳は頻りにケン〳〵を見せるだらうが然し中々利くまい結句引分といふ體となるだらう然し鳳も組んでは損と知つて居るだらうから注目の一である去る春場所には西に破られた一、伊勢の濱對朝潮は何うだ腰がしつかりして且つ力量のある伊勢に組まれては大概のものは寄られるか吊られるか然し朝も腰もあつて技も又ある春場所では伊勢が却つて破られた一、大蛇潟に朝潮之は何うだ大蛇は技は未だ多少若いか知れぬが大して伊勢に劣らぬ强力もの春場所には大蛇が負一、朝潮對鳳之が又々見のがす事が出來ない春場所朝は負けたが昨今の元氣如何なる今度は技を現はすや計り知れない夫から春場所に於て東軍の兩大關を美事倒した小常陸元氣益旺盛とあるから又々ドンデモない事をせはせぬかと東軍の大物同士は今から用心して居るそうだが然し小常陸には押すか寄るかより外に危險な手は餘んまりないようだ其他綾川、宇都宮春場所十兩にて好成績であつた兩國、釋迦嶽、松井川、大錦、栃木山、宮城山、寒玉子も大分元氣な樣だ何れは奮闘目覺しきものあるであらうと注目して待つ。

△相撲雑感

笹川三男三

私は一體古い相撲好きで明治二十九年の暮に西洋から歸り、三十年の春場所から盛んに相撲を見初め、近來まで、ずうと缺かさずに見て來たのである。

全體角力と云ふものは男らしい面白い遊びであるから、見初めてからは益々其興味が加はる一方であるのに、殊に當時は常陸山に梅ケ谷それに逆鉾、荒岩など云ふ名力士の揃つた時分であつたから今から考へても、二度と得られぬ快感を起さしめる。其中常陸山とは別して懇意となり、常陸などの依頼もあつたから、此間亡くなつた駒ケ嶽や又西の海などは彼等の二十歳位から、よく私の處にやつて來て、殆んど自分の子供同然に育てた。又及ばずながら多少薫陶も與へた積りである。

角力と云ふものは、どうしても、只角力を取つて強いといふばかりでは面白くない。矢張り多少の素養と識見が無くてはならない。さうでないと角力取りは一種の藝人風のものに流れて、役者などゝ一所に見られるやうになる。然しそれでは甚だ面白くない。此點に於ては常陸の部屋のもの並びに駒ケ嶽や西の海などにも出來る丈け注意し、三宅磧夫さんなども大いに骨を折られて居るのであるから、他より非難を受けるやうな事はない積りであるが、然し東西を通じて近來の我が相撲界には餘程面白くない風潮がありはしないかと思ふ。

角力と云ふものは勝つも負けるも其時の具合で、勝つたからとて必ずしも褒めることの出來ぬ事もあり、又負けたからとて一向差支ない事がある。畢竟は男らしく奇麗に角力ふのが其本領であると思ふ。然るに今日の角力は只無暗に勝たう〳〵とばかり焦せる。勿論之にはいろ〳〵な關係や理由もあらう。が、其關係理由の如何に拘らず、どんな手段でも勝ちさへすればよいといふのは確かに角力道の墮落であつて、如何にも卑しく汚ない感じを與へる。で私なども近來は時々不愉快な取口を見せられるので、一頃ほどの興味を以て角力を見得なくなりつゝある。只單に點を考へたり、利害得失を考へたり、甚しきは八百長までもやり兼ねない。是等は實に角力の本領を沒却したものである。

それで我々から云ふと、男らしく勝負をすると云ふ點から見れば、今の太刀山などに對しても多少の遺憾がある。太刀山は實に強い。今日に於ては横綱の價値は十分にある。然し其取口はどうも「勝つこと」をのみ主眼として「男らしく」と云ふ事を第二として居る傾がある。それで其角力が面白くないのみならず、遺憾ながら其人の地位に疵をつけるものぢやあるまいかと思ふ。

もう一つは今日の力士には角力の素養が少いと思ふ。角力も矢張り學問をすると同じで、學問をするものが小學、中學、大學とずつと順序を踏んで來るやうに角力も序の口から段々取り上げて來なくては面白くない。世に謂ふ所の中年力士と云ふものは其點に於てどうも缺けて居る所がある。角力を澤山見ない人には、強ければ只よいやうに思はれやうか、

若し強い事からいへば素人川揆にも随分強いのがある。が、少し角力を多く見ると、只強い丈けではどうも面白味がない。矢張りどこまでも角力道に協つた取口で以て勝負を決する、そこに角力の眞の面白味があるのである。今より二三年前に太刀山と駒ケ嶽との取組に、太刀がペチン立ちをしたとの非難攻撃があつた。私は其日は不幸にして此取組を見なかつたが、友人などから話を聞いて見るとどうも太刀はペチンをやつた譯ではない。(又實際横綱たるものがペチン立をするなどゝは想像も出來ぬ話であるが)只あの人は所謂中年角力で力士としての素養が十分でない爲めに、向ふから再三再四しかけられたものだから氣合が十分熟さなかつたに拘らず終に立つたのであらう。そこがペチンのやうに見えたかも知れないが、決して故意ではなかつたに違ひない。然しかういふ事は矢張り力士としての缺點であつて、常陸、梅などは私は長年見て居る中に一度たりとも氣合が熟せずして立つた事を見た事がない。

要するに私の希望する所ば、第一、角力と云ふものは奇麗に男らしく角力ふべき事、即ち勝負は第二として立派な勝負と云ふ事を第一に心掛くべき事。第二に成るべく中年角力と云ふものを廢めて、少さい時から角力道を踏んで來た力士を多くすること等である。

私の贔屓側の少壯力士については、三宅さんや佐藤さんのお話があつたさうであるから私から別に申上ぐべき事もないが、反對側の方で云ふと、私は大蛇潟と云ふ人を餘程怖い人と思ふ。先代の大蛇は私と懇意であつたが、一日當時能代潟といつた今の大蛇を私の所に連れて來て、之は私の大事な秘藏弟子ですからどうぞ十分病氣を直して呉れと云ふ事であつた。其時はまだ十八位にしかならなかつたが、其時初めてあの人の身體を見て驚いた。實に筋骨逞しいもので、私は常陸に向つて能代潟と云ふものは末恐ろしい大敵だぞアレは確かに大物になるぞといつた事があるが、果せる哉、今日の大蛇は實に體格力量實に大じたもので、昔の海山といふ趣あり、或は海山より一層強味あると思ふ。私は今後二三年――イヤ二三年を經たぬ中に必らず立派な大關角力で、鳳や伊勢の大關よりも強味があると思うて居る。

今度の場所に於て最も面白い取組ですか？左様、私は鳳と兩國とは餘程面白い角力を見せるだらうと思ふ。あの手取りと手取りとの立合であるから、互に電光石火眼にも止らぬ早業を見せるであらう。若し組まずに押し切らるれば兩國の方が分がわるいかも知れないが、あの敏捷い兩國の事だから、なか〳〵鳳の手に乘る事がなからう。若し組めばひつかけて一つ廻れば、私は兩國の方に行きたい。兎に角此一番は滿都の好角家の眼を瞠らしむるであらうと思ふ。

福本日南先生新著

〔新刊特賣〕新式細字總振がな　年表其他共約千頁　正價參圓參拾錢　貳萬部限特價貳圓八拾錢　送料十六錢

元祿 快擧眞相錄

花あり實ある赤穗義士仇討の眞相は俗說誤傳の雲霧を披きて見よ讀者の眼前に躍現せり

著者卷頭に本書著作の用意を述べて曰く。

曩に元祿快擧錄を修めて、之を世に公にするや。誤りて大方の鑑賞を博し、爾後義士傳の出づる、其數を知らず。乃ち出づるに隨ひて之を讀むに、十中の七八は皆我著の踏襲に過ぎず。……當時我の疑問として世に遺せるものは、依然疑問の裏に葬り……前に我拋棄したる市井の妄傳、謬說を再び拾取して、點綴篇を成す者、亦尠ならず。……是に於て、發憤更に史實の研鑽に從事し、凡そ見聞の及ぶ所は、努めて材料を網羅し、其異同を辨じ、其眞價を正し、拮据二年して、爰に此編を成す』と。

著者が義士に關する研究の深きは定評ある所。曩に元祿快擧錄を讀めるの士は勿論、然らざるの士も、亦此空前の快筆に依て描かれたる、空前の大快著を備へて以て家々の淸凉劑とせよ。

――東京牛込見付前――

東亞堂　電話番町三五七番　振替東京一七一一番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



ロマン・ローラン原著

三浦關造先生譯

本月初旬

製本出來

クリストフ 闇を破って

■四六判クロス■

■定價壹圓卅錢■

■郵稅金八錢■

「聖人死せずば大盜やまず」と、しかり大盜出てて大聖生まる。今や大盜的文明のドン底より、人生の眞面目を發揮せる一大藝術品現はれざるべからざる時也。しかして、吾人は之を若かき英雄ローランが傑作「ジャン、クリストフ」に看る。かのエドモンド、ゴスが極力激賞して、クリストフは二十世紀に於ける最も高貴の大作なりといへるが如く、ローランは實にクリストフに依て、文明と人生との一切の暴力を撃ちひしぎて、一大光明を攫出し、壯美雄大なる「生」を創造せり。今や前後十巻より成る「ジャン、クリストフ」中前二卷を翻譯し、題して「闇を破つて」といふ言々これ詩なり、火なり、洪水也。江湖諸君子の熱讀を乞ふ。

■是れ霹靂一聲、生活革新の一大福音書なり■

東京・京橋・尾張町

警醒社書店

振替東京五五三番

(中附二の二)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

第一高等學校教授 文學士 速水滉先生著（最新刊）

現代之心理學

（各章毎に歐米及本邦の參考書を擧げ研究者の便に供せり）

菊版函入上製 定價壹圓五十錢 送料十二錢

本書は現今の心理學が如何なる方面に向つて其進路を開拓しつゝあるか如何なる成績を擧げつゝあるかを明かにし併せて精神作用の概觀を試み人間が如何にして其の周圍の境遇に順應するか如何にして知識を獲得するか如何にして向上發展するかを何人にも解り易く述べたるもの敢て江湖の讀書子に一讀を推薦す

京大教授 文學博士 藤代禎輔先生著

新刊

文藝と人生

内容 文藝の意義及價値 性格と作物との關係 演劇の社會的位置 文藝史上戀愛問題の消息 郷土藝術の使命 ゞアストの劇の含蓄 室町文學の精華 謠曲の新解譯 最近獨逸劇壇の景況 其他著者が實歷談感想錄及飜譯小說

四六版上製 定價壹圓三十錢 送料八錢

高再版

嶋平[illegible]

心理と人生

教育宗教哲學文藝修養自然等論じて及ばざるなく更に古今の人物に於ては日蓮を評しロダンを語りベルグソンを說く凡て現代の思潮一として本書の中に呑吐せざるはなし

菊版上製 壹圓四十五錢 送料十二錢

發行所 東京府下西大久保二五八 振替東京二七〇一二一番 不老閣書房

（中附二の三）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 波多野精一先生書簡
早稻田大學教授 内ケ崎作三郎先生序文
野村隈畔先生新著

最新刊

ベルグソンと現代思潮

菊判最上美本全壹冊
正價壹圓卅五錢 郵稅拾錢

今や世界の思想界はベルグソン哲學全盛の時代なり。殊に本國の佛蘭西に於ては彼の講演を聽くは社交上の必要條件となり貴婦人及び一般人士に至るまで彼の講延に出席するといふ程の大流行となれり。然れども流行は往々にして皮相無意義に終り易し徒らに舊を惡みて新を趁ひ何等深き根柢なき我思想界に於ては殊に此感を強くせずんばあらず。著者茲に大に見る所ありベルグソン哲學の流行をして意義あらしめ結實あらしめんが爲めに此書を著はす。本書は現代哲學の意義ベルグソンと現代思潮との關係及べルグソン哲學の眞髓を論ずること頗る精確を極む。若し夫れベルグソン哲學をして一時の流行物とせず自己思想の潑溂たる血肉たらしめんと欲するの士は是非とも本書を一讀せざるべからず。

發[illegible]賣

東京帝國大學文科助教授
東京高等師範學校教授
文學士 宇野哲人先生新著

忽再版出來

支那哲學史講話

菊判最上製
美本
壹圓五拾錢
郵稅十二錢

本書の特色は(一)叙述平易にして佶屈聱牙の弊なき事(二)簡明に要領を盡して一讀瞭然たる事(三)清朝思想史を加へて從來のレコードを破れること(四)附錄に原文を揭げて直に堂奧を窺ふの便に供し著者の議論の根據あるを知らしむ。

發行所
東京市神田區表神保町六
振替口座東京八七貳六番
大同館

信用ある店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

評論

文藝時評

新ハムレットと新ドン、キホーテ

中澤臨川

一

何時の代にも新しいハムレットと、新しいドン、キホーテがある。ツルゲーネフの天才が描き出した人間の二鑄型は萬代不易に榮えるてあらう。殊に現代の如き頽廢と倦怠の時勢に於て、是等は最も鮮明な形を採て實生活の悲喜劇を展開する。半世紀前のオブロモフとバザロフは、今日のアナトール、フランスとマリネッチに姿を變へて到る所に出沒するてはないか。

『私は孤獨である』――これは何人も、意識的にせよ無意識的にせよ、最も痛切に感ずる人世味てある。然かしそれと同時に、カントの如く『私は自由である』と言ひ得る人は殆んど稀てある。孤獨、それから起る倦怠（アンヌイ）が人生の最も恐るべき敵てある。

倦怠の代名詞を『自殺』と謂へる。感覺のある生物の爲す一擧一動は渾な自殺の身代りである。いかにして倦怠を禦ぐべきか、いかにして靜止せざるべきかと云ふとが普通人間の目的てあり、終局てある。倦怠をまぎらす爲めに、人は如何なる代價を拂つても、凡らゆる種類の感傷を覓める。酒、賭博、女、詩、音樂、演劇、哲學、宗教、モルヒネ、コカエン――苦痛をさへも。

それにも干らず倦怠は我等を襲ふ。而かもそれが一

種の時代病の形を採つて人類を侵かす時ほど恐ろしいことはない。史家の說に由ればゲーテが『若きウェルテルの悲』を書いた頃、またはトルストイが轉機に先つて煩悶を重ねた時代は、歐洲一般に自殺が流行したと謂はれてゐる。

前世紀の末葉から現代にかけては珍らしい頽廢の代てある。理想論も實證論も與に其力を失つて、凡らゆる高い感激が我等を見棄てた。よし、一方に光明の火の手が昂つたにしても、それが萬象を推し動かす波を起すまでにはまだ餘程の日子を借さなければならない。て、現代の悲劇の最も強い基調は人間の道德的孤立てある。ゴルキーの小說中の主人公が次のやうに曰つた。

『さうだ、お前の知つてゐる通り、俺は物ごとが厭やになつた。實際のところ、時々俺は生きてゐられないほど厭氣が差す。俺には、この廣い三千世界に生きてゐるのはたつた俺一人で、他には虫けら一匹ゐないやうな氣がしてならない。そんな時に限つて、俺は萬事に愛憎をつかす。俺様ミ身體でさへ御荷物だ。世の中の奴が皆んな死んで了つたからと云つて、俺は嘆息一つ洩すまい。實際、これが俺の病氣だ。以前飲まなんだ俺が近頃飲み出したのもそのお蔭だ。』

斯うして恐ろしい倦怠が何人をも墮落させずには已まない。何人も此に於てか一個の「我主義者になる。或者は忌避して安逸と虛無に憧がれ、或者は反抗して騷擾と快樂に其日を紛らす。新ハムレットと新ドン、キホーテの生れる所以てある。

二

新ハムレットの特徴は謂はれのない恐怖てある。彼等は人生を恐れるが、然かしその理由を了解してゐない。彼等は丁度惡童の手に捕はれた小鳥のやうに、全身が恐怖そのものてある。彼等は善ともつかず惡ともつかず、唯だ小自我を守つて其日々々を送つてゐる。佛蘭西の作家アンリー、ボルドーが「生活の恐怖」の中て寫したやうな人物がそれてある。彼等は其生活の跡に些しも人格の記憶を殘さずに此世を去る。

『彼女は死んだ、しかし彼女は決して生きなんだ。
彼女はたゞ生活の眞似をしてゐた。
書籍が物憂く彼女の手から落ちた。

その中の一字でも彼女は讀んだとがない。

「彼女」は現代に於て、其仲間を「彼」の間に有つとを誇りうるてあらう。

彼等の生活は唯だ日々の小平和の追求である。責任と爭と冒險と努力との忌避である。彼等は周到に注意して、凡らゆる危難、疲勞、情熱、感激、犧牲のたぐひから逃れようとする。換言すればそれは我等の心や血や汗の上に人生が要求する義務を拒むのである。それて眞面目な戀をすら彼等は恐れる。食ふ爲めに働くよりも、能ふだけ空腹を忍ぶのが彼等の主義である。丁度好んで平坦な道を撰つて歩む旅人の如く、唯だ前途に些しも危險がないと云ふとだけを目的に、その欝憂も無趣味も彼等の厭ふところではない。

並木街道の腰辨生活、恩給の附く正服生活は、期せずして一個の喜劇的社會主義を實現する。それは「平等」の養老院て、この道に進む者は何人もその恩澤に浴するとが能きる。更に廣く適切な例を見出せと言ふのか？。汝は汝の結婚を汝の眞情と義務に訴へずして、汝の心の中の法律家に諮問した、妻帶の利子の高下を決する爲めに。汝の母は汝の生れん爲めに鎭守の森に日參をしたが、汝の若き妻は却て子種のないとを誇としてゐる。汝は「溫厚」の紳士であるが故に公けな選擧場裡にさへ出入することを好まない、恰も「棄權」と稱ぶ消極的な國民的義務てもあるかのやうに。尠くとも確かに汝は汝の公的權利を獵の約束やカフェーの集會よりも輕く視てゐる。汝はたゞ物質としての金錢を重んずるが、富の內容を尊重する勇氣だにない。汝は唯だ笑はれるために富を持つ。汝の富は汝の貧困にも增して汝の品性を傷け汝の身體を毀つ。更に汝の恐怖は凡らゆる種類の保險會社をして事業の繁榮を誇らしてゐる。

我等の心的虛弱、道德的勇氣の缺乏は、我等の肉體までも傷けずには已まない。殊に此年其數を增す神經病の如きは最も著しい實例である。チェーホフの短篇小說にこんな話がある。或る醫者が富豪の貴女の家へ招ばれて行つた。それは其家の一人娘の病氣を診る爲

めてあつた。母子二人は田舍の大きな屋敷の中に淋しく暮してゐたが、その娘は何事によらず氣を懸ける性質て、遂々その爲め夜も碌々眠られないやうな態になつた。て、母親までが鬱々とした日を送つてゐた。醫者はその晩其處へ宿めさせられた。彼は不眠の病人の側に座り乍ら一晩中彼女に色々な話をした。彼女の世界がこの狹い屋敷の中に限られないことや、希望に充ちた人間には世界のどの土地へ行つても樂しい活動の天地のあることやを。すると、翌朝その醫者が歸つて了つてから、彼女は直ぐに白い衣物に着換へて、常に似ず頭髮へ花を挿した。彼女の眼は輝き、彼女の顏には熱心の色が浮んだ。彼女は救はれた。

實際斯樣な病氣の唯一の治療法は、心の勇氣と嚴正な正義の觀念とにあると謂つてよい。多年その方面に深い研究を重ねた佛蘭西の或る醫學教授が次のやうに述べてゐる『我等は病人自身て回復させる爲めに、彼に希望と野心を起させねばならない。て、その爲めには、人生がまだ彼を必要とする目的と、及び斯の世に於て猶彼が果さなければならない使命のあることを彼に教える必要がある。人生を理解せず、人生が生活の勞苦に値することを思はず、また明日の事を考へることを厭ひながら寢床へ入る神經病者は必ず不治である。：：換言すれば、我等は患者の心を轉換させて利他主義を吹込み、唯だその一途に於てのみ療法のあることを覺らせねばならない。一個の健康な人間は利他的動物である。利我主義と自己中心主義は疾病と關係があり、疾病の原因または徴候てある。』

汝は更に他方面の實例が要ると言ふのか。然らば私は藝術界の趨向を窺ふてあらう。

今日我邦の文藝界を視るに、そこには生活の恐怖が觀照乃至感情の恐怖と入混つてゐる。彼等は一の題材を選擇しまたは之に突入する充分な能力を缺いてゐる。一の問題に對する努力と愛が徹底しない限り、いかなる些事も理解能きよう筈がない。然るに、彼等は唯だ氣隨なその日〳〵の刺激に隨て、事件の表面に漾ふ感興に生きてゐる。凝視の恐怖と苦痛が彼等を驅つ

て、藝術の爲めの藝術の名のもとに、または自然主義の名のもとに、彼等の創作から眞の人道とその陰に咲く詩の華とを斥けさせる。夫れ觀照の唯一の道は廣く『運命を愛する事』Amor-fati である。然るに今の小説家はその作中の一人の主人公をさへ眞に愛し憐れむ事が能きない。彼等は己れをさへ卑しみ怖れる。彼等は凡らゆる事物を得意げに冷笑するが、その冷笑はフローベルの那の視凝めた眼に浮んだ幻滅のそれではない。彼等の自負する幻滅的態度は實は恐怖の變形である。されば彼等の取扱ふ樣々の人形の小さな冒險には性格らしい性格がなく、たゞ小感情小欲望の排列があるばかりだ。凡そ昔から偉大な藝術の叫びは力と勇氣と誠實とのおのづから洩す喚叫であつた、よしそれが暗黒な絶望に終つたにしても。頽廢のどん底に陷つた露西亞の一時代に生活してその空氣を描き、自らもその重い空氣に厭され踠いたチエーホフてさへ斯う叫んだ。『今日の露西亞人が最も要求する物は何てあるかと訊くのか。然らば玆に私の答がある。望め！。彼は凡らゆる望のうち最も性格の力を要する。私は最早那の女々しい不得要領には飽々した』と。然るに今日の藝術家はチエーホフの反抗心さへ持たない。況して彼の悲しんで傷らざる博大慈悲なユーモアを彼等に望むは不可能な事てある。ユーモアの缺乏は劣惡な自我心を意味する。然るに我邦今日の文壇ほど一般にユーモアの快調を缺いてゐるためしは無いてはないか。

更に批評界を見よ。彼等は他人の批判をする前に、先づ自分の名聲を氣にしてゐる。彼等の胃は黨閥と流行と謂ふディアスターゼなしには如何なる作物をも消化する能力がない。彼等は至て饒舌てある。それにも關らず彼等は心から何物にも感服せず、何物をも好まず、何物をも要求せず、また何物をも憎み得ない。彼等の血脈には魚の血が流れてゐる。さもあれ、彼等にとつては、何を如かく固執して、自ら勞する必要があるか。

これが今日の新ハムレットである。

ダンテの『地獄』の卷の第三齣に、彼がバージルに導

かれて『涙の街』の入口にに近づく一節がある。彼は地獄の側から洩れる悲嘆の叫を聞き乍ら、斯う曰つて訊いた。

『師よ、私の聞くあの聲は何てあらう。また斯くまて悲嘆に暮るゝ群集は如何なる人々てあらう。』

そこて師は答へた。『あれは毀りもなくまた譽れもなく世を終へた凡らゆる悲しき魂の慘めな運命てある。……彼等は天國から棄てられた、なぜなら彼等はその美を汚したから。然るに地獄の底も亦彼等を容れることを拒んだ、なぜなら極惡者は彼等と雑つて却て些しばかりの光輝を受けるのを嫌つたから。』

そこて、また彼が聞いた。『師よ、あんなに彼等を苦しめ、あんな傷ましい泣聲を出させる苦痛は何う云ふ苦痛てあらう。』

そこて師が答へた。『簡單に話して置かう。彼等には死ぬる希望がない。彼等の暗い生涯は、如何なる他の生涯も美ましく見えるほど下賤てあつた。世界は彼等の記憶を殘さない。慈悲も正義も彼等を輕蔑した。彼等の噂を已めよ。唯だ視て、そして通り過ぎよ。』

三

我等の社會には一方に新ドン、キホーテがある。これも同じく倦怠の恐怖、眞理の忌避、生活の紛らしから起る一種の世迷事てある。彼等は勿論努力も戰も、或る苦痛さへも恐れない。然かし彼等の斯様な奮闘は唯だ一克な我利主義てあつて、貴い勢力の惡用に過ぎない。彼等の目的は自分の意の儘に人生を征服し、自分の實利にだけ之を用ゐようと云ふのてあるから、丁度一圖に驀進する馬車馬のやうなもので、亦生活恐怖の一形式てある。

斯様な奇妙な恐怖心はいろ／＼の形を採つて世の中に現はれる。彼等はなるべく多い刺激に由て斯の世の孤獨と倦怠を忘れようとする。彼等の眼から見れば現世は一種の賭博場てある。その賭の高の多ければ多いほど彼等の人生は樂しい。彼等の勇氣は山賊の勇氣てある。或る小説家の曰つたやうに、『彼等はたゞ自分の猪勇を示す爲めに――たつたそれだけに、世の中に生

活する。」若くば彼等の目的は劇しい肉の快樂てある。あのドン、ジャンを見よ。彼ハ極端な自我主義と快樂主義を見よ。あの凡ての誓の破壞者、凡ての德の冒犯者肉の饗宴の誇りがな勝利者を見よ。而して斯のドン、ジャンは今の代の凡らゆる社界に生活する。

『彼は如何にして何々を成せしや』は、現代の淺薄な成金ドン、キホーテが、時を得顏に鼓吹する時代思想てある。彼等の馬車馬的暴進主義の効果は、その贏ち得た阿賭物の多寡に依て公々然と尺量せられる。血屬を尊重する念は未だ可し、爵位名望を尊重する念は未だ可し、富を愛惜する念は未だ可し、獨り阿賭物を誇示する態はいかに。阿賭物を誇示するは猶ほ可しとして、之を亂用するのは今の代の甚だしい罪惡てある。否な、阿賭物を亂用して榮譽榮華を謳した昔の羅馬衰亡時代ても、その人民は猶ほ女子を尊重することを知つてゐた。然るに今の世のドン、ジャンは妻を賤しみ、女子を辱める。辱しめて猶足らず、之を世間に誇る。誇つて猶足らず、之を世間に奬める。奬めて猶足らず、病毒を傳播する。彼等の勢力の亂費と病毒の散布は、自らの子孫を弱め、併せて廣く種屬を傷ける。之が現代の最も下賤なドン、キホーテてある。

今日の我等は第一に騷擾と行爲とを混淆してゐる。眞の活動と盲目的暴進とを誤認してゐる。これが十九世紀以後所謂物質的時代の由々しい迷想てある。我等は自から樂しまなければならない。好んで自分て迷はせなければならない、騷がせなければならない。朝夙くから夜晩くまて街へ出て、群集に混らなければならない。斯うして社會の習慣は喧擾を我等の日常の義務とした。我等の生活は丁度活動寫眞のフィルムのやうに、目まぐるしく廻轉して、やがて跡も殘さず暗に消えて行く。て、我等の堪えうる生活は、たゞ不斷の混迷てあるかのやうてある。玆に近代的生活の恐怖が赤裸々に現はれてゐる。

更に現代の高尚なドン、キホーテはニーチェの說いたやうな超人的努力主義てある。彼等は戰ふために、自我の現實を益進する爲めに、冷酷と驕慢の『假面』を

要した。彼等は强て『笑』はなければならなんだ、『踊』らなければならなんだ。幸福の爲めには何物をも――眞理すら――犧牲としようとするのが、現代の一面の風潮である。彼の超人に醉つたマリネッチを見よ。彼はたゞ物質と幸福と戰とを絶叫して、理想の完人の出生を夢み、それに未來の人類の福音を委ねようとした。誘惑的な高尙なドン、キホーテよ。

私は唯だ數言次のやうに加へたい。

ビートーベンが或る日のこと、愛兒を失つた貴女を訪問して慰藉の言葉に窮した時、無言でピアノの前へ座つて悲凉な一曲を弾いた。そして彼女を慰めた。悲も喜もそれが誠實であるときに初めて力である。我等は幻想を求めるな、たゞ眞理の力をのみ求めよ。

或る無名な哲學者の詞に斯う言つてある。『虚僞と眞理と、汝はその何れを擇ばうとするか。前者はその價として汝の全身を要求するが、後者にはたゞ〲汝の幸福だけを拂へば可い。』

海外評論

墨西哥の難境

懷沙隱客

一

米墨紛議は四月下旬、米墨小戰を挑發し、次て南米亞爾然丁、智利、伯剌西三國の居中調停となり、仲裁會議今や加奈陀のナイアガラ、フォルス（瀑布所在の市）に開かれんとす、吾人は先づ時局變展の窮り無きに驚駭せずんはあらず。

少しく其經過を述べん乎、墨國大統領ウエルタ氏は米國要求の謝罪禮砲發射を拒絶したるを以て、米國大統領ウイルソン氏は二十一日フレッチャ提督に命令を下し、墨西哥太西洋海岸の要港ウエラクルース港稅關占領を求めたり、依つて提督は陸戰隊を率ゐて上陸し、市街戰の末、同地稅關及びウエ市全部を占領し、同時に米國議會は兵力使用權をウイルソン氏に附與する決議案を通過し、一時米軍は大活動を企つるにはあらさ

る乎と見えたりき。

然るに米墨戰爭開始は痛く墨國民の愛國心を刺激したり、北方叛軍の將にして米國の味方なりと思惟せられたるカランザ將軍は、通牒をウイルソン氏に致し、ウエラクルース占領の戰爭行爲が墨西哥の主權を侵害せるものなるを說き、「ウエルタ征伐は我が憲政軍之に當るあり、米國は敵對的行動を中止し、ウエラクルースより撤兵す可し」と要求したり、是に至て狼狽の狀見るに忍びざりしは、米國政府の態度なりき、ウイルソン氏始め以爲らく、墨西哥官軍の費用一箇月一千三百萬、之か財源たるは重に關稅收入なり、我れ港灣を封鎖して此財源を奪ひ、且つ獨逸船舶よりする武器彈藥輸入の途を杜絕せん乎、北方のカランザ軍は此間に乘し南下、ウエルタを打破す可きを疑はすと、然るにカランザ軍の態度、今や斯くの如し、周章狼狽甚しかりしも怪むに足らざる也、

米國が此窮境に陷れるに際し、之を難境より救出し其志を成さしむる機會を造れるものあり、南米三國是也、南米中比較的發達せる亞爾然丁、智利、伯剌西の三國は英佛西諸國の裏面的斡旋の下に仲裁を提議し、米墨兩政府は之に同意し、戰鬪中止せられたるが、カランザ軍は米墨戰鬪中止を見て、最早やウエルタ政府に對し無爲的態度を守るの義務無しとし、ウエルタ政府が軍器彈藥及關稅收入共に空しく、窮境に陷れるに乘し、着々南下モンテレーに入り、又たタンピコを占領するに至れりき、是れ現下（五月十六日）に於ける形勢とす。

二

然らば則ち墨西哥今後の成行は如何なる可き乎、吾人は之を想ふて、轉た悲淚滂沱たるを覺えずんはあらず。

墨西哥の將來は、無政府的狀態に陷り、衆民益々其緖に安んするを得さる可し、蓋し現下の形勢にては、ウエルタ政府の沒落は殆んど既定の事實也、國庫空虛となり、止む無く富民の義心に求めて兵員の俸給を支拂ふの策を執れるも、實効割合に擧らず、此際兵員が

能く北方叛軍を相手に最後迄も戰ふ可きかは、疑問の裡に在り、試みに思へ、ウエルタ軍、十五萬の兵ありと誇稱すと雖も、其間ウエルタ腹心の兵員は五千を出でず、他は權勢に從ひ孰れにも味方するを辭せざるものゝみ、或は監獄に呻吟せる囚徒の出身たり、或は叛徒若くは盜賊團に加はり捕虜となりて、一轉官軍に從へるものたり、眼中國家無く、主義無し、最近の如く北方にカランザ軍の優勢なるあり、南方にサパタ軍の猖獗なるありとせば、誰か彼等が一朝戈を逆まして、ウエルタ政府に禍ひする無きを知らんや、次きに南米三國發起の居中調停會議は、ウエルタ氏の退隱を條件とすと傳ふ、然らば則ち墨國の戰勢如何に係らず、ウ氏の退職は止む可からざる所にあらずや、然かも吾人は疑ふ、ウエルタ氏一たび去りて、何人か能く墨西哥を平治し得可きかを、カランザ氏は理想家なれども、實行的手腕を缺き、ウイラ將軍は實行的手腕あれども、亂世の雄にして、臺閣宰相の器にあらず、サパタに至ては、純粹なる草賊の頭梁のみ、孰れも九十萬方哩の國土、千五百萬の人口を治るの材にあらず、然らば前外相ロハス氏は如何、彼は文治の良政事家なれども、國內を統御する鐵腕と聲望とを有せず、而して墨西哥人の常として、功名心甚しく、私人的慾望の爲めには、忽ち干戈を動かすを辭せず、思ふにウエルタ去るの後、彼等恐らくは相和して國內の安寧を圖ると無く、必らず勢力爭ひに汲々たる可し、而して墨西哥の國運は端なく玆に危殆の淵に瀕す可き也、

吁嗟墨西哥も最早や外國の干渉を避くる能はさる乎、更らに明瞭に言へは、愈々米國の勢力下に置かれさる可からざる乎、ウイルソン氏の外交は失敗せりと雖も、米國の南下政策は、矢張り實現せすんは止まざる乎、

英帝の佛國訪問

（英佛協商十年記念）

英佛協商成立してより正さに十年、英國皇帝ヂョル

ヂ五世は皇后同道、佛京巴里を御訪問あり、外相グレー、亦供奉す、是れ四月二十一日なりき、

二十一日午後四時四十分、國賓列車ボア、ド、ブーロン停車場に到着するや、大統領ポアンカレー氏、内閣員と共に之を迎へ、祝砲殷々として中空に轟きぬ、皇帝は海軍元帥の軍服を召され、稍々御疲勞の色あり、大統領進みて皇后の御手に接吻せるに、皇后は快よげに笑ませ給ひ、やがて皇后は大統領夫人と、皇帝は大統領と馬車を共にして停車場を出て、群衆歡呼の裡をケードルセーなる外務省に進み給ひぬ、

爾後二十四日迄、或はエリジー宮の饗宴あり、觀兵式あり、佛國官民の歡待は一九〇三年エドワード七世の訪問に勝るとも劣ると無かりき、二十四日、兩陛下英國に還御あるや、皇帝先づ傍人に語つて曰く我等は今回の歡迎の熱誠を忘却することあらざる可しと

皇帝今回の行は外交的貢獻も少しと言ふ可からず、蓋し隨行せる外相エドワード、グレー氏は佛國首相兼外相ヅーメルグ氏と會見し、種々協議を凝らす所ありしが、其結果、佛露人の希望せる如き同盟成立をこそ見る能はざりしも、双方の接近程度を一層深からしめたるを疑ふ可からず、二十三日公式に發表せられたる通告文を見るに下の如し、曰く

英國兩陛下巴里訪問に際し、佛國外相ヅーメルグ及び英國外相グレー兩者間に行はれたる會談に於ては、兩國に關係ある各種の問題につき講究する所ありたるに全部に亘りて兩大臣の意見一致したり、兩大臣は勢力均衡と平和維持の爲め英佛露三國の協力繼續を必要と認む

是れ兎も角も英佛露三國が獨墺伊三國同盟に對抗して進む可きを聲明せるものに外ならざるなり

吾人以爲らく、是れ三國に執りての良策也、否な寧ろ當分必要止むを得ざる所也と、唯だ惜むらくは、同盟成らず、從つて獨帝が狡策を施すの道、未だ全然杜絶するに至らざるを、然かも是れ時機未だ到らざるが爲めなる可き乎、

佛國總選擧

四五兩月に亘りて行はれたる佛國總選擧に於ては大なる異動無かりしと雖も、急進黨及び社會急進黨兩派の黨員幾分減少し、ブリアン派多少優勢となりたること疑ふ可からざるが如し

就中明白となりたるは、三年兵役制復活と選擧法改正とが輿論の後援を有することと是れ也、三年兵役制とは他無し、獨逸陸軍力が八十七萬に增加したるに顧み、佛國に於ても昨年之が對抗策を講じ、從來の二年兵役制を三年に延長したるもの、選擧法改正とは他無し、小選擧區制に代ゆるに大選擧區制を以てし、之に比例代表主義を加味せんとするものなり、ヅメルグ、カイヨー等は之に反對し、ブリアン、バルツー等は之に贊成せしが、今回の結果斯くの如くなる以上、ブリアン派今回の活動、大に見る可きものあらん。

此間に在りて、現ヅーメルグ內閣は如何なる態度を執る可き乎、系統として言へば過激派たり、急進黨の內閣たり、新議會內に味方多からざる可きは言を俟たず、如何なる妙略を以て此難關に處せんとする乎、

新加奈陀總督

加奈陀總督コンノート親王退き、テック家アレキサンダー公(皇后の御弟)之が後任に決す、加奈陀の民論之を喜ばずして曰く、王侯的儀禮を民主的邦國に維持せざるを得ざるが如きは、不適當の措置にあらざる無き乎と、

思ふにコンノオト親王在職四年、治績大に擧れるは誰か之を疑ふものぞ、然かも其幾分英國宮廷に於ける舊來の儀式を加奈陀に移し、前總督グレー伯時代に比し繁文褥禮の嫌を生じたるは拒む可からず、而して加奈陀は純粹の英人より成らず、米佛人の勢力亦偉大なるものあり、何ぞ此種議論の發生を怪まんや、

新總督にして意を此點に用ゐ巧みに之に處する無からん乎、或は恐る、是れやがて英本國と殖民地との疎隔を促すの一因となる可きを、

ウェネゼロス

希臘首相ウエネゼロス氏、エピルス放棄に決し、希

臘軍隊を撤退す、勇斷と言ふ可き也、希臘已に巴爾幹戰爭の利得として領土五萬六千英米突平方、新臣民二百六十萬を得たり、何を苦んでか一小「エピルス」を爭はんや、況んや北方に方て領土を減少したるアルバニヤに執りてはエピルスを失ふこと是れ獨立的存在を危うするものなるに於てをや、古より「負くるは勝つ」の語あり、ウ氏今日の雅量は漸がて希臘將來の福となる可き也、

洪牙利の名相逝く

洪牙利首相フエジエルヴァリー男、四月末を以て維也納に長逝す、行年八十一、吁噫悲ひ哉、

男は勇敢なる軍人なりき、一八六七年洪牙利陸軍に移り、二十世紀初年陸軍卿として軍隊改革事業を遂行し、一九〇五年洪牙利國語問題の爲め皇帝對洪牙利政治家間に衝突起るや、首相として普通選擧權採用の主張を試み、以て單にマッヂャー民族の參政權擴張をのみ主張せる反對黨の膽を奪ひたるが如き、絶倫の手腕と言はざる可からず、男に比し二歳の兄たるフランツ、ヨセフ皇帝の信任深かりしもの怪むに足らず、今其長逝に際す、帝の心中如何ぞや、

新刊批評と紹介

△死人の家

片上伸譯
博文館發行

シベリアでの監獄生活が生んだドストイエフスキーの傑作「死人の家」は「ひとり囚人生活の心理的解剖として徹底し究盡したものであるばかりでなく、またひとり監獄生活の精細な生きた描寫であるばかりでなく、その觀察と解剖との往きつくすところは、やがてまた廣い深い限りない人間生活の内部の表現である」といふ譯者の序言に同意する。譯者は我國に於いてドストイエフスキーを譯するに最も適當な人であつて、此譯文の成功せる所以もそこにあるのだけれど、難解を以て知られたる此原文を斯くまで忠實に、而かも極めて自然に日本の文脈に移したるなどはいかにも推奬に價ひする。序ながら六百頁に餘る大册、殊には數葉の寫眞版を添へて而かも定價の壹圓は甚だ平價である。(定價壹圓)

△貯金奬勵論

下村宏著
東亞堂發行

此書は經濟的見地から國民性の上に着眼して貯蓄の必要を認め、各種の方面より研究せんとして、曩に「富と貯蓄」を公けにし今此書を著すに至れる也と。著者は爲替貯金局長として令名あるもの、蓋し一般人の一讀すべきものといふべし。(定價金壹圓八十錢)

△巴里より

與謝野寛
同晶子 共著
金尾文淵堂發行

與謝野氏夫妻の滯歐見聞記に、德永柳州氏のこれも滯歐中の畫稿から拾葉ばかり巴里に因んだ挿畫を入れて、極めて美術的に裝幀されたものである。詩人と畫家の觀たる巴里は氣持よく讀者の眼前に展開せらるゝであらう。(定價金貳圓)

△禪の第一義

鈴木大拙著
丙午出版社發行

禪の第一義が此書の中に含まれてゐるか何うかは疑問だが、悟道に入

る便がとしては甚だ都合のよいものである事は確である(定價金壹圓)

△沈默の饒舌　内田魯庵著　丙午出版社發行

此書は魯庵氏が嘗て諸雜誌に於いて發表せられた感想や評論を纏めて一册にしたものである。氏の評論や感想は深呼吸を行ふと同じ意味に於いて氏自身の爲めの執筆であるそうな。然しながら氏の評論は現在の我社會に於いて寔に苦勞をした伯父さんの意見としての權威と價値とを持つてゐる、江湖の一讀を推奬する。(定價金八十錢)

△人の影　德田秋江著　採原書店發行

各作家の短篇を輯めて「名家短篇叢書」と題して發行せられたる第二篇が本書である。「人の影」を卷頭に「見ぬ女の手紙」を最後に八篇の小說を載せてゐる。「人の影」は故獨步をして人間的な情味に泣かしめたといふ程あつて著者が初期の佳作である。とり／＼に人の摸すべからざる著者の特長が表れて面白い。(定價金五拾錢)

△ペラミー　小野秀雄譯　以文館發行

モウパッサンのペラミーが今日まで我國に移植されなかつたのは寔に不思議といつてもよい。此譯書は稍不馴な所もないではないが。忠實に眞面目に比較的通俗的になされて讀み易い。(定價金壹圓四十錢)

△文藝思潮論　廚川白村著　大日本圖書株式會社發行

著者は紹介者として最も適當なる人である。獨創的の見に乏しい嫌ひはあるが、その代り泰西の藝術を咀嚼して移植する事の上手な人である本書の如きは此意味に於いて最も格好な又最も成功したるもので、特に學生諸君にとつては泰西文藝思潮を知るに最も便利なる書である。(壹圓)

△立志論　村上專精著　廣文堂發行

靑年と立志、修養の模範、運命論、革命論、人生觀の先決問題等例を擧げて靑年修養に資せんとす。好箇の修養論也。(定價金壹圓四十錢)

△笑の研究　廣瀨哲士譯　籾山書店發行

本書はベルグソンの「ル・リイル」を譯したるものにして、單なる笑の研究に止まらず、生活と喜劇の關係より、藝術と人生との關係に及び、それを人生問題として取扱へる處に本書の價値は存する也。(定價金壹圓)

△偉人の家庭　阪本秋村著　實業之日本社發行

東西古今に亘りて名將、富豪、帝王、文豪、政治家名婦等の家庭に就いて研究せるもの也。(定價金八拾錢)

△如意杖　安藤忠義　武者金吉　共譯　北文館發行

作者はジュルダン夫人とて、十九世紀初半の人、筋は活動寫眞向きの珍趣向、神出鬼沒の珍譚。面白い事請合也。(定價金壹圓)

△伊太利紀行　高木敏雄譯　隆文館發行

ゲーテの伊太利紀行を譯せるものにして、此書が一代の大詩人ゲーテを知らんと欲する者の見遁すべからざる書也。(金壹圓八十錢)

△徒然草、方丈記、東關紀行　大町桂月校註　隆文館發行

國文學に造詣深き桂月氏の校註に成れるものなれば、讀者は安心して我國古典を研究するを得べし。(定價金壹圓)

△桂公功罪史論　高橋燃洋著　フースヒー社發行

萬朝報紙上に、「フースヒー」の筆を執つて讀者の歡迎をかへる著者は更に正義と人道の爲めに明治の一大政治家桂公の功罪を論じ、其面目を躍如たらしむ、是れ近來の政治史也。民權史也。(定價金七十五錢)

△東京の表裏八百八街　杉韻居士著　鈴木書店發行

定價金七十五錢

△涙より鬪ひへ　生田晄藏著　研光社發行



僕は毎日滋養强壯劑
ソマトーゼを飲んでゐる
それでこんなに丈夫！
僕が大きくなつたときはこんな顔！



ソマトーゼは總て衰弱したる場合、肺結核、胃腸病者、恢復期、發育不良の小兒等に對し、最も卓効ある滋養强壯劑なり……………

定價
粉末 百瓦入 金二圓四十五錢
五十瓦入 金一圓三十五錢
液狀一瓶 金一圓六十錢

横濱市山下町
神戸市明石町
バイエル會社

（中付三の一）

新刊

小形青村譯

ドオデイ作

戀の南國

美しき南歐！　風の南、太陽の南、蜃氣樓の南、熱烈なる南國の情緒は冷靜なる北方人種の性格と紛糾錯綜して「戀の南國」一編なる。「戀の南國」を讀まずしてドオデイを語るべからず。「戀の南國」を見ずして南國の夢に耽ることは不可能だ！

四六判上製　美本箱入　四百八十余頁　定價金壹圓拾錢　送料金八錢

（發行所　東京市牛込區早稻田大學前　電話番町三〇六四番　振替東京七〇〇三番　文影堂書店）

本會に入會すれば

まづ日課的に上達する新式な判りやすい面白い文學講義が期日嚴重に諸君の手に届く▲文藝參考圖書券進呈▲誰でも得られる獎學資金五百圓提供▲興味ある有益な機關雜誌文藝教場無代進呈▲直ぐ直して返へす親切な添削部▲會員を親身のやうに世話をする相談部▲其他種々の特典あり▲會員全體に本會責任證明書授與す

申込次第見本附規則書進呈

入會するには今が一等よい時!!!

僅か六ヶ月

て自分でも呆れる程めき／＼文學文章が甘くなること請合

一ヶ月卅五錢　六ヶ月貳圓

◀本會の科目▶

論文　小說　書簡　和歌　俳句　新詩　小品

◀作法▶

國文　漢文　名文　名著　日本　外國　文學

◀評釋▶

新聞　作家　文典　熟語　似字　美辭　修辭

◀研究▶

其他數科目あり

講義は何れもわかりやすくて面白い

東京九段

大日本國民文學會

振替東京二五一九番

（中附三の三）

ホフマンスタール作
森鷗外先生譯

謎

最新刊

四六版美裝全一冊箱入　價金壹圓廿錢　郵送料金八錢

希臘悲壯劇の雄大に墺太利新作家の細緻を加味したる脚本にして『運命』のいかに懼るべきものなるかを感ぜしむると共に具眼者には人類の性情人生の歸趣味を象徴的に哲學的に領界せしむ忽ちにして『王者』忽ちにして乞丐榮枯轉變の迹は火の如く錦の如き韻語を以て寫し出せるもの苟も新劇を口にするものは一讀せざるべからず。

イプセン作　草野柴二譯（好評三版）

海の夫人

■袖珍本美裝全一冊正價金四拾錢送料四錢■

イプセンの海の夫人は『人形の家』及び『ヘッタガブラア』と相並んでイプセンの婦人問題に關する思想を伺ふべき名著なり其の夙に出づべくして出でざりしが今草野氏の洗練せる譯筆により公刊せらる苟もイプセン劇を口にするものは必ず本書を一讀せらるべし。

メーテルリンク作　若月紫蘭譯（最新刊）

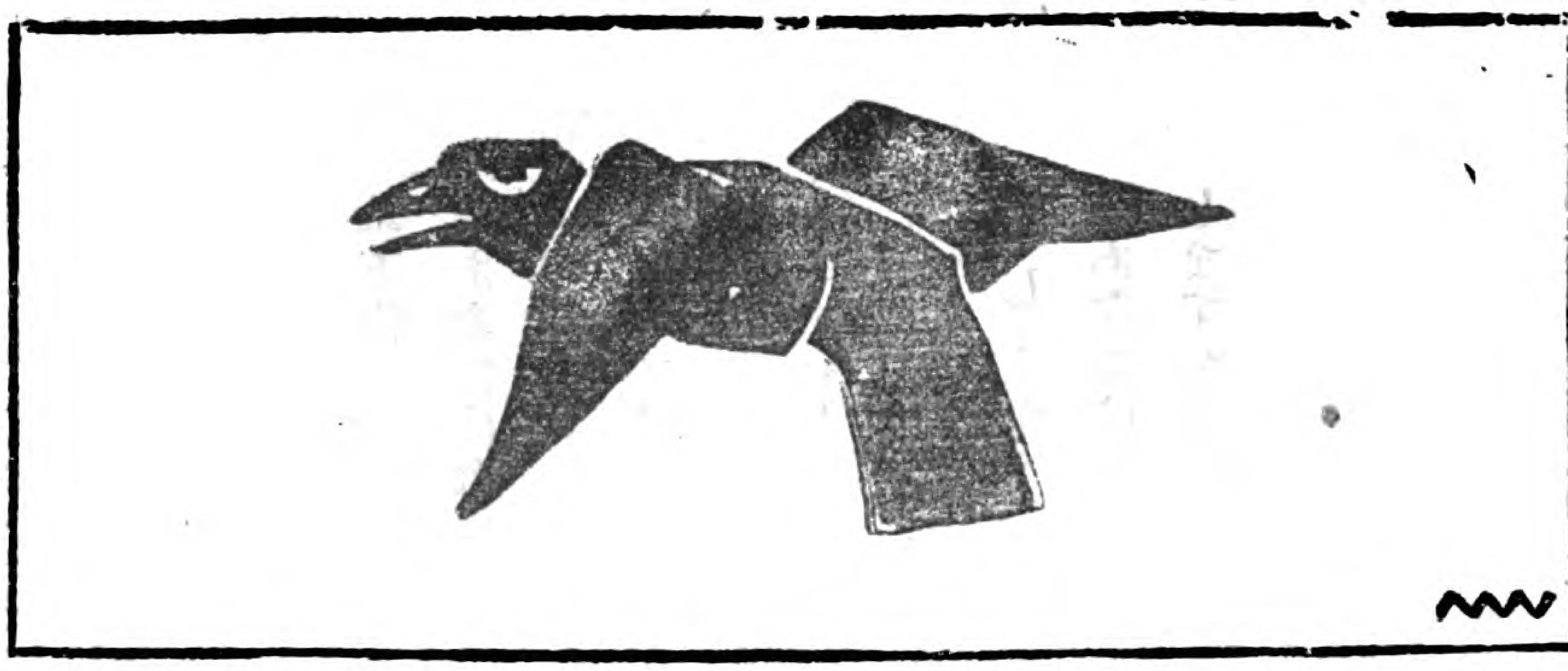
青い鳥

■袖珍本美裝全一冊正價金八拾錢送料六錢■

象徴派の泰斗と稱せらるゝメーテルリンクの傑作を譯したるものにて「青い鳥」とは人間の求むる幸福を象徴化したるもの原著者の所謂幸福とは如何なるものなるかは本書に於て之を窺ふを得ん譯者は本書を譯するに當つて直接原著者に交渉して日本語に飜譯發行の特權を得其承諾書は原文のまゝ寫眞版として載せて卷頭にあり譯者の用意知るべし譯筆は定評あり贅するまでもなし。

東京市神田區南神保町　現代社發行　振替東京二三八三六番　電話本局一四二五番

（中付三の四）



毒藥を飮む女

岩野泡鳴

一

よそほつてまで見せるいつものむッつりとは少し違つた氣分で、貞夫は自分の物だが、最も好かない家へ出かけて行つた。然し下宿屋吉野の玄關をあがると、直ぐ女房の壽美子に出くわしたので、いつもの通りまたむッつりした氣が起つて、物を云ひかけたくも無かつたが、强いて顏を和らげた時は、棒立ちに立ちどまつてゐた。

壽美子も立ちどまつて、冷やかな笑みを示めした目をぢッと所天に投げた。そしていきなり、

『珍らしくにこ〱してらッしやいますが、何か面白いとでもありますか、ね?』

『…………』これて、もう、渠は素直に出られなくなつてしまつた。腹のどん底に用意してゐた聲を腹一杯に出して、『金が入るんだ——三圓だ!』

『へい——』かの女はきよとんとして、所天の突然な太い大きな聲を出した顏を見

守つてゐたが、飛び出たやうな眼をわざとらしく横に反らして、「お金なんかありません！」
「何！、こないだ渡したのが、もう、無くなつたわけは無い！」
「あれは」と、また向き合つて、「うちの暮しに入ります――お客さんが立て換へて呉れいと云つても、直ぐ困るぢやアありませんか？」
「下宿人に金を立て換へると決つてやアしない！」
「あなたは御自分のうちの商賣を御存じないのですよ。」
「商賣はお前が勝手にしてゐるのだ、おれは別におれの仕事がある！」
「ぢやア、あんなめかけなどに夢中にならないで、せッせとその仕事をすればいいでしよう―下宿屋は、ね、亡くなられたお父さんが、やめてしまうのも惜しいから、わたしにしろとおつしやつたのですよ！」
「だから、勝手にするがいい、さ。おれは兎に角、今、音樂會に行く金が入るんだ。」
「ふン」と、かの女は鼻で受けて、横を向き、「きのふの新聞に在つた音樂倶樂部でしよう―ありません！」
「よし！」かう云つて、渠は鳥うち帽をかぶつた儘、つか〳〵と、家族の居間へ這入つて行つた。
「あなたは」と、かの女はついて來て、「泥棒して行く氣です、ね。ぢやア、お待ちなさい、わたしが出しますから。」
「おれのうちの物を」と、つッ立つて勢ひを見せ、
「おれが出すのに、何て泥棒だ？」
「だッて」と、一生懸命な口答へをするやうに口をとんがらかして、「算術をこわされるだけでも詰りませんから、ね、この家だつて、もう、抵當に這入つてゐますよ。」

「知れたことだ、今度の樺太の事業の爲めにやァ、家どころか、家族やおれ自身をも犠牲にするかも知れないんだ。」

「あの女におだてられてでしよう――」

「手前におれの心が分るものか？」

「分つてますとも！」

「ぐづ〳〵云はないで、出せ！」

「樺太の事業だつて、成功するか、しないか、分るものぢやァない――きのふだつて、二百圓よこせの電報が來たのを届けたのに、どうするんだらう？」

「どうするも、かうするも、おれの考へだ。」

「あなたはおれ〳〵とお云ひなさいますが、ね、若し失敗したら、うちのものをみんなどうする氣です――かつゑさせても構はないのでしよう」などと云ひながら、壽美子は引き出しをあけて、札を三枚出した。「ほんとに馬鹿々々しい！」

「出せ」と、引つたくつて、「うちなんざァどうでもいいんだ！」

「そんなにあの女が――」

「いつも云ふ通り、ね」と、あごを突き出して、「おれは女の爲めに狂つてるんぢやァない！」

「狂つてるぢやァありませんか？ちツともうちにゐつかないで――」

「おりやァ手前をいやなんだ！」

「いやでもなんでも、家内は家内ぢやァありませんか？」

「だから、早く自決しろと云ふんだ！」

三人の子供はおづ／＼しながら、一緒に室をのぞいてゐるので、女房のくど／＼云ふのを相手にしないて、貞夫は飛び出すやうに家を出てしまつた。

その頃、貞夫は、芝公園に接する或片側道の粗末な二軒長屋の一方の二階へ、お島を移してゐた。一度も二度も居場所を隠して歩いたが、魔のさすやうに發見せられるので、とう／＼大膽になつてしまつた。それに、樺太から事業上の電報などがいつやつて來るかも知れず、また、新聞雑誌の寄稿依頼者があつた場合——これが本來の職業であるから——ゐどころが分らないのも困ると思つて、自分の家に近いここに決めたのである。

お島は最初これを非常に反對した。

「また、やつて來て人に恥ぢをかかすのぢや。」

「もう、決してをどり込まないと誓はせてあるのだから。」

「分るもんか、あの氣違ひが！」

「來たら、蹴倒すだけのこと、さ。」

時々、皿におかづやら、一人前のおはちに五もく飯やらを、子供が好意らしく屆けて來ることがあるが、お島は口に入れたことがない。

「毒が這入つてるかも知れへん。」

「まさか——」

『まさかと云ふたつて』と、かの女は口びるを左右に引き張り、歯の間に少しつばをどらせ、

『それだけまだ向ふを信じてるんぢや。』

『信ずるも、信じないもないぢやァないか』と、微笑しながら、『死ねばもろともだァ。』

『あたい、まだ』と、眞面目くさつて、皮がたるんでくしや／＼した顏の中から男を見詰めて、『あんな婆々ァに殺されたうはない。』

『おれも死にたかァない。』かうからかひ半分にあしらひながら、貞夫は、家から屆けて來たものがあるど、いつもみんな自分獨りて平らげた。かの女には、それがおのれを馬鹿にしてゐるとしきや思はれないやうてあつた。

かの女は一日物を云はないとがある。貞夫はまたそれをいいしほにして、急ぎの原稿を書きつづけた。

障子をあけると、向ふは、もう、公園の一部て、烏が澤山集まるので烏山と名の付いた森が見える。この森と家の建つてる側との間の道幅は廣いが、少し傾斜があつて、上ては直角に曲つて、水道溜め場のある方に導く。その角を曲つて來る人の姿が見えると、『旦那さまや奥さまや、お助けてございます』をやり出す樣子の乞食が、こもを敷いて毎日のやうに、丁度、この二階の正面に出てゐる。

『また云ふてる』と云つて、お島はよく障子のあはひからのぞいた。親子はいかにも哀れみを乞ふやうな樣子て往來の男女を拜んてゐるが、人通りがちよつとても絶えると、子は

『何かたべたい、なァ』と云つて、足を投げ出し、横になつて天をながめたりする。

『それ、それ』と親に注意されると、急に拜みの卑劣な姿勢に返つて、向ふから見え出したものを見ない振りて見ながら、再び物乞ひの聲を張りあげる。

「あの子面白い子だ――あたいも何かたべたい、なア――」
「ぢやア、またあすこのあんころかい？」
かう云はれてかの女が機嫌を直すこともあつた。貞夫はそれにお付き合ひしながらも、執筆を絶つたことはない。その乞食親子とこの書齋代用の二階とを舞臺にして、自分の事ではないが、自分が先驅者の一人であつたと思ふ詩界に於て、落伍者となつた架空の一詩人を點出し、その無自覺な努力をしてゐるところを以つて、或る方面に對する諷刺をした小説が出來たのが、この叫びである。去年苦心して書いた長編「耽溺」が今年の二月に或雜誌で發表せられてから、渠は小説をも書かうと云ふ確信が強くなつてゐたのだ。でも、いろんな雜誌や新聞から依賴して來るのは、多くは評論の方で、それに次いてはまだ、渠としては、もう、興が去つてしまつた詩である。かう云ふ依賴を渠はすべてこの二階で受けた。
「お助けでございます」が初まると、お島はきつと障子のそばへ行つた。そして御成門の電車停留所の方から傾斜をのぼつて來る男があると、どの男を見ても、先づ貞夫の客ではないかと思つた。
「違てた」と、失望した様子で、「うちへ來るんかおもたら。」
「東京にやア、人は多くゐるから、ね。」
「でも、きのふ、あの加能に似た人が通つた。」
「お前、あいつを好きだ、ね――？」
「誰れがそんなことを云ふた!!」かの女は足ぶみして怒つた。机に向つてる男を見おろして、
「あんな輕薄な奴、あたい嫌ひぢや！」
「おれも嫌ひだが、ね、小學校時代の友人でもあるし、いろんな口聽きとして役に立つやうだから――」

『そりや、自分の勝手やないか——あたい知らん！』

そしてまた上から下りて來る女があると、かの女は先づ貞夫の女房ではないかと——あれは綿服主義だとか云つていつもきたないなりをしてゐるが、立派さうな風の、若いのを見ると、また、女優ではないかと思つた。

この上を拔けたところに、帝國女優學校の假敎場があつて、そこへお島も這入らうとして貞夫にかけ合つて貰つてるし、またその用意に三味線と踊りとを稽古してゐるのであつた。

貞夫とお島との間に出來た最初の約束はそんなことではなかつた。かの女が一たびその故鄕なる紀州に歸るまで在學して卒業した或裁縫學校へ再び入學し、一二年間その高等科を修めさせることとてあつたが、裁縫などよりも琴の師匠にでもなる道を開いてやらうとしてゐるうちに、貞夫自身の直つてしまつた或病氣を急激に受け繼いだが爲め、殆ど半年ばかりは病院通ひで經過してしまつた。

『もう、さう苦にならんさかい、早う何かの稽古にやつてお呉れ』と、かの女が云ひ出した頃には、かの女に對する渠の一度冷めかけた愛情が再び回復してゐた。そして渠は、多少の慾目が手傳つてゐるとは身づから思ひながらも、既に二人まで失敗した女優養成を今一度かの女にやつて見ようと考へ付いた。それに、やがては自分も事業上一時は樺太へ出向かなければならないので、かの女をどこかへ——金錢上の責任は持つとしても——託して置くやうにする必要もあつた。

『どうだ、女優になつて見ちやア？』

「そんなもの、いやぢや！」

『何も顔を赤くしないだッていいぢやァないか？――三枚目ぐらゐのところぢやァ、牛耳が取れるかも知れないぜ。』

「三枚目たら――？」

「…………」貞夫はその日それに對する返事をしなかつたが、かの女がさう云ふことに對して有する恐れだけは、毎日のやうに努めて取り去つてしまうやうにした。そして、顔のことは云はないで、歳がもう三四年若かつたら三枚目にも、第一流の花形にも行けたにきまつてるが、それにしても、背が高いのは女優として一つのいゝ武器だとも話した。

六疊敷きの、外に向つたところに小い一閑張りを置いて、その上で貞夫が筆を走らせてゐるそばへ來て、かの女は片ひぢを突いて横になり、黄の勝つた中形矢絣りの廣島銘仙の綿入れの、太く時色の袵の出たところを、足袋の親指でさわりながら、云ひにくさうに、

「あたいでも成れるだろか」と聽いたこともあつた。

「お前の決心一つ、さ。」

「決心したッて、成れないこともある。」

かの女は、それでも、頻りに獨りで鏡に向ひ、自分の顔をいろんな風に映して見る日がつゞいた。

「大分乘り氣になつて來た、な」とは考へながら、貞夫は後ろ向きにそ知らぬ風をして、友人なる有名な背景畫家の山野がいつか云つたことを思ひ出した。

「あいつア馬鹿だぜ――少し足りないぜ。」

『そりやア、君のやうに藝者や苦勞人ばかり見て來た目にやア、ねー―ありやア、まだほんの、田舍ものだ。土のにほひが拔けてないのだ。』

この問答があつたのは、山野が貞夫とお島とを招待した或うなぎ屋の二階で、お島が便用に立つた留守の時だ。かの女が澄ましてもとの座に返つたところで、山野は醉眼でかの女の顏を小娘か何かのやうにのぞき込みながら、

『可愛い、ねえ。』

『ふん』と、かの女は自分の顏をしやくつて、眼を横に反らせた。これはかの女が誰れに對しても冷かされる時などにする表情だが、自分は餘ほど得意でゐるのだ、な、と貞夫にはいつも推察が出來た。けれども、こんな時ほど女の顏の缺點をさらけ出す時はないと渠には見えてゐるので――兎角、太い横じわが三筋寄り勝ちの額の下に、青みがかつた眼の玉が動き、あまり高くない鼻が廣かつて、その下で大きな口が一文字に引ける。意地の惡い表情の變化が豐富に出來ると思はれるのは、ただこの口がある爲めだけだ。

『それにしても、もツと都會馴れなけりやア、ねえ――』

『田舍ものなら、田舍ものに成れる――では、女優にしておくれ』と、かの女が云つたのは、それから二三日もあとのことだ。

女優學校へ傍聽生とでも云つたやうな入學の交渉は、校長が旅興行にまはつてゐるので、返事はそれて歸るまで得られないのであつた。

その校長がわが國では有名な女優であつて、年中どんな忙しい生活をしてゐるのかも知らないお島は、

不在て分らないと云ふ返事を聞いただけて、それが體のいい斷りてはないかとあやうんだ。
「そんなに心配するなよ、どうせ何事も手筈が延び〳〵して來たのぢやアないか？」
「だから、早う何かさせて呉れたらえいぢやないか？」じッと、また、睨むやうにして、「樺太のことと云ふたら、――何でも自分のことは――火の付くやうに騷いてる癖に、あたの事となつたら、いつでも平氣てぐづ〳〵させて置く！」
「おやア、下のお婆アさんに先づ三味線でも習つてゐるがいい、さ。」
「そんなら、早う頼んでくれたらえいぢやないか？」
「さう意地惡く云ふなよ。」貞夫は、かの女が餘ほど情の籠つた時の外はおだやかに出ず、どことなく皮肉なやうな、いぢけたやうな物の云ひ振りをするのを、社會一般から見て不自然な狀態に置かれてゐるのを忘れない爲めだと受け取つてゐる。渠は、どうせ、今の妻は離別する時があると思つてるので、お島に對しても、時には「やがておれは女房が無くなるのだが」とも語つた。さうかと云つて、いづれ來たるべき本妻離別の時になつて、お島のやうな女を正式の妻に直さうとは夢にも考へてゐない。「本妻にして呉れ、して呉れ」が、子供が母に何かをねだるのを見てゐるのと同じやうに、渠にはうるさかつた。

それには、毎日かの女のあたまを何か一つのきまつたことに占領させて置く必要から、さきには、貞夫が何年か以前に使つたヴィオリンを持つて來た。すると、かの女は獨りでどうやらかうやら調子に迯り付いて、田舍て歌を聞きおぼえたストライキ節などを云はせるやうになつた。て、三味線も行けないことはなからうと云ふことが分つてゐた。

貞夫は自分の家から、繼母が殘して逃げて行つた古い三味線を、壽美子の反對を受けたにも拘らず、ひッたくつて來たのである。それが毎日一度は、渠の坐わつてる下から、ぺこん、ぺこんと聞えた。同時に、またかの女は近所のちよッとした踊りの師匠へ通つたので、二階の片隅では、しよッちう、五十錢であつらへて貰つたとか云ふ花やかなあふぎが廣げられたり、閉ぢられたりした。

「濟田さん、お稽古をしましよう。」から本當のお師匠さんらしく呼びかけられて、お島が三味線を以つて下りて行つた時、貞夫は客の加能泰藏に對して二百金の周旋を頼んでゐた。

渠はこの客に大して信用を置かなくなつた。と云ふのは、不斷から輕薄な性質であるばかりか、その本職のやうにやつてる周旋が一向依頼通りに運んだことがない。家を抵當にするからと云つて、去年から頼んであつた事業費引き出しの件も、とう〱意外の方面から突然に出來た。去年の歳末に迫つて子供が三人揃つて入院し、一人は死んだ騷ぎの時も、加能はとう〱工面し切れなかつたので、貞夫は自分の足かけ七年間勤めた商業學校の英語教師を、どうせ辭職するのであつた豫定よりも、三ヶ月早く辭職し、その退職金を十二月三十一日と云ふ日に受け取つたので、僅かに年を越えることが出來た。

けれども、今回は、もう、二進も三進も行かなくなつたので、またこの加能を呼び寄せたのである。柄でもないと云はれる事業に於ける兵站部を勤める爲めに、技師や弟以下に後れてまだ居殘つてる貞夫てはあるが、から早く金の追求が來るとは豫期しなかつた。もつとも、その用意としては、地方の或都會の水道建設費二百萬圓を外資に仰がせることにして、渠の先輩で今コンミシヨンマチヤントをしてゐる人に話し込み、市の責任者の依頼状を待つことにまで運ばせたが、これは勸業銀行が出すから外資を

仰ぐなと云ふことになつて、渠の奔走は無駄になつてしまつた。

また、渠の玉突き仲間なる或鑵詰問屋の主人へかけ込んでも見たが、少くとも第一回の製品を見ないうちは、商賈の法則として、金の融通が出來ないと云はれた。

家を二重抵當にするか、餘ほど好意ある人から信用貸しを仰ぐか、この二つの道しきやなかつたのをこの客は今度は、どこをどう甘く立ちまはつたのか、信用で借りられさうだと云ふ話を持つて來た。

「おやア、頼む。」

「然し金のことだから、君も十分に責任を負ふて呉れんと――」

「そりやア、無論、約束する期限までにやア――」

「おい」と、今まで何となく下へ氣を取られてゐた加能が、俄かに、『下手くそぢや、なア。』

「ふ、ふん。」貞夫も客について又苦笑ひをした。

お島は『今と昔は』を習つてるが、三味線がびつこのやうに歩いてるらしい。

「まだ聲を出せないのか?」

「出せば出せるだらうが、下の婆アさんを半分馬鹿にしてゐるから、いけないの、さ。」

「無論、あの婆アさんかて」と、時々、加能に關西辯が出るのはお島と同じやうて、『上手だと云へん。それに、五十づらをさげて、薄化粧をして、若い亭主に燒き餅を燒く奴だから、なア。」

「清田に聞いたのだらう――けれども、ね、如何に縁日商人だからツて」と、貞夫は額の廣い、頬のこけた顏に、鋭い眼を眼鏡の裏から光らせながら、『さう馬鹿にするものぢやアない、さ――お互ひに好き合つてゐるのだから。」

「よく夫婦喧嘩をすると云ふぢやないか？」
「そりやア、また、出來心からだらう、さ。」
「君等と反對だぜ、女が五十て、男が三十四ては。」
「僕はさう年を取つてやしないぢやアないか？」
「いやさ、年の割合ひがよ——あいつは二十二ぢやさうぢやないか？」
「欲しけりやアやるよ、僕が樺太へ行つちまやア。」實際、貞夫はその金を空鑛材料に換へ、それを持つてあつちへ行かなければならないのだ。そしてその後のお島は、都合によれば、どうなつてもいいとも思はないこともない、から金の融通に困つてる時は、殊に。
「君の病氣の身がはりなんて」と、加能は反抗の樣子を見せようとしたが、顏に多少の釣り込まれた色が見えたのを、貞夫は私かに、『馬鹿な野郎だ』と認めた。
「聲をお出しなさいよ、聲を！」下の婆アさんの年に似合はない凉しい聲がした。「出さないぢやア、いつまでも出ませんよ。」
「ナダイムスメノー」低く、然し氣取つてるやうな——
『やつてる、やつてる！』加能は背廣の洋服に圓まつて、そゝ場にわざとらしくひつ繰り返つた。
貞夫が音樂倶樂部の入場費を自家から強奪したのはその日で、——渠が不愉快な心持ちて戻つて來た時、お島が同倶樂部へ伴はれて行く用意を濟まして、貞夫の机に横ずさりにもたれ、むろ咲きのにほひ菫を頻りに鼻に當ててゐた。渠の友人なるアメリカ歸りの或客がかの女へ贈り物に持つて來た小鉢で、
「あの人はなかなかハイカラだ」と云つて、かの女はその客が歸つたあとまでも喜んだ物だ。そして貞

夫の想像では、かの女がこれまでに餘ほど得意に感じたことはたつた三つだ——第一は、かの女の寢物語りから知つたことだが、さきの所天なる小學教員に、紀州でまだほんの同僚であつた時、自分の寫眞を要求せられたことだ。第二は去年の夏、貞夫に伴はれて甲州へ行つて、初めて温泉のお客さまとなつたことだ。そして第三が、乃ち、この贈り物を受けたことだ。

「あたい、あの人好ッきや」と、かの女はぢらし半分に云つた。

「でも、ね、お前のお望み通りの獨身者ぢやァないよ。」

「獨身者でなかつたかて」と、負け惜しみに、「自分のやうなおぢいさんではない。」

今も亦じらしてゐるのだと思はれるので、貞夫はそんな興には乘りたくなかつた。坐わらないで、そしてかの女の正面には向つてるが、暫く物を云はなかつた。そして長く反り返つたうは鼻をいじくりながら、曾てかの女が怒つて、その鼻をひッ張つた時の痛さを思ひ出してゐた——まだ痛みが殘つてるやうだ。

かの女はこれでもか、これでもかと云はないばかりに、紫の花の上に自分の鼻を突つ込み、ふん／＼ふん／＼嗅いで見せてゐた。が、根負けをしてか、目だけで見あげて微笑した。

「さア、行かう。」

「でけた」と、疑問的にくびを優しく動かしてから、いきなり訴へるやうに、「あの加能の奴、好かん！」

「…………」

「あたいに、こないだから、いやらしいことばつかり云ふて——」

「いいぢやァないか」と、とぼけた振りで、「向ふがお前を好いて呉れりやァ？」

「では」と、花の鉢を兩手で持つて、すわり直した膝の上に置き、男の顏をうは向きに正視して、「あた

いを取られてもえいか？」
「うん。」ふと、さうして呉れりやア、こんな面倒はなくなると云ふ氣が出て、「それもお前の決心一つだ。

二

「念の爲めに聞いて置きますが、な。」音樂倶樂部の幹事の一人杉本博士の聲だ。「この會では、正當な婦人でなければ出入りさせないことになつてゐますが、君はあの婦人に關係ないでしよう、な？」
「關係！」貞夫は、同倶樂部の演劇研究部へ鶴子と云ふ女をモデルに入れる爲め初めて紹介しにつれて行つた時のことを思ひ出してゐた。無論關係はなかつたが、その時考への中にあつた痛いところを突かれたので、それを隱す爲めにわざとらしく胸をそらせた。
　こんな思ひ出に冷汗をかく氣がして、貞夫は今夜の演奏會を小さくなつて見渡すと、あの夜、あの女や渠と共に、三味線につれて新工風の國風舞踏の一なる「木曾の御嶽さん」を稽古し、トコセ、キナヨヤ、ドン〳〵と云ふかけ聲などを擧げたりした連中は、すべてあちらこちらの倚子に陣取つてゐる。渠の早く目に付いたのは、博士——某銀行の頭取り——某富豪の息子で、義太夫に上手なもの——常任幹事の細君——踊りのモデルなる濱野孃——。
　貞夫は、演奏藝術に對する純粋な感興によりも、寧ろ周圍の人々との關係に醉つてしまひながら、有樂座の下の眞ン中ごろで、通り道に接する倚子を、自分と並んで占領してゐる女が、さきに演劇のモデル志願を他の或理由でたツた一日で斷念したあの女のやうな美人でないのを、且田舍ものじみてゐるのを、誰れにも見られたくなかつた。が、いづれも美しい女連が先づ見のがさなかつた。

『吉野さん、吉野さん！『常任幹事の細君が廊下で貞夫を捕へて、『あなた、今晩は奥さんと御一緒？』

『え――』

『嘘でしよう』と、濱野孃は、細君と目くばせしながら、踊りの時のやうにからだをしなやかに動かせた。『それで、この頃は不勉強、ね――トコセキナヨも、富本も。』

『…………』どうしておれの女房でないのを知つてるだらうと思つた時、ふと、蒔美子が曾て、同倶樂部の素人試演會があつた時、――その時、けふも來てゐる理學士が研究の爲めに習つてる踊りのうちの『保名の狂亂』を踊つたが、――貞夫の紹介も待たないで、いつもの出しや張り根性で、勝手に杉本博士に面會し、うちのがいつも御厄介になりましてなどと入らざらん挨拶をしたのに思ひ及んだ。あの時見てゐたに相違ないと氣が付いたが、ただ二人の美しい衣物の着こなしやからだのしなやかさにいい感じを與へられながら、何げなく、『どうせ僕にやアどッちも駄目ですから、ね。』

『駄目ッて』と、細君があまへるやうに品をして『稽古おしなさいよ――あたし大分富本が進みましたわ。』

『あすからでも、つづけて入らッしやいよ。』

『もう、僕にやア興味がなくなつたのでしよう。』から云つて、渠は樺太に於ける事業に對する誇りを私かに胸に踊らせた。

『どうです、吉野君、あの歌澤は？』番組の第四が終つてから、博士は貞夫に立ち話しをした。『富士の白雪などは最も面白いぢやアありませんか？』

『ちよッとひねくれて、含蓄があるやうなところが、ね、お宅で初めて聽いた時から面白い物だと思ひました。』

「さうでした、な、君は歌澤再興者の一人です。」博士のかうした自信を交へた誇張的な挨拶が、この流派の再びあたまをあげて來た當時であつたから、貞夫には不愉快ではなかつた。

番組第五の長唄「綱館」が六左衛門等の紋で進行中、伊十郎が例の通り自慢らしく大きな音を立てて鼻をかんだのが、つい厭になつた爲め、氣を變へようとして席を立つた。すると、貞夫は出口に近い一番後ろの、誰れもゐない一例の椅子の一つに腰かけて、黒い羽二重の羽織を着た壽美子が、瘦せこけた顔から兩の眼を飛び出させるやうにぎろ〳〵させて、こちらを見てゐるのに出くわした。

「こいつだ、な、お島を何かの手段で呪つてると云ふのは！」直ぐにもなぐり付けたかつた。が、あたりにこの會の内輪に屬する連中がゐるので、からだ中にみなぎる怒りの顫えを微笑にまぎらせ、そッとその前の椅子に行きながら、成るべく小さな聲で、「お前も來たのか？」

「お目出たうございます！」

「…………」渠は吹き出したかつたが、かの女の多少は遠慮してゐるらしい聲が、持ち前の癇性を運んで、ぴんと靜かな聽衆の耳に響いたと思はれたので、この演奏會のレコード破りをやつたやうな申しわけ無さを感じた。

「あなたばかりがいいことをして」と、こちらばかりに恨めしさうな目を注いで、「うちのものはどうするんです？」

濱野孃や常任幹事の細君がじろ〳〵こちらを見てゐた。貞夫は腰をかけたてもなく、かけないでもなく、かの女に向つて椅子の脊にもたれてゐるのに氣が付いた。

なほいつものやうな事を壽美子が云つてるので、貞夫は默つて廊下へ出てしまつた。が、かの女はついても來なかつた。

ふら／＼歩きながら、暫く氣を落ちつけて見ようとしたが、どうしても貞夫の怒りと不面目な氣とが直らなかつた。

「壽美子が來てゐるから、きッと面倒が起る。直ぐ歸れ」と、名刺の裏へ鉛筆で書き付け、案内の女に托したら、「隣りのお方が取つてしまひました」と云つて、歸つて來た。

渠が扉に付いてるからす窓の羅紗をあげて、のぞいて見ると、渠の席へちやんと黑い羽二重の紋付きがかけて、メリンス無地の牡丹色の被布と並んでゐる。そこばかりが見すぼらしいやうに思はれて、お島をつれて來るのではなかつたと後悔された。迫めて被布が道行きて、道行きがメリンスなどでなく、且、都會じみた柄であつたらいいのに――かの女がいい氣になつて着てゐるのを幸ひに、何も新調してやらないのも、あんな下らない病氣の爲めに、かの女の病院通ひの入費がかさんだ爲めだ。

「馬鹿々々しい！」渠は自分で自分を批難しながら、別な扉から這入り、夫婦で來てゐる山野のそばに行き、渠に廊下へ出て貰ふやうに賴んだ。

「僕もさッきから」と、山野は酒くさい息を吹きながら、「何か事件が起るぞと云つてたのだ。困つた、ねえ。」

「兎に角、君が行つて何とかこの場だけは無事に濟ませて呉れ給へ。」

「何でも君の細君を一先づ外へ出して、なだめるんだ、ねえ。」

「ぢやア、賴む！」

貞夫はまた扉の窓からのぞくと、新式な洋服を着た紳士然たる友人が聲をひそめるやうに壽美子の顏に近づいてゐると、かの女は何か云つて、つんけん〳〵と顎をあげてゐるのが見える。氣遣ひ聲がここまで聽えるやうだ。

やがて山野は出て來たが、『駄目、駄目!』首をふりながら、『相變らず分らない、ねえ。おれの云ふことなんか、吉野の友人だから、信じないッて。』

『困る、なア。』

『今夜こそ逃がさないで、方をつけると云つて、ちやんと片手で』と、山野は口を結び、目を据ゑ、力強く握つた右手を出して見せ、『向ふの袂をやつてゐるよ。』

『仕やうのない奴ぢやアないか?』

『それもいいとして、さ、一方も亦大膽ぢやアないか?見ッともなく袂を握られながら、どうせ來たのだから、わたしもおしまひまでゐましようッて。』

『おい、君!』貞夫は堪らなくなつて、『今一度二人を呼び出して見れ給へ——どんなことが起るか知れないから。』

『いやな役割だが、ねえ』と云ひながら、山野はまた這入つて行つたが、ぷり〳〵怒つて出て來た。『もうほうッとけ、ほうッとけ——バーに行かう。』

三

東洋軒の二階でビールを飲みながら、山野は貞夫を冷かしたり、慰めたりしたが、貞夫の耳にはそれ

が碌に這入らない程であつた。

　そのうち、長唄が濟んだかして、がやがやと食堂へ這入つて來たものがある。その間に常任幹事もまじつて來て、心配さうに二人に聽いた。

『どうしたのです？』

『實は、ねェ』と、山野が受けて、手短かにことのわけを話したので、貞夫はそれにつゞいて、

『どうもあなたに濟まないやうなことがあつてはと思つて——どうだい山野君、幹事の權利であの二人を追ひ出して貰はうか？』

『それにも及ばない、さ、おしまひまで聽きたいと云つてるし、僕からもこの場では必らず間違ひをすなと云つてあるから。』

『云つたッて、氣違ひが分りやアしない。』

『心配するにやア及ぶまい、あの樣子ぢやア、一方が惡く云やア、鬪々しいから、無事に受けてるよ。』

　最後は呂昇の柳だが、貞夫は勿論、山野もそれを聽く氣にならなかつた。が、ビールに飽いた頃、もう終りが近からうと見に行つて見ると、『必らず草木成佛』のところで、語り手の一特色なるほがらかなラ行音が直ぐ貞夫の耳に這入つた。

　渠は山野夫婦の席の後ろの方から、お島と壽美子との樣子を私かに注意してゐたが、はねをばかりが急がれる神經のいら／＼する奥には、どうでもなれ、あの二人がどんな芝居をするか見てやらうと云ふやうな落ち付きもあつた。

『自分だけが早く出てしまへばわけアないぢやアありませんか』と、どこからとなく無言の聲が注意し

て呉れた。それが正面の二重舞臺の、敷きつめた赤い毛布の色が背後の金屛風に反射してゐる、その中央に据わつた赤い房が二つ下つた見臺のあたりからてあつたやうにも聽えた。

「どうせ燒けッ腹だ」と、渠も亦無言て答へた。そして花ても降つて來さうな音樂に滿ちた空氣を、最後に於て、出來るだけ澤山吸ひ込んで置かうと努めた。

　山野の細君の靜子がちよッと振り返つてこちらを見た。その所天と同じやうに役者じみたところがあつて、ちよッと微笑して見せるのにも、その圓く肉づいた頰ッぺたにまで表情が溢れてゐる。この女だ――姉よりも妹の方が眞面目だと貞夫が批評したのを人づてに聽いて、曾て、わざ／＼『不眞面目生』と稱して愛嬌ある手紙を渠によこしたのは。それから親しく行き來するやうになつたが、渠は、かの女の妹の眞面目腐つて田舍じみた傾向あるに反し、靜子は藝人じみても可なり垢ぬけした精神があるのを好みして、かの女を自分等の集まる或詩人會へつれられて行つたこともある。

　あれはかの女が山野と結婚する一二年前のことであつた。世間では、山野より以前に貞夫はかの女と關係があつたと云つてる。それてさへ詰らないと思つてるのに、この男女がいよ／＼結婚するとなつて、山野が先妻を虐待すると云ふごた／＼の時、貞夫が山野の先妻に同情したと云ふところから、またそれにもきたない關係があつたと山野がはの友人等に云はれた。靜子よりは、また、かの女と山野との間を圓滿に成立させる責任があるやうなことを頻りに云つてよこして、貞夫に訴へるやうな又渠の態度に抗議するやうな言葉があつた。

　實際、山野と靜子との手を握らせたのは――洋畫家たる山野の或特別な畫にかの女自身をして適當な

モデルを供せしめる爲め――貞夫の所爲である。

「僕は、然し、結婚しろと云つて紹介したのではなかつた。」から、貞夫は靜子に語つたことがある。それは、然し、甚だ未練らしい言葉だと、渠自身も思つた。その時であつた――渠は、かの女と山野とが關係の途中で中たがひをしたのを仲裁する爲め、山野を日比谷公園の松本樓に待たせて置いて、靜子をそこへつれて行つたのは。

山野は既に大分醉つてゐた。その上また貞夫とビールやヰスキを重ねてから、そこを出ると、電燈のちらつく樹かげで山野はふら／＼と倒れかけた。靜子は、

「あぶない」と叫んで、抱きとめようとしたのを、

「大丈夫です」と、身づから踏みとまつて、山野は太い樹の幹に片手を支へた。貞夫はこれを見て、

「相變らず芝居をやる男だ」と思つた。

靜子をまかされた貞夫は、かの女と共に急いで赤電車に乘つたが、車中から窓の外へ今喰つた物を吐いた。渠の脊中をかの女はさすつてゐた。そしてかの女は、電車から下りると、藥屋を叩き起して寶丹を買つた。

靜子姉妹は新派に屬する日本畫家で、女二人の腕でその母と靜子の先夫の子とを養つてゐた。

「お顏が眞ッ青ですよ」と、母なる人が驚いた。

貞夫は寶丹を飮ませられ、暫時その家に寢かせられた。やがて車が來て、それに乘つた時、またへどを吐いた。

こんな記憶の間から、「母の柩」が引かれて行く後ろ姿を貞夫はまざ／＼と見た。すると、

「吉野さアん、吉野さアん」と云ふ女の聲が青山あたりの電車の窓から聽える。
さうだ、あれは、貞夫の友人なる某漢詩人が有名な事件で殺されたその葬式の掛り員として、貞夫等が人力車を列ねて青山に向ふ途中のことであつた。靜子が妹と一緒に九段行きに乘つてゐて叫んだのださうだが、貞夫は後にかの女から、
「すまアし込んでゐて、一向氣が付かないんだもの」と、聽かせられた。かの女がまだ山野との間に親しみも何もなかつた時のことだとは云へ、その場の情熱に燃えると、前後もかまはず、
「何て向ふ見ずの女だッたらう」と、渠は思ひ出して、獨り微笑をもらした。
そして段々と自分の神經が舞臺の氣分に一致して來たと思ふ時、惜しいやうに幕が下がつた。

どや〳〵と聽衆が出て行くあとから、廊下の外の石段の上で、貞夫と靜子とお島と壽美子とが落ち合つた。
壽美子はお島の袂を片手でしッかり握つてゐる。
「見ッともないから、よせ！」と、貞夫はあたりへ聽えないやうに云つた。
「よう御座います」と、これはまた皆にも聽えるやうに、「わたしの勝手です！」
お島は何も云はないで、微笑にまぎらせてゐようとしてゐる。
「うちのはどうしたんでしよう、ねえ」と、靜子は首を延ばして方々を見まわした。
「僕が見て來ます。」貞夫は殆んどがらんどうになつた聽衆席をのぞいて見たり、廊下をあちらこちら行つたりした後、便所のそとのところで山野が巡査と何か云ひ合つてゐるのに出くわした。

「そんな誤解をされちやア、僕は實に迷惑します。」
「誤解ぢやアない、實際ではありませんか？」
「馬鹿なことを！」
「馬鹿とは何だ？」
「どうしたんだ、君？」貞夫はそこへ口を出した。
「なアに、ね」と、山野はふり向いて、怒りの爲めに聲を顫はせて、『僕が君の細君に接吻をしてゐたと云ふんだ。」
「そりやア間違ひです――實は、ちよッとした事件の爲めに――」
「まア、君、云はないでも濟むことは云はないでもいいんだ――野暮くさい誤解を解きやア。」
「何が野暮くさい？」巡査が赤い顔をしてゐるのは、息の臭ひで、貞夫には、酒を飲んでゐると思はれた。
「まア、君」と、巡査をなだめるやうに、「僕が僕の妻に用があつて言づてを頼んだので――そんな野暮は云ひ給ふな――君は酒を飲んでるぢやアないか？」
「おれは決して醉つてをらん！」
「醉つてないかも知れないが、飲んでるのは事實でしよう、顔に現はれてるから。」
「おれだッて、茶の代りに酒ぐらゐは飲む。」
「飲むのは御勝手ですが、それが爲めに云ひがかりを云はれちやア――」
「何が云ひがかりだ？」
「實際、僕がこの友人に對してすまないことになるのですから。」

「風俗壞亂だ――兎に角、警察所まで行つて貰はう。」

「何が風俗壞亂だ――馬鹿々々しい！」山野はかう云つて、巡査をにらみ付けた。

靜子がいつのまにか後ろへ來てゐたが、

「あなたの爲めに」と、泣き出しさうな顔をして貞夫に向ひ、「こんな詰らない目に會ふのだ、わ。――さア、行きましよう。」と、山野の上衣の末を引ッ張つた。

「また風俗壞亂だぞ」と、山野は押さへた聲で叫んだ。

「馬鹿なことを云ふにも程があるぢやアないか」と、貞夫は巡査にも聽えるやうに靜子に云つて、皆と共に建て物の外へ出た。

晴れた夜で、夜ふけの寒い風が星々の光をちらつかせてゐた。

「事件は何でもないのですから」と云ひながら、倶樂部の常任幹事もついて來て、當の巡査をなだめてゐたやうであつたが、貞夫は巡査がなほうるさく從つて來るのを見て、

「もう、あなたがついて來るにやア及びますまい。」

「何だ、警察まで來なけりやならん。」

「馬鹿を云ふな！」山野がまたむきになつた。「貴さまは醉つてるんだぞ！」

「貴さまとは警官に向つて無禮だぞ！」巡査も少し身がまへをして、「おれをそんなに馬鹿にする氣なら鐵拳を喰らはせて見せる！」

「う、う、う、なぐるなら、なぐつて見ろ！醉ッ拂ひの警官に、人民をなぐる權利があるならなぐつて見ろ！」

「手出しをすりやア、おれも承知しないぞ！」貞夫も山野の勢ひにつり込まれて、腕がむづ〳〵してゐた。
「まア、さう手荒いことは云はないでも」と、幹事が云つてるところへ、別な巡査がやつて來て、この二人で兩方を引き分けた。
巡査が去つてから、幹事は云つた、
「有樂座で歡待しないからと云つて、あの巡査がその鬱忿をこちらへ漏らすのだから、たまりません。」
「不都合極まる」と、まだ山野は納まらなかつた。
「いろんなことが起つて、すみませんでした」と、貞夫は幹事に詫びたが、あらゆる面目を失つてしまつた氣がした。
見まわしたが、三名の女はいづれもそこにゐなかつた。

數寄屋橋から日比谷公園に至る道で、女どもの後ろに追ッ付いたが、靜子が昂奮した口調で早口にお島に物を云つてるのが聽えた。
「だから、ね、早く吉野さんと別れるやうにおしなさい——どうせ、いつか、棄てられるにきまつてますから。」
「……………」
「ね」と、のぞき込むやうにして、「分りましたか？」
「……………」お島が高いあたまを少し頷かせるのが見えた。
「あなたも」と、靜子はちよこ〳〵と壽美子のかはにまわり、「あんまりひどいてしよう？」

「何がひどいのです！」壽美子はその方へ向いて、頸に力を入れながら、「わたしが頼みもしないことを持つて來て、山野さんがぐづぐづ云つたのです。」

「馬鹿を云ふな！」貞夫も默つてゐられなくなり、つかつかと出て行つて、妻と、それから今の巡査とに對して抑さへてゐた忿怒を一緒にして、この言葉と同時に、かの女の横ッつらを思ひ切りなぐつた。

「そんな野蠻なことを――」靜子はとめようとした。

「おれが貴さまを追ッ拂ふやうに山野君に頼んだのだ！」

「おほきなお世話です――かうしてつかまへてる以上は、うちまで引ッ張つて行つて、處分を付けます警察へでも、どこへでも突き出してやる！」

「あなたも少しお考へなさいよ、吉野さんの――」

「考へた上のことですから、ね！」

「わたし、もう、知らん！――吉野さんは女をみんなおもちやにしてしまはうとするのです」と、靜子は立ちどまつて泣き出した。すすり上げながら、「そんな人ではなかつたのに！」

貞夫は引き入れられるやうな感じがして、かの女の姉妹と直接に行き來してゐた時のことを今一度親しく思ひ浮べさせられた。そばへ行つて、

「兎に角、ねえ、奥さん、これから山野君の家へ行つて、あいつによく以後こんなことをしないやうに話して貰ふつもりですから。」

「兎に角、奥さん」と、山野が壽美子をなだめるやうに、「これから僕の家へいらッしやい。」

「わたし、不贊成です！」靜子はからだを振つて、その所天から一歩を退いた。「吉野さんのやうな人は、

もう、來て貰ひたくありません！」
「貴さまにそんなことを云ふよ」と、山野はおも／＼しい聲を出して、「權利があるか？」
「わたしだッて、山野さんのところなどへちッとも行きたかァありません！」
「默れ！」貞夫は妻の言葉を制してから、友人に向ひ、「君まで夫婦喧嘩をしちやァ困るぢやァないか？」
「あいつが獨り勝手な横暴なことを云やァがるから！」
「ぢやァ、わたしはあなたの家庭をおいとま致します。」
「勝手にしやァがれ！」
「そんなことを云ふなよ、君。」
「なァに」と、山野はまた巡査に向つた時のやうに怒りの聲を顫はせて、力づよく、「生意氣なことを云やァがる！」

お島はただ默つて、何かの機を見てゐたのだらう。この時、さきを握られてゐる自分の袂を兩手で摑んで、うん―うん―うん―と云ふやうに、左右に三度振つたかと思ふと、それが壽美子の手から離れた。
「あんなことをしましたよ」と、壽美子は甘へるやうに貞夫を見あげたので、渠はいやで／＼ならない妻がまだこッちに頼る氣があるのだと知つて、自分も逃げ出したくなつた。

靜子はその家路とは反對の電車に乘つた――曾て貞夫がかの女と一緒にそこから乘るが早いか、窓からへどを吐いた方角へだ。

お島はその脊高い眞ッ直ぐなからだをそと輪に運んで靜子とは反對の方へずん／＼行つてしまう。その歩き方は持ち前だが、これを後ろから見るたんびに、かの女のまだ本當に直らない下の病氣を貞夫は

思ひ出さずにはゐられないのであつた。

「今夜は、おいやでしようが、ね、どうしても離れませんよ」と云つて、靜美子は渠がかの女から綿服主義にさせられてゐるそのごつ〳〵した羽織の袂を握つた。

「今、僕が逃げたら」と、言葉を英語に換へて、「こいつが君の重荷だから、ね―君、先づ電車に乘り給へ。」

「君ア色をとこだよ。まア、やさしくついて行つてやり給へ。―僕はもツと醉ひのさめるまで散歩する。」

「ぢやア」と、邦語に返つた、「失敬するよ。」

「僕のワイフは、實際、飯田町へ歸つたのか、なア？」

「大丈夫、君の方へまわつて行つたの、さ――どいつも、こいつも、をどかしやアがつて！」

「わたしは一生懸命てす、をどかすの、をどかさないのなど云ふさわぎぢやアありません！」

「默れ！人をさわがせたぢやアないか？」

「まア、奥さん、お靜かに」と、山野は少しうつ向きになり、兩手をうは向きに、低く廣げて、一歩を退いた。

「また芝居をしてゐる。」貞夫はかう思ひながら、「ぢやア、失敬するよ。」

「おれは獨りぼッちだ、なア。」

山野は投げ出すやうに云つて、力なささうにつッ立つた。多くの外燈から落ちる光が混亂して、渠の姿を舞台の脚燈が反對にうへから照らして、明暗の光をそれに集めたやうに見えた。そして電車の響さへ丁度途切れて、相變はらず外套が欲しいやうな寒い風が吹いてゐた。

今の平野屋が出來たあのあたりの、もと黑い塀のあつたところだ。

「失敬」と、今一度貞夫は山野の方に向いたまま云はなければならなかつた。

山野は軍人のやうな直立の姿勢に直り、右の手を横顏のところまであげ、ゆつくりした、低い、沈んだ調子で、同じく、「失敬」と云つて、靴の底で少しつま立つと同時に、首を前方へ傾むけた。

四

貞夫は壽美子に引かれて、電車通りを、公園のふちに添つて歩いてゐたが　あの鶴子の爲めに遠のくやうになつた倶樂部の途中に、またこんなことがあつた爲め、又と再び會はせる顏がないかのやうな耻辱に滿ちて、一言も口を聽かなかつた。

かの女も亦胸が張り詰めてゐるのを、その息づかひに現はした。かの女が月が滿ちた時に、よく苦しさうな息づかひをしたが、そのやうに肩で息をしてゐるのが、貞夫によく分つた。

公園を外れようとするところにある公番の前へ來ると、かの女はその方をじろ／＼見ながら、獨り手に巡査の立つてる方へ貞夫を引つ張つてゐるのであつた。

貞夫は踏みとまつた。それが渠の袂の長さ一杯にかの女をこちらへ引いたわけになつたので、その手ごたへてかの女は氣がついたやうだ。

「わたしはどうかしてゐるやうだ。」からかの女は獨り言を云つた。

「訴たへてどうなるんだ」と、貞夫は極さげずんだ意味を心ばかりて叫んだ。この氣違ひ女め！何を仕出かすか知れやアしない！が、撒いてしまう折もうまく見つからない。人通りは少いが、少くとも、一人や二人は絶えなかつた。

橋を渡つて芝區へ這入ると、直ぐ友人なる辯護士の家があるので、そこへ立ち寄つて話をつけ、今夜はおだやかに別れようかとも考へた。が、山野に迷惑をかけたのを思ふと、重ねて友人を騒がせるでもなかつた。

成るべく人通りの少い横丁などをえらんで引ッ張られて行つたが、『きやッ』とか、『恨めしや』とか、今にもこの女が變化になつてしまひはしないかと云ふ氣持ちが、渠のかの女を度々いじめて來た記憶から、おそろしいほどに浮んで來た。不斷憎み飽きて、投ぐり飽きて、またと見たくはない顏を見て、一度でもいやな氣を重ねるでもないと、渠は出來るだけそッぽうを向いてゐた。

『年うへなばかりに增長して！』これは、もう、思ひ出したくもない。今の結婚法が改正せられ、男女どちらかの申し立てを裁判所で受理して、兎も角も訴訟を成立させることが、當分、望めるやうにならないとすれば、たゞ／＼この、自分には既に死骸の、女を早くどこかの闇へ方づけさせて呉れる願ひばかりだ。

愛宕下の通りを横切り、櫻川町の大きな滯わきを歩いてる時、物好きにその中の黑い水たまりを人の門燈の光にのぞいて見た。そして、ふと、死んだ實母があか金の足つきだらひに向ひ、おはぐろを付けてゐるのを、自分はそのわきで見てゐたことがあたまに浮んだ。きたないやうだが、身に滲み込むやうなにほひで、黑い物から出るのか、それとも、吐き出されたそれを受けるあか金から出るのか、分らなかつた。

ここのはたゞの滯のにほひに違ひないが、おどんですえ腐つた物の發散する分子がぷんと鼻さきへに

ほつて來ると、何だかかな臭い氣がして、母が新らしく生き返つて來さうに見える。

「All or nothing——生てなけりやア、死だ！」

この間に讓歩はない！妥協はない！人間その物の破壞は本當の改造だ——改造はそして新建設だ。ぶッ倒されるか、ぶッ倒すか——そこに本當の新らしい自己が生れてゐる！

渠はかう考へながら、面倒な物を引きずつてゐるにやア及ばない——いッそのこと、握られた袂を、あの、柔術を習つたと云ふお島の手を試みて、わけもなくふり切り、壽美子を轉がし込む氣になつてゐた。

溝の黑い水のおもてが暗くなつた。——そのまたうへが闇になつた。——自己の周圍がすべて眞ッ暗になつて——自己も、尖つた嗅覺のさきにおどみの垢がくッ付き、からだ中がひやりとしたと思つた。

するど、反對に手ごたへがあつて、「どうするつもりです、わたしを！」

「…………」渠の身の毛は全體によ立つてゐた。

「なアんだ、夫婦喧嘩かい！」から云つて、黑い影が他方の路ばたを通り過ぎた。もう、十二時を越えたと思はれるのに、矢ッ張り、人通りが絶えない。

「…………」かの女は、さッさと、反對の側へ引ッ張つて道を進みながら、「人を水に投げ込まうたッて、そんな手は喰ひませんよ。」

「…………」

「それこそ馬鹿げ切つてる！」

「…………」渠が逃げようとして、ちよッと踏みとまると、かの女も直ぐ電氣に觸れたやうに手の握りを固めて、こちらをふり向いた。

『殺さうたッて、逃げようたッて、駄目ですよ、直ぐおほ聲をあげて、誰れにでも追ッかけて貰ひますから、ね!』

渠は答へもしないで歩いた。

避けて來た交番だが、西の久保通りの、廣町角にあるのは、どうしてもその前を――而も挨拶して――通らなければならないのであつた。父の生きてた時、家へも來て、いつも顏を見おぼえてる巡査がゐる交番だ。

壽美子がここで木當に出來心でも起したら大變なので、その交番の手前で貞夫はおのれの袂をふり切つた。

『おまはりさん!』かの女は實際に甲高い聲を出した。

貞夫は自分が水をあびせかけられたと思つて、つッ立つた。幸ひに人力車の響きが通つた爲め、向ふへは聽えなかつたやうだが、渠は再び袂を握られてゐた。

何げないふりをして通る二人を、顏を知らない巡査がゐて、怪しさうに見詰めてゐた。

若し今の聲が聽えてゐても、こちらが發したのだと思はせない爲めにと、貞夫は、ふと、その向ふ側のそば屋へ這入る氣になつた。壽美子もあとからはしご段をあがつて來た。

『こんなところで喰べるくらゐなら、いッそ今一つ向ふの、いつもうちが取るとこへ行けばいいのに。』

もう、自分の物だと思つたのか、かの女の聲は以前よりも落ち付いてゐた。が、貞夫は一層いや氣がさして、無言でぐんぐんまづい酒をあふつた。

二三杯でも赤くなると云はれる酒が、例外に飲んだ今夜に限り、大して顔に出たとは思はれなかつた。家に歸ると、直ぐ、壽美子の母――もう、褥に這入つてゐた――を書齋に呼びつけ、

『不都合極まる女だから、壽美子をけふ限り引き取つて行くやうにして下さい！』

『貞夫さんはいつもさう云ふことをおッしやいますが、ね、子供があるのにそんなことは出來ますまい？』

『子供などアどうでもいいんです――そんな呑氣なことぢやアありません！』

『またどう云ふことがあつたのか、聽かないぢやア分りませんが、ね――』

『みんなあなたのことから起つたのぢやありませんか？』壽美子も傍へ來て、いやな眼をぎろつかせる。

『貴さまなどの出しや張る幕ぢやアない！』今まで默つて押さへてゐた心中のもや／＼が一時に、ここだと云はないばかりにほど走つて來たまゝに、渠はおのれの妻が裏棚のかかアか何かのやうに、燒けぼッ杙じみた行爲に出た不埒を述べた。苟も表面だけはまだ亭主たる者を――そしておだやかに離婚をしようと云つても、分らないで、承知しない癖に――その亭主を多くの公衆の前で侮辱したのだ！分つた母なら、この申しわけに、直ぐ娘をつれて出て行くべきである！精神的には、もうどッちからも、夫婦でないと云ふことを證據立つたことになつてゐる。

『さうおッしやると、あなたに濟まないやうですが、ね――この娘がこの頃何だかいら／＼してゐるのは、云つて見れば、まア、病氣なんですから、ね。』

『そんな氣違ひ病人は、母として、直ぐ引き取つて行かなけりやアなりますまい！』

『そんなことも出來ません、わ。』

『出來ますとも！巣鴨へでも、どこへでも、つれてゆきさへすりやアいいのです――あとの始末はゆッ

くりお母さんとわたしとで出來ることです。』

『困つたことになりました、ねえ』と、母は娘の方へふり向いて、『この娘もあんまりわさ〳〵して、落ち付かないからいけないのですが――』

『でも、ね』と、壽美子は母に頓着せず、『あなたが好きで、わたしを一緒に車に乘せて、ここへつれて來たのぢやァ御座いませんか?』

あれはまだ二人乘りの人力車が澤山あつた時代だ。そしてこの女も二十四五の若盛りであつた。或友人の紹介で尋ねて行つたのが緣となり、間もなく、とう〳〵約束までしてしまつたが、その友人があとで貞夫に向つて、『結婚しろと云つて紹介したのではなかつた』と云つたのを思ひ出すと、丁度、貞夫が山野の今の細君に向つて云つた同じやうな言葉と意味は違はなかつたのだ。

かの女は小石川の方で、人の二階を借り、自炊をしながら、晝は小學の敎員を勤め、夜は或音樂講習所の生徒であつた。今の狀態とは違つて、おも長の上品に艶々しい顏に、姉のやうな優しみをも帶びて、その着物の着こなしさへ、他の田舍出の女學生などとは違ひ、如何にもしなやかな姿に貞夫は引かれた。そして三つ下の貞夫ではあるが、渠が當時他の一人の女を思ひ思つてはねけられた失望を全く取り返すことが出來た。

渠は芝の我善坊から、毎夜のやうに、電車もなかつた丸の内の寂しい道をてく〳〵步いて、江戶川のほとりまで通つた。そしてそこから、直ぐ、築地の或西洋人のところへ、日本語を敎へに且讚美歌改正の補助に――それが渠の毎日の仕事であつたに――出かけたこともある。

『深川の叔父さんが、あす、わたしを引き取つて行くさうですよ』と、女があわてて告げたその晩に、

貞夫は非常手段として女を車に乘せ、かの驚きながらも寬大であつた父の家へつれて來たのである。

『そんなことは十五年も、二十年も昔のことだい！』

それから、妻子をつれて田舍の中學教師にもなつた。文學專念の爲めに、東京の場末て貧乏な暮らしをつづけたこともある。子供は六人も出來て、三人は死んだ。去年父が亡くなつたので、父の家業を壽美子に引きつがせたが、その年末にはいろんなことで非常な困窮をした。

『みんなあなたのせいですよ、色氣違ひのあなたのせいですよ』と畳みかけて、壽美子はあまり喜びもせず、かの退職金――大晦日に都合して貰つた――三分の二を手にした。

貞夫はその他の三分一を以つて、お島と共に、氷川の森かげに於て、新年を籠城したのであつた。けれども、壽美子はなほ自分へ貞夫の愛が返ると思つてゐるのか、かう云つて叫んだ――

『昔のことだッて、今のことだッて、このわたしにやア變りはないのです！』

『現に』と、渠は坐わつた膝にまで力を入れて、『婆々アになつたぢやアないか？』

『そりやア、五人も六人も子供を產んだのですもの！』

母は當り前のことを云つてると云ふやうな顏つきをしてゐた。

『何かと云やア子供、子供と云ふ！それよりも自分自身のことをもッと忠實に考へて見ろ！今の女の心持ちも知りやアがらんて！』

『おやア、あんな淸田島のやうなものが今樣美人ですか？』

『淸田などア本當の問題ぢやアない！人のことなどにやア口出ししないで、手前のざまを見ろ！』

『どうせ、あなたの云ふ若々しいものにやア、今更らなれません、さ。』
『手前は、お母さんと同様、ずッと時代に後れたうじ虫だから、さう思へ！』
『これでも、武士の――』
『またか、よせ！――武士の娘だらうが、なからうが、活き〳〵した女の精神が死んでゐらア！』うじ虫と云はれたのを母も怒つたのかして、
『わたしもあなたの御厄介にはなつてゐますが、ね、まさか、そんな物ぢやアないつもりですよ。』
『どうせ分らないのだ！分らないものがゐるところにやア、おれの家もないのだ――勝手にしろ！』
われを忘れたやうに叫んでゐたので、俄かに酔ひが發して來た。貞夫はそこへ倒れた。隣りの寺の庭にある池から、時々緋鯉のはねる水音がして、急に靜まつた深夜の靜けさを破るのが聞えた。そして渠は、子供の時、あの鯉を釣つて、寺の和尚と自分の父とにひどく叱られたことがあるのを思ひ出してゐた。
阿彌陀經を借りに行つたら、直ぐそれを坊さんになりたいのだと思つて、何なら增上寺の管長へも紹介しようと云つた、あの世間知らずの、然し柔和な和尚も死んだ。これと親友であつて、いろんな世間話を共にした父も、和尚年來の素志であつた本堂新築の工事の音を羨ましさうに聽きながら死んだ。自分の子供も、前後三人まで死んだ。女房も自分には死んで、もう、形體ばかりだ。お島なるものも、その本體の半分か、四半分しきャ自分に活きてゐない。
『自分を去るものはすべて形體だ、否、死だ！』
そして自分自身も亦死ぬ時があらうと云ふ考へに及んだ。既に已に過ぎ去つた自分の半生が、その死と同様に空であつた。――虚であつた。――無であつた。――理想とか、運命とか云ふ形式的概念、外

存的思想などが出て來る餘地さへもない。今、この身に具體してゐる慾望ばかりが、闇夜に於ける燈臺の光のやうに、僅かに唯一のいのちだ。

今や貞夫には樺太の事業に全心全力を注ぐのがそのいのちである。早く、もッと金が欲しい！同時に、また、よく自分を理解して呉れる女が欲しい！

ぞく〳〵と寒く、そして息詰るこの醉ひの苦しみはやがて又この現在の煩悶の苦しみてあつた。

ぱちり！ぱちり！

水面に踊りあがる大きな緋鯉の姿が、締め切つた室に倒れた渠の肉眼に見えて來て、渠のつき詰めた思想に正しい合の手を添へて呉れるやうだ。

『おれは兎に角生きてゐる！』

『また、何か』と云ふ壽美子がまだそこにゐたのに氣付いた、『考へ込んでゐるんでしよう――さッき逃げて行つた清田のことでも？』

『…………………』無に歸したことを再び思ひ起させられるのがいやさに、起さあがつて『下らないことは云ふな』と、眞面目に叱り付けたかつたが、からだが利かなかつた。

壽美子の何かにのぼせて來たやうな息使ひが烈しくなつてゐる樣子が、ちらりとみえただけてある。

『以後は、ね、貞夫さん』と、母も亦ゐたのであつた、『から云ふことのないやうにわたしからも云つて聽かせますから、けふのところは、あなたも、どうか、勘辨してやつて下さいませ――久し振りのお歸りぢやァ御座いませんか？』こんなことを云ひながら、母は、押し入れから、渠の何ゲ月か觸れたこともない蒲團を出して、洋書の脊皮文字が金色や銀色に輝いてる二つの大きな書棚の前に敷げた。

然し、その夜も、それッ切りて、貞夫は、暫く經つて障子をあけに來た壽美子を、一歩も、書齋兼用の寢室へは入れなかつた。

五

末の男の子は、父と云へば、恐れて少しも獨りては近よらない。うへの子二名は、父のことを母がいつも馬鹿だ、馬鹿だと話してゐるのを聽いてゐるので、父のそばへ來ても何にも云はず、半ば下げずむやうな目を見張つてゐる。貞夫はもとからこれを知つてゐた。

て、翌朝、遲く起ると、直ぐ、何にも云はず、その家を出た。

お島は二階の眞ン中で、だらりと足を投げ出し、そッぽうを向いて肱まくらをしてゐた。不手腐つてる、な、と貞夫は思つたが、今までおさらひをしてゐたかして、三味線がそのわきに横たはつてゐる。

かの女が挨拶しないので、渠も默つてその後ろの方に坐つた。圓いニッケルの置き時計ばかりがちやき〱云つて、五分か六分を過ぎた。

『もう、別れさせて貰ふ！』かの女は半身を起して、目で貞夫をにらみ、足は投げ出したままだ。『相當の手續きをして呉れ！』

『手つづきも何も入るものか？』渠はわざとゆッくりして、『別れるなら、直ぐにも別れよう、さ。』

『では、病氣を直ぐ直せ！』

『そりやア、仕かたがないと諦める、さ、これまで隨分金をかけてもまだ直らないんだから、ね。』

『誰れがもよぢや――お前の外にありやせん！』

『今更らそんなことア云つても駄目だ――お前の好きなやうにするがいい！』

『でも、ええ氣になつて、引ッ張られて行たぢやないか？』

『いい氣でもなかつたの、さ。』

『迫めて――けさ――早くても』と、また例の荒い息使ひになつて、『歸りやええのに！』

『おれが寢坊なのはお前も知つてるぢやアないか？』

『場合が違ふ！――ふん！あたいが紀州を出て來たのが惡かつたんや』と云つて、再びぶッ倒れた。

そして渠の豫期通りにすすり泣きになつた。

山出しも同様な癖に、紀州を出て來たのが惡いのは、貞夫は初めからさう思つた、無論のことだと。さきの亭主――それも本當の亭主てあつたか、どうだか、分らないが――に棄てられたか、若しくは本人の云ふ通り自分からそれを見限つたかして、もッといい人に引ッかからうと云ふ野心から、東京へ出たのだ。そして碌でもない炭屋の亭主――貞夫の家の筋向ふだ――にくッ付いて見たり、神田にゐる國のものだと云ふ人の、そしてちよッと同居した家の細君に疑はれて追ひ出されて來たり――それてゐてこッちの本妻に立ち直らうとするなどとは以つての外だ。

若し女優になれるとしたら、それだけても仕合せを與へられたのではないか？多少ぬけたやうなところがあるのに――その癖、神經が過敏て――ちよッと熱でも出ると、直ぐうは言を云ふ。

『お母さん、お母さん、あア、ア、、アーアッ』などと云つて、目をさますことは氷川の方にゐた時は一番烈しかつたと思はれたが、この頃では、またその習慣が回復して來て、夢に見た母の姿を、枕もとに

起きあがつてまでも、見まわす樣子をする。

『おい、何をしてゐるんだ』と、貞夫が注意するのに初めて氣が付き、

『また、何か云ふた？お母さんが來た筈ぢやのに』と、眞面目くさつて微笑してゐる。

貞夫はそんな時に、度々、わざとてはないかと疑つて見た。が、あかりの蔭に横たはつたかの女の、地肌のなめらかな白い顔が、引き締つて、青いやうに、緑りのやうに、また紫のやうに見える時は、穢多てないかと云ふ疑ひを初めて起したのを今でも忘れないに拘らず、虚僞か眞面目かのやうな問題はいつも〳〵消えてしまつた。そして朝になつて、かの女のまづいたるんだ顔を見る度に、自分は廣い野原の眞ン中に狐からすッぽかされたやうな不興に落ちた。

『死んだと云ふものが二度と再び出て來るものか、ね』と、たま〳〵云つたことがある。『よくお前のおやぢが出て來ないものだ！』

『親さへ生きてて呉れたら、あたいもこんなことになりやアせん。』

『無論だらうが、ね、それても本人の心がしッかりしてイないと――』

『だから』と、からだを振り、『あいつを追ひ出せと云ふてる！』

『そりやアお前のある無しにやア關係しないても、ね。』貞夫は成るべくうそを云はないて通りぬけたかつた。

それがかの女には渠の煮え切らない證據に見えるので、そんな時に泣いて渠を威し付けようとしたこともある。そしてその末には、さきの亭主が去年一度歸つて來て呉れと云ふ手紙をよこしたに對し、返事をやらなかつたのを悔い、國てあのつらかつた別れをしたあとて、まさかの時はこちらも死ぬつもり

で、醫者なる兄の藥局からアヒサンを一服盗んで來てゐることを白狀した。

時には、貞夫もこの神經がつよい女がどんなことを仕出かすまいものでもないと心配した。かの女は今も、泣き倒れてゐながら、

『あいつを追ひ出さなければ、あたいは死んでしまう』と云つた。そんな時には、渠はかの女に仕込んでやる仕事の話でもして、氣を轉じさせる外はないと思つた。

が、けふはまだ起きッぱなしてあるので、『兎に角、おれは飯を喰ひたい、ねえ。』

『まだ喰べないの――?!』

かの女は俄かにまた半身を起した。そして面倒臭さうに顏をしがめてこちらをじッとながめてゐたが、『今下の人が、もう直きお晝だと云ふてたのに――なんにも無いよ』と云つた時は、全くその顏がやわらいてゐた。

かの女は渠の食膳に茶づけの給仕をしながら、ゆふべ、山野の細君が貞夫の惡口を澤山云つたのを、かの女自身の恥辱であつたかのやうに訴へた。が、渠はそれを少しも氣にかけなかつた。烏山にからすがガア〳〵云つてる聲にまじつて、櫻の咲いてゐる道ばたから、例の乞食の『お助けて御座います』が聽えてゐる。

その日、お島が踊りの稽古に出ると、貞夫は或新聞の日曜附錄に賴まれた論文を書きあげてしまつた。それから、貞夫が外出したあとへ、加能泰藏が尋ねて來たが、あがつてかの女と話しながら、暫く待つてゐた後、また來ると云つて出たさうだ。

貞夫は愛宕下町の山野の家へ行つて見たのであつた。が、主人はゐなかつた。何だか、不斷のやうにづか〳〵あがつて行きにくいやうな氣がして、細君を呼んで貰つた。なか〳〵出て來なかつた。それでも出て來た時は相變らずにこ〳〵してゐるやうなところが渠の目に付いた。

『今お稽古をしてあげてるのよ。』

『さうでしよう、ね』と、先づ渠は云ふより外に仕かたがなかつた。この夫人も、書を教へてゐるばかりに、矢張り、自分の女房のやうに、教員然たる、云ひ換へれば、人に對して誰れにでも子供あつかひをする風が滲みて來たのを、渠は發見したのである。『ゆふべは、どうも、失敬しました。』

『あなたの奥さんも隨分、ねえ――？』

『あいつア、もう、仕やうがないのです。』

『あなただッて、さうでしよう――もう、いや』と、つッ立つたまま、からだを振つて、『あなたのやうな人が來るのは！』

『さう云はれるだらうと思つたのです』と、渠は苦笑しながら、『ですが、ねえ、まア、そんなことは云ひッこなし、さ――どうせ、山野君がゐなけりやア歸りますから。』

『さう――失禮、ね。』かう云つて、かの女は障子をしめにかかつた。

『畜生！』と云ふやうな淡い奮慨心を懷いて、貞夫は、ついその近處の玉突屋へ行つた。渠とも長らくこの遊びの仲間になつてゐる有名な金貸しが來てゐた。この人は、もと、歐米へまでも出かけて宗教の腐敗してゐるのを實見して歸り、一種の自己發明の耶蘇教を傳へるには、外國人の補助などを仰いでゐ

ちやア駄目だ、先づその費用たる金を自分で拵らへなけりやアと云ふ考へを以つて、金貸しになつた。この動機が丁度、貞夫の唯一の先輩たる人がコンミシヨンマチヤントになつたのと同じなので、渠は初めのうちは多少の尊敬を以つて接してゐた。が、貞夫の別な友人なる辯護士や會社員と大きな花を引いたり、惡辣な高利貸しとなつてゐるのを知るに至つて、もう、既に金ばかり欲しがるあゝ勝ちな平凡人に過ぎなくなつてゐると侮蔑するやうになつた。

さきに家を抵當に資本を貸せと交渉して見たのも、――どうせ出來なかつたが、――貞夫は向ふに一ッも同情などは乞はないで、あり振れたアイスとしてゞあつた。

けれども、丁度この人が獨り來合はせてゐたので、

「どうだ、負かしてやらうか、ね」と、貞夫はキウを取つた。

「今ちよッと途中で電話をかけに來たのだから。」から云つて、渠は袖さきのカフスを直し、手袋をはめ初めた。

「さうか――こないだの連勝をどうして呉れるのだ?」

「また、今度だ。」

「わたしとやりましよう」と云つて、ボーイが出たが、どうも貞夫も氣が乘らなかつた。いつもなら、見ると直ぐ親しい感じを起す青羅紗の玉臺や、こち〳〵云ふ紅白象牙の玉などが、渠の目にもあたまにも、散らけて遠いところにあるやうに感じられた。

三度に勝負まけをして、渠はキウを置いた。

「どうも、晝間は氣が締まらないで駄目だ。」

そしてお島の二階へ歸ると、やがて山野正也がやつて來た。

『もう、醉つてるのか？』

『例の、ね、書き割りの監督に行つてたの、さ——いつまで寒いと云ふのだらう？』

『君と一緒に濱町で目がさめると、意外のお雪であつたのも、こんな時候であつたよ。』

『さうだ、なア』と云ひながら、山野は少し離れて坐つてるお島を見て、『どうだ、御機嫌はいいか、ね？』

かの女はほほ笑んだが、横を向いた。

『君の細君も無事のやうぢやアないか？』

『だが、ね、君の細君にかぶれて、僕のもゆふべから變だよ——君にも何かいや味を云つたさうだが、あいつも感情家だから、ねえ。』

『まア、いい、さ、僕の事情のやうなものぢやアないんだから——僕も』と笑ひながら、『けさ、やッと逃げて來たよ。』

『君が惡いんだよ』と、山野は片手を下向きに火鉢の少し上に浮けて、それを上下すると同時に幾度も首を小刻みに動かした。

『役者のやうな眞似ばかりする』と云つて、お島は渠を初めから嫌つてゐるのである。今もこの樣子を憎しみを帶びて見詰めてゐるのに氣が付き、

『いや』と、渠は恐れ入りましたと云ふやうなお辭儀をして、『お島さんがいらせられたのでした、な。』

『ふん』と、また横を向いた。

山野は話題を轉じて、書家の社會、殊に劇場の書き割り書家の社會に、卑劣な人物が多いことなどを憤慨し初めた。

『書家社會ばかりぢやァあるまいよ』と、貞夫は答へた。『形式家のまだ勢力ある現代では、どの社會にても、新しい思想を體現し得るものを除いちやア、みんな僞善者でなけりやァ卑劣家ばかり、さ。』

『大きにさうだ――君も蟹の鑵詰めなどに熱心するのをやめて、お互ひにしツかり戰つて行かうよ。君は詩人、僕は書家ぢやァないか？』

『さうだ、ね』と、貞夫も答へた。が、戰ふのは自分一個の力にあるので、如何に親友でも、自分と共に自分の自覺するだけのことを實行するものはないのだと思つた。落ち付いて、腹の底から出る聲で、

『然し、僕は、この場合、どうしても、あの事業をやらなければならない――背水の陣を張つてるやうなものだから、ね。』

『それもさう、さ、な。』

『あたい、行て來る、わ』と、お島は立ちあがつた。

『ぢやア、勝手にしなよ！』貞夫はつッ放すやうに答へた。もと、二人で二階を借りてゐた氷川の家の細君――と云つても、一老人に對する下女あがりの妾――が手紙をよこした。前にかの女が勝手に頼んで置いた勤めの口だとは云つてるが、何か渠に對する反逆をたくらんでゐるのかも知れないと思つたので、その手紙を見せろと迫つたのは今しがたのことだが、どうしても見せようとしなかつた。見せないのはこれまでにも度々あつたことで、身うちからのらしいのもさうしてどこかへ隱してゐた。『叔母さん、うちのお父さんはどこにゐるのでしよう』と、貞夫自身の子が云ひさうな子供のハガキも、貞夫はかの

女の留守にこッそり机の引き出しを探した時に、ふと發見したのであつたが――

『どこへいらせられますか、奥さんは？』

『…………………』

『どうせ、めかけの口か、さうでなけりやア、下らない電話交換手ぐらゐの話にきまつてらア、ね。』

『なんでもええ！』お島はぷり〳〵して階段を下りて行つた。

格子戸の明く音がしてから、山野は障子のあはひから外をのぞいた。再び座に着いてから、

『よせよ、おい、あんな女！』

『僕だッて――その時機を見てゐるんだ』と云つて、貞夫はゆふべのさまを思ひ出した。逃げよう、逃げようとして、とう〳〵いやな巣まで引ッ張つて行かれた。お島の關係に於ても、あのかな臭い溝をのぞき込むやうな場合にまで立ち至つたこともある。

『僕が今度は君の眞似言を云つて、しッぺい、返しをするやうだが、ね』と、山野も靜子と結婚する、しないの騷ぎに、貞夫が一時山野のもとの細君の方に肩を持つた時の言葉を持ち出して來て、『よつぽど細君の方がいいぢやアないか？』

『情けないことは云ふなよ。僕はもッと〳〵新らしい生活をやりたいのだ。』

『それも君の說だから、惡いともなからうが――まア、あんなへたなラシヤメンじみた女はペケ〳〵！』

『だから、どうせ兩方ともやめ、さ。』

山野は、それから、芝居の興行と脚本作者の立ち場とを妥協的に論じ、座の方はどこへでも關係をつけるから、今日の見物に分る程度の新らしい脚本を書けと、頻りに貞夫に勸めた。

るものぢやアないと答へた。

が、貞夫はいづれ脚本は書くが、そんな妥協的態度で、とても、自分等の考へるやうないい物は書け

貞夫は、山野につれられてビールを飮みに行き、暗くなつて歸つて見ると、加能が來て、下の老細君と二人で話をしてゐた。

渠等二人が二階へあがると、加能は云つた、

『あの婆アさんは話し好ッきやぜ。』

『さうだらう、亭主がいつも遲くてなけりやア仕事から、歸らないから、その間は獨りでぽつねんとしてゐるんだ。』

『吉野さんは淸田さんにばかりくッついてて、一向下りて來ませんと云ふてたぜ。』

『まさか、そんなお相手も出來ないぢやアないか？、——そして、君にお島を貰へと云はなかつたか、ね？』

『………………』加能はちよッと赤い顏をしたが、『そんなこと云やせん。』

『それぢやア、僕も安心だが、ね』と、貞夫はわざと冷かしを云つて見た。

『ゆふべ』と、下から機嫌を取るやうな風に出て、『活劇があつたさうぢや、な——？』

『誰れに聽いた？』

『淸田にも、我善坊でも。』

『よせ、下らない！』から云つて、貞夫はこんな男に詳しいことも、短いことも聽かせるに及ばないと思つた。しやべる奴もしやべる奴なら、聽いた奴も、面白さうにこてから又我善坊へ出かけるには及ぶ

まい！これも、自分に兩方の女に對する若しくはどちらかに對する眞實の愛がないからだらう――若しそれがあらば、こんなぐら〳〵した、ふた股膏藥じみた男の出入は禁止する！『肝腎の用はどうしたい、きのふの――？』

『二三度行て見たが、いつも留守でまだ會へん。』

『ぢやア、その方をもッと熱心にやつて吳れたらいいのに。』

『やるよ、心配しないでも』と、笑つてゐる。

『何の爲めにぶら〳〵してゐるんだ』と云つてやりたかつた。

格子が明いて、締まつたやうだ――

『淸田さんですか』と云ふ婆ァさんの聲がした。

二人の眼は、見えない階下の方へばかり向いてゐた。

『ええ。』

障子が靜かに明いた――

『寒かつたでしよう――？』

障子が靜かにしまつた――

『そんなに寒いことも――へ。』

はしご段が靜かにトン、トン、トン――貞夫の耳には、お島のいつも人前ではなか〳〵をかしい程氣取つてるその樣子までが聽えて來る。

去年の暮れに買つてやつた細長い鵜の毛ショールを二つに折つて、これを片手に持つたかの女が現は

れた。

いつもにないほど、にこ〱、にこ〱してゐる。

「やア、女優さんのお歸りか?」から、あぐらをかいて見あげてゐた加能が云つた。

「馬鹿!」忽ち恥かしさうに顔を赤くしてにらみ付け、坐りもしないで「馬鹿!――早う歸つて呉れ!」

「そないに」と、ちよツと口をとがらせたが、加能のます〱輕薄笑ひの心を加へたのが貞夫に讀めた、

「おてらんてもええぢやないか?」

そして貞夫はこのありさまを見て、却つてかの女の外出事件に連つたこともなかつたのを感づいた。

六

トンと強く叩きつける煙管の音がして、

「わたしを何だと思つてるんだよ!」

「……………」

「假りのおめかけや、たまに旦那に來て貰ふ圍ひ者ぢやアないよ!」

「…… ……」

「お前の女房だ位は分らない野郎でもあるまい!」

「分つてらア、な。」

「それに何だッて、うちを明けるのだよ?」

貞夫は朝飯をしまつてから、机に向つてゐたのだが、下のこの怒鳴り聲に耳が引ッ張られてゐた。ま

た一騒ぎあるだらうとは、婆アさんのゆふべの心配しかたで豫期してゐた。お島はけさも何だか慰めを云つて聽かせてゐるやうであつたのに――

「仲間のつき合ひだから、仕かたがねい、さ。」

「つき合ひ、つき合ひッて、幾度あるのか、ね？そんなつき合ひは斷つてしまひなさいと云つたぢやァないか？碌にかせぎもしないで！」

「うへの先生でもやつてることだァ、な。」

「先生がお手本なら、直ぐ、けふ限り、わたしが斷つてしまうよ。」

「斷はるなら、斷はるがいゝが、ね。」

「生意氣をお云ひでない！」

貞夫は自分の女房より一段どころか、二段も三段もうへを行く女もあるものだと思つてるのだ。

「何が生意氣てい――これでも貴さまを年中喰はせてやつてらァ！」

「喰はせるだけなら、ね、犬でも喰はせるよ！米の御飯が南京米になり、南京米が麥になり――」

「何だ、この婆々ァ！見ッともねいことを云やァがつて！」

「なぐるなら、なぐつて見ろ！働らきもない癖に！」

取ッ組み合つて、あッちの障子に當り、こッちのから紙にぶつかりしてゐるやうであつたが、大きな女のからだが疊の上に投げ飛ばされたやうな音がした。

「婆々ァ女郎め！」

「殺してやるから、さう思へ！」

臺どころの方でがた〳〵云はせてゐたが、またとッ組み合が初まつたらしい。

「おい、行つて見ろよ」と、貞夫はお島に云つたが、

「あたい、おそろしい」と、ちいさくなつた。

渠が下りて見ると、婆アさんをねぢ倒して、そのさか手に持つてゐる出齒庖丁を亭主がもぎ取つたところであつた。

「どうしたと云ふんです、ね？」

「あの野郎がまだ目をさまさないから」と、婆アさんはからだを起し、『今、根性をつけてやらうとして。』

「どッちが」と、立つたまゝ荒い息をして、『腐つた根性てい？』

「手前に——きまつて——らア、ね」と、これも息を三度につきながら、立ちあがり、長火鉢の座に行つた。そして貞夫に、『どうか——火の方へ——お近く。』

亭主は、庖丁を臺どころの方へ投げてから、婆アさんとさし向ひの座についた。そして、

「あり勝ちの夫婦喧嘩ですから、どうか惡らず」と云つて、若いが、その場だけに血の氣の失せたやうな顔で笑つた。

貞夫には、この男がこんな老母のやうな女を女房と思つてゐられるのが不思議なほどであつた。ずッと若い時からのくッつき物なら知らず、まだこの二三年來の慣れ合ひだと聽いてるので、ただいろんな好き〳〵もあるものだと思つた。

「まア、喧嘩をするにも及ばないでしよう。」

「濟んで見りやア」と眞面目な顔つきで亭主を見ながら、『馬鹿々々しいことですが、ねえ。』

「あは、は、は」と、亭主は笑つて見せた。
「女と云ふものは思ひ詰めりやア、われながらおそろしいものですから、ね、まア、先生も御用心なさいましよ。」
「十分用心が、必要です、ね。」と、ただほほゑんでゐた。
「わたしが先生の奥さんなら、をどり込んで殺してしまうが、ね――まだあなたのは、教育もおあんなさるんでしようから、おとなしく控へてゐらッしやるんです、わ。」
「さうでもないのだが――」かう云ふ人々が望む教育なるものが、今日のやうぢやア、これを與へるものの方針に非常に間違つたところがあるのを、貞夫はどこかで訴へたくッてならないのである。「斯うすべからず」の消極概念が殆ど教育界全部を占領し、「斯うすべし」がまた、ほんの、形式にばかりとどまつてゐて、有識者と云はれるものが凡て、如何に嚴格でも、また如何に熱心らしくあつても、空に他を教へようとして、少しも自己の實行如何を反省しない！何のことはない、法律と教育とで以つてわが國人は自由なるべき人間本能の誠實を、わざ〳〵、無意義に制限せられてゐるばかりだ！
たとへば、結婚と云ふ形その物が道德でも實質でもない。實質が既に違つた以上は、その形の破れて新たまるのを認める法律が必要だ。同時に、また、婦人から云つて見れば、くッ付き物が離れた場合にそこに獨立する精神や生活法がいつも具備してゐるところの教育を、不斷から、與へられてゐなければならない。お島のやうなものやこの婆アさんのやうな、身を棄てて低い生活に安んじられるものは、寧ろどんな教育でも入りはしないとしても、中流生活の婦人が無教育ではない癖に獨立生活的教育の素養がないのは、わが國の發展を害する最も大なる缺陷の一つで、自分が壽美子に苦しめられてゐるのもそ

れが爲めだと思つた。

『どうせこんなことを云つたッて分らない』のだから、貞夫は再び『もう喧嘩はしッこなし、さ』と云つて、二階へあがつた。

晩春も、もう、過ぎようとする或日の正午前のこと、お島は小い低い聲で歌ひながら、三味線を獨りさらひしてゐた。

貞夫は机に向ひ、烏の啼き聲も乞食の哀訴も聽えなかつた。が、ふと、自分の耳を疑はせるやうなことを叫んでるものがある。女のやうだ―、否自分の妻のやうだ―

『あなた、少しうちへ歸つて下さらないと困るぢやアありませんか？うちばかり明けて――うちがどうなつても構はないと云ふのですか？子供だッて、云ふことを聽かないで――あなたがゐないぢやア、どうすることも出來ないぢやアありませんか？』

『馬鹿！』渠は私かに應じて立ちあがつた。そして肉眼の力をふさいでゐたいやうな豫期をしながら、障子のすき間から下をのぞいて見た。

道ばたに植ゑ並んでる櫻の枝々からは、昨夜の雨に打たれた殘りの花びらが、まだおもたさうにひらり、ひらりと落ちてゐる。その中を、かの女のあふ向いた顏だけ見えたが、段々あとずさりして下の方まで現はしながら、なほ叫びつづけてゐる――

『困りますから、早く歸つて下さいよ。子供が云ふことを聽きません！どうか、お願ひですから、歸つて下さい！ほんとに、おねが――！』

がックりと倒れかけた――櫻の一つの根もとに敷かれた乞食のこもの端に、はき物のかかとが引ッかかつたのだ。
「お助け」をやめて、ぼんやり仰いでながめてゐた親子が、「あは、は」と笑つた。
が、それをじろりと一瞥して、かの女は僅かにからだを踏みこたへた――
「お願ひだから、ちよッとでも歸つて下さい！」
「阿呆ぢや、なア」と毒々しく云つて、いつのまにか後ろへ來てゐるお島の手が、貞夫の背中にとまつて渠に顫えを傳へてゐた。
「旦那、見ッともないぢやアありませんか？」下の婆アさんもいやな顔をしてあがつて來て、かう云つた。
「なアに」と、婆アさんを叱り付けるやうに、「うッちやつて置け、置け！」
「あなたはよいとしても、わたしのうちで困ります、わ。」
「あなた、聽えませんか？」
「また、云ふてる！」お島は婆アさんにどうしようと云ふやうな樣子を見せた。
「わたしが兎も角下へ通して置きましようか？」
「さうです、な、――どうか」と、お島の聲も息詰つてるやうだ。
「あなた――あなた――ゐないのですか？」
またのぞいて見ると、「聽えませんか、ゐないのです」とおめいてるその前を、職人體の男と女學生とどこかの夫人が別々にじろ／＼見返りながら通つて行く。
乞食の哀訴はそれらに對してしなかつたやうである。

がらりと格子戸が明いた――

『奥さん』と、婆さんの激してるやうな強い聲がして、『まア、こちらへお這入りになつたらどうです、ね。』

『ほんとだ、困つてしまう!』壽美子はづかづかとこちらへ歩き出した。

『あたい、知らん!』から云ひ放つて、お島は裏の方へ向つた窓ぎはへ行き、横向きに窓の眞ン中の柱に身をもたせかけた。

貞夫は、おもて窓に向つた自分の机に對して、坐わつた。

格子戸が、かたりと荒々しく締つた――玄關の障子がまた荒々しく締つた――

『二階でしよう。』

『へい――』

どた〳〵、どたと荒い音があがつて來た。

『どうしたんです、ね、あなた!』

『…………』

『子供達が云ふことを聽かないで、仕やうがないぢやア御座いませんか?』

『…………』

『聽えないのですか?』

『…………』

『つんぼですか?』

『…………………』貞夫が、ふと、惡かつた一方の耳が先づ直つたらしいのを思ひ出してゐると、かの女はつづけて、

『たとへかた〳〵の耳はまだ直らないとしても、一方は聽えるでしよう？』

『…………………』

『返事をおしなさい！子供が――』

『默れ！子供は、ほんの、かこつけで、貴さま自身がだらう！』

『…………………』壽美子は、所天が突然ふり向いて睨む鋭い眼の力を受けて、灰色じみた顏色をちよッと赤くした。

貞夫は、かの女が小指一本ででもさわれば倒れさうな足もとで、段をあがつたところからこちらを見詰めてつッ立つてゐるのを、一歩でも近よらせないと云ふ勢ひを見せて、

『して、子供のことぐらゐを處分出來ない女だから、馬鹿なんだ！』

『さうは行きませんよ――』

『よせ！』

『父親があるのに留守ばかりぢやア――』

『おれは、ね』と、分らせるやうに念を押して、『手前のゐるやうな家にやア父でもない！所天でもない！』

『馬鹿をお云ひなさんな！』

『分らず屋！』貞夫はそれッ切り横を向いて、そ知らぬふりになつて考へた――おれは、妻に對しても

こんなことをこれで三度もやらせて置くだけが、まだ弱い――妻も矢ッ張り、その後ろに來てゐる婆アさんと同樣、全く自分の所謂無教育、無自覺だと。けれども心のうちで「若し少しでもあいつに理解力があつたら、それを糸口にして、おだやかにあの狀態を改造して行かせるのに！」

「どッちが分らず屋だ」とつぶやきながら、かの女は二三歩お島の方へ行つて、「あなたもあなたでしよう、うちが困るぐらゐのことは氣が付かないことァないだらう！」

「…………」

「自業自得で因業な病氣にかかつて、さ、入らないおかねまで使はせたんですよ！――その衣物だッて、拵らへて貰つたんだらう！――あすこに掛つてる白い首巻きだッて、買つて貰つたんだらう！囲ひ者氣取りで、三味線など彈いて！」

「……………」

「さア、わたしの出るところへお出なさい！」

「何をする！」と、お島が云つた。

　貞夫が胸おもく張り詰めてゐる怒りを動かして急にふり向くと、お島の廣島銘仙の袂を壽美子が取り摑んだのを、摑まれた方がふり切るところであつた。同時に、お島は訴へるやうな目をこちらに向けてゐた。

「どこへ出るんだ！」渠は飛び込んで行つて、「この氣違ひ婆々ア！」

「婆々アでも、何でも、出るところへ出たら、分ります！」

「自分で行け」と、お島も負けない氣で、「巡査のやうなものに笑はれて來い！」

「笑はれるのはお前さんですよ！――あなたも」と、壽美子は貞夫を返り見たが、鋭いにらみを避けるやうにして、「こんな見すぼらしいとこにゐないだッていいでしよう？」
「何をぬかす！」渠は思ふさま壽美子の顔をぶつた。
「そんな手荒いことは」と、婆アさんがとめようとした時は、壽美子は既に横ざまに倒れてゐた。
「ぶつならいくらでも御ぶちなさい」と、案外けふはおとなしく起きあがつて、「警察へ出れば分るのですから。」
「そんなことを、奥さん、云ふものぢやァありませんよ。あなたも恥ぢなら、旦那さんにも恥ぢてしよう？」
「恥も何もかまふものですか？」
「さう無茶苦茶になつちやァ、あなた――まア、下へ來て、氣を落ち付けなさいよ、旦那さんや清田さんには、わたしからまたよく申しやすから。」
　貞夫もお島も他の二人の樣子をばかり見つめてゐた。
　婆アさんの片手に脊中を押されて段を下りかけた壽美子が、こちらをちよッと恨めしさうにふり向いて見た時、かの女の少し前に反つた大きな前齒に血が付いてるのが見えた。
「早く引ッ越すんだ！」から云ひ放つて、渠はどうせ行くべき北へ行くことを思つたのだが、お島はさうとは知らず、
『それがええにきまつてる、さ。』

七

毎日のやうにやつて來る加能だが、その引き受けた要件を一向はか取らせて呉れないので、貞夫も亦棄て身になつて、よく方々の玉突屋へ通つた。

耶蘇教あがりの高利貸しとも勝負した。友人の辯護士や會社員やアメリカ歸りの無職者とも勝負した。さう親しくもない官吏や年若い銀行員等とも勝つたり、負けたりした。

多少でも名の知れてゐる文學者と云ふので、知らない人々までが面白半分に、渠の周圍にはいつも集つて來た。

「吉野さん、盤の鑵詰とかはうまく儲かりますか」など云はれて、貞夫は一生懸命にやつてゐる勝負の腰を折られたこともあるが、

「まだその時節にはならないのです」と答へながら、遠く離れキン玉を力一杯出して取らうとしたが、一方のに當つて一たびコシンに這入り、それから自分の玉は縱に二たび往來して、なほその餘力がフロクになつた。

「あは、は、は！」見てゐるものは一切に笑つた。

「でも」と貞夫も微笑しながら、「當つたのは當つたのだらう。」

「さうきつく突いちやア、象牙の玉でもこわれますよ」と、女ボーイも口を出した。

「こわれたら、辨償するだけのこと、さ。」

「然し當ることは善く當る！」から感心したやうにささやくものもあつた。

こんな時には、貞夫も額を汗ぎらせるほど調子づいてゐるのである。そして夢中になつた時突きかたが普通の正しい姿勢と違ふので、それがおのづから渠の一特色となつて他人への愛嬌の種となつた。渠はこれを別に頓着しなかつた。

或るをんな友人が西洋料理を計劃しかけた時、

「吉野さんなら、實費で通すから常連をつれて來て下さい、ね」と云つた。

「そりやアよからう――あなたの爲めなら、廣告屋の代りにもならう」と、渠は冗談半分に答へた。この計劃は立ち消えとなつた。

ところが、今回加能が一人の、玉突屋を開業したいと云ふ人――これが金を貸さうと云ふのだ――に紹介して置くと云つて、貞夫を京橋へつれて行つた。

「おれに常連を頼むは、眞ッ平だぜ。」

「ええぢやないか、二百圓が出來さへすりや?」

この人は貞夫も知つてる或文學者の弟で、新らしく手を出した出版業をこの頃大體に見限り、築地橋のそばの或家の二階を借りて、年うへの、何だか分らない女と同棲してゐるのであつた。よく／＼おなじやうな人間にぶつかるものだと、貞夫は考へた。

「僕も大切な金で」と、主人がおも／＼しい氣分になつたのを貞夫は見とめて、おのれも今の氣分を解したと思つたが、『加能君の紹介でもあるし』が、渠に聽かされては、力のぬけた言葉であつた。

「また、これから君にも交際して貰いたいので、加能君にも話した通り、現金が近々歸つて來さへすれば、君の爲めになるのなら、融通してあげてもよいのです。」

「無論、僕の事業費に追加が必要なのてすから。」
『それは加能君からよくうかがつてゐますし、君の事業の有望なのも分つてますが――この急場さへ切りぬけたら、あとはどうでもええ云ふやうな――」
『そんな無責任はしません！」
「無論、君のことだから――然し信用貸してすから、念の爲めに申して置くのてす。」
貞夫はあッちの季候では、この頃やうやく蟹が取れ出すので、六七月となつて牧獲の絶頂に達し、八月の半頃まてて一先づおしまひになるのだから、先づ九月一杯に返却する約束なら、決して苦しいことはないことなどを説明した。
「然し僕は君の兄(にい)さんの文學には反對て、よく攻撃の矢も向けたが――それに關係を及ぼして貰つちやア困りますが、ね――」
「第一、兄とは別に關係のない金てすから――」
「さうなら實に結構てす。」
三人はそれから近所の玉屋へ行つたが、貞夫は他の二人の教(をし)へ手てあつた。

●

渠は玉を突きに出さへすれば、どうしても夜の十一時か十二時てなければ歸らなかつた。
お島はこれを怒つて、いつもさきに褥へ這入つてゐた。
「おい、お嬢さん、どうしたい」などと、一杯機嫌てそのそばへ坐わると、向ふを向いてるまま、そら寢をしてゐることもある。そして突然こちらを向いて、

「あたいを大事にしないからぢやないか？」

渠は、ランプの光が直接にかの女の顔に當らないやうに、その方へ、原稿紙の半切れを笠に張つて目隱しをしたその蔭を向けるのであつた。

「閨中美人！」そして穢多おぢやアないかの疑は、もう、ほんの、形式的に、渠のあたまにくッ付いてゐた。

或夜、風の氣味だからいつもより早く、九時頃に貞夫が歸つて來たら、女はちよッと出て來るからと云つただけで、明るいうちに外出したまままださうだ。

「どこへいらしッたんてしよう、ね？」

「さア——」

「もう、お歸りなさいませんでは、ねえ——」

「さア——」

「女おひとりぢやア、この頃ア物騷てすから。」

「なアに、あいつのことだから、また引ッかきむしるなんかして——」

「うふ」と、婆アさんは笑つた。きのふ、女房にしろ、しないと云ふ喧嘩をして、貞夫が首ッ玉のところをかきむしられたのを、かの女は思ひ出したらしい。「あのお方も氣のきついお方てす、ね——今どきの若い方てすから——ても、まだあなたの奧さんのはうが餘ッぽどいいぢやア御座いませんか？」いい加減にあしらつてから、長火鉢のそばを離れ、二階にあがるが早いかあかりを付けて戶棚をあけて見た。渠が心配したやうなことてはなく、女の荷物はそのまま殘つてゐる。

その代り、またそれ以上の心配がわれ知らず浮んだ。

「まさか――」と、打ち消しながらも、あの時を――あの、壽美子がここへ踊り込んで來た時を――思ひ出さずにはゐられなかつた。壽美子が歸つてから、女はまたあいつを早く追ひ出せとせがんだ。貞夫はさう容易に法律が許さないと云つて聽かせた。――お島は、すると、負けてゐるからぢやないかと突ッかかつた。いや、さうぢやアないと押さへ付けた。――そのあげく、女はむッとしてしまつて、何も云はないで出て行つた。貞夫はせい〱したつもりで、散歩に出た。長くも留守にしてゐられない用があつたので、何げなく、烏山へ登つて見ようと云ふ氣を起した。毎日、毎日、障子をあければさし向ひになる山だが、これまで登つたこともなかつたのだ。

すると、この山の、あッち側の急傾斜に瀕したところで、女がこッちの來たのも知らず、松の枝に自分の細帶を結びつけ、その出來た輪につかまつて、今にも首をかけようとしてゐた。

渠はそのそばへ驅けて行つて、憎々しいほどに怒罵の聲をかけた、

「何をする！」

「死ぬ！死ぬ！」女は渠の手をふり切らうとした。そして泣き聲になつて、「どうせ――みなに――こんなに恥ぢをかかされて――お母さんにも、兄さんにも濟まん！」

「何も死ぬにやア及ぶまい――」どうせ、こッちに對しちやア、もう、半ば死んでゐるのだから、ね、とまでも云ひたかつた。また一方には、申しわけに死ぬのは、申しわけをしなかつたと同樣ではないか？生にばかり執着する渠には、これほど無責任なとはなかつた。さう云ふ心のうちで、「馬鹿だ、なア！」

「實際、死ぬ氣であつたのか」と、貞夫はあとになつて尋ねて見た。

「さう、さ！」

(中阡四の一)

現代第一の大家が心血を濺ぎし大著

前京都帝國大學總長澤柳政太郎先生序
伯林大學教授ドクトル、グスターウ、シュモラー先生原著
東京高等商業學校教授 文學士 山田伊三郎先生譯補

第二冊新刊

國民經濟原論

シュモラー原論の譯補、豫告の如く茲に第二冊を公刊す。本冊の載する所は原本第一冊第一卷の全部にして其取扱へる問題は一に國民經濟樹立の地盤たる自然關係也、二に國民經濟の中心現象たり其發展に特色を與ふべき人種及民族の研究也。三にマルサス以來殊に識者の注意を喚發したる人々の論議なり。茲にシュモラーが統計を基礎として廣く歷史に察して三項の救濟策を提供したるは多とすべし。四に國民經濟生活を支配し、之に影響するの力として重視すべき技術の進步也。故きを溫ねて以て所謂近世機械時代に及び、先づ記述して後之を評論し、而して最も精力を傾注せる觀あり。既に譯補の第一冊概論の見地は廣さ深さに於て經濟學史に異彩を放ち、本冊の叙述は即ち此の見地を以て斯學に近接せる諸科學の領域を涉獵して殆んど遺憾なし。類例なく匹儔を求むべからず、寔に珍重すべき努力と謂ふべし。

本書の飜譯は曾て二三人士に企圖せられしも、其浩瀚と原理の深遠なる爲中止せられしが、今や原著者に私淑せる山田教授が絶倫なる精力を以て駸々脫稿しつゝあり、期を錯らず完成せんこと疑ふべからず。大方の諸君、意を安んじて申込まるべきなり。

要素之部
菊判紙數四百餘頁
定價金壹圓五十錢
郵税內地十二錢
以下組織運營
總覽之部續刊
第一卷壹圓六十錢

東京神田 合資會社 冨山房
振替五〇一 電本四一三〇、一〇三六

佛國 ルネ、バサン著
馬場孤蝶序
永代靜雄譯

好評嘖々

●文明の田園に及ぼす影響、罪惡を活寫せる社會小説

都會病

四六判 クロース製 定價金壹圓廿錢 小包料金八錢

法學博士 浮田和民著
五版 **社會と人生** 定價壹圓六十錢 小包送料十二錢

海老名彈正著
再版 **國民道德と基督教** 定價壹圓十錢 小包送料八錢

外國語學校教授 村井知至著
再版 **時代思想** 定價壹圓十錢 小包送料八錢

文學博士 桑木嚴翼閲并序
獨逸リール博士 安井文學士譯
再版 **現代哲學講話** 定價壹圓五十錢 小包送料十二錢

日本女子大學教授 松浦政泰著
再版 **代表的世界文學物語** 定價金八十錢 送料金八錢

農商務省編纂 松尾音次郎著
四版 **南洋の產業及其富源** 定價金貳圓 送料金十二錢

農商務省編纂 松尾音次郎著
新版 **我國商業の現在及未來** 定價金貳圓 送料金十二錢

慶應義塾々長 鎌田榮吉著
再版 **教育と實業** 定價壹圓四十錢 送料八錢

佛國 ジラルダン夫人著
和田垣博士閲並序
安藤忠義 武者金吉 共譯

最新刊

ステッキ奇談 如意杖

四六判上製 定價金壹圓 小包料八錢

●佛國の文學の妙味を解せんとする者は必ず一讀せよ

發行所 東京市小石川區櫻木町六 振替口座東京一四四八四 **北文館**

(中附四の四)

『ぢやア、なぜ兄から盜んで來てゐると云ふそのアヒサンで死なない――もう、棄てたのか？』

『あれはもッと大事な場合でなけりやア――』

『二度も三度も死ねる氣かい――うそを云つてらア。』

から云ふ對話もあつたのを思ふと、然し、また、今夜は、うちにゐないだけ、何も事件がありさうでない――まさか外で毒藥を服用しようとは！

渠は風邪の熱を出さうとして、水を大きなコップに三四杯飲み、獨りで寢どこを敷いて、そこへもぐり込んだ。

寢苦しいので、右を向いたり、左を向いたり、うつ伏しになつたりしながら、渠は女の歸りを待つた。

――

お島は、おれに身をまかせる前に、ちよッと朝鮮人へ目見へに行つたことがあるぞ！然しあれは仲働きの候補で、いやだから一日でよしたと云つた。

質屋の隱居のめかけていいなら、十圓の口があると、桂庵から聽いて來たこともあるさうだ。

おれのところへ來てから、病院通ひの外は、さう獨りで出歩いたことはない。

『どうせ、あたいは日かげの身だ――恥かしうて、うか〳〵外へも出られん』と云つてゐた。――

渠は苦しいので左りを向いた。

『けれども、どうせこんな身分でゐるときまつたら、お前のやうな貧乏人は相手にしやせん。』――ひよッとすると、ああ云ふつもりで、何かの野心を起したのぢやアなからうか？

あの氷川の森かげの下女細君、あれがそんな風な口をかけてゐるのぢやアないか知らん？一度手紙が

來てから、よくあすこへ行き〱する。——

渠は右を向いた。

今夜も亦あすこなら、高が知れてゐる——が、——あいつは、二三軒の口入れ屋を歩いた經驗がある。いざとならば、今度は大膽にその暖簾をくぐれよう——？

現に、この隣りの桂庵婆アさんも、こないだ、變ななぞをかけたと云つた。あの婆アさんは、おれのおやぢの生きてる代から、おれのうちへ出入りしてゐたのが分つた。して見ると、今は逃げて去つた繼母がまだゐる時、繼母がお島を第一に紹介した口入れ屋はこの隣りであつたらう。

「下らないことを——」と自分で云つて、また寢返りした。

繼母を愛してゐた父は死んだ——その葬式はまだその時生きてゐた隣りの和尚さんに頼んだが、おれはどんな形式で以つてでも宗教家の手で葬られたくない。これはおれの主義だ——まさかの時の爲めに、おれは喜美子にも、お島にも云つて聽かせた、おれがおれを去る時は、決しておれの主義を恥かしめるなと。

宗教——形骸ではないか？たとへ宗教心——はあるとしても、却つて宗教その物にはない。生その物に執着する努力を宗教心と云ふなら、刹那刹那の實生活がそれだ。今のおれの苦悶が乃ち宗教心だ。

——

いつのまにか、渠は、仙臺の耶蘇教學校にゐる時、松島へ行つて度々獨禪をしたことや、中學教師をしてゐる時、毎土曜日から日曜日にかけて比叡山へ登り、いろんな經文を調べたことなどを思ひ出してゐた。すると、自分の義兄の幼時からの遊び仲間であつて、自分の尊敬してゐた比叡山の僧で、十五年

も山中の業をしたものが、業を終へて下山すると直ぐ、村の女の爲めに墮落したと云ふ記憶が伴つた。

『然し實際は墮落ではない、人間として當り前になつたのだ！』――

渠はうつ伏しになつた。

何だか、から――寂しいやうな――身輕になつたやうな――さツぱりしたやうな――足かけ二年を初めて獨り寢してゐるのであつた。

どこかの嚴粛な敎會で讃美歌の聲とオルガンの音とがよく揃つて、その中へ惡念や惡物が何もかも消えて行くやうな――どこかの靜寂な本堂で蠟燭の光が眞ツ直ぐに燃えて、永劫の聲が聽えるやうな――そんな氣分にもなつた。

今一度女や事業を遠ざけて、世外の人になつても見たい――が、――或山の荒廢した堂内で一夜を明かした時、おれは狸でも狐でも出て來て呉れた方がいゝと思つた。周圍の山林を吹きまくる風が唯一の賴母しい物であつた。が―その―その風は何だ？、矢ツ張り、今感じた永劫の聲だ―讃美の歌だ！、『形を以つて形を追つてゐたのだ。』まだ〱そんな低級な自分ではない――自分には少くとも一種の哲想がある。否、その哲想を自由に具體化した生活がある。これはいつかは小説にも表現して見なければならないと思ふと、直ぐ又ほんの筆さき專門の作家や世の雜誌連の雜評に對して、今から用意した侮蔑の念が浮んだ――渠等は哲想のテツの字も分らないのだ、まして哲想を自由に具體化した人物の描寫をやと。渠はまたあふ向けになつたが左右には觸れるべきやわらか味の物はなかつた。そして自分のからだ中があせばんでゐるのばかりが感じられた。然しこの病氣に苦しみ、女に苦しみ、事業に苦しみ、自分自身に苦しむ自分その物の熱とあせの臭みとが、この場合、一番懐かしかつた。

自分と共に並んで寫眞を取つたが、如何にも野暮臭い花嫁が現はれた。
『兎に角、あの品だけは、どうしても、出してやるよ』と、貞夫は時々念を押した。
『あたいをさへ可愛がりやア、あんな物はやる、さ』とお島は、不斷、その品ばかりを心配してゐるにも拘はらず、平氣で云つたことがある。
『まだ、ね』と、輕く受けて、『おれの一身を田舍婆々アのかたみ位でふん縛ることは勿體ないよ。』
『では、直ぐに質屋から出して來い』と、かの女は怒つた。
あれを出してやらうか、それとも暗に手切れ金のつもりで新らしい衣物を一つ買つてやらうか、どつちを撰ばうかと考へる日が貞夫に來た。
『おい、何か衣物を欲しいことはないか、ね？』
『買うて呉れる』と、かの女は急に喜んでやわらかに首をかしげたが、『では、セルが欲しい。』
その日、貞夫は不時に這入つた原稿料をふところにして、かの女と共に白木屋へ行つた。二階は棚浚ひの爲めに賑はつてゐて、かの女は一方の端から他方の端まで熱心に見て歩いても、買ひたい物が澤山あつて、豫定額の中をどれで滿たせばいゝのか分らなくなつた。
『どれにしよ』と、のぼせ加減にかの女はあとについて來た貞夫を返り見たが、渠はかうして別れることばかり考へてゐたので、たゞ張れ物をそツとして置くやうな氣で返事をした、
『どれでも好きなのを買へばいゝだらう。』
『…………』かの女は、渠をふり棄てるやうにして、反對の側に足を運ばせたので、渠は椅子に腰かけて、圓テブルの上のマチを取りあげた。

そして去年の暮の大晦日に、粗末なのだが、蒲團を一組買ひに出た時のことを思ひ出してゐた。案外安く買へたのが愉快であつたので、その餘勢で麻布箪笥町の通りを赤坂の新町まで古道具屋や夜店などをひやかして歩き、古物の火鉢を約束したり、火ばしや餅あみを買つたり、——そしてそれがまかつたり、添へ物をさせたりするのが面白さに、入らない物まで値切つて見た。

『そんなに使たら、あとで困るぢやないか』と、お島の方から注意をした。が、それでもなほ、自分には、いろんなこざ／＼した物を買ひながら、店から店を渡る興味が盡きなかつた。

そして自分とお島とは、共に兩方の手に持ち切れないほど、日常の必要物や化粧品や食物の皮包みを持つてゐた。

『けふの氣分は、然し、丸て違ふ』と、貞夫はわざとゆッくり煙を吹きながら、お島を初め、多くの婦人連がちよこ／＼と屈んでは歩み、歩んでは屈み、順ぐりに同じ切れをいじつては行く樣子を傍觀してゐた。

『ちよッと來てな』と、お島はあわただしく顏をしかめて呼びに來た。そして貞夫が立ちあがると、あたりに人がゐるのも構はず、渠の袂をぐッと引ッ張つて、『ちッとも一緒に見て呉れへん——人に買はれてしもたらどうする！』

かの女は急いで白羽二重の夏帶地ばかりかゝつてゐるところへ行き、その一つの端を攫んだと思ふと一人の女の後ろを越えて、また向ふにある一つの端を取つた。そして引き締つた笑がほて、

『どッちがえゝだろ？』

中に圍まれた女は、直ぐその下からくぐり出て、お島にちよッといやな目付きを投げた。

貞夫は、かの女をしてぐづ〳〵と人の邪魔をさせて置くにも及ぶまいと思つたので、わけも無く自分に近い方のをあごを以つて示めし、

『これがいゝだらう』と、尤もらしく答へた。で、かの女は他方のを放したが、かの女の手に殘つたのには、竹に雀の畫繪が書いてあつた。

『では、これと下て見たセルとにしよか？』

『ぢやア、さうしなよ。』

渠はこの二つの品に半襟を一つ加へてやり、これが代金を拂つてから、食堂で木原店の汁粉を取り寄せた。

九

お島が最終電車に間に合ふか合はないほどの時刻に歸つて來たことが、今一回あつた。そして矢ッ張り、前回と同じやうに、氷川の森蔭の細君のところへ行つてゐたのだ。そしてあの人がいろんなおどけた話をして歸さなかつたものだから、つい、また遲くなつたと申しわけをした。そしてまた、あの人がこッちを引きとめてゐたのは、亭主の留守が寂しいからであつたのだから、あのいやな白髮おぢィが歸つて來ると、人を直ぐ出て行けと云はないばかりにあしらつたと、訴へるやうに報告した。

けふ、初めて縫ひ上つたセルを着てゐるのをちらと見て、貞夫はかの女がこれを見せびらかしに行つたのだ、な、と分つた。が、前回に於て、既に女の夜遊びを懇々戒めて置いた言葉を破つたのを憤り切つてゐたので、何等の返事をもする氣にならなかつた。

かの女が貞夫の枕もとに坐わり、不斷通りの笑がほを見せたのを、渠は枕の上から睨み付け、おほきな聲を——下への遠慮の爲め——押しつぶすやうにして、

「馬鹿」と一喝した。『あんな女の相手をしていて、うちをどうするんだ！」

「…………」見る〳〵顏色を變へて、『うちなどありやアせんやないか？——そんなに可愛けりやア、早うあいつを追ひ出して、あたいを本妻にせい！』から云つて、かの女は力一杯に貞夫を蒲團の上から兩手で突きのめした。

「…………」貞夫は返事をしないで、あふ向いたまま、目をつぶつた。そしてこの女も駄目だ。かの壽美子も駄目だ。また、父の遺產をすべて投げうつた事業も、あと僅か二百金の出來ない爲めに、すツかり時期を逸してしまうかも知れないと思つた時、寂しい、寂しい氣持ちが胸に迫つて、熱い涙が一滴自分の頰に傳つたのをおぼえた。

あかりを吹き消した音がしてから、直ぐだ——

「妻にして呉れ、妻にして呉れ」と、いつに無くこわ張つたからだを、幾度も、かの女は貞夫に投げつけた。『して呉れんと、殺すぞ』とも威かした。

それでも貞夫は目も明けず、口も開かなかつた。うと〳〵と眠りに入りかけた頃、蒲團の一端が引ッ張れたのに氣が付いて、目をあけると、——いつのまにか枕もとに置いたランプがともされてゐて、——お島は褥をぬけ出て、蒲團の裾に當る押し入れの、膳やまな板を入れてある方の唐紙を靜かにあけた。

光があたまで遮ぎられてゐるのを幸ひ、見ない振りで、細目に目をあけて、かの女の横顏を見ると、かげのせいか、低い鼻まで鼻筋がくッきり通つてゐるやうに目を据ゑて、押し入れの中をのぞき、右の

手に出齒庖丁を取り出した。

一度はぎよッとした爲めに、ねむ氣は全くさめてしまつたが、

「なに、くそ！」再び目をつぶつた。そして子供の時、空想的に望んで見たことが、今、多少の事實となつて來たと考へた。自分を「ぼんさん、ぼんさん」と云つて、よく菓子を呉れたり、下駄の鼻緒を直して呉れたりした、あの船乘りのかみさんだ。他に土方の男が出來た爲めに、亭主をくびり殺さうとした時、亭主が氣が附いてはね起ると、枕もとに出齒庖丁もあつた。その翌晩は船が大阪にとまる順番てあつた。そしてその翌々晩に、歸つて來て、渠は前々夜に何事もなかつたかのやうに、毒婦の室に入つた。貞夫はこんな大膽なおやぢになつて見たいと、おぼろげだが、思つたことがある。

『手切れの口實にはいい機會が來た』と覺悟して、渠は出來るだけ息をゆるやかにしてゐた。

お島はそッと坐わつたやうだ。その裾のべから押し出された空氣が、生あッたかく鼻を掠めて、一種のにほひがあつたのに、貞夫は今更らのやうな氣がした。

自分には、これがかの女をいやになる心の條件の一大原因であるとも思はれた。

蒲團がめくれたかと思ふと、やがてひイやりした物が輕く、貞夫の左りから右の方へ、その喉の上を横切つた。……

「さうだらう、威かしに過ぎない」とは口に出さないで、するりと顏をかの女の方から遠ざけて起き上り、「なによウする！」

「殺してやる！殺してやる！」

その時は、もう、出刄は貞夫の手に在つた。そして暫く、二人は無言て、睨み合つてゐた。

お島は下へおりて行つた。下の臺所へ他人の刄物をでも取りに行つたのかと心配してゐると、便所の戸を明ける音がした。

貞夫は明けッ放しの押し入れから鰹節削りの小刀を取り出し、机の上のナイフと持つてゐた庖丁とを合はせて、自分の寢てゐた側の敷蒲團の下に隱した。そしてかの女と入れかはりに便所に行くふりをして下におり、臺所を探して見ると、下の人の使ふ庖丁はあつたので、これをもいつもの位置とは違つてちよッと氣がつき難いところに置いた。渠があがつて來たら、かの女は渠の机のあたりにまご／＼してゐたが、また押し入れへ行つて、頻りに何かを探し初めた。

『ナイフも小刀もあるものかい』と、心に語りながら、貞夫は堅い物を脇腹の横に避けて、それでもこれを少し押さへるやうにして、もとの通りに横たはつた。

渠がその翌朝の十時頃に目をさますと、平生の通り飯の仕度は出來てゐた。が、二人は無言て食事を終つた。

それからも、貞夫は無言て新聞を讀み、便所に下り、また衣物を着かへた。そして書き終りかけの長篇評論の原稿と共に、四五冊の參考書をすッかり引きまとめて、風呂敷に包まうとしてゐると、お島は離れた方の窓下て足を投げ出し、片肱を突いて自分の裾から出た桃色ネルの端とこちらとを見比べながら、少しも小だはりの無い聲て云つた、

『どこへ行くの？』

『…………』貞夫は、もう、これッ切りこの座敷へあがる必要はないと決心してゐたので、

返事もしたくなかつた。
『ええ、どこへ行くの？』その聲は一段と優しくなつてゐた。
『…………………』
『默つて行くなら、あたいも行く』と、異樣な顫えをさへ帶びて來た。
『來たッて仕やうがない、さ』と、止むを得ずこれに應じて、うそは云ひたくなかつたが、『原稿料を取りに行くのだから、ね。』
かう云つて包みをかッ浚ふやうにしてこれをかかへるが早いか、立ち上つてはしご段の下り口まで行つた時、
『ちよッと待つて』と、お島は息をはづませて起きあがつて來て、貞夫の袖を握つた。そしてちよッと段の下の方をのぞいて見てから、もとの窓ぎはの方へ貞夫を無言で引ッ張つて行き、窪んで靑みがかつた眼で、じッと力強く命令するやうに渠の顏を見詰め、かの女は先づその白い幅ッたい顏をのぼせさせてゐた。

一〇

『向ふの愛情が熱して來ただけに、却つて始末に終へ難いのだ』と、貞夫はその日加能の宿にかけ込んで、お島のことを訴つたへるやうに語つた。そしてかの女と手を切る爲めの奔走をして貰ふやうに頼んだ。――質物は金が出來次第出してやること、病氣は直るまで改めて治療させてやること、この二ヶ條を條件として。

加能は喜んで引き受けた。そして直ぐお島のところへ出かけた。もう、くッ付くなり、何となりしろと、貞夫は心を落ち着けて、渠の留守二階で、渠の自炊兼用の机に向ひ原稿の續きを書いてゐた。

すると、渠は間もなく歸つて來た。手には馬肉の新聞紙包みを持つてゐたが、

『えらいおこりやうだて、なア』と云ひながら、その包みを投げ出し、また脊廣のポケトから正宗の二瓶を出して、貞夫のそばにあぐらをかいた。

『また馬肉かい？』

『うん――うまいぢやないか？』

貞夫は去年痲病で苦しんだ頃、この肉が藥になると聽いて頻りに喰つたことがある。

そして加能は能くそのお相伴をしたのであつた。

『おこつてるて？』

『丸ッ切り、あいつァ氣違ひぢや、なア。』

『おこつたッて、仕かたがないぢやァないか？』

『おれに、お前のやうなものは仲へ立つて貰はん云やがつたぜ。』

『ぢやア、どうすると云ふのだ？』

『直接に話を着ける云ふた――おのれのうちに隱れてるに違ひない云ふて、こわい顏でにらみ腐つた。』

『ここを知る筈ァなからう――？』

『無論だ――自分で自分のからだをひッかいたり、君の雜誌を引裂いたり、あのざまを君に見せたかつたよ。』

『ウッちやつて置へ、さ。』

『歸りに下の婆アさんにさう云ふたら、あいつも失敬なヤッちや、丁度いいからおれに貰つてやれと、さ。』笑ひながら、『馬鹿にしてやがる！』

『…………………』貞夫はちよッと加能の顔色を見たら、何だか得意さうであつた。『どうともさせて置くがいい、さ、――おれだッて、もう、二度と再び喉を出しちやアゐられないから、ね。』

『今度こそ、見つかつたなら、ひどい目に會ふぞ。』

『ふ、ふん』と、貞夫も心配さうに笑つた。

『然しやつて來る氣づかひは無いし、なア』と、加能は立ちあがりながら、『まア、一杯やろか――久し振りだ。』

この時、がらりと下の格子戸が明いて、女の聲がした。貞夫は身の毛がよだつた。

加能は抜き足して行つて、下り口から下をのぞいてゐたが、

『なんぢやい』と、棄てぜりふて云つて、にこ〱戻つて來て、『廣告摺りを取りに來たんぢや――美人やて。』

貞夫はちッぽけな一私人の印刷屋の二階にゐるのに氣が附いて、ふと窓の外に目を迻り、家根から通りへ傾いてゐる大きナ横看板の裏を見た。そしてこんな家の主人を相手に何か共同の發展をしようとしてゐる友人の、大して望みありさうでもない努力を戒める氣になつた。

『晩飯にやア早過ぎるが』と云ひながらも、二人は自分等て拵らへた食事を初めようしてゐる時、加能へ

の訪問客があつた。
『鶴田君ぢやて』と、加能は肩をすくめて貞夫を見た。そして低い聲で、『あの金が出來たんなら、うまいか、なア。』
飛び下りるやうにして迎へに行き、加能はこの鶴田と云ふ築地橋そばの人をも仲間に加へた。
『お約束の金は』と、鶴田はちよつと貞夫に改まつて云つた、『いよ〳〵近々戻つて來ますから。』
『さうすれば、僕も』と、貞夫の心では、その嬉しさよりも、寧ろお島の追跡を避けることが出來るのを、この場合、一番の幸ひだとして、『出發が直ぐにも出來るのです。』
食事が終つてから、三人は玉突きに出かけた。そしてその夜は、貞夫は加能と共に加能の二階へ歸つて來て、二人で一組の蒲團を引ッ張り合つて眠つた。
翌朝貞夫が目を覺ました時、もう、加能は昨夜斷つてゐた通り、外出してゐなかつた。そして下の時計が十時を打つのを數へたが、自分は起きる氣にならなかつた――若し人間が人間を忘れ、自分が自分をどうでもいいとならば、家が人のであらうが、仕事が自分に迫つてゐようが、このまま斯うして、自分が寢飽きるか、人が追ッ拂ふかするまで、ぐッすり寢つづけてゐたいものだと。
渠は仰向けにからだを延ばして見た時、これまであくせくと考へたり、働いたりして來たことの結果をすべて吐き出すやうなあくびを一つした。そして自分が持つて來た書物を坐蒲團で卷いた枕の方へ無意味に兩眼を流れ出て、兩方のもみあげのあたりを傳ふ、生ぬるい涙じるを手の平で押しぬぐつた。
また、うと〳〵して見たが、直ぐまた目が覺めた。下の印刷屋の格子戶が度々明いたり、締つたりする忙しさは、自分のあたまで通つて來たこれまでの忙しさと同じやうだと思つた時、今度格子戶を明ける

のが若しお島であつたらどうだ？うか〳〵してゐて、なまなか柔術知りの女に寢込みでも襲はれたら？兎に角、渠は思ひ切つてはね起きた。さうして下て顔を洗つてから、近所の牛乳屋へ新聞を讀みに行つた。樺太のカラの字だけにても注意を集めるやうになつてゐる渠は、或新聞に、あちらの鑵詰め製造の景氣が今年はよかりさうだと書いてあつたのを見ては、微笑しないではゐられなかつたが、誰れもかれもと小資本の製造所が出來て、その競爭の結果、原料なる蟹の價段があがるばかりだとあつたのには、少なからず心配の念をいだいた。もう五月の半ばも過ぎたのだ、これから大切な六月一杯にかけて、早く効果を擧げさせなければ——

午後の五時頃まで待つてゐると、加能は歸つて來た。「二千五百圓の宅地をあの○○に」と、國から出た先輩の名を擧げ、「買はせようとしてるけれど、なか〳〵買はんて——ついてに、またあいつのとこへ寄つて來たが、なア、ゐなかつたて。おれのうちを探してるのぢや、なア。ゆふべもおそくまで留守にして、歸つて來ると、直ぐ君のヴァイオリンも三味線も皆たたき毀わしたさうぢや。」

「いッそのこと、あいつのからだも一緒にたたき毀れたら、肩拔けがすらア、ね。」

「さつう、おこつてるんぢやて——おッそろしいぞ、あいつのことだから——鼻にえらい皺を寄せて、きのうも殺す云ふてたから、なア。」

この時、下の格子戸が明いたやうてあつたが、

「加能さんはをりますか」と、靜かに氣取つた聲がしたのは、確かにお島だ。

「とう〳〵來やアがつた」と、貞夫は低語したが、その調子が引き締つてゐたのを身づからもおぼえた。

それから少しのぼせたやうに調子がぐらついて、「どうして分つたらう？」

「加能さん、お客さんですよ」と、下のかみさんがうは付いた聲をかけた。

「へ——さア」と立ちあがつたが、貞夫の方をふり返り、「不思議ぢやが、——君は、まア、早く歸れよ。」

貞夫も急いで、机の原稿とそばの書物とをまとめて、風呂敷に包んでゐる時、お島は加能のあとからあがつて來た。

とッつきの三疊の間から、おもての六疊へ這入つたところに突ッ立ち、悲しみを忍ぶやうな、そして又憤りを堪へ切れないやうな顏をして、かの女は貞夫を睨み下ろした。

「どうして、また、分つたのだ？」貞夫は頬のぴく／＼し出した顏にわざと笑ひを湛へさせて、下から見あげた。疊の縱の長さ　どは距離があつたが、若し飛びかかつてでも來たらと云ふ用意に、右の方を立て膝にしてゐた。

『畜生！』かの女は斯う一言して、全身の力を籠めたやうにからだを振つた。

『さう、さ——お前も畜生なら、おれも畜生、さ、然し、ね』と、向ふを荒立たせないつもりで言葉を優しくして、『おれの方はよく分つた條件を加能君まで持ち出してあるのだぞ！』

『あんな者の云ふことなど聽かん！』

「ふ、ふん」と、加能はかの女の正面に當るところにあぐらの片膝を抱いて、にやりにやり笑つてゐた。

「逃げないでも、直接に話をきめる！」

「こんな場合に、お前とおれとてかたを付けるなんて、出來るものか？——兎に角、おれは加能君にま

かせてあるから、ね。』ちよッと加能を見て立ちあがりながら、『僕は失敬するよ。』

『では、おれがあとでよく云ふから心配すな。』

『逃げないでもえゝ！云ふことがある！』まだ睨みつづけてゐて、かの女の息は迫つてゐた。

『おれは、もう、二度とお前の命令じみたことは受けないよ。』から云つて、次ぎの間へ行かうとした時、かの女は忍び切れなくなつて、兩手を固めて飛びかかつて來た。

『何をする！』貞夫は本包みをかかへない右の方の手でかの女の左の手くびを握りとめた。見れば、方式通り、母指を中にして他の指でそれを固めてゐるが、こんな用意をしたにも似合はず、少しも力が這入つてゐなかつたので、『まだおれに手頼る氣でゐる、な』と感じた。そして強くふり放せば倒れさうなのを加減して、形ばかり勢ひよくふり放した時、あの肌のすべッこさが惜めた。

が、時の勢ひがあと戻りをさせなかつた。全く未練の無いやうな強さを見せて、障子を締め切り、ずんずん下へ下りた。

自分の締めた障子が明くのを恐れたが、そんなけはひは無かつた。

采女町と木挽町四丁目と相對してゐる通りで、ここの印刷屋の横丁を拔けると、直ぐ木挽橋へ出られた。貞夫は通りの方を歸つて行くのを、二階から加能に見られるのもあんまり體裁のいいものではないと思つて、直ぐその横丁の細い溝板を渡つて、三十間堀のふちへ出た。

あとからお島が追ッかけて來はしないかと云ふ恐れにばかり追はれて、おづ／＼と急いで橋の袂までは來たが、いよ／＼これを渡らうとする時になつて、どうしても足が進まなかつた。追ッかけて來るものが無いだけ、寂しいやうな氣がして、二足三足戻つてもみた。が、思ひ切つてまた一二歩歸り路の方

へ進んで、ぴたりと立ちどまつた。この時は、もう、加能に對する嫉妬の念が胸一杯に滿ち滿ちて、あたまがぼうとまでしてゐた。

『若しや、けふ、あいつが立ち寄つた時、お島にこと更らに自分の住所を知らせて置いて、直ぐあとからやつて來いと云つて置いたのではなからうか？』堪らないほどもや〱して來た胸を押さへて、渠は跡もどりをした。

印刷屋の格子をあけて締めた時には、自分の女房を寢取られてゐる現場を見た心持ちも斯うだらうと思はれるほど、貞夫のあたまに血がのぼつてゐたのをおぼえた。

印刷機械の一部や印刷紙などを積み重ねてある間のはしご段を、づか〱とあがつて行つて、三疊と六疊との間の障子をすッと明けた。注意したつもりのが、あまり勢ひよく明いて、柱にぴたりとあたつた。

『どうした』と、加能も多少びッくりして眉根をあげたのが、左右に引ッ張れて、ゆるい八の字に見えた。が、先刻と同じところに、同じやうな坐わり方をしてゐた。

お島は、然し、横になつて、加能が車に乘る時に使ふ膝かけをその上にかけてゐた。

『燒けになつて、愼しみを失つたのか』と云つてやりたかつた。『いや、おれと別れたら、直ぐ困ることは知れ切つてるから、加能の意を迎へるつもりだらう』とも思つた。

かうなれば、もう、嫉妬よりも侮蔑の氣が勝つて來て、貞夫は多少心を落ち付けた。

『なアに、ね』と坐はり込み、『矢張り、僕が直接に、おだやかに、云つて聽かせた方がいいと考へ直したから――』

『もう、云ふて入らん』と、お島の上へ膝かけが動いた。
『お島さんも大分わかつたやうだから、今少し氣を落ち付けさせる爲め、――少し――休むやうに僕が云ふたんぢや――僕も君の友人だから、君の爲めになるやうに計らうよつて、なァ、心配するな。』
『ぢやァ、矢張り君に賴んで置くとしよう』と云つて、また立ちあがつた。もう、渠はどちらにも未練らしく言葉をつづけたくなかつた。
そこを出て、再び溝板の橫丁を通り拔け、木挽橋を渡り、竹川町で品川行きの電車に乘つた。多少すッとして輕い氣持ちになつた時、さッきから左の腕にかかへてゐる書物の重さをおぼえた。
『どこへ行つて仕事をするつもりだ？』から云つて、自問自答をして見たが、どうしても自分の我善坊の家へ歸る氣にはなれなかつた。
宇田川町で電車を下り、御成門の方へ一直線に急ぎ、またの電車線を橫切つて、自分がきのふまで陣取つてゐたところに行つて見た。が、そこへもあがる氣がしないので、格子を這入つたところの疊に腰かけて、それと無くお島の昨夜來の樣子を聽いた。
婆アさんが迷惑がつた顏つきをして、昨夜のあり樣を――加能にも同じ調子で語つたと思はれるやうに――語り、
『ゆふべ初めて分つたのですが、ね、あんなおそろしい方は、もう、眞ッ平です、わ――燒けになつていつこの家へ火付けをされないものでも無いのですから、ねえ――わたしも夜おそくまでたつた獨りでゐるものですもの、いざと云ふ場合にやァ、女一人でどうすることも出來ません、わ、ね。』
『まさか、そんなことも――』

『いいえ、あなた、どうして――清田さんもまだあなたに未練があるやうですが、あなたもまだ思ひ切れないのでしよう？』

『僕は、もう、大丈夫ですよ。』

『尤もそれが奥さんの爲めです、わ、ね――清田さんのやうな方は、あなたもさん〴〵もて遊んだのでしよう、もう、あの、加能さんにくッ付けておやんなさいよ、大した代物でもないぢやアありませんか、ね？』

『どうとも勝手にさせますとも！』

間代は既に今月中拂つてあるので、それ以後自分の責任は無いからと云つて、貞夫が立ちかけると、婆アさんは思ひ出したやうに、ゆふべ、我善坊の壽美子がやつて來て、相變らずやき〴〵云ひながら、弟が病氣で入院したと云ふ樺太からの電報を見せたことを告げた。

それでも渠はこの坂を向ふへ越える氣になれないで、再び御成門の方へ引ッ返した。

『自分の家が無くなつたのだ！そして例の金が揃はないぢやア、弟の生命もどうなることか分らない！』から心に叫んで、久しく行き絶えてゐた濱町の怪しい家へこの夜を明しに行くと決心した、そこで小仕事に短い原稿を書いて、本夜の費用にすればいいからと。

二

翌朝、獨りになつてからまた一寢入りしたが、起きて近處の錢湯に行つて歸つて見ると、ゆふべから賴んで置いた使ひが歸つてゐて、或雜誌社からの稿料が來てゐた。費用を拂つて、なほ大分に殘りがあ

つた。

電車に乘る前に、朝昼飯帶のちよッとした食事を濟ませ、竹川町で下車して加能のところへ行つて見ると、渠は外出してゐなかつた。

また電車に乘つて三田の薩摩ッ原で降りた。渠は、鑵詰製造に必要なので釜を拵らへさせたところを思ひ出したからである。

あの時、鑄釜なら、價段も安くて、どこにでもあつた。然し時によると熱湯の勢ひで破裂することがあると云ふので、鐵をうち鍛へさせることにした。

大人の手でも殆ど二かかへもあらうと云ふ圓みの、その高さは脊延びをして中をのぞくほどの釜であつた。その鐵蓋は密閉して熱湯の壓力をしッかり押さへるだけの强さがあり。釜の横へ出して、また、その壓力測量機がついてゐた。

いよ／＼出來あがつたと云ふので、湯の代りに水を一杯に滿たせ、强力なポンプを以つてその上にまた水を送ると、壓力測量機の針はくる／＼とまわつた。その機械の根を締めて、また一段の力を與へると、今度は釜と蓋との密閉部から、水が多くの細い線となつて吹き出し、あたりにゐる人々の顔となく、胴となく、裾となく、ちよッとの間にずぶ濡れにしてしまつた。あまり廣くもないおもて庭を逃げまどつた人々でも、こちらでポンプの手をゆるめた後までも、飛ばッ尻を喰つてゐた。

沸騰點以上なほ四五十度の熱と同樣の壓力をかけたのであつたが、これではまだ行けないと云ふことになり、密閉部の工合をもッと緻密に直させた。

そんな釜を厚い鐵板から鍛ひあげさせたのである。それを、自分の身が形作られて行くやうな氣で、

鐵工所へ見に行くのを貞夫は毎日の樂しみにしてゐた。
とんかち！とんかち！とんかち！そして赤くなつた鐵が段々に延びて行く。そして又延びて行くと同時に、半圓形になつて行く。
これを見て、初めて、渠は實際にどんな形の物であるかを想像し得たが、二つの半圓形の厚板がまだ全圓に合はされないうちのこと、自分はお島の二階に歸つて、晝間の工場であまりに目を見疲れさせた爲めに早寢をしたことがある。そして自分が熱鐵の板輪に圍まれて、ぐんぐんと締め上げられた苦しみの夢を見た。
とんかち！とんかち！とんかち！と云ふ音が遠く聽える氣がして毎朝目をさまし、食事が濟むと直ぐまた出かけた。
やがて兩半圓は會合した。そしてその會合部は、上から下まで、多くの大きな鋲を以て固められた。そして又その鋲の個所々々も、一たび熱せられて、打たれて、そして鍛へられて、釜の本體と一緒になつてしまつた。
それに底が出來た。また、蓋が出來た。そして渠はアミーバがその母體を離れたやうにとんかちの音に別れた。
が、その音は今や自分の中に微かに響いてゐた。
とんかち！とんかち！鐵工所の門前に近づくほど、足の歩みが急がれて、その音が段々と明らかになつた。
門が見えると、渠は飛び込んだ。すると、また同じやうな釜が一つ出來あがつてゐた。

「そりやアどこ行きか、ね？」

「これですか」と、知り合ひの職工が答へた、「これは蟹の方ぢやアごわせん――どこか東京近在の注文です。」

「何に使ふのだらう、ね？」

「さア――旦那も、どうです、今一つ發展しちやア？」

「うまく行きやア、ね」と、貞夫は微笑した。あちらがうまく行けば、この秋から朝鮮へ行つて、すつぽんの鑵詰をやる計劃と研究とも出來てゐた。

そこを出てから、また行く先に迷つた。

愛宕町の山野を思ひ出したが、あの有樂座以來何だか興がさめてゐて、行く氣にならなかつた。て、佐久間町の辯護士なる友人を久し振りて尋ね、王突やら晩餐やらを一緒にしてから、再び加能のところへ行つて見た。が、午前からあの女と一緒に出た切りまだ歸宅しないと云ふ下のおかみさんの話なので、おやア、ゆふべはとまつたのかと聽くと、さうだと答へた。ゐなければ待つてゐようともしてゐたのだが、果して案のじやうなるこの事實が分つたので、待つのも馬鹿々々しくなつた。

時計を出して見ると、もう十時に近かつた。これからは、もう、ゆふべのところへ行くより仕事が無かつた。

その翌朝、水天宮前から電車に乘り、竹川町で下りて、性懲りもなくまた行つて見ると、幸ひに加能はゐたが、貞夫を見て不安さうな顏つきをした。貞夫はわざとお島のことは聽かずに、直ぐ金の話をした。

「どうだい、鶴田君は至急運ばせて呉れないか、ねえ?」

「さう迫いても仕やうがありやへん—外へ融通してあるのが、今月末に返る云ふてるのやさかい、なア。」

「ぢやア、そッちで少し都合が悪いから、今一ケ月待つて呉れいと云つて來られりやア、鶴田もそれッ切りだらう——?」

「そんなことは無い筈ぢや——それよりや、君の方が九月一杯に返せんと、僕までが面目ないで。」

「おれの方は大丈夫だよ——然し大丈夫と云やア」と、貞夫は少しどぎまぎするのをさう見せないやうにして、『あいつを物にしたのかい?』から云つて、この點を突きとめさへすれば、もう、お島との手切れ條件の一つなる治療條件は御免を被らうと云ふ下心があつた。

「そんなことがあるもんか」と、輕く反らせようとした加能の顔には、どこかぼんやりしたやうな、とぼけたところか見えたと、貞夫には思はれた。貞夫がわざとらしくにや〱してゐるのに對抗しだやうに、『そないに疑ふなら、今度轉宿させるところへ行て見よか?』

「行かうとも!」

「では、早う行かんとかち合ふて——けふの午後二時頃に移つて行く筈ぢや。」

「どこだい?」

「八丁堀の電車通りの裏手ぢや。」

「さア、行かう」と、貞夫は立ちあがつた。『おれも二度とは直接に會ひたくないから、ねえ。」

「會ふてたまるもんかい、僕の君に對する奔走が無駄になつてしまうぢやないか?」

治療代はこッちで出し、本人はそッちで占領する——そんな都合のいい計算は人間その物の十露盤上

には無いぞと、貞夫は云つてやりたかつた。

加能が道々話したに依ると、お島が渠の居どころを知つたのは渠が貞夫に紹介した或書生のハガキが殘つてゐたからであつて、かの女はその書生を尋ねて、加能のところを知つたのだ。

二人は櫻橋で電車を下り、堀に添つて東へ入り、右へ曲つた通りへ來た。

一間ほどの窓格子の眞ン中に、一尺四方ばかりの額ぶちがかかつてゐて、その中に桃太郎や天狗やあかんべいなどの繪が書いてあつて、そのまた右に「百面相」と云ふ横長の看板が出たところがあつた。その格子に「明間あり」の紙札が張つてあつたのを、加能はいきなり破り取つた。そして貞夫を返り見て、低い聲で、

「ここぢや――失敬な奴ぢやないか、まだ札をはがしとりやへんのや、手附け金を取つてる癖に！」

「…………………」貞夫は默つてちよッと苦笑ひしたが、その金だツて、こちらがお島に自分等二人の日常費として來月十五日までの分を渡してある、その中から出したにきまつてると思つた。

この百面相の窓格子のはづれと、どこか　倉との間に、一間四方あまりの空地があつた。そこにけち臭い氷屋の屋臺店が張つてあつた。そのよし簀のかげに這入り、「今日(こんち)は」と、加能は聲をかけた。そして窓の奥から婆アさんが一人、横の濡れ椽のところへ出て來たのに向つて、「まだ來ませんか？」

「ええ、まだ――」

「もう、おッつけ來るでしよう――君、この二階だよ」と、屋臺店の奥を高くゆび指した。

下は物置きになつてゐるが、雨ざらしの大工ばしごを登つて見ると、四疊半の座敷があつた。壁や天井裏はすべて新聞紙を張りまわしてあり。大きな大黑を書いた去年の柱ごよみと、石版摺りの美人繪とが壁に向ひ合つてゐる。通りに向つた方は、家に付いてあがり口を取つたあとが一杯に窓で、そのそとに二三の盆栽を並べた棚が、日よけの爲めに掛け垂らしたよし簀から透いて見える。

その簀の一端をあげて、貞夫はそとへ出もしなささうなつばをしようとしたら、その下に氷り店のあんこが伏せてあるがらす蓋が目にとまつた。で、渠は顏を引ッ込めて、奧の片隅の高い小窓のそとは何であらうかと思つてのぞいて見ると、隣りの押し迫つた家根の上であつた。

「わざ〳〵ひどい所を探したものだ、ねえ。」

「でも、安いよつて、なア――いくらだと思ふ？」

「いくらだッて、もう、おれア――」

そこへ二十四五の小綺麗なかみさんが茶を持つてあがつて來た。

「御主人はゐますか」と、加能はかの女に聲をかけた。

「けふは、○○の宮さんのとこへ招待されまして、つい、先刻出ましたが――」

「白面相ッて」と、貞夫はまだ何のことか分らなかつたので、「どんなことをするのです？」

「をかしい藝人で」と、かの女は愛相笑ひをしながら、「ほんの、道樂が高じてこんな商賣をすることになつたのださうです。」

「きのふ、本人が」と、加能は得意さうな顏つきで、「どこか呼んでくれる宴會でもあつたら、世話して呉れと云ふてた。」

『そりやア何だか面白さうな仕事でしやう、ね』と、貞夫は笑ひながら。
『いえ、ほんの、道樂で――』
『藝が面白いよりや』と、加能が受けて、『本人が面白さうな人間ぢやて。』
『さうだらう、ね――そして氷の方ゝあなたのうちで――？』
『へい――』
『おい、一つやろか？』
『さア――』と、貞夫は應じ兼た。喉がかわいてゐて、こんな應對をしてゐるのさへ舌がくッ付き氣味であつたのだが、第一に何だかきたならしいやうな氣がした。第二に、また、ここにぐづぐづしてはゐられなかつた。『來ないうちに出ようぢやアないか？』
『では、おかみさん。』加能も立ちあがつて、『來たら、よろしう頼みます。』
それから電車通りへ出て、二人は氷を飲んで別れた。

二

貞夫はかかへてゐる長篇評論の結末を書かなければ、自分自身のその日、その日をささへる金にさへ困るにきまつてるのだが、落ち着いて書く場所がなかつた。
この原稿を依頼した社へでも遊びに行つて見ようかと考へたが、まだ書きあげないのを持つて遊びに行つたとて、無責任としか見られないのにきまつてゐた。
渠はふと山野を訪ふて見たくなつた。そしてその細君とも話しをして、いよいよ清田と手を切つたこ

上を報告したくなつた。

て、愛宕の塔下へ訪ねて行つたが、生憎、山野は留守であつた。細君はゐるとのことだが、子供達がぎやア〳〵云つてゐるのが聽えたので、――子供と云ふものはその聲だけでも聽くさへ、貞夫にはいやなので――あがる氣にはなれなかつた。

轉じて四谷へ行き、或婦人の獨身者を訪問した。この婦人は渠を冷かし半分で、

『なぜあたしを口説いて見なかつたの』と云つたことがある。

『どうせ口説いたツて、物にならうとは思へない人だから、ね―』と、渠は眞面目に答へた。そして今日まで二人の交際は少しの氣まづさも無く續いて來た。渠には、今更らの如く、かう云ふ交際が却つて無事で而も懷かしみもあるものであつたことが分つて來た。

かの女が某華族の夫人と共に催した或慈善音樂會に於て、渠は一場の演説をしたこともあつた。かの女の家でかの女と婦人論を爭つて、その母親に喧嘩してゐるのではないかと思はせたこともある。かの女の紹介で、何物であるかまだかの女にも分らない或美人――實際の美人であつた――を訪ねて行つてその生活の樣子を探つて見たこともある。かの女が玉突屋兼業のレストランをやつて見ようと云ふ出來心を起した時、無駄であつたが、いろんな助力を與へたこともある。

そんな關係で、渠が濟田島と云ふ女に熱心になつてゐたことも、かの女は渠から聽いてよく知つてゐた。が、渠がいよ〳〵樺太（からふと）へ出發する折は、そのお島を預つて呉れないかと頼んで見た時、これは三ケ月ほど前のことだが、

『そんなきたならしい病氣の人なんて、あたしいやです、わ』と、かの女は半ば怒つて、はね付けた。

『そッちが分らないのぢや――誰れが、いつまでも、めかけなどになつてゐるもんか?』
『さうして、何かい、加能の足かけなどになつたのか?』
『そんなことは無い!』かの女は怒つたやうに膝に力を入れて疊にぶつけ、顏を皺くちやにして見せた。
『その顏がお前の見え透いたうその手だよ――もう、ちやんと、おれにやア分つてるのだから、ね。』
『…………』かの女は眞顏になつて目を少し落して、貞夫の强みを藏する視線を避けたがまた見あげてあまへるやうに、『そんなら、何て來た?、歸つて貰ふ!』
『ふん―こんな詰らない部屋でも、ね、もう、前金を拂つたに相違ない以上は、おれが借り主だらうぜ。』
『では』と、かの女は尋常な顏になつて、『人を棄てたりせんでもええぢやないか?』
『然し、ね』と、貞夫はわざと落ち付き拂つて、卷煙草を袂から出しながら、『お前とおれとは、もう、もとの通りにやア行かないよ。』
『どうして、さ?』かの女は、不思議さうに。
『二人の間には、第一、出齒が這入つた。』
『…………』
『それから、加能が這入つた。』
『そんなことは無い』と、また顏をしがめた。
ゆき平がぷう／＼吹いてゐたので、かの女はその蓋を取つた。飯が煮えたのだ。
『誰れの爲めに焚けたのだか、ね――おさしつかえは御座いますまいか?』
『丁度ええとこぢやさかい』と、かの女は渠の冷かしには頓着せず、ゆき平をおろして、『何か買うて來に

か？」

「さうだ、ねえ――」と、貞夫は手を懐ろに入れかけた。

「お金はこッちに[illegible]ある――けふも、あんまり癪にさわつたさかい、あの婆々アから間代の五日分だけ取り返して來てやつた。」から云つて、かの女は喜んでゐた。

かの女は正宗一本とかれいを一尾と買つて來て、膳ごしらへが出來た頃、加能が案内もせずあがつて來た。

「來てるのか、君」と、渠は間の惡いやうな顏をして立つた。

「ああ。」貞夫は、食膳代用の机に向つたまま、惡びれずに返事をした。「おれにやア、行くところも、ゐるところも無いのだ。――まア、一緒に一杯やらう――坐わり給へ。」

「僕も一本あるぞ」と苦笑しながら、ポケトから取り出したのをしほに、貞夫と相對して腰をおろした。そしてからだを横にして、瓶を女の方につき出し、「お島さん、これもついでにつけてお呉れ。」

「…………」かの女はちよッとふり返つたが、取り合はなかつた。

「あれから、なア、また○○の」と、先輩の名を擧げて、「とこへ行て來たんぢや――銀行家なんて、なか〳〵けちんぼて、なア。」

「二千五百圓の宅地とかてかい――まア、つかう」と、貞夫は加能と自分との猪口に出來た酒を注いだ。

渠はお島に命じて、加能の持つて來た正宗をも燗しろと云つたが、かの女はそれに手をつけようともしなかつた。

「まア、さう嫌はんて」と、加能はかの女のつんとそッぽうを向いてる横顔を見た。渠の目には、これまでに見せたこともない劍があつたと、貞夫は讀んだ。

「ぢやア、おれが燗をしてやる、さ。」貞夫はかう語つて、火鉢へ行つた。

渠は半ば加能に後ろを向けてゐたが、加能がじろ〳〵とお島を見て、かの女の顏色を讀まうとしてゐる樣子が、自分の近眼鏡の裏に寫つた。

その夜、加能もいろんな世間話をして、いつまでたつても歸らうとはしなかつた。

貞夫はまた、このいきさつがどうなることだと、心を据ゑて、半ば傍觀氣を起してゐた。

お島だけはじれ〳〵してゐて、加能に歸れと云ふ素振りばかりを見せた。

「もう、締めますが――」下からかみさんの聲がかかつた。

「ぢやア、締めてもよう御座います」と、貞夫は答へた。

お島はこらへ切れなくなつたと見え、

「歸つて呉れ」と、加能につけ〳〵云つた。

「歸るなら、歸るやうに話をつけて行く。」かう、加能は强いことを云ひ出したが、その割りに聲が顫へてゐた。見ると、渠の顏は、貞夫には、如何にも恨みある悲しみを表してゐるやうであつた。

「こッちの範圍內に立ち入らせたのが惡かつたのだ」と、貞夫は私かに、多少、同情の念が起つた。

「まア、一緖に寢よう、さ――僕も醉つてるから、ね。」

お島は物も云はないで、自分だけの蒲團を敷いてゐた。

貞夫は下の濡椽をあがつて、奧の便所へ行つて、またはしごを登つて來た時、立ちあがつてゐる加能

がこれも立つてゐるお島に突きのけられて、壁の大黒ごよみにぶつかつたところであつた。
『喧嘩なんかするな！僕がこの場にゐる以上は、ね。』から云つて、貞夫は、一方に片よせて敷いた褥の上から、上の蒲團一枚を剝いて、加能に與へ、『仕やうがない――君はこれにくるまつて寢て貰はう。』
『かしわ餅かい？』加能は愛相らしく笑つた。
『さう、さ、ね――それでも女は女だ』と、貞夫は自分の寢まきに着かへながら、『ヴィオリンなどはぶち毀わしても、衣物はこんな下らないのでも、何かの足しになると思つて、持つて來てゐらア。』
『それも』と、お島は褥の中から、『燒いたろかおもたんや。』
『あの婆アさんが』と、加能も少しゆッたりした聲になつて、『火事でも出されるのを心配してたのは尤もぢや、なア。』
『ほんとに、さう、さ、ね――然しここは、また』と、貞夫は今見て來た締りを思ひ出して、『どうしたのだらう、ね、下の庭に戸締りも何もしてないぜ。ただよし簀を立て廣げて、細い横木で押さへてあるだけだ。』
『そりや僕も知らなんだ、なア。』加能は心配さうに蒲團から顏を出して、『用心が惡いやないか？』
『惡くッたッて仕かたが無い、さ――君がわざ／＼こんなところを見付けてやつたのだから。』
『そんなことまで僕も氣が付きやせん、さ。』
『然し萬事よく釣り合つてらア、ね。』貞夫のこの言葉を聽いて、お島は無言でだが怒つて、渠の横腹をきつく突いた。
貞夫も默つてしまつたが、こッそりかの女の手を引き寄せ、

「どッちが好きだ」と、指さきて書くと、
「おまへ」と、かの女は書き返した。

翌朝、遅くあさ飯を一緒に喰つてしまつた頃、加能は言葉を置き〱、かう云ひ出した――

「僕は――これから――時間があつて――出るが、なア――一體、この話は――どうなるんや？」

「どうなるッて」と、貞夫もむッとして、「もう、濟んだやうな物、さ。」

「まだ濟みやせんぢやないか？」加能は眉根を引ッ釣らせて、「君は僕に依頼して、僕は君とあの女との手を切る奔走をしたんや。」

「そりやア、さうだが、ね、今となつちやア、もう、取り消されたのだ。僕自身でこれと僕との間は、切れるなり、またくッ付くなりする、さ。」

「でも、まだ君は取り消してない。」

「ぢやア、今僕が取り消すが、君の二三日來の奔走は實にありがたかつた。」かう云つて、一つあたまを無器用に下げた。

「如何に友人間でも、君はおれを馬鹿にしてるよ――僕だッて、一日をほかのことて奔走すりや、それだけ金になるからだぜ、君の爲めだおもて、この二三日棒に振つてるやないか？」

「然し君はその報酬は得てゐると思ふが、どうだ？」

「さう云はれると、なほ――」加能は言葉を中止して、お島が二人を少し離れて後ろ向きになつてゐるのを横目に見た。

「あれは、たとへ」と、貞夫はかの女を見ずに、『何も分らない無智同様の田舍者としたところが、兎に角まだ娼婦や何かでは無い。それを――』

「さう云はれると、僕も――然し君の爲めに手を切らせる一つの手段としては――」

「いいや、そんなことは、今更ら、意味もない申しわけだ。僕は、だから、何も君のこの二三日のことを責めるのぢやアない！」

「然し――」

「それとも、友人間のことを金にする氣かい？」

「…………」加能は暫らく默つてゐたが、決心の色を見せて、『どうせ、君がそんな不都合をするなら、金にしたる！」

「よし」と、貞夫も坐わり直して、『いくらの口錢を出せばいいのだ？その代り、またあの女にも要求があるだらうから、ね。」

「…………」

「僕は豫め云つて置くが、あの女をまたこれまで通りにするか、それとも矢ッ張り手を切るか、それは君にもあの女にも受け合はれないのだ。が、あいつの處分はどッとも僕自身がすることにきめたのだ。」

「さう云はれると、僕も――實に――心――苦しい。」加能はその脊を壁にもたせて、女と貞夫とをどッちにも横目で見るやうにして、『實は、もう――僕のうちへもとまつたし、大森の砂風呂へも一緒に行たし、――」

貞夫はこれを聽いて、くわッとのぼせた。想像と推斷とは、既に分つてゐたことだが、本人の口から

から當てつけられて云はれると、あたまにのぼせて、からだがひイやりしてしまつた。そして今までのがん張り方が馬鹿々々しくなると同時に、この女をわれからかばふのが、女にも笑ひの種になつてはすまいかと思はれた。ゆふべのありさまだッて、自分がただいい氣になつてゐたに過ぎないのかも知れず、女が加能にむごく當つたのも却つて反對の意味があつて、加能が馬鹿の爲めにこれを理解し得なかつたのだとも取れ出した。

「おい、ちよッとこッちを向け！」から、貞夫はお島に叫んだ。が、かの女は向きも返事もしなかつた。

「おれが若しお前を處分するとしても、今加能が云つたことを土臺にすれば、おれの方はずッと責任が輕くなるのだ――返事をしろ、お前の口からも事實だと！」

「…………………」かの女は矢張り無言で、少し仰向き加減にそッぱうを見てゐるらしく、然しからだは全體に顫えてゐるのが見えた。

貞夫はこれを見て、あの烏山でかの女が縊死しかけた時のありさまを思ひ合はせ、如何に憎い女でも、再びあんな眞似はさせたくなかつた。

渠はどう自分の身を處していいか、ちよッと度を失つた時、加能は勝ち味な聲で、

「兎も角、僕が一時あの女を預かるのが順當ぢや！」

「預かれるなら、預かつて見ろ！」まだ實際の好意があるのをかの女にも分らせる爲めに、「君が預かるのは、どうせおもちやにする爲めだらう――？」

「うんにや――！」加能は貞夫のこわい目を避けて、かの女の方に向き、「僕だッて、男ぢや――君ぐらゐ

の世話はする！」

「これまでの僕ほどでは、もう、行かないよ――今のさし迫つた問題は、あの女を生かすか、殺すかの問題だ。君が本氣で獨り者だから、少くとも、一生愛してやるか、僕が本氣な同情でかたをつけてやるか？　如何に馬鹿だッて、あいつも、もう、そこまで突き詰めてゐる樣子だから、ね。」

『そんなことを君に受け合ふ必要はない！』

『君は途中から逃げようと云ふのだらう――？』

『…………』加能はただじッと、半ば横目て、貞夫を見つめてゐた。

「さア、もう僕はどッちでもいい！』貞夫は決心した樣子で他の兩人を見まわして、『僕はこの場合慾情は拔きだから、あの女の意向一つにまかせるが――その前に、一つ、僕がしッかりと事實の念を押して置く必要がある。――おい』と、またお島を呼び、『加能との關係を白狀しろ？」

「…………」

「返事しろ！」

「…………」

「どうしてもしないと云ふのなら、今一つ聽くが、ね、お前は一時おれに來るつもりか、または加能に行く氣か、どッちだ？」

「…………」

「顫えてゐるのは、自分のしたことを後悔してゐるのかい？　それとも、おれが恐ろしいのかい？」

「…………」

『うそを云つてたから、返事が出來ないのだらう――面倒だから、今一度だけ聽くが、ね、これで僕は永久にお前と會はないことになるかも知れないのだぞ!』かう云つて、貞夫は言葉を切り、お島の前をわざと荒々しく通つて、原稿の包みを手に取りあげ、もとの坐に來て立つたまま、『返事が出來ないなら、返事をしない方で聽くが、ね――加能がおれに代つて、お前をおもちやにしようとするのだが、その方がよければ返事をしないがいい!』

『…………………』

返事が無いので、貞夫は、自分のかの女に對するこれまでの待遇に對して、かの女からゆふべとけさとに全くしッぺい返しを喰はせられたものと見た。そしてまた一段とくわッとなつた。

『加能!おやア、君にまかせた』と云つた聲さへ、耳からでも出たやうになつて、一度期に忿懣の情が顏に燃えあがつた。

渠がからだの中心を失ひかけたほどそそくさと下り口まで行つた時、

『まア、待つて』と云ふ聲がして、自分の袂が引ッ張れたが、今や加能に語つた言葉に面じても、女々しく再び坐わりも出來ない氣がして、

『放せ、もう、これッ切りだい!』握られた袂をふり拂つた。さうして女が足もとにばッたり倒れた音を耳にとどめて、はしごをそと向きに急ぎ下だり、下駄を引ッかけるが早いか、屋臺の後ろからかみさんが驚きの目を見張つてゐるのにちよッと間の惡い挨拶をして外に飛び出した。

一三

『まア、待つて』が氣になつてはゐたが、待つてやつて、拜み倒されてもそれまでのことだ。

『お前』の代りに、『あなたには』などと初めて改まつた言葉を使つて、これまで大相世話にはなつたが、今となつては、加能にも辨理がある――ぶつなり、蹴るなりして、思ふ存分に意趣は晴らして貰ふ代り、あの條件通りを行なつて呉れい！こんな工合に向ふが出まいものでもなかつたら――結局、馬鹿を見るところであつた。

『幸ひにも、けふと云ふけふこそ、下だらない責任をのがれたのだ――この結果は早く誰れかに發表しなければ』と云ふやうな氣がしながら、貞夫はふら〳〵と我善坊の家に歸つた。

　生垣の間かか隣りの寺の緋鯉の池が見える室に入り、ヅックの旅行革鞄を出して、その中へまだ手のあッたか味が殘つてる原稿や書物を初め、その他に、今の原稿が終れば、直ぐ何かあとを書く爲めの參考書をあれやこれやとえらび入れてゐた。

『あなた、どこをぶらついてたのです、ねえ。』壽美子の無作法な歩みの足音も聽えて來て、『あッちから電報が來たことは聽いたでしよう？』

『聽いたから、あせつてるのだ！』渠はかの女を睨むやうにしてちらと見たが、かの女は敷居のそとに立つて、おづ〳〵と相變らずの氣違ひづらをしてゐた。渠は私かに、『こいつには氣違ひ責めにせられ、あいつには刄物責めにせられ、もとはと云へば、たとへおれの仕出かしたことにしろ、たまるものかい』と考へた。

『それならいいてしようが――あなたは旅行なさるんてすか、また自慢さうにあんな女を連れて――！』

『清田とは、ね』と、貞夫は飽くまで念を押してやるつもりて、あごを堅く突き出してわざとらしくあ

げ下げして、「とッくに手を切つたのだ！」自分までが氣違ひじみた空

から云つた時、渠はふと自分自身を返り見ると、この壽美子にかぶれて、氣を呼吸してゐた。

ここにだッて、渠は一刻もとどまる氣は出なかつた。

「それは初めから當り前のことてさァ、ね――喧嘩か何かしたのてしよう？若しあなたの弟があッちて病死でもして御覧なさいな、あの人をあなたがあの女のために殺したも同前てすよ！あなたが、ね――あなたがてすよ！」

「うるさい！死ぬやつア、どうしたッて死ぬんだ！」渠はかう叫んで、「若しやあのお島も――」と云ふやうな疑惧の念が浮んだ。

渠の精神はからだ中に顫えあがつた。そして八丁堀の堀端を歸る時氣になつたかの女の最後の一言が、今やまた耳の記憶から繰り返されて、あはれッぽく渠の胸に傳はつた。

「氣味がよかつた」と、私かに渠は自分を辯護し、かの「不如歸」劇で泣かせられるもの等のと同様な安ッぽいあはれみの心などは踏みにじつてしまへと決心して、書物を七八冊ねじ込んだ革鞄を提げて立ちあがつた。

「車を呼べ、車を！」

「車なんか來ませんよ！」

「なんだと！」

「あなたはちッとも御存じないのてすが、ね、呼びに行ッたッて、向ふが、お前さんのとこは信用が出

來ないからッて、ね――」

「…………………」貞夫はじろりとかの女を見詰めて、言葉が出なかつた。

「それほどまてにあなたのうちが困つてるのに」と、かの女は半ば哀訴の口調になつて、「あなたはちッともふり向きもしない氣てすか？」

「無論、さ！」力の拔けかけた聲だが、渠はなほ反抗せずにゐられなかつた、「おれにやア妻もない！家もない！あの事業が失敗すりやア、おれ自身も無いか知れないのだ！」

「そんな無謀なことを云ひなすつたッて」などと云ひながら、かの女はあとを廊下のはづれまで追つて來たが、渠は自分て荷物をひッ提げて出た。

我善坊を下つて西の久保の通りに出て、やッと辻ぐるまを見付けて、渠は手に提げた革鞄を車の蹴込みへ投げ込んだ。

顏や脇の下の汗を拭き〳〵、くわッくわと照る太陽の下を走らせると、すッと輕くなつた自分の世界は却つて自分の世界てないやうに思へた。日は輝いてゐても、この數ヶ月來、滅多に晴天を仰いだこともなかつた渠には、あんまり明るい光の中を半ば自分が失はれて、取りとめも付かない。

先づ心から落ち付けようと、自分のからだの住ひを車上て正して見た。すると、目の前を横切つた一人の男の子が自分の總領息子の年輩てあつた。

「かいるが鳴くから、かアいる」と云ひながら、ゆふ方よく外から歸つて來たものだが、或時自分の今乘つてるやうな車に敷かれて、手と足とを怪我した。若し頸か胸かをてもやられたら――渠は自分の身

になつて、ぞッとして目をつぶつた。

すると、その子等の母がわざ〳〵と落ち着きもなく、しやりかうべにまで痩せこけて、子供を叱つたり、暮しのことを心配したりするあり樣が見えて來た。あの婆々アじみて――こんなことは、もう、考へたくもないので、目を明けた。

若い婦人がからだの曲線を衣物のいい着こなしに表はして、顏を蝙蝠傘で隱して行く。すると、お島はあれからどうしたらう――自分は、もう、全く傍觀的にだが、今一度行つて見てやらうか知らんと考へられた。

これに、また、「まア、待つて」がからみ付いて來て、かの女の死んだざまが見たくなつた。その場合にやア、自分も自分の關係を憚らず天下にさらけ出し、かの女のどうせ死ぬべきものであつたこと、並に自分がどの點まで責めを負ふべきかを公表して、あとは誰れにでも勝手な判斷をさせてやる！

「然し、死ぬなんて――まさか――」あの加能さへあの場にゐなかつたら、かの女も手を廣げてもッと芝居をしただらう。自分も亦もッとかの女の心をえぐれただらう。

若い女を飽くまで試みるのも面白かつただらうにと云ふ氣になると、あの時滔々としやべつたことが前後の取りとめさへ無かつたことを思へて來た。

「二十歲をたッた二つばかり越えたに過ぎない女の爲めに、――おれもどうかしてゐたのだ！やり直しだぞ、お島！待つてゐろ」と、力を入れて心に叫んだ。「お島――お島！お島、お島、お島！」

「さう足を踏みしめては困ります」と、車夫は走りながら後ろを見た。まだあの女に迷つてゐるのかと云はれたほど、貞夫は顏を赤くして澄まし込んだ。

新橋停車場前の或休憩所に車を降り、荷物をそこに預けて置いて、電車に乘つた。氣が引けながらも、加能がゐたらいよ〳〵一喧嘩をする覺悟で行つて見ると、下の主人が今お島の室から出て、はしごを下りるところであつた。

「こいつ、また、おれ達の遺利を奪ふ氣でも――」貞夫はむかッとした時、

「おう、旦那」と、主人は嬉しさうに下り立つて、「今、あなたのお宅へ使ひを出しましたのですが、な――どうか、本人の云ふことがはッきり分りませんので――」

「どうかしましたか?」貞夫はうッて變つて自分の世界が開らけたので肩身が廣くなつた氣がしたが、同時に「やッ付けた、な」と合點して、俄かに胸さわぎがし出したのである。

「まア、どうぞこちらへ――只今、やッとお休みになれましたから。」

かう云つて主人が導くまゝに、貞夫は百面相の客間へ通つた。

「アヒサンをやつたのぢやアありませんか?」

「えッ、そんな毒藥を!」主人はびッくりした聲を擧げると同時に、胸を反らせて左の手を輕く後ろの疊へ突き、そッちへ引ッ張れたやうに眼と口とを傾けた。そして下くちびるを少し受け口にして見せた。が、直ぐもとの顏に直つて、「わたしは、また、御酒をめしあがり過ぎたのかと思ひましたが――」

「まだ醫者に見せませんか?」貞夫は氣が氣で無かつた。

「いや」と、主人は渠の樣子を見て、わざとらしい落ち着きを見せて、「御心配にやア及びません――もう、一時間も前に來ましたから。然し、そばに一升德利が出てゐたので――」

「ありやア、醤油入れてした。」
「それに、大相吐きましたから、な――多分、酒を飲み過ぎたのだらうッて、醫者は下痢をかけて歸りました。」
「そりやア、丁度いい思ひ付きてしたらう。」貞夫はかう云つて、この、想像には描いてゐたが、いよいよ事實と聽いては一たび突然に驚かれた事件を、まだ物足りないやうな氣がした。
　これまでにも、かの女の留守、留守に、度々かの女の荷物を探して見た。一つは、他の男からの手紙ても來てゐはしないかと思つてだが、次ぎに、それよりも重大な理由は、國を出る時から用意してゐると云ふこの毒藥の有無であつた。どうしても見付からないので、うそを云つてるのだとも思つた。また知り合ひの醫者などに、それと無く、これを飲むとどんなきき目があるか、どんな結果を呈するか、など云ふことも聽いてゐたのだ。
「分量が多過ぎて、却つて吐いてしまつたから、助かつたのでしよう。あの藥は死ぬにも度合があつて、多いと吐きますから――また少しづつなら、健康劑になつて外國婦人などにはこれをわざ／＼、使用するものがあつて――たとへば、宴會とか舞踏會とかへ行きます、ね、少しづゝやつてゐると、そのききめがいつか現はれて、ぼうッとその顏がほんのり櫻色になるさうです。」
「道理て」と、主人は、はたと膝を打ち、「眞ッ赤にのぼせてゐました。酒の醉ひだと思ひ違へたのも、無理はないてしよう。妻が氷をかいてゐましたら、どん／＼倒れたやうな音がして、二階てうん／＼うめく聲がしたと御らうじろ。わたしがあがつて見ると、それてしよう――うちのものまでが皆七顛八倒でしたぜ。」

『そりやア』と、貞夫は微笑にまぎらせて、『おさわがせしました、ね。』
『全體、あのお方はどうした人です』と、主人に尋ねられ、『實は』これ〳〵と、貞夫はそこの老母も出て來た前てありの儘をぶちまけ、『かうなつちやア、僕が少くともそれが直るまては、看てやらなけれりやアなりますまいよ。』
『人助けてさア、ね。』主人はまた胸を反らすやうにした。『加能さんには御名刺は戴きましたが、何だかちやらっぽこばかり云つて――あんな人は』と、鼻をつまむ眞似をして顏をしがめた。
『いや、さうまで薄情ても無いてしようが、ね。』
『それが、あなた』と、うち消すやうに首を一つ和らかにまわして、襟を拔け衣紋にして、『御失敗のもとぢやアありませんか?』
その樣子ゝ聲も、丸て、女がお客にあまへてゐるやうだ。
『なアに、失敗と云ふわけてもないのてしよう、ね、ただ僕がまだあの子に愛情が殘つてゐて、思ひ切れなかつたのが惡いのてした。』
『それもさうてしようが、な、女なんかいくらてもありますさア――わたしのうちのても、拋り出しさへすりやア、直ぐあとが二人も三人も待つてますさア。』
『これは惡くもない家柄てすが、ねえ』と、老母がそばから、『道樂、爲めに、好きて、こんな商買をしてゐますんて――』
『百面相ッて、どう云ふことをするのてす?』
『なアに、わけァないもんてすが、な。』かう云つて、主人は次ぎの間から古行李を引きずつて來て、そ

の中からいろんな面やら道具やらを見せ、何でも手早く早變りをして、一人でいろんな人物になつて見せるのが藝だなどと說明する間にも、素顏にちよッと物を當てると、ひよッとこになつたり、おかめになつたりした。

「ただの鼠ぢやァあるめい」といつの間にか男之助になつたかと思ふと、面をちよッと裏返して、仁木彈正になり、卷き物を喰はへ、「ふ、ふ、ふ、ふ」と笑つた。

そして、

「これが〇〇の宮さん、〇〇〇の宮さんのお氣に入りだから、ありがてい――どうか、あなたも御吹聽を願ひます。」

馬鹿にされたやうな氣をして、その室を出て、貞夫は二階へ行くと、お島はあたまだけ、枕の上に、こちらを向けて、氣だるさうに、

「來たの」と云つた。

「とう／＼やッつけた、ね！」

「…………」かの女は顏をそむけた。涙聲で、「どうせ生きてゐられへん！」

「おれに棄てられてか？」渠は冷然とそのゝばに坐わつた。

「…………」向ふ向きにただ頷いた。

「そして又加能に棄てられてだらう――？」

「…………」何の返事もなかつた。が、やがて獨り言のやうに、「死にさへすりやええのぢや！」

「さうだ、死にさへすりやア、おれが加能をも呼び付けて、墓所の奔走をさせ、おれも尋常に見送つてやつたのだが、ね、死にそくなつちやアまた問題が起るぞ。」

「起るも起らんも無い——あいつは、あたいがわざと、世話が出けるか云ふて念を押してやつたら、返事が出けなかつたさかい、追ひ返してやつた。」

「それ見ろ——誰れにだッて見限られらア、ね。」渠はかの女の精神が、もう、大丈夫正氣になつてゐることを認めた。て、語法を一歩進めて、「おれだッて、もう、友人の手を付けたものを、二度とは、可愛がれないよ——たとへ、お前の決心は精神に於てお前を潔めたものと許してやつても、ね。」

「可愛がつてなど貰はんでもえゝ！」

「うん、さう諦めてゐさへすりやア、おれはまた一肌拔いて、お前の處分を付けてやつてから出發するよ。」

かの女は向ふを向きッ切りてあつた。なんにも喰べたくないと云ふ上に、からだの自由が利かなかつた。

渠はかの女の便器を求めに行つたり、自分の食物を用意したりして、ゆふ方になつた頃、加能がのッそりやつて來た。

「また君ア來てるか？」ぶりりとして立つてゐる。

「君こそ來るに及ばないんだらう！」貞夫は、火鉢にかけた物の下をあふぎながら、横さまにねめ付けた。

「君も男子だらう——あれだけはッきりと僕に委托して置いて！」

「そりやアおれから云ふことだぞ——どうして君アおれのその委托を正直に實行しない？この本人の様子を見ろ！」貞夫は顎でお島の方を示めして、「毒をあふいて死にそくなつてるぢやアないか？」

『…………………』加能もかの女の寢姿を見やつて、ぎツくりと來たやうであつたが、見る〳〵惡人のやうな相を顏に描いて、立つてるからだを固めた。『貴さまアこれツ切りおれをあの女に近よせないつもりだ、な？』

『さうだ――君自身がその權利を、けさ、拋棄したのだ！』

『おれだツて、若しやとおもてやつて來たのぢや、人情は持つてらア――この二三日、大事な時間を棒にふらせやがつて！』

『口錢が欲しけりやア金てやる――友人呼ばはりはすな！』

『畜生！』から叫んて、加能は貞夫の横ツ腹を蹴つた。

『なに、くそ！』『貞夫は立ちあがつて、加能を力一杯に壁の美人へ突き飛ばした。みしりと云つて、張り子板の音がしたのて渠は下の人々に氣兼ねする氣になり、―また横たはつてる女の爲めをも思つた。て、勢ひを盛り返して來た加能の爲めに、貞夫は組み敷かれて、また二三度方々を蹴られた。が、こちらからの手出しはさし控へた。

『壯士を二三人つれて來て、おれは貴さまとあの女とにあやまらせてやるぞ！待つてやがれ！』

加能はこちらを尻目にかけて、はしごを下り初めた時、貞夫は言葉て追ッかけた――

『貴さまのやうな奴が、ね、自分の色女をおしまひにやア賣り飛ばすのだぞ！』

『賣り飛ばされるやうな女ぢや！』

『弱虫！』から云つて、お島は加能が行つてしまつてから、顏だけをこちらに向けた。『あたいが起きてたら、あいつを締めあげてやるのに！』

『…………………』お前の爲めを思つて負けてゐたのだとは、心で云つたが、貞夫には正直に發言出來なかつた。

一四

心配してゐたほどでも無く、加能は押し寄せても來なかつた。然し貞夫は下の家族にも注意を與へて再び渠が來ても、あがらせるなと命じた。

室の入り口なる半間のひらき戸へ、うち側から輪かぎがかかるやうにして、貞夫は毎日、毎夜、かの女の看護をした。そしてその傍らで書きかけの原稿を書き終つたし、また或新聞社へ行つて、樺太からあちらの通信をすることを引き受ける相談をも整へた。

二三日のうちに、お島のからだも段々自由が利くやうになつて、これまでとは打つて變り、貞夫に對する情が忠實でこまやかになつた。そして、質物を出す話を渠がし出した時、

『あんな物はいつでもええ』と云つた。

貞夫はまたかの女に對して、まだ望みありさうにそツとして置いたかの女優志願は、その實駄目であつたのだからとうち明け、かの女が近頃になつて寫眞屋になりたいと云ひ出した志望を容れ、その方の學校へ入れてやる手續きなどをした。

『これで、兎に角、お前との最初の約束は實行出來る、ね。』

『學校がきまつても、金がつゞかにや駄目ぢや――』かの女は下のかみさんを思ひ出したかして、『下のは、な、色女であつたのが、かみさんを追ひ出して這入つたんやさうや。』

七月十五日發行

中央公論臨時增刊

新脚本號

新時代には新時代の人を滿足せしむべき脚本と俳優と無かるべからず。此要求に基いて幾多の新劇團は起れり。而かも遂に傑出したる新脚本の少きが爲めに、多くは飜譯劇を上演して、僅に一部人士の不滿を癒し來りしが、之れ固より過渡期に於ける止むを得ざる一時の現象のみ。移植したる異邦の花は、其芬香色彩永く世人の感興を繫ぐに足らず、不熟なる果實は、忽ち飽滿の情を催さしむるが如く、今や一代の機運は、邦人の習性と情調とに緊密に契合する創作劇の出現を仰望するの情に燃ゆ。已に小說に於て新時代の表現を全うしたる我文壇が、未だ脚本に於て新時代を代表すべき作物を產まざるが如きは、獨り劇界にとつて大いなる遺憾なるのみならず、又實に我文壇の耻辱といはざるべからず。

（脚本寄稿を依賴せる諸大家）

正宗白鳥　島村抱月
武者小路實篤　小山内薫
上司小劍　中村吉藏
吉井勇　長田秀雄
田村俊子　秋田雨雀
木下杢太郎　久保田萬太郎
德田秋聲　森鷗外

本誌玆に感ずる所あり、常に劇文學に携はるゝ新脚本作家の外、新たに戯曲に筆を染めんとする文壇の大家數名に乞うて、新脚本十數篇を得、之を公けにして從來文壇劇壇に存せし大缺陷を補塡せんことを企つ。若し本號が脚本界に於ける新機運を促がすの第一聲となり、新時代の要求する新脚本が續々として出現するの動機ともならば、獨り我等の希望の達せられたるのみならずと信ず。尚右新作脚本に添ふるに堂々たる數篇の演劇論、及び趣味津々たる劇界諸種の記事を滿載すべし。其委細の内容は次號の本誌について見られむことを希望す。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
京都市七條停車場前　三共社

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
	以上郵稅共	

▲但し新年號（本年度に限り三倍）春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十五册（本年度十六册）分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢（本年度は金四圓）外國は金五圓貳拾五錢（本年度は金五圓六十錢）拂込まるべし

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替　にて御送金の場合は本郷西片町十番地中央公論社と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵劵代用　必ず一割增の事
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに共取扱をなすべし
　一金一圓迄　金五錢
　一金三圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢
　（集金委託料及送達料共）
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正三年五月廿五日印刷納本
大正三年六月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話局下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可